

三夜原東遺跡  
新堀東遺跡  
壺清水西遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第1集

1997

土浦市教育委員会  
土浦市遺跡調査会  
田村・沖宿土地区画整理事業組合

さん 三 新 壱 や 堀 はら 東 ひがし 遺 い  
しん いっ ぱい ほり ひがし い せき  
新 壱 杯 清 みず にし い 跡 せき  
いっ ぱい せい みず にし い 跡 せき  
壠 清 水 西 い 跡 せき

田村・沖宿土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第 1 集

1997

土 浦 市 教 育 委 員 会  
土 浦 市 遺 跡 調 査 会  
田 村 ・ 沖 宿 土 地 区 画 整 理 組 合



## 例　　言

- 1 本書は土浦市田村・沖宿上地区画整理事業に伴う同市田村町字三夜原2320外所在の三夜原東遺跡、申橋2345-1外所在の新堀東遺跡、2347-8外所在の壺杯清水西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 調査期間は下記の通りである。

三夜原東遺跡 1990年8月1日～8月6日 1991年2月25日～2月28日

新城東遺跡 1990年7月26日～8月8日

壺杯清水西遺跡 1990年8月1日～1991年1月18日

- 4 発掘調査は黒澤春彦と関口満が担当し、調査員として磯前順一が当たった。
- 5 本書の編集は黒澤が行なった。
- 6 本書の執筆は旧石器時代、縄文時代石器を駒澤悦郎、绳文土器、基本層序、遺構の一部を開口、その他を黒澤が行なった。
- 7 整理の分担は下記の通りである。

石　　器　　駒澤　雨宮瑞生　大野美津子　須貝和子

縄文土器　　関口　磯前　遠藤成江　川田光子　椎名まさ子　浜田久美子

土師器須恵器　　黒澤　富田シズエ　新関郁乃

ト　　レ　　ス　　小松崎廣子　松川さち子

遺　　構　　黒澤　関口　小松葉子　井上敏昭　大坪美知子

写　　真　　黒澤

- 8 石器の材質鑑定は工業技術院地質調査所の高橋浩氏、山元孝広氏、宮崎一博氏にお願いした。
- 9 本調査及び報告書作成には下記の諸機関に御援助、御協力を賜った。  
田村沖宿上地区画整理組合　JR川鉄商事　JR清水建設　茨城県教育委員会  
県南教育事務所　JR茨城県教育財団　工業技術院地質調査所　日本考古学研究所
- 10 本調査及び報告書作成には下記の方々より御協力、御助言を賜った。また茨城県立歴史館の斎藤弘道氏には縄文土器に関して御指導をいただいた。墨書き土器については国立歴史民俗博物館の平川南教授、茨城県教育財団の川井正一氏、東洋大学の鬼頭清明教授に御指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)  
磯部一洋　市毛美津子　大瀬淳志　小川和博　瓦吹堅　小林謙　小松崎毅彦　齊田克史  
土肥孝　福田卓志　福田礼子　松田光太郎　森本玲子　吉井守正
- 11 本遺跡の資料は土浦市教育委員会が保管する。
- 12 本事業に伴う報告書は全11集を予定しており、各集共通の事項や、考察は総集編に掲載する。

## 凡　　例

- 1 遺構番号については、遺構の種別ごとに調査順を原則として付したが、調査や整理の過程で遺構でないと判断したものは欠番とした。
- 2 土層観察における色相の判定は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を使用した。
- 3 各遺構の実測図は、原図20分の1を使用し、縮尺3分の1を基本としたが、状況により2分の1、4分の1等を用いた。カマドは、原図10分の1を使用し縮尺3分の1を基本とした。
- 4 実測図中の標高は、すべてm単位で示している。
- 5 実測図中のは「SI」は堅穴住居址、「SK」は土坑、「P」はpit、「TM」は方形周溝墓、「K」は攪乱を示している。また原図や台帳、遺物注記はこれらの記号を用いている。
- 6 実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また接合関係にある遺物は、各々を実線で結んだ。
- 7 実測図中の破線は推定線を示している。
- 8 遺構実測図中におけるスクリントーンの指示は下記のとおりである。

焼土



カマド袖部粘土



- 9 遺物の縮尺は3分の1を基本としたが、大きさにより原寸、2分の1、4分の1に縮尺した。
- 10 各部位の名称と法量表現は下記のとおりである。

A - 口径 B - 底径 C - 器高 D - 高台高

- 11 遺物実測図中、中心線の一点鎖線は復元実測を表わす。

- 12 遺物実測図中の赤色は赤彩を表わす。その他スクリントーンの指示は下記のとおりである。

黒色処理



須恵器断面



織維土器断面



漆付着



タール付着



墨痕



- 13 土器観察表について（古墳時代以降の遺物）、図版番号は上段が実測図中の番号である。種類は上段が器種、下段が種類である。

種類で、土器器の色調を呈するが、須恵器の技法を用い、還元焰焼成を試みたもの（須恵器を作ろうとしたが還元焰焼成が不完全）であれば須恵器とした。

法量は、上記の10の表記を用い、（ ）は現存値、〔 〕は復元推定値を表わす。

手法の特徴は、整形、成形について記した。また黒色処理や墨書き等においても当欄に記した。

器質は上段が色調、中段が胎土、下段が焼成を記した。色調は原則として外面、内面の順に記した。胎土は、半透明、透明の鉱物（1～2mm）を石英、白色の鉱物（1～2mm）を長石とした。焼成は良好、普通、不良の三段階に分けた。備考には、残存率や出土層位等を記した。

- 14 繩文原体の名称については、山内清男「日本先史土器の縄文」を参考にした。

## 調査者名簿

### 発掘調査

調査主任 黒澤春彦 土浦市教育委員会社会教育課  
調査員 中澤達也 タ (~H2.9)  
関口 満 タ 勤務  
タ 磯前順一 東京大学大学院 (H2.12~H3.3)

### 整理

担当 黒澤春彦 土浦市教育委員会社会教育課 (H5.4より文化課)  
調査員 関口 満 タ タ  
タ 磯前順一 東京大学大学院 (H2.12~H3.3)  
タ 駒澤悦郎 東洋大学大学院 (H3.3~)  
タ 小松葉子 (H3.10~)  
タ 雨宮瑞生 筑波大学大学院 (H4.7~)  
タ 吉澤 悟 タ (H3.5~)  
タ 井上敏昭 タ (H4.4~)

事務担当 秋元照子 市川律子

事務局 土浦市教育委員会社会教育課文化係 (H5.4より文化課文化財係)

### 発掘参加者 (10日以上)

赤池定雄 赤池ミツ子 浅川和代 浅野松意 浅野善子 安達浩二 飯田トミ 伊勢山こう  
伊藤晴江 今泉代志子 岩瀬いま 岩本よし子 遠藤幸子 大木ちよ 大槻陽子  
大久保さだ江 大竹きみ子 大坪美知子 大野欣子 大原繁 岡村美樹子 小倉はる  
小沼さと 小野里智恵子 折本秀子 貝塚文子 貝塚雪枝 加藤博司 神野栄子 川島敏子  
川俣茂子 久保田勝 倉田俊夫 栗又八重子 小松崎仁男 古仁所和子 斎藤政男 坂本節子  
坂本弘子 桜井久代 桜井秀子 清水せつ子 清水たまの 清水としえ 白波瀬初代 鈴木武  
鈴木秀雄 関野喜久代 土肥末 戸田幸子 富島栄子 中根延子 野口絹子 堀越敏枝  
堀越方子 福田高明 福田久之 福田まさ 福田美代子 服部誠 繩野重雄 松浦澄子  
松永庸督 矢の中たつ 横浜長一郎 粕山末義

### 整理参加者

遠藤成江 大野美津子 大坪美知子 川田光子 小松崎廣子 椎名まさ子 須貝和子  
宮田シズエ 新闇郁乃 野口絹子 浜田久美子 平野敬子 松川さち子

## 調査会組織 (平成5年度まで)

会長	永山 正	土浦市文化財保護審議会委員長
会長	須田 直之	タ
副会長	青木 利次	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木 雅博	土浦市文化財保護審議会委員 大塚 博 タ
	雨貝 宏	土浦市建築指導課長
	横田 紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	タ
	野口 幹雄	土浦市区画整理課長
	小川 和博	タ
監事	藤枝 正	土浦市教育委員会教育次長 二野屏昌男 タ
	鶴町喜美雄	タ
	滝ヶ崎洋之	土浦市企画課長
	廣田 宣治	タ
幹事	田中 紀夫	土浦市教育委員会社会教育課長 福田 統太 タ
	竹本喜一郎	タ
	宮本 昭	タ 文化課長
	久松 一夫	土浦市教育委員会社会教育課副参事
	岩沢 茂	土浦市教育委員会社会教育課課長補佐
	加倉井蘿雄	土浦市教育委員会社会文化課主査
	石山 淳一	土浦市教育委員会社会教育課担当係長
	飯村 基	土浦市教育委員会社会教育課主幹
	石川 功	土浦市教育委員会文化課主事
	黒澤 春彦	タ
	中澤 達也	タ
	関口 満	タ
	塙谷 修	土浦市立博物館学芸員

# 目 次

口 絵

例 言

凡 例

調査者名簿

調査会組織

目次・挿図目次

第1章 調査経過 .....	1
第2章 調査方法 .....	3
第1節 地区設定 .....	3
第2節 基本層序 .....	3
第3節 遺構調査 .....	4
1 確認調査 .....	4
2 表土除去 .....	4
3 遺構調査 .....	4
第3章 遺構と遺物 .....	7
第1節 三夜原東遺跡 .....	7
1 縄文時代 .....	7
2 時期不明遺構 .....	7
第2節 新堀東遺跡 .....	9
1 繩文時代 .....	9
第3節 壺形清水西遺跡 .....	17
1 旧石器時代 .....	17
2 縄文時代 .....	20
3 弥生時代 .....	170
4 古墳時代 .....	171
5 平安時代 .....	176
6 中世以降・時期不明遺構 .....	188
第4章 索語 .....	191
報告書抄録 .....	192
写真図版 .....	

## 挿 図 目 次

第 1 図 田村沖宿遺跡群分布図	2	第 31 図 第 8 号住居址出土遺物(2)	42
第 2 図 基本層序	3	第 32 図 第 8 号住居址出土遺物(3)	43
第 3 図 遺跡位置図	5	第 33 図 第10ab号住居址・第76号土坑	45
第 4 図 三夜原東遺跡 a 区全体図	6	第 34 図 第10号住居址出土遺物(1)	47
第 5 図 三夜原東遺跡 b 区全体図	7	第 35 図 第10号住居址出土遺物(2)	49
第 6 図 第 1・2 号溝	8	第 36 図 第10号住居址出土遺物(3)	50
第 7 図 遺構外出土遺物	8	第 37 図 第11号住居址	51
第 8 図 新船東遺跡全体図	10	第 38 図 第11号住居址出土遺物(1)	52
第 9 図 遺構図	11	第 39 図 第11号住居址出土遺物(2)	53
第 10 図 第 1 号土坑出土遺物	13	第 40 図 第11号住居址出土遺物(3)	54
第 11 図 遺構外出土遺物(1)	14	第 41 図 第12号住居址	55
第 12 図 遺構外出土遺物(2)	15	第 42 図 第12・14号住居址出土遺物	56
第 13 図 宅杯清水西遺跡全図	16	第 43 図 第14号住居址	57
第 14 図 旧石器時代遺物(1)	18	第 44 図 第14号住居址出土遺物	58
第 15 図 旧石器時代遺物(2)	19	第 45 図 第15号住居址・第77号土坑	59
第 16 図 第 3 号住居址・出土遺物	21	第 46 図 第15号住居址出土遺物(1)	60
第 17 図 第 4 号住居址	22	第 47 図 第15号住居址出土遺物(2)	61
第 18 図 第 4 号住居址出土遺物(1)	23	第 48 図 第17号住居址	62
第 19 図 第 4 号住居址出土遺物(2)	25	第 49 図 第 1 号柱穴列	63
第 20 図 第 5 号住居址	27	第 50 図 石器微細剥片分布図	64
第 21 図 第 5 号住居址出土遺物(1)	28	第 51 図 石器微細剥片集計図	65
第 22 図 第 5 号住居址出土遺物(2)	29	第 52 図 土坑(1)	67
第 23 図 第 5 号住居址出土遺物(3)	29	第 53 図 土坑(2)	71
第 24 図 第 6 号住居址	30	第 54 図 土坑(3)	73
第 25 図 第 6 号住居址遺物出土状況	31	第 55 図 土坑(4)	75
第 26 図 第 6 号住居址出土遺物(1)	33	第 56 図 土坑出土遺物(1)	79
第 27 図 第 6 号住居址出土遺物(2)	35	第 57 図 土坑出土遺物(2)	81
第 28 図 第 6 号住居址出土遺物(3)	37	第 58 図 土坑出土遺物(3)	83
第 29 図 第 8 号住居址・第82号土坑	39	第 59 図 土坑出土遺物(4)	83
第 30 図 第 8 号住居址出土遺物(1)	41	第 60 図 遺構外出土土器 1 群(1)	87

第 61 図 遺構外出土土器 1 群(2)	89	第 87 図 遺構外出土石器(1)	155
第 62 図 遺構外出土土器 1 群(3)	91	第 88 図 遺構外出土石器(2)	157
第 63 図 遺構外出土土器 2 群～4 群	93	第 89 図 遺構外出土石器(3)	159
第 64 図 遺構外出土土器 5 群(1)	99	第 90 図 遺構外出土石器(4)	161
第 65 図 遺構外出土土器 5 群(2)	101	第 91 図 遺構外出土石器(5)	163
第 66 図 遺構外出土土器 5 群(3)	103	第 92 図 遺構外出土石器(6)	165
第 67 図 遺構外出土土器 5 群(4)	107	第 93 図 遺構外出土石器(7)	166
第 68 図 遺構外出土土器 5 群(5)	111	第 94 図 遺構外出土石器(8)	167
第 69 図 遺構外出土土器 5 群(6)	115	第 95 図 遺構外出土石器(9)	169
第 70 図 遺構外出土土器 5 群(7)	117	第 96 図 第 9 号住居址出土石器	169
第 71 図 遺構外出土土器 6 群(1)	121	第 97 図 第 9 号住居址	170
第 72 図 遺構外出土土器 6 群(2)	123	第 98 図 第 9 号住居址出土遺物	171
第 73 図 遺構外出土土器 6 群(3)	127	第 99 図 第 1 号方形周溝墓	172
第 74 図 遺構外出土土器 7 群	129	第 100 図 第 1 号方形周溝墓上層断面	173
第 75 図 遺構外出土土器 8 群(1)	133	第 101 図 第 1 号方形周溝墓出土遺物	175
第 76 図 遺構外出土土器 8 群(2)	135	第 102 図 第 2 号住居址	176
第 77 図 遺構外出土土器 8 群(3)	136	第 103 図 第 2 号住居址出土遺物	177
第 78 図 遺構外出土土器 9 群(1)	139	第 104 図 第 7 号住居址	179
第 79 図 遺構外出土土器 9 群(2)	141	第 105 図 第 7 号住居址出土遺物(1)	181
第 80 図 遺構外出土土器 10 群	143	第 106 図 第 7 号住居址出土遺物(2)	182
第 81 図 遺構外出土土器 10 群・11 群・12 群	145	第 107 図 第 16 号住居址	184
第 82 図 遺構外出土土器 13 群	147	第 108 図 第 16 号住居址出土遺物(1)	185
第 83 図 遺構外出土遺物(穿孔土器)	148	第 109 図 第 16 号住居址出土遺物(2)	187
第 84 図 遺構外出土遺物(土製品 1)	149	第 110 図 第 1 号溝	188
第 85 図 遺構外出土遺物(土製品 2)	152	第 111 図 第 1 号住居址	189
第 86 図 試掘出土遺物	153	第 112 図 第 65 号・81 号土坑	190

## 写 真 図 版

- P L 1 遺跡周辺航空写真  
P L 2 上 三夜原東遺跡試掘  
下 三夜原東遺跡 a 全景  
P L 3 上 三夜原東遺跡 b 全景  
中 第1号溝  
下 第2号溝  
P L 4 上 遺構外出土遺物  
下 新堀東遺跡試掘  
P L 5 上 新堀東遺跡試掘  
下 新堀東遺跡全景  
P L 6 上 第1号土坑  
中 第1号土坑遺物出土状況  
下 第1号土坑土層  
P L 7 上 第2号土坑  
中 第5号土坑  
下 pit群  
P L 8 上 第1号土坑出土遺物  
下 第1号土坑出土遺物  
P L 9 上 遺構外出土遺物  
下 遺構外出土遺物  
P L 10 上 遺構外出土遺物  
下 遺構外出土遺物  
P L 11 上 壱杯清水西遺跡調査前全景  
下 壱杯清水西遺跡遠景  
P L 12 上 壱杯清水西遺跡基本層序  
下 第3号住居址  
P L 13 上 第4号住居址  
下 第5号住居址  
P L 14 上 第6号住居址  
下 第6号住居址遺物出土状況  
P L 15 上 第8号住居址  
下 第8号住居址遺物出土状況  
P L 16 上 第10a・b号住居址  
下 第11号住居址  
P L 17 上 第6号住居址炉址  
中 第8号住居址遺物出土状況  
下 第11号住居址遺物出土状況  
P L 18 上 第12号住居址  
下 第14号住居址  
P L 19 上 第15号住居址  
下 第1号柱穴列  
P L 20 上 第2号土坑  
中 第2号土坑遺物出土状況  
下 第7号土坑  
P L 21 第8・14・16～24号土坑  
P L 22 第25～31・34・41号土坑  
P L 23 第43・44・47・49・52～54・56号土坑  
P L 24 第57・60・62・68・70・72・75号土坑  
P L 25 第76～79号土坑  
P L 26 上 第9号住居址  
下 第1号方形周溝墓  
P L 27 上 第1号方形周溝墓遺物出土状況  
中 第1号方形周溝墓遺物出土状況  
下 第1号方形周溝墓遺物出土状況  
P L 28 上 第1号方形周溝墓土層  
中 第1号方形周溝墓周溝内土坑  
下 第65号土坑土層  
P L 29 上 第2号住居址  
下 第2号住居址カマド

P L30上	第7号住居址	P L55	遺構外出土土器5群
	下 第7号住居址遺物出土狀況	P L56	遺構外出土土器5群
P L31上	第7号住居址カマド1	P L57	遺構外出土土器5群
中	第7号住居址カマド2	P L58	遺構外出土土器5群
	下 第7号住居址遺物出土狀況	P L59	遺構外出土土器5群
P L32上	第16号住居址	P L60	遺構外出土土器5群
	下 第16号住居址遺物出土狀況	P L61	遺構外出土土器6群
P L33上	第16号住居址遺物出土狀況	P L62	遺構外出土土器6群
中	第16号住居址土層	P L63	遺構外出土土器6群
	下 作業風景	P L64	遺構外出土土器7群
P L34上	第1号住居址	P L65	遺構外出土土器8群
	下 第1号溝	P L66	遺構外出土土器8群
P L35	第3・4・5号住出土遺物	P L67上	遺構外出土土器8群
P L36	第5号住出土遺物		下 遺構外出土土器9群
P L37	第4・5号住出土遺物（石器）	P L68	遺構外出土土器9群
P L38	第6号住出土遺物	P L69上	遺構外出土土器9群
P L39	第6号住出土遺物		下 遺構外出土土器10群
P L40	第8号住出土遺物	P L70	遺構外出土土器11・12群
P L41	第8号住出土遺物	P L71上	遺構外出土土器13群
P L42	第6・8号住出土遺物（石器）		下 穿孔土器
P L43	第10a号住出土遺物	P L72	土製品
P L44	第10b号住出土遺物	P L73上	土製品
P L45	第10b・11号住出土遺物		下 試掘出土遺物
P L46	第11号住出土遺物	P L74	旧石器時代石器
P L47	第12・14号住出土遺物	P L75	遺構外出土石器
P L48	第15号住出土遺物・土坑出土遺物	P L76	遺構外出土石器
P L49	土坑出土遺物	P L77	遺構外出土石器
P L50	土坑出土遺物	P L78	遺構外出土石器
P L51	遺構外出土土器1群	P L79	遺構外出土石器
P L52	遺構外出土土器1群	P L80上	遺構外出土石器
P L53	遺構外出土土器1群		下 第9号住出土石器
P L54	遺構外出土土器2群～4群		

P L81上 第9号住出土遺物

下 第1号方形周溝墓出土遺物

P L82上 第2号住出土遺物

下 第7号住出土遺物

P L83 第7号住出土遺物

P L84上 第7号住出土遺物

下 第16号住出土遺物

P L85上 第16号住出土遺物

下 繩文原体

P L86 繩文原体

## 第1章 調査経過

- 1989年3月 三夜原東、新堀西、壺杯清水西遺跡の試掘を行なう。  
(平成元)
- 4月 三夜原東遺跡の試掘を行なう。三夜原東、新堀東遺跡は、遺物が極少量出土しただけであった。壺杯清水西遺跡は遺構は確認できなかったが、東側から縄文前期の土器片などが多量に出土した。
- 1990年7月25日 新堀東遺跡について、重機でトレンチを入れる。  
(平成2) 26日 三夜原東遺跡について、重機でトレンチを入れる。  
新堀東遺跡の調査を開始する。
- 28日 壺杯清水西遺跡の表土除去を開始する。
- 8月1日 本格的に調査を開始する。  
三夜原東遺跡の調査（1次）を開始する。極少量の縄文土器片が出土しただけで、遺構は確認されなかった。  
壺杯清水西遺跡の調査を開始する。
- 6日 三夜原東遺跡について全体図を作成し、1次調査を終了する。
- 8日 新堀東遺跡の調査が終了する。
- 9月28日 本日より寺畠遺跡の進入道路部分の調査を開始するため、壺杯清水西遺跡の調査を中断する。
- 10月16日 本日で寺畠遺跡の調査を終了し、再び壺杯清水西遺跡の調査を開始する。
- 11月12日 本日より、前谷東遺跡の進入道路部分の調査を行なうため、壺杯清水西遺跡の調査を中断する。
- 11月16日 本日で前谷東遺跡の調査を終了し、再び壺杯清水西遺跡の調査を開始する
- 12月26日 1990年の調査を終了する。
- 1991年1月8日 1991年の調査を開始する。  
(平成3) 数名を残し、寺畠、長峯遺跡の調査を開始する。
- 1月18日 壺杯清水西遺跡の調査を終了する。
- 2月25日 三夜原東遺跡2次調査を開始する。
- 2月28日 三夜原東遺跡2次調査を終了する。



第1図 田村沖宿遺跡群分布図（1三夜原東・2新堀東・3壺井清水西）

## 第2章 調査方法

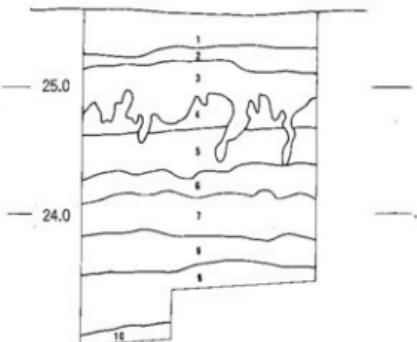
### 第1節 地区設定

壺形清水西遺跡について、発掘調査を実施するにあたり、日本平面直角座標を用い、調査地区を設定した。調査区の名称はアルファベットと算用数字を用い、4mごとに西から東へA、B、C…、北から南へ1、2、3…、とし、「A-1区」のように呼称した。「A-1区」は日本平面直角座標第IX座標系、X軸+10,010m、Y軸+38,300mである。

### 第2節 基本層序

第2図の基本層序は調査エリア北方のエリヤ際(X-6区付近)に設定したトレンチ北壁の土層堆積状況である。以下現地で分層した所見に基づき、各土層の状況を述べる。

1層は表土である。2層は、調査エリア南半で多量の土器を含み包含層とした土層と同様のものであるが、トレンチ設定付近ではほとんど遺物を含んでいない。3層よりは若干赤味を増す。3層はソフトロームで7.5YR4/6(褐色)を呈し、しまり、粘性とともに弱い。下部はクラック状を呈し一部は6層にまで達する。4層以下9層まではハードロームである。4層の色調は7.5YR5/8(明褐色)を呈する。しまりあり。極小の火山ガラスのようなものや約1mmの赤色粒、約0.5mmの黒色の粒子を含む。5層の色調は7.5YR4/6(褐色)を呈す。0.5mm以下の赤色・黒色粒を含み、白色粒も微量ながら含む。しまりが非常に多い。6層は4、5層に比べソフト化したロームである。色調は7.5YR4/6(褐色)で5mm以下の小石を微量含む。0.5mm以下の赤色粒と黒色粒を含む。7層はしまりがあり、0.5mm以下の小石を多く含み、径約1mmの7.5YR8/6(浅黄橙色)を呈する粒子及び、0.5mm以下の黒色粒・赤色粒・青灰色粒も含む。8層は、7.5YR4/6(褐色)を呈し、5層同様のしまり具合を見せ、0.5mm以下の黒色粒を多く含み、赤色粒・青灰色粒も含む。酸化鉄の沈着も見られ、帶状に赤褐色の部分がある。9層は7.5YR5/6(明褐色)を呈し、2~5mmの小石が微量含まれるほか、0.5mm以下の赤色粒・黒色粒・青灰



第2図 基本層序

色粒が含まれる。上層より粘性が強まる。10層は常総粘土層であり、色調は7.5YR6/6（橙色）～10YR7/4（にぶい黄橙色）を呈し、しまり、粘性ともに非常に強い。0.5mm以下の白色粒・透明粒を含み、3～5mmの橙色粒・黒色粒を含む。

### 第3節 遺構調査

#### 1 確認調査

第1章で述べたように1988年（昭和63年）11月より1989年（平成元年）4月にかけて重機による確認調査を行なった。エリア内は山林が多く、困難を極めたが幅1mで計5本、総長430mのトレンチを入れた。掘り下げはハードローム上面までとした。地表からは30～50cmの深さである。試掘の結果、遺構の確認面は包含層上層かソフトローム上面で、地表からの深さは30～40cmを測る。

#### 2 表土除去

壺清水西遺跡について試掘の結果、遺構確認面までの深さが30cm以上あることから、重機を入れても遺構に与える影響はないと判断し、重機による表土除去を行なった。包含層が存在するところは包含層上層まで、ないところはソフトローム上面まで掘り下げた。木根については調査時に人力で除去した。

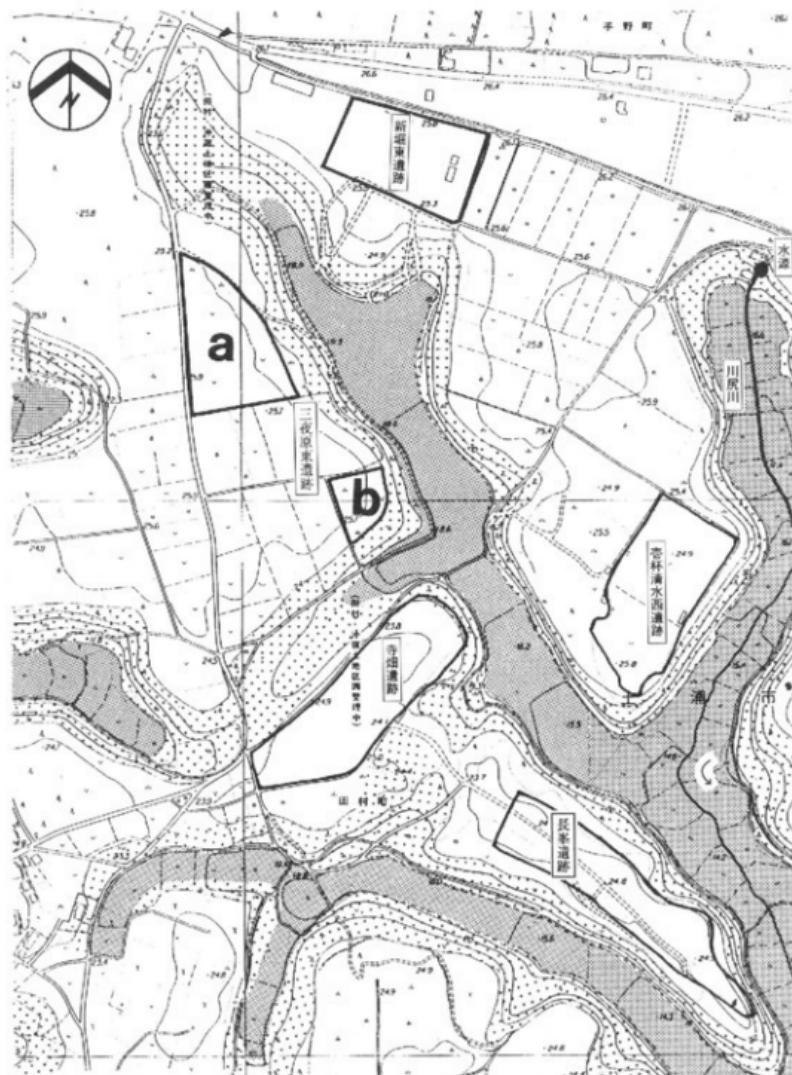
#### 3 遺構調査

住居址の調査は土層観察用ベルトを十字に設定して検出する方法を原則とした。地区的表記は主軸の右前を1区とし、時計回りに2、3、4区とした。土坑については長軸方向に分割し、地区名は住居址の表記に準じた。検出作業は覆土の変化や遺物に注意しながら掘り進めた。土層観察は、色調、含有物の種類と量、締まり、粘性等を観察した。土層観察用のベルトを除去した後、写真や図面等で記録し、標高を測定して取り上げた。遺物を取り上げた後、炉、カマド、柱穴等の付属施設を調査し、完掘した後、写真、図面等の記録を行なって、終了した。

平面図は水糸を1mごとに張って測量した。

包含層の調査は、縄文土器が多量に包含されていることから、4m四方の区ごとにローム上面まで掘り下げた。

写真はローリングタワーや脚立の上から、35mm、120mm（中型）で撮影し、フィルムは35mmモノクロ、リバーサル、120mmモノクロを使用した。



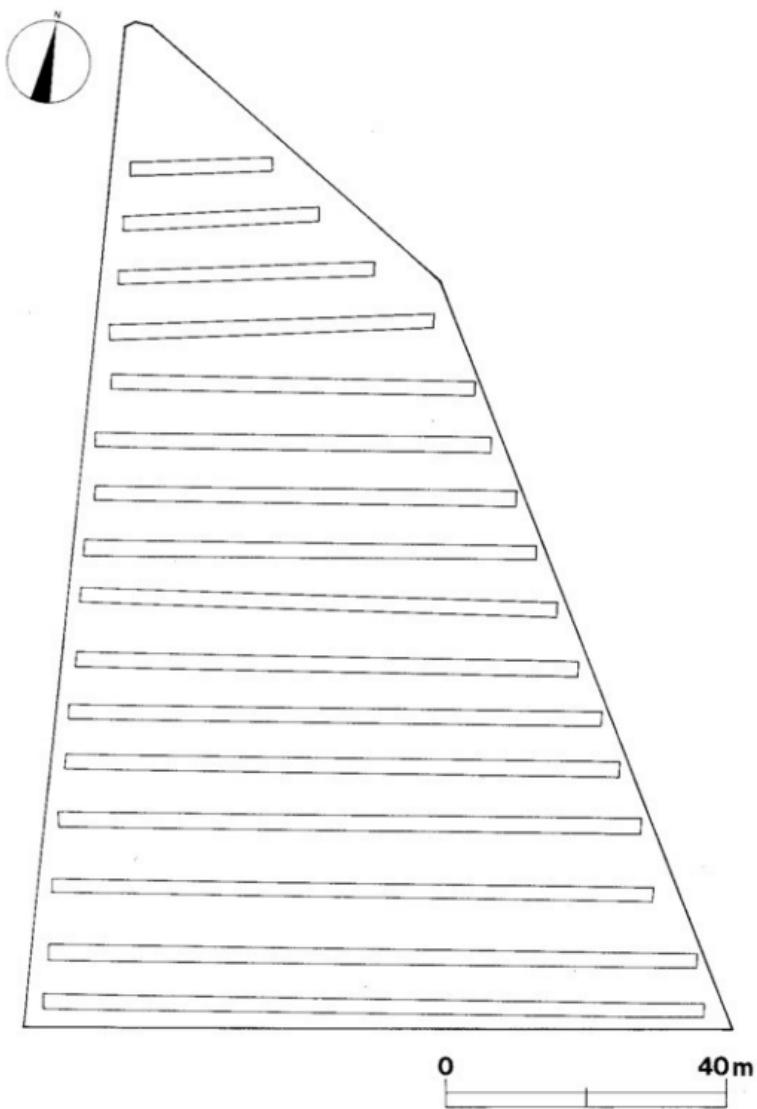
第3図 遺跡位置図 1/5000



谷底平野



傾斜面



第4図 三夜原東遺跡a区全体図

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 三夜原東遺跡

本遺跡は二期に分けて調査を行なった。調査方法は遺構の密度が低いことから、トレンチ法を用いた。第1次調査（a区）は遺跡の北側約8,600m<sup>2</sup>の調査で計16本、総面積約2,030m<sup>2</sup>のトレンチを入れた。その結果遺構は確認されず、遺物も極少量であった。第2次調査（b区）は遺跡の南端の緩斜面約3,900m<sup>2</sup>で計2本、総面積約400m<sup>2</sup>のトレンチを入れた。結果、2条の溝が確認され、表土中から縄文土器、土師器等が出土した。

#### 1 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかつたが、遺物は土器片が表土中や包含層から少量出土した。

##### 出土土器（第7図）

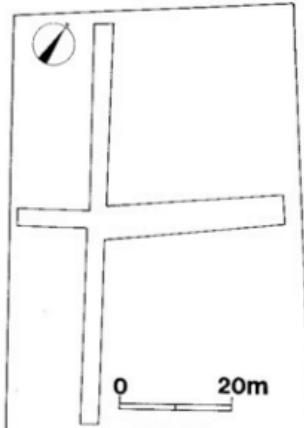
縄文時代前期から後期にわたる土器が出土している。出土した量は非常に少ない。No1、2は縄文時代前期の土器であり、胎土に纖維を含み器面には羽状縄文が施文されている。

No3～10・13は縄文時代前期末葉の土器である。器面への施文は大別して2種に分けられ、No3～4・6の縄文施文の土器とNo7～10・13の貝殻波状文が施文されているものである。

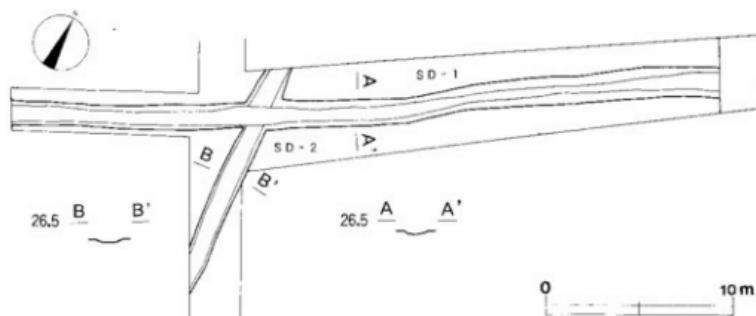
No11～12、14～18は縄文時代後期前葉の土器である。No11・12は口縁部破片であり、No11は波状口縁を呈する。No12には口唇部に沈線が巡る。土器に施文される縄文は2種類で、L字型とR字型が施文されて、それぞれ撚りの具合が緩い。No16～18は沈線により施文される胴部片で、17には弧状の集合沈線が施文され、No18は頸部下の「麻手文」の一部であろう。これらの土器の胎土には砂の混入が多いようである。

#### 2 時期不明遺構（第6図）

第2次調査において時期不明の溝が2条検出されている。1号溝は幅mで東西に延びている。2号溝は幅mで南北に延び、1号溝と交差している。覆土は黒色土である。



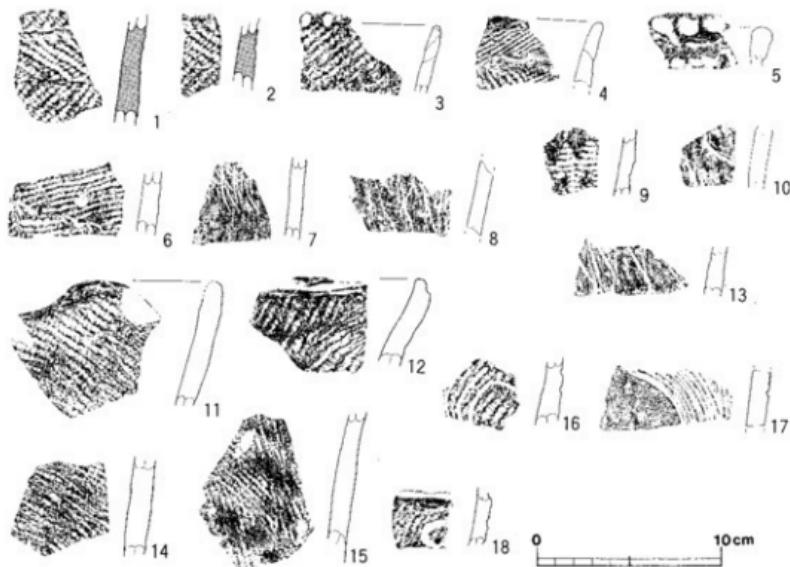
第5図 三夜原東遺跡 b区全体図



第6図 第1・2号溝

遺物は縄文土器が少量出土した。

時期については、覆土から判断すると古墳時代以降と思われる。



第7図 遺構外出土遺物

## 第2節 新堀東遺跡

本遺跡は確認調査の結果、遺構の密度が薄いことがわかり、トレンチ法を用いた。調査面積は約11,570m<sup>2</sup>で、トレンチは計10本、総面積2,100m<sup>2</sup>である。その結果、縄文時代後期と思われる土坑3基、焼土址2基、pit 5本検出された。第2号土坑を除き第2トレンチと拡張部からの検出である。遺物は土坑やその周辺から土器片が出土している。

### 1 縄文時代

#### 第1号土坑（第9図）

本土坑は第2トレンチ拡張部で確認された。平面は円形を呈し、規模は径1.0m、深さ1.3mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、一部わずかに入り込む。

覆土はロームブロックを含む褐色、暗褐色上で、上層に焼土が堆積しており、焼土の範囲は0.5×0.3mを測る。

遺物は覆土上層から縄文の土器片が出土している。

#### 第2号土坑（第9図）

本土坑は第9トレンチの東端で確認された。東半分はエリア外となっている。平面は梢円形を呈すると思われる。深さは0.95mを測り、壁は内側に大きく入り込み袋状を呈する。

#### 第5号土坑（第9図）

本土坑は第2トレンチの西端で確認された。平面は円形を呈し、規模は径0.9m、深さ0.3mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

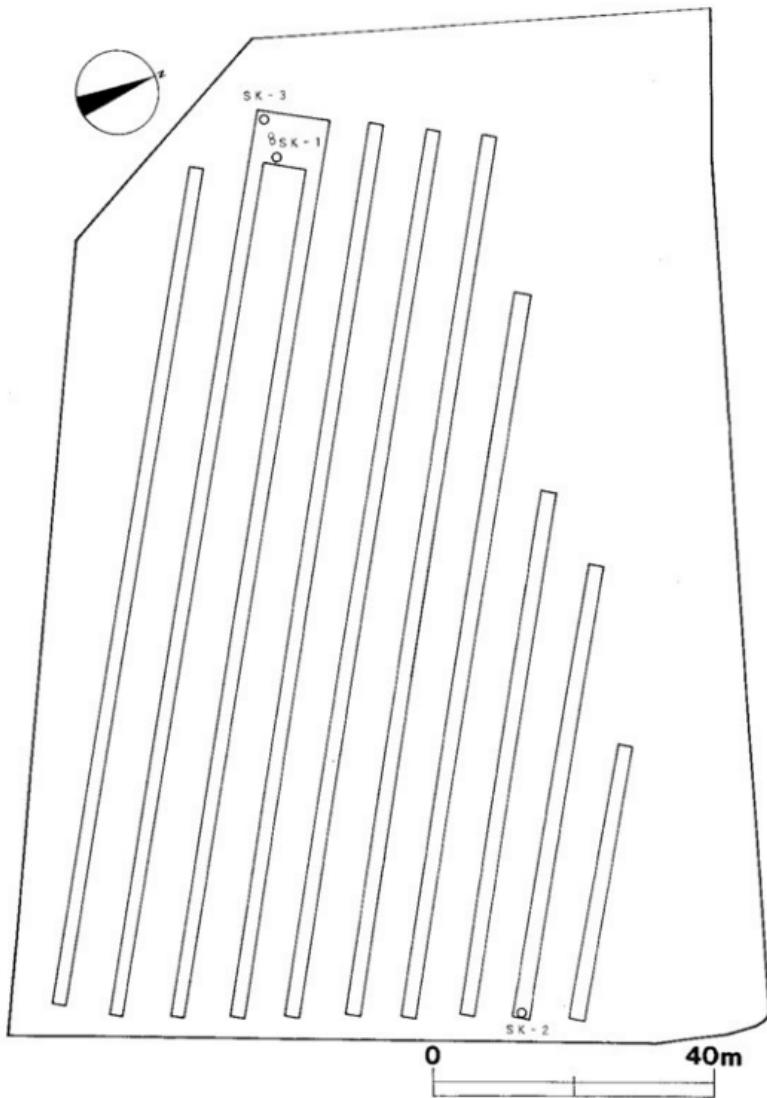
#### pit群（第9図）

第2トレンチ拡張部より5本のpitが確認された。規模は径0.3m～0.4mで深さは0.m前後である。

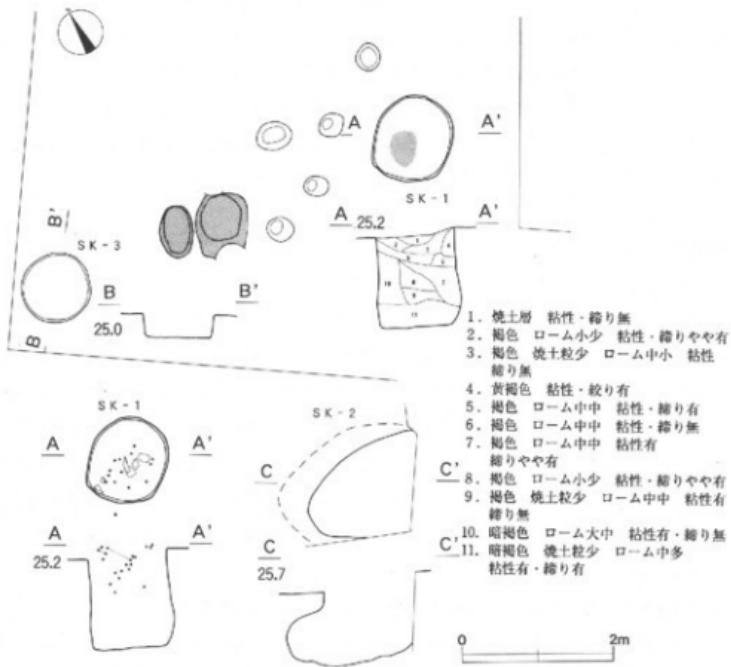
#### 第1号・2号焼土址（第9図）

本焼土址は第2トレンチより隣接して確認された。東側を1号とする。1号焼土址は一部擾乱を受けており、平面は不整方形を呈する。規模は0.8×0.7mを測る。

2号焼土址は梢円形を呈し、規模は0.8×0.7mを測る。



第8図 新堀東遺跡全体図



第9図 遺構図

出土遺物（第10~12図）

第1号土坑出土土器（第10図No 1~8）

同遺構からは縄文時代後期前葉の土器片が主体的に出土し、若干前期前半の土器が出土している。No 1~3は同一個体で、バケツ状に底部から口縁部に向いて広がる深鉢であろう。内外面はまず粗い削りがなされ、内面は掠でられている。器面には櫛歯状工具（6本単位もしくは7本単位）による横位沈線、渦巻文が描かれている。調整、施文統合的に粗い作りである。第12図No 49も同一個体であろう。No 2は平縁に3単位の波状口縁の深鉢と考えられる。頭部は括れ、胴部上半に最大径を持つプロボーションの土器である。波状部には貫通孔が開き、口唇部は内面、外面直下に陵を持つ。胴部には地文に附加条縄文（軸は不明）が施文され巻き付けられた縄はL字である。頭部は丁寧に掠でられた上に沈線、盲孔により波状部間を二区画づつ合計六区画に分割しているものと考えられる。それぞれの盲孔下には「藤手文」が施文されている。No 4、5は類似し

た胴部文様を持つものと考えられる。No 5は口縁部破片で、No 2の口縁部形態に類似している。口縁部は波状口縁を呈する。波頂下には盲孔を穿つ。頸部は無文で胴部との区画で横位の沈線が巡っている。波頂下には継に沈線、その下端には盲孔が穿たれているようである。そして盲孔を中心として、懸垂文が左右に下垂して、地文はNo 4がL |長、No 5がL |;である。No 4には炭化物付着帯が見られ、No 5の調整痕の凹みにも炭化物の付着が認められる。No 6も同時期のものである。No 7、8は縄文時代前期前半の土器であり胎土に纖維を含む。

#### 遺構外出土土器（第11・12図）

##### 縄文時代前期前半（第11図No 1～10）

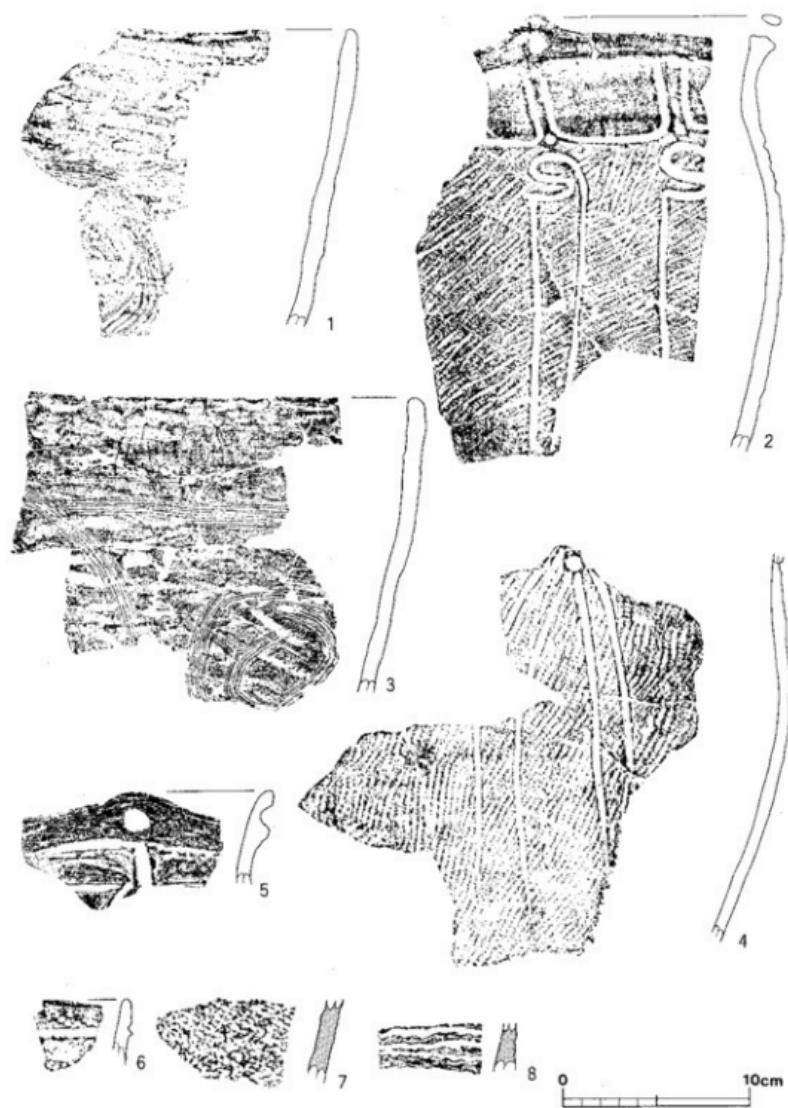
前期の遺物は第10トレンチより出土しているものが多い。No 1、2は口唇上に平坦面を持ち、直口して開く器形を持つ。No 3は口唇部が舌状をなす。No 1、4、5、7～9は器面に単軸絡条体による施文がされるもので、No 1、9は2本組の撚り日紐を軸に巻いたものである。それぞれR撚りのものを巻いている。No 4、5、7～9は1本の撚り紐を軸に巻いている。LとRの2種の撚り糸を使用している。同種のものはおおむね単軸絡状体la類の木目状撚糸文である。No 6はヘラ状工具による格子目文が施文されている。No 5の外面は赤褐色を呈し、内面には炭化物の付着物が見られる。No 10は外面にR |七とL |長による羽状縄文が施文され、胎土に含まれる纖維の量は非常に少ない。

##### 縄文時代前期末葉～中期初頭（第11図No 11～12、14～19、第12図No 54）

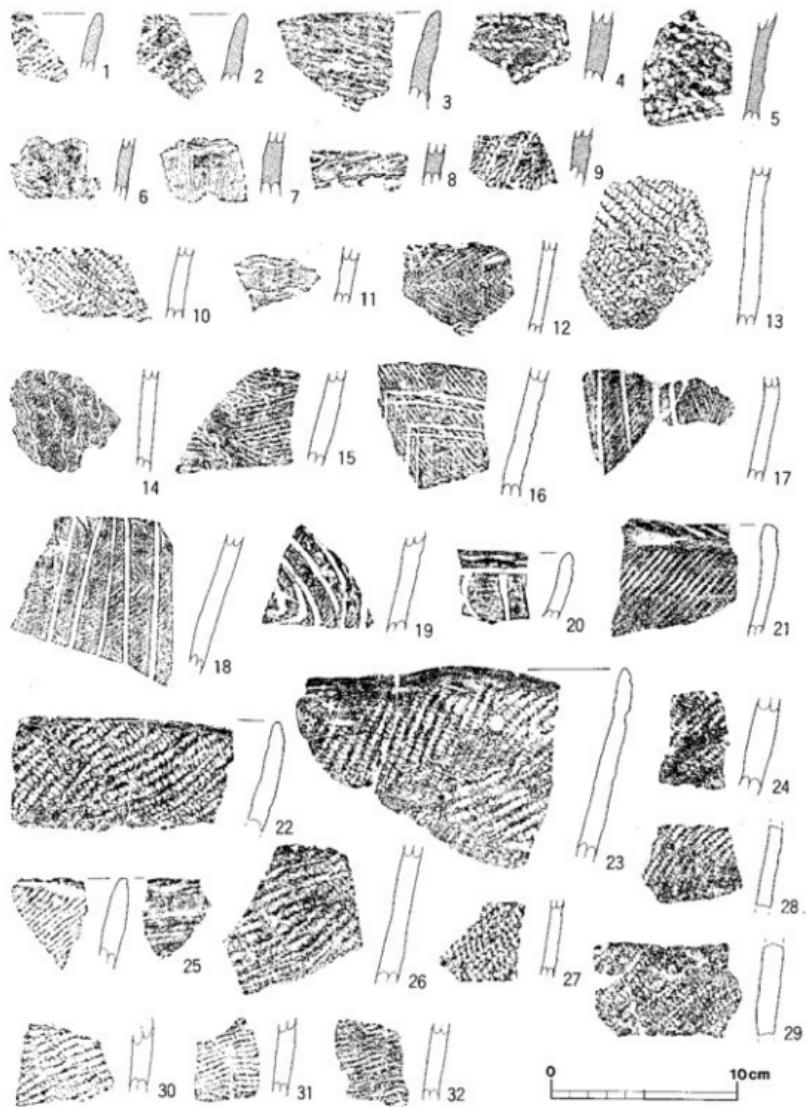
No 11、14～15はS字状の結節回転縄文が施文されている。No 11は横位回転、No 14、15、54は縦位斜位回転による施文である。No 12はR |七とL |長の結合による羽状縄文である。No 16～19は縄文を地文として沈線が施文されている。沈線はNo 16のみが半蔵竹管状工具内側による平行沈線であるが、他の沈線は1本単位の沈線であり竹管状工具外側による施文である。No 54の底面には網代痕が見られる。全体的に胎土には砂粒や石英、長石粒が多く含まれ、ザラザラした感触がある。No 17の外面、断面には炭化物の付着が見られる。色調は橙色や明褐色のものが多い。

##### 縄文時代後期前葉（第11図No 13、第11・12図No 20～53）

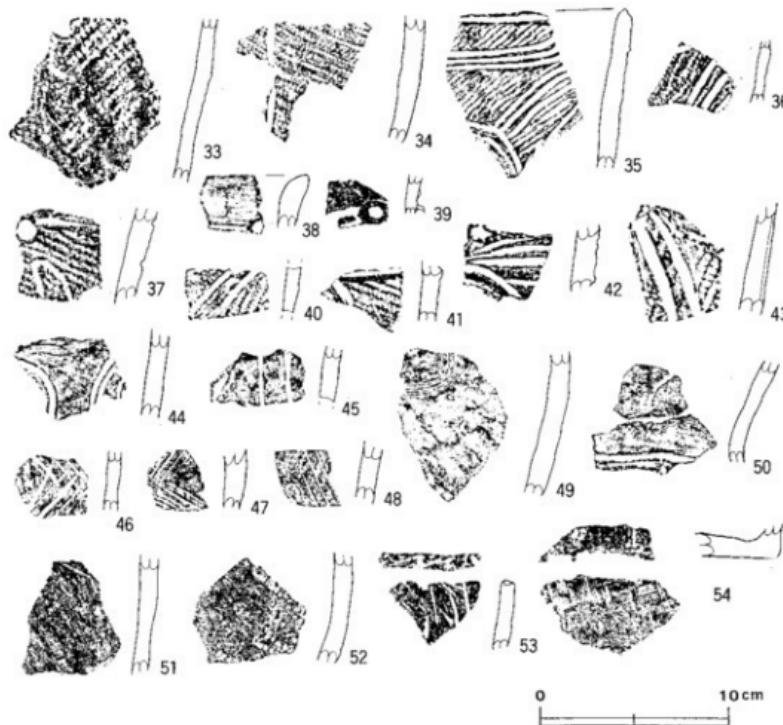
出土した土器は人別すると縄文のみが器面に施文されるものと、地文に縄文を施文しその上に沈線によりモチーフを描いているものである。前者は、第11・12図No 13、21～33があげられる。地文に施文される縄文はL |長が極端に目立つ。縄文は節の大きなもの（第11図No 22、23）や節の細かいものがある。No 21は口唇内面に緩い陵を持ち口唇上には斜めの刻み目が施される。No 23は緩やかな波状口縁を呈するようである。器面の一部には焼成後に盲孔が開けられている。No 33は胴部下半と考えられ、一部縄文が磨り消されている。第12図No 34～50、53は沈線によ施文がなされるものである。No 35、38は口縁部破片である。No 35は波状口縁を持ち、口縁部が開く深鉢と



第10図 第1号土坑出土遺物

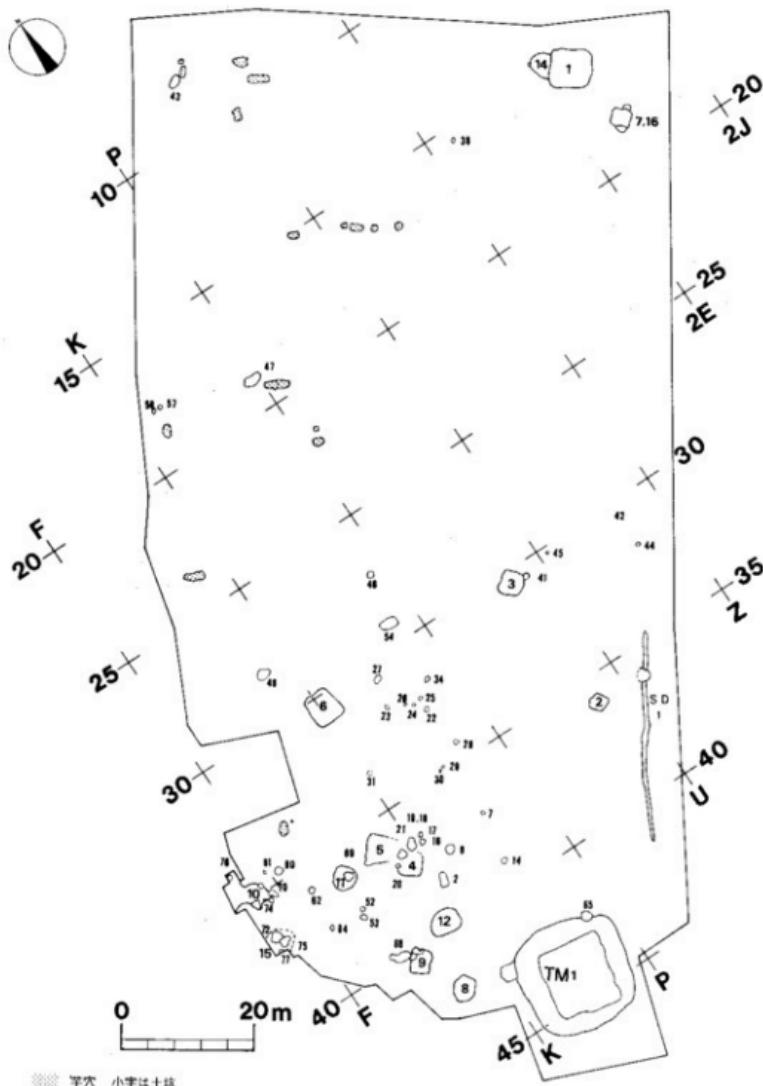


第11図 遺構外出土遺物（1）



第12図 遺構外出土遺物（2）

考えられる。地文に「」縄文が施文された後、口唇上に一条の沈線が巡る。器面には三条単位の集合沈線が波頂部を中心として斜位に施文されている。それらの沈線は弧状のモチーフに連結する。No38は内側に陵を持つ口唇部で、横位の線と盲孔が見られる。同様な施文が見られるものとして、No37, 39, 42があり、いずれも口縁部もしくは頸部付近に沈線が巡りその一部に、直接盲孔が施されるか、貼付文として盲孔が施される（No39）。この盲孔が施文される部分にはNo37のJ字状文やNo42、41の懸垂する沈線が施されるようである。No36, 40, 43の沈線内は磨り消されている。No44～49は沈線により曲線文、矢羽根状文等が描かれている。No53は上部断面に刻み目が見られる。胎土には砂粒が多く含まれる。断面の観察によれば、器面から数mmは器面同様の胎土色調であるが、内部は黒褐色を呈するものが多い。



第13図 壱杯清水西遺跡全体図

### 第3節 壱杯清水西遺跡

本遺跡は、南へ延びる小舌状台地の先端に位置し、調査面積は11,000mである。東側の谷には川尻川が流れ、北東300mに水源がある。標高は約25~26mを測り、ほぼ平坦な台地上から旧石器時代から近現代にかけての遺構、遺物が発見されている。旧石器時代は石器や剥片が調査区の南端を中心に出土した。縄文時代は本遺跡の中心となる時代で、前期と思われる住居址12軒、土坑40基が検出された。遺物は早期から中期初頭にかけての土器片や石器が遺構や包含層中から大量に出土した。特に前期が多い。弥生時代では後期の住居址が1軒、古墳時代は前期の方形周溝墓が1基検出されている。平安時代は住居址が3軒検出された。

#### 1 旧石器時代

##### 第1号方形周溝墓周溝覆土出土の石器群

###### (1) ナイフ形石器（第14図No 1・2）

No 1はやや幅の厚い縦長剥片を素材にして二側縁加工を施している。調整加工は主要剥離面からのみ施され、基部調整は側縁に比較して更に急峻な角度で行なわれ、気持外反している。平面形は左右非対称になっている。断面形は厚みのある台形状を呈し、刃部上方には刃こぼれが観察される。また、刃部先端と基部先端を欠損する。なお、主要剥離面の打点は先端部の方にあるが、左側縁の調整加工によって残置されていない。No 2は薄手の縦長剥片を素材に、二側縁の表面のみに急峻な角度で調整加工がある。刃部と反対側の側縁はきれいな弓なりで、平面形は左右対称形に近いが、先端部よりも基部が尖っている。刃部を大きく欠損するが、薄くて鋭いが短い点に特徴がある。なお、主要剥離面の打点は基部の方にあるが、左側縁の調整加工によって残置されていない。No 1・2とも頁岩製である。

###### (2) 細石刃核（第14図No 3）

No 3は单設打面から約半周程度にわたって長さ2cm、幅0.5cm前後の剥片剥離作業が行なわれている。打面は一部を除いて平坦で節理面を利用している。形態的には円錐形細石刃核に近いものである。黒曜石製である。

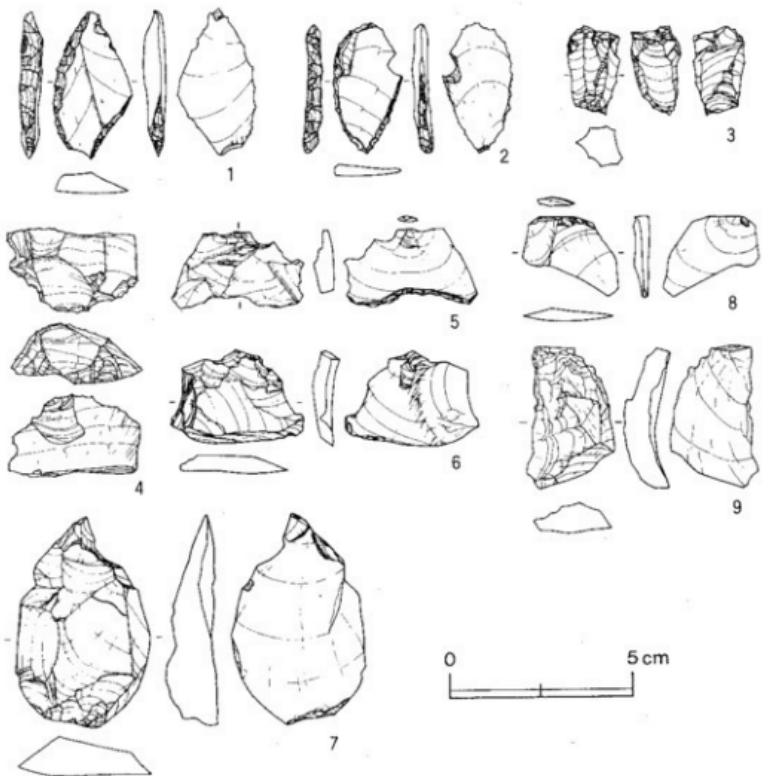
###### (3) 挿器（第14図No 4）

No 4は厚手の縦長剥片の分割剥片を素材として、主要剥離面からの急峻な二次加工を約半周させたものである。その二次加工は全体的に鋸歯状を呈し、鋭いスクレイパー・エッジを作出している。背面には縦長剥片の分割以前に、剥片剥離作業が対向からなされたことが窺え、この厚手

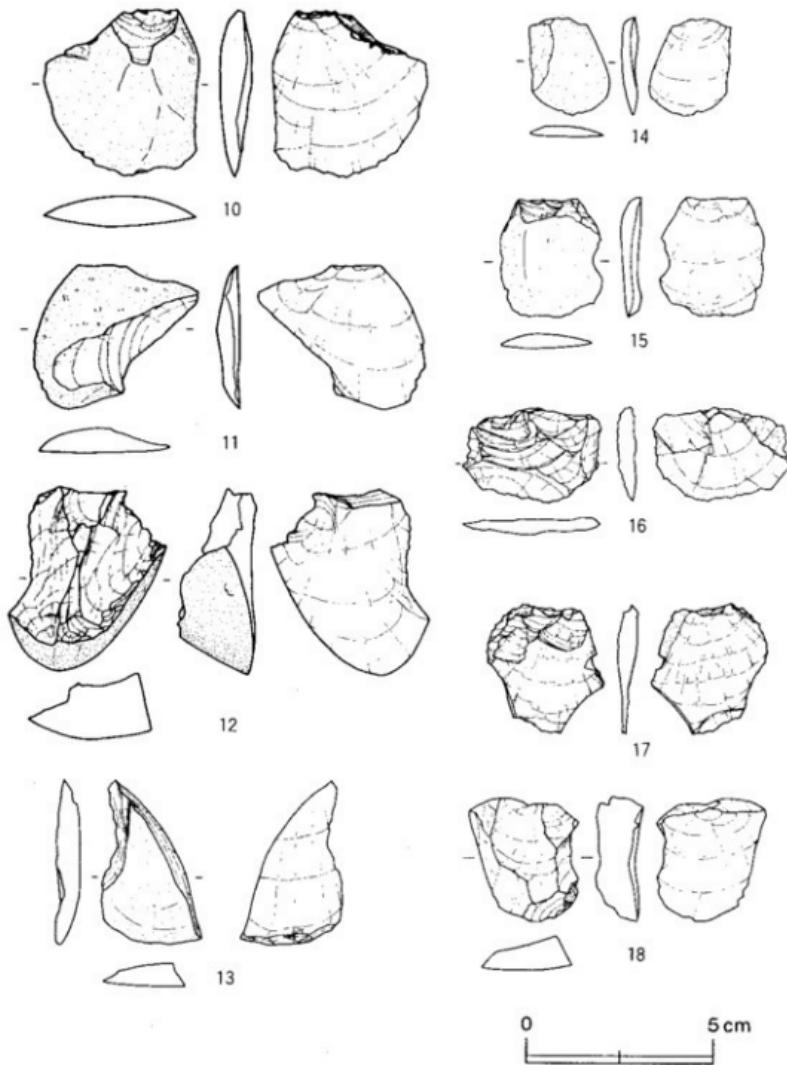
の縦長剥片は両設打面を有する石核から剥離された可能性が高い。凝灰岩製である。

(4) 剥片 (第15図No 5～9)

No 5・6はどちらも打痕を残置した二次加工を有する剥片である。特にNo 5は背面からの急峻な調整加工によって抉り込みが作出され、スクレイパーに近いエッジを有する。7は石核から新たな打面や作業面などの作出のために剥離された剥片と思われる。No 8・9は調整剥片であろう。No 5～9まではいずれも頁岩製である。



第14図 旧石器時代遺物 (1)



第15図 旧石器時代遺物（2）

### 包含層出土の旧石器

#### (1) 剥片—黒色緻密質安山岩—（第15図No10～18）

総数は10点を数える。No10～18の石質はいずれも黒色緻密質安山岩であるが、同一母岩から剥離されたかは不明である。No10・11・14・15は背面に大きく自然面、主要剥離面には明瞭な打点を残置する剥片で、No12・16～18は背面に打撃方法の異なる剥離痕がいくつか残置する剥片である。いずれの剥片も調整加工などは施されておらず、母岩から石核を製作する過程の第一工程として考えられる自然面排除作業によって生じた調整剥離と思われる。それを裏づけるようにすべての剥片の背面には前段階の剥離痕が残置しており、特にNo16～18の背面はある程度の自然面排除作業が進行した段階での剥片剥離を示し、作業の進行に伴なって打面が新設されていく過程をそれらの交錯する剥離方向から看取できる。尚、No13・17には周辺を切斷した痕跡が観察される。

## 2 繩文時代

#### (1) 住居址・柱穴列・他

##### 第3号住居址（第16図）

本住居址はS-30区・T-30区を中心に確認された。東壁コーナーは41号土坑と重複している。平面は方形を呈し、規模は3.57×3.4m、深さ0.17mを測る。主軸方位はN-50°-Eである。床面は軟弱で不明瞭である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認されなかった。

Pitは11ヶ所検出され、深さは0.2～0.3mと浅いものが多い。

覆土はローム粒を含む暗褐色、褐色土である。

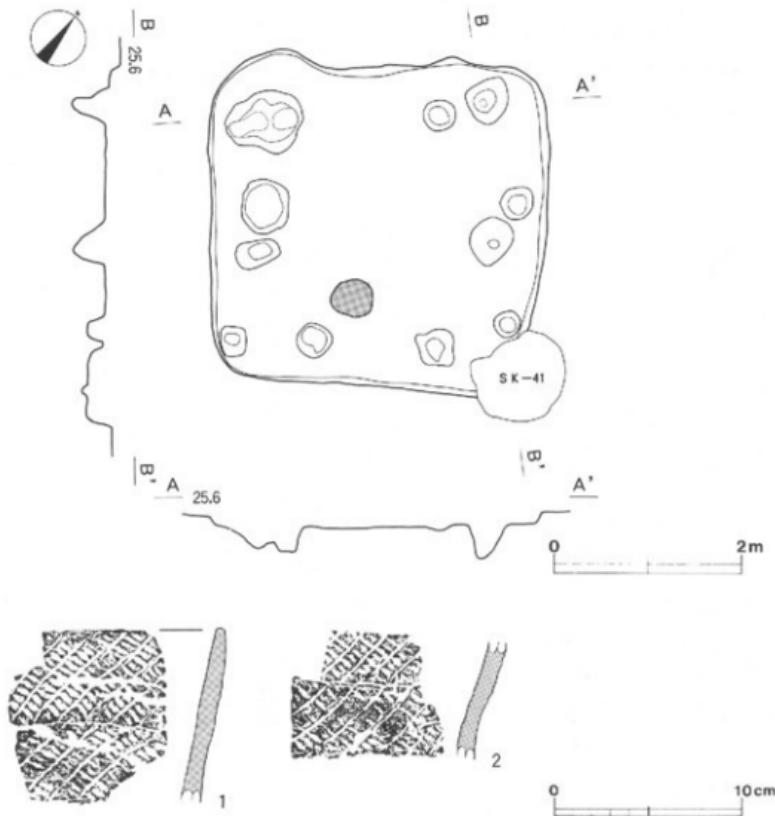
かは住居の南東側で検出された。規模は0.4×0.3mでわずかに床を掘り込んでいるが、炉床はあまり焼けていない。

##### 出土土器（第16図）

No2はR-33区出土の遺物であるが、住居址出土のNo1と同一個体と考えられるため同じく住居址出土遺物とした。他にも覆土中からの遺物はあったが、拓本を取り得るものはなかった。本住居址は、他の住居址に比べて遺物の出土量は少なく、遺構として認定後に出土した遺物の重量は323gであり、その内訳は繩文時代前期前半207g、前期末～中期初頭59g、中期前半57gとなる。

No1は口縁部破片であり、頸部よりやや外反し直行して口唇まで開く。口唇部は平坦面を有す。器面にはR+L+r附加条2種が横位に施文される。器面上への施文は3単位見られ、下部から口唇に向けて施文を繰り返しているようである。器面の中心付近に別原体（附加条のrがほどけないように縛り付けたもの）結束による横位の結節文が見られる。この原体はrと思われる。No2は、頸部と思われる若干括れる部分と胴部の緩い丸味を持つ部位が見られる。2単位の施文が

上下する。附加条の軸となるR↓↓原体の条の動きから、器面左より右へ回転したものと思われる。粘土中には纖維を多く含み、断面の観察によれば、器面から内側各1mm位とその内側とでは粘土が異なるようである。内面は、一部丁寧に磨かれている部分が残るほかは荒れている。器形は胴部に緩い張りを持ち、頸部で緩く括れ、口縁部が外反しながら直行するものと思われる。



第16図 第3号住居址・出土遺物

第4号住居址（第17図）

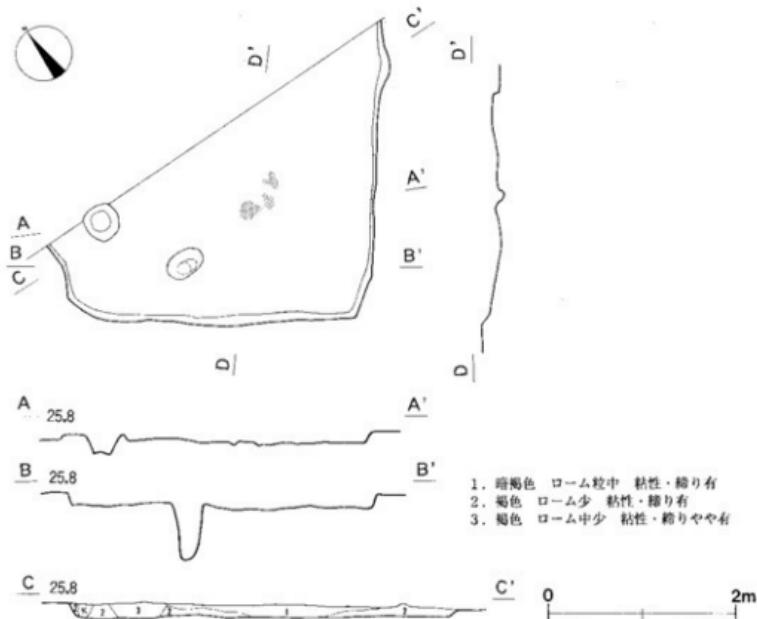
本住居址はJ-37区を中心に確認され、北東には5号住居址が位置する。住居北半分はトレンチや16~21号土坑と重複し、依存状態は悪い。

平面は方形を呈すると思われ、現存する規模は $3.5 \times 3.2m$ 、深さ $0.16m$ を測る。主軸方位はN-40°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床は軟弱で北側がやや高い。壁溝は確認できなかった。

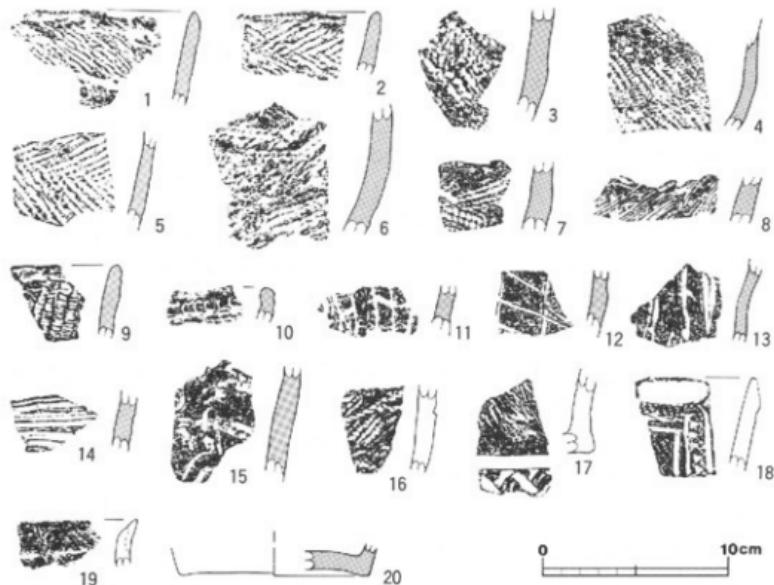
Pitは西寄りに2ヶ所検出された。P1は $0.35 \times 0.4m$ 、深さ $0.2m$ 、P2は $0.4 \times 0.26m$ 、深さ $0.6m$ を測る。

覆土はローム粒を含む褐色土である。

炉は近接して3ヶ所検出され、炉1は $0.3 \times 0.25m$ 、炉2は $0.2 \times 0.15m$ 、炉3は $0.2 \times 0.15m$ を測る。いずれも炉床はあまり焼けていない。



第17図 第4号住居址



第18図 第4号住居址出土遺物(1)

#### 出土土器（第18図）

本遺構からは1,372gの前期前半の土器、154gの前期末～中期初頭の土器が出土している。遺構出土の土器片重量の中で前期前半の土器がほとんどを占めるが大型の破片はない。No 1～15・20が前期前半で、No16が前期末であり、No17～19は中期初頭である。

No 1・2・9・10は口縁部破片でありNo 1・2は縄文地文のみのもので、口唇部が舌状になっている。No 9・10は口唇部が丸く外そぎ状の形態をとり、No 9は平縁と考えられNo 10は若干内済する波状口縁であろう。No 9の口唇下には有節沈線が一条、No 10は二条巡る。No 6～8は胴部破片であるが、器面には単軸絡条体による施文が見られ、No 7・8は単軸絡条体1類、縄はNo 7がL、No 8はrを使用している。No 6は単軸絡条体1A類でR、Lを1組みにして施文している。No 11～15は沈線が施文されるものであり、No 11～13は単沈線であり、No 14・15は半截竹管状工具内側による平行沈線である。No 20は上げ底の底部片であり外面にはし | 裂回転縄文が施文されている。以上の繊維を含む土器の中でNo 3・5・6・8・20は繊維の混入率が少なく、砂粒の混入が目立つ。No 16は口縁部付近の破片と考えられ、L | 裂の縄文原体側面圧痕や同原体による回転縄文が施文さ

れる。No17～19は同様な胎土組成を持つもので砂粒（中でも石英粒）が多く含まれザラザラした感触を持つ。No17は器面にL |長縦回転、No18は地文にR |上、沈線や隆起線に沿って三角彎刻文が施文される。No19はL |長のS字状結節文である。

#### 出土石器（第19図）

1は磨製石斧で素材は剥片である。全体の研磨は刃部に対して平行になされ、いくつかの研磨面を形成している。刃部は片刃で研磨は作業方向と平行になされ、それを裏付けるように刃部に打撃痕が観察される。部分的に素材剥片の調整加工痕が残置されている。結晶片岩製。

2は磨製石斧片を扁平かつ方形に丁寧に加工したもので、形態等から小形磨製石斧の素材と考えられる。一部に磨製石斧であったことを示す研磨や敲打痕が残置されている。結晶片岩製。

3はいわゆる乳棒状磨製石斧である。側面が明瞭な稜線で画されておらず、断面形が楕円形を呈する。また、器面には敲打による整形痕が広く残置され、一部には凹部が存在し、刃部の研磨はその凹部の形成後になされていることから、凹石や敲石からの再利用とも考えられる。刃部は両刃で丁寧に研磨が施されている。頭部には表裏に同一方向からの剥離痕が観察され、着柄に伴う整形や衝撃痕と考えられる。結晶片岩製。

#### 第5号住居址（第20図）

本住居址はI-35-36区、J-35-36区で確認され、西に11号住居址、南東に4号住居址が隣接している。

平面は不整方形を呈し、南東は削平されている。また、西コーナー付近は搅乱を受けている。規模は3.8×4.6m、深さ0.4mを測り、主軸方位はN-45°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、床面は軟弱で、わずかに西側へ傾斜している。

Pitは3ヶ所検出された。規模は径0.25m前後、深さ0.45～0.6mである。

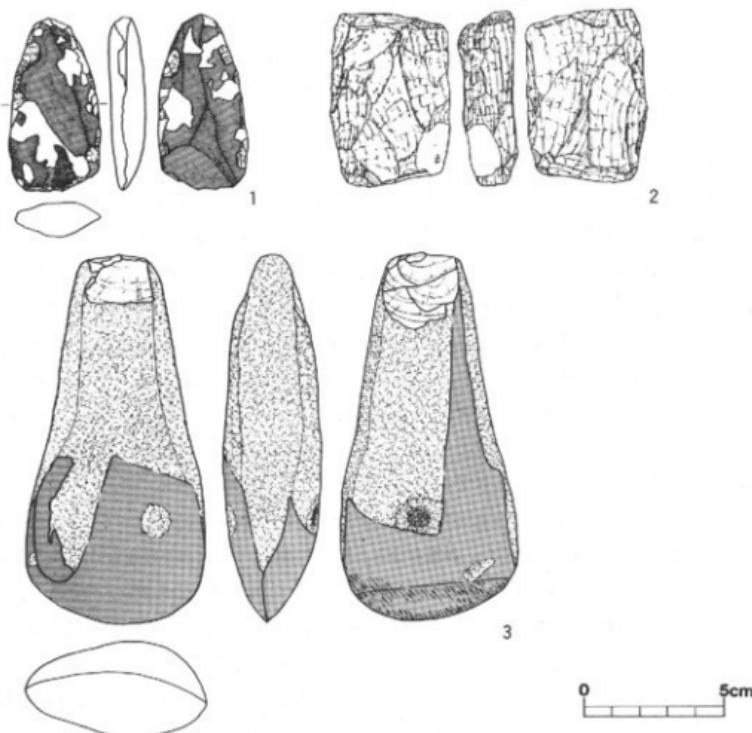
覆土は径2～3mmのローム粒や、5mm前後の黒色土塊を含む褐色土である。

炉は南西壁に寄り、P2、P3間に位置する。規模は0.4×0.35mである。

#### 出土土器（第21・22図）

本住居址からは2,941gの土器が出土し、その内訳は前期前半2,600g、前期後半176g、前期末～中期初頭165gである。

No1～8・11～12は縄文原体による回転縄文が施文されたものである。No1は口縁部及び底部が欠損しており、器面には単輪絡条体1類Rの縦回転の施文がなされている。胴部下半部より急にすぼまり、その変換点付近には粘土貼り付け痕が残る。急にすぼまる部分には不明瞭ながら無節縄文が施文され、その上に半截竹管状工具による平行沈線が横位に施文される。同部分には単輪絡条体施文が及ばず、区画の意味を持つものと思われる。同個体は住居址中のpit 1西方より



第19図 第4号住居址出土遺物(2)

横位に潰れた状態で出土し、床面より約5cm浮いている。No.2はL「巻」が横位回転され施文されたものである。施文された縄文は1条おきに施文が深いものと浅いものが見られる。破片下部は被熱を受けたらしく赤色化している。また、断面においても、胴部においては胎土色調の変化が起っている。胎土には纖維が含まれる。裏面には指頭圧痕による凹凸が見られる。No.3～6・8はR「巻」縄文原体が横位回転されたものである。No.3は口唇端に平坦面を持つ口縁部土器片である。No.4は口唇端に丸味を持つ。No.5はR「巻」の節が粗大であり、下部表面が赤色化しており、被熱しているようである。No.6は胴部に膨らみを持ち、頸部で括れて外反するものと思われる。表面及び断面の観察によれば、全体的に丁寧な作りといえる。器面上内外の1mmは上塗りの土となっている。やはり下部は被熱のせいか変色し、もろくなっている。No.8も同様に被熱しているよう

である。No 7・12は羽状縄文が施文された土器片である。No 7は別原体L | 番、R | 番による施文が施され、先にL | 番が施文されている。No 12はR | 番とL | 番の結束によるものである。内面は磨かれ、指頭圧痕が一部に見られる。No 13はR | 番縄文原体による異条縄文のもので原体は太めのものである。内面は非常に丁寧に磨かれている。No 9・14・15は口唇下に半截竹管状工具内側による施文がなされる。No 9は崩れたコンパス状文がR | 番縄文施文の上に描かれる。No 14は短い平行沈線が一定間隔をあけてR | 番縄文の上に施文されている。No 15にはほとんど刺突に近いものが上下2重にL | 番地文上に施文されている。それぞれの口唇端は平坦である。

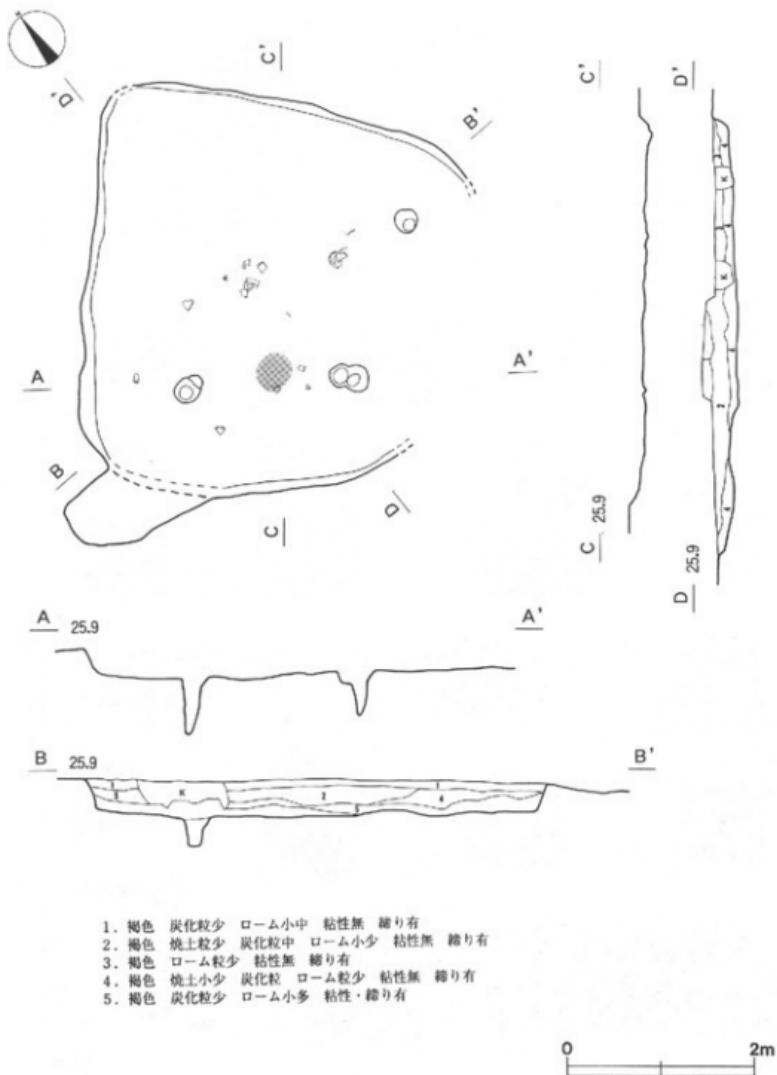
No 11・16～18・20・21は縄文は施文されず、沈線のみ施文されている。No 16・17・18は格子目文が半截竹管状、ヘラ状工具によって描かれており、No 17は均整のとれた格子目施文後に横位の巾の広い沈線を右から左に引いている。No 14・20・21は器面上に半截竹管状工具により崩れたコンパス状文を横位に施文している。No 11・20は口縁部破片であり、No 11は波状を呈するが、No 20は平縁と思われる。No 21は2種類のコンパス文の施文を用い、一方は引きずり、他は刺突するように施文している。文様は右から左へ施文している。No 19はNo 5・No 9と同一個体と考えられる胴部であるが、口縁部と同様のコンパス状文が横位施文され、区画の意味を持つものと思われる。No 22は口縁部の破片であろうが、平行沈線及び単沈線を用い、縱、横の区画を行なっている。No 27は底部片であり、底面上がやや膨らむ。繊維を含み、器面には短い平行沈線が幾条も引かれている。胎土の赤褐色化が表面より厚さ2／3まで及ぶ。No 23～26は、前期前半から前期末の土器で、胎土には繊維が含まれない。No 23は口縁部破片であり、口唇下に平行沈線が引かれ口縁部文様帯を構成する。文様帯中には綴位の平行沈線が引かれ、肋骨文状の文様が描かれる。No 24は半截竹管状工具による刺突文、崩れたコンパス状文が横位に描かれる。裏面には稜を持つ。No 26は半輪縫条件R原体による横位施文の土器である。No 25はL | 番の結節縄文が横位に施文される口縁部であり、口唇部は尖っている。

岡化した遺物の出土状況は壁より1m位内側に入った地点より出土したものが大半である。

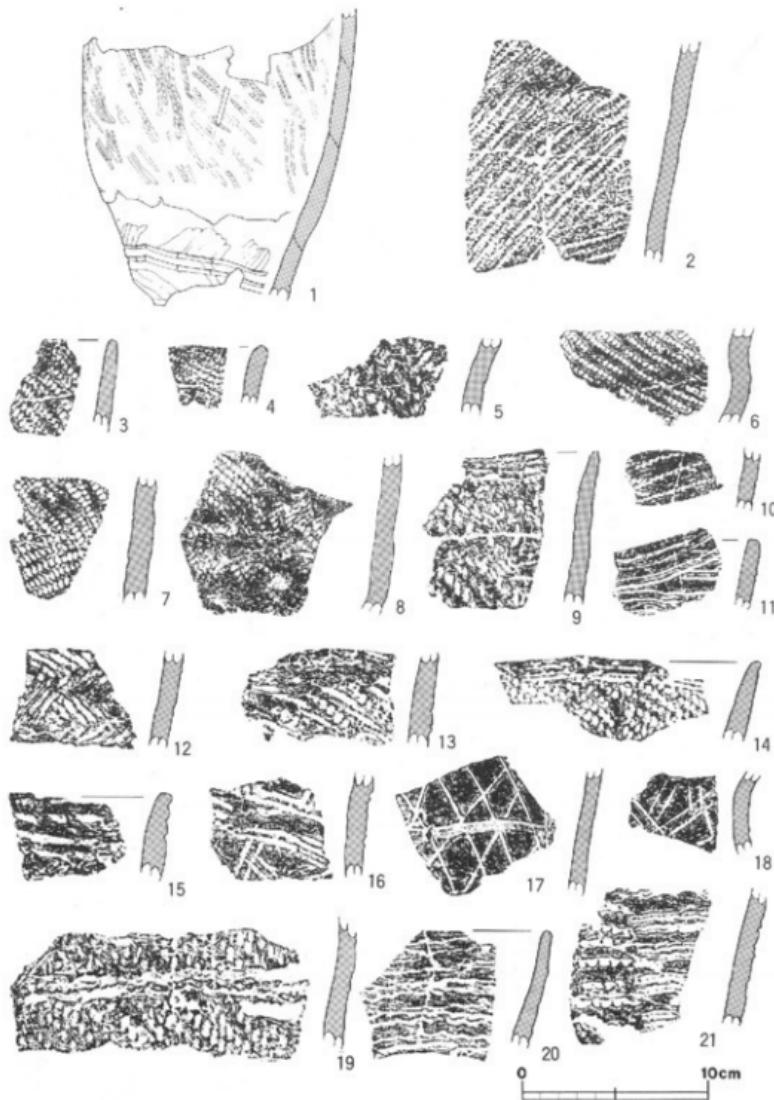
繊維なし土器については皆覆土中一括のものである。

#### 出土石器（第23図）

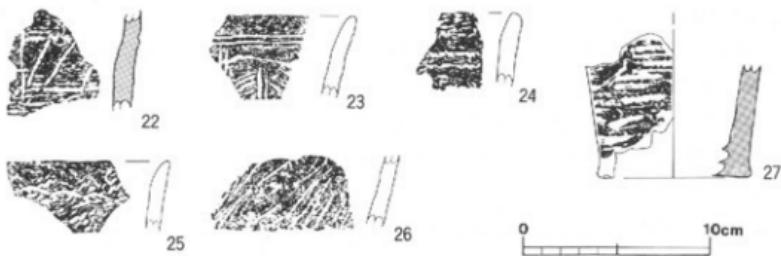
1は磨製石斧で素材は幅の厚い剥片を使用する。形態はいわゆる楔状で片刃である。部分的には研磨以前の剥離痕が両面に見られ、刃部には微細な線状を呈する使用痕が観察される。結晶片岩製。2・3は磨製石斧である。2は小形で側面には明瞭に稜線が作出されており、断面形が長方形のいわゆる定角式石斧である。刃部は両刃で、器面は全体に研磨され、面的な研磨面として画されている。また、一部に敲打や剥離による整形痕が観察される。結晶片岩製。3は側面の稜線ははっきりと作出されておらず、刃部は両刃でも非対称である。これは刃部の欠損による再加工によるものと考えられる。頭部は大きく欠損しているが、再加工の痕跡は見られない。器面の一



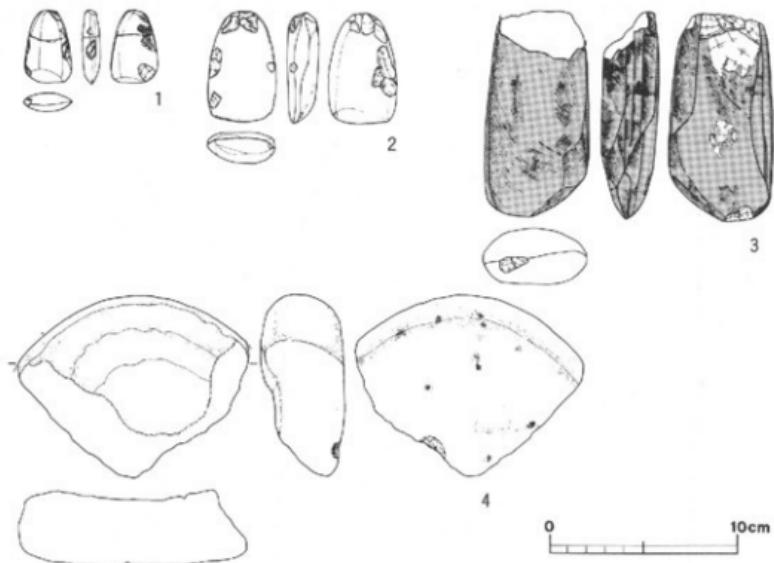
第20図 第5号住居址



第21図 第5号住居址出土遺物(1)



第22図 第5号住居址出土遺物（2）



第23図 第5号住居址出土遺物（3）

部には研磨以前の剥離による整形痕が残置されている。結晶片岩製。4は原形の半分以下の石皿片と思われる。片面のみ使用されており、使用面は緩やかな凹みを呈している。その裏面には著しい敲打痕による凹部が観察される。安山岩製。

第6号住居址（第24・25図）

本住居址はK-30区を中心に確認された。平面は方形を呈し、規模は $5.7 \times 4.5m$ 、深さは0.2m、主軸方位はN- $2^{\circ}$ -Wを測る。

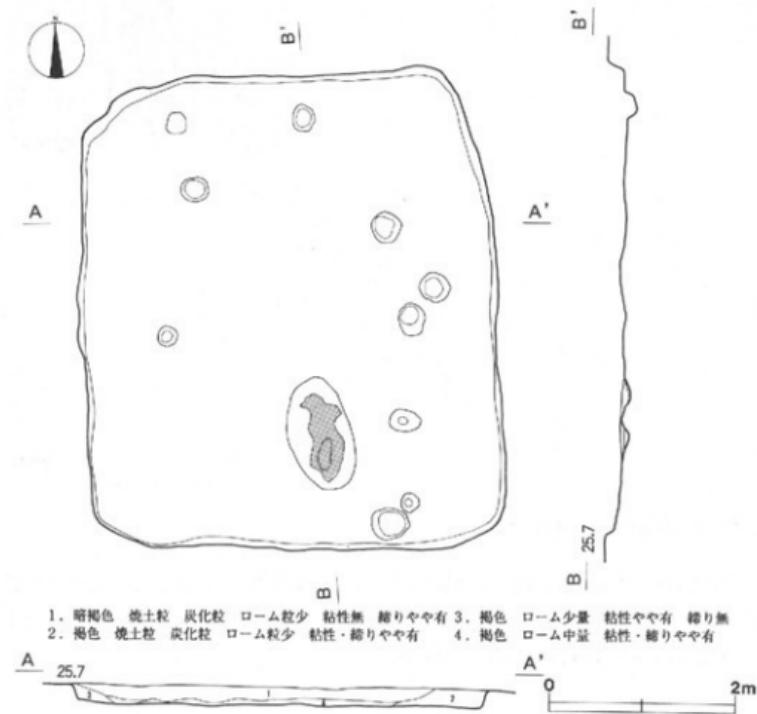
壁は垂直に立ち上がり、床はほぼ平坦でやや硬い。

Pitは不規則に10ヶ所検出された。径0.3m多く、深さは0.1~0.5mを測る。壁溝は確認されなかつた。

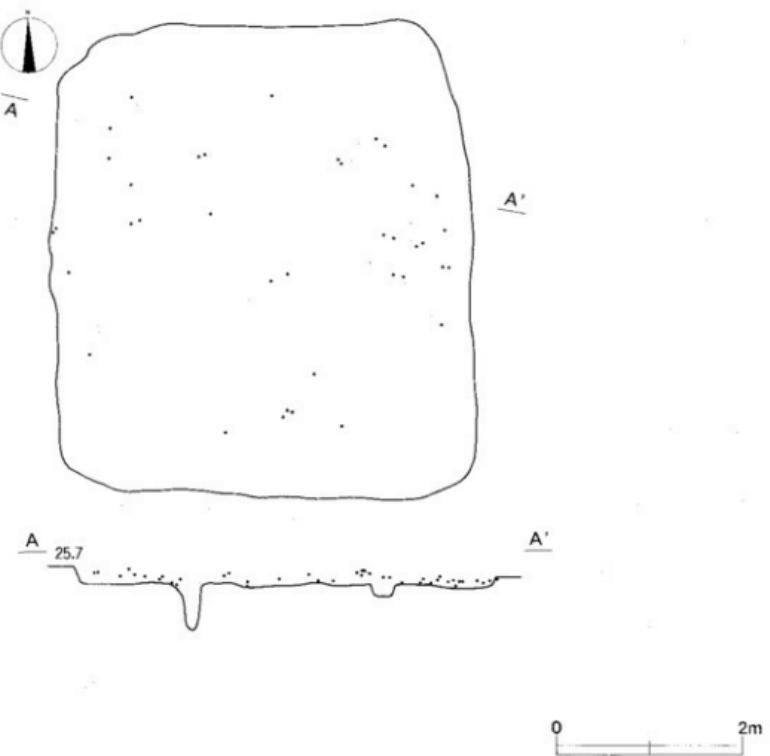
覆土は、炭化物、ローム粒を含む暗褐色土、褐色土で、他の縄文の住居址よりやや暗い。

炉は住居の南側で検出された。平面は梢円形を呈し、規模は $1.2 \times 0.7m$ を測る。主軸方位はN- $7^{\circ}$ -Wである。底面は火を受け、赤化している。

遺物は縄文前期初頭から中期前半まで多量に出土した。総重量は5,550gを測り、本遺跡の住居の中で一番多い。時期は前期前半が90%を占める。



第24図 第6号住居址



第25図 第6号住居址遺物出土状況

#### 出土土器（第26・27図）

6号住居址出土の土器は、住居址として認定した後の重量として約5kgを超え、住居址認定前におけるグリット一括の土器を含めると約13kgに達する。前期前半の土器が出土量の大半を占め、前期後半から中期前半の土器も出土しているものの、前期前半の土器の量とは比較にならないことが分かる。ただし前期前半とそれ以外の時期の土器との出土量比割合で言えば、住居址認定前と後では変化が見られる。すなわち住居址としての認識を持った後は前期前半以外の土器の割合は低下している。前期前半の土器の地文の種類で目立つものをあげると縄文では、単節縄文の土

器片が目立つ。単節縄文のなかでも、L |長よりR |七の燃り方が多く、無節縄文ではL |七燃りの方が多い。結束縄文は、無節縄文を結束させたものが多いようである。他の縄文原体では、単軸絡条体1A類原体により施文されたものが目立つ。

縄文以外の文様要素で比較的多いものは、半截竹管状工具を使用し平行沈線、格子目文様を施文したもの、及び単沈線により格子目文を描いたものである。

遺物の出土状態は、一個体の1/3の大きさのものが見られ、住居内でもK-30区内に収まる範囲内で出土し、床面より浮いた状態で出土している。他の細かい遺物に関しては中央部よりも壁寄りの部分で多く出土している。

第26図No 6~10・13は単節縄文及び無節縄文により施文されているものである。No 6~9は深鉢の口縁及び胴部であり、原体はL |長縄文が使用される。L |長縄文の中には、条が重なりあっているもの（No 8・9）、条間が開くもの（No 6）、0段多条と考えられるもの（No 7）が含まれる。これらは胎土中に多量に纖維を含み、土器器表面には化粧土を塗っている。ほとんどのは平滑に磨いている。

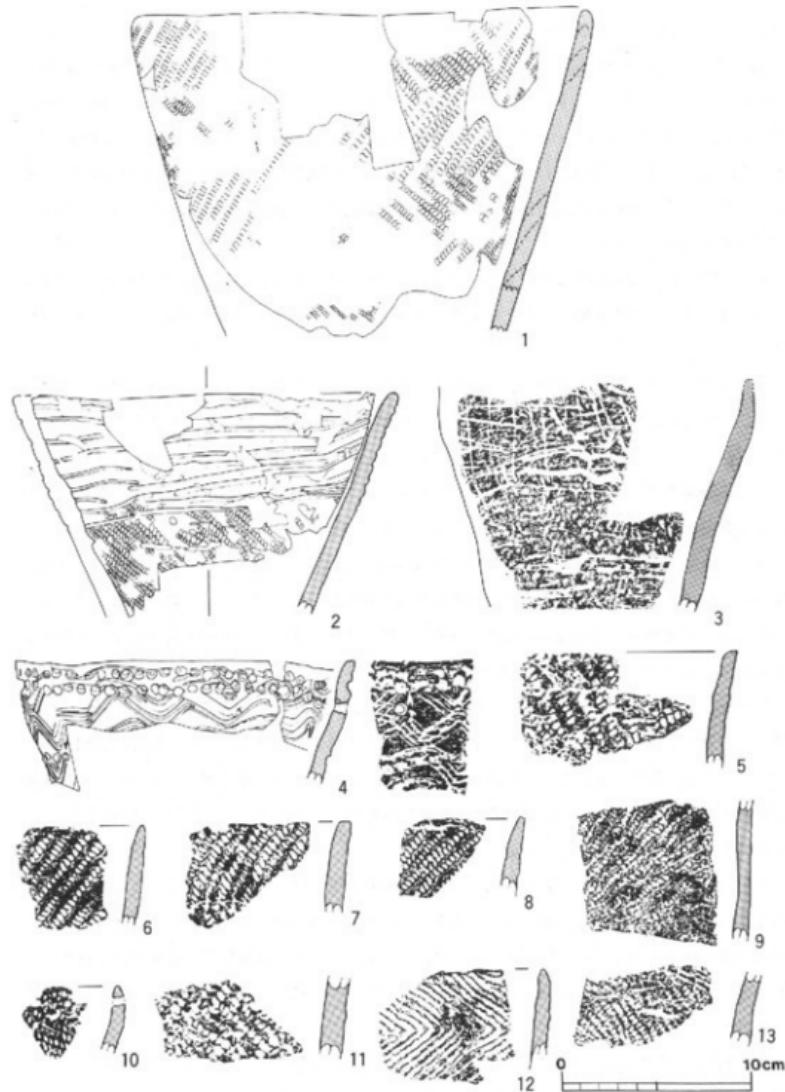
No 10・13にはR |七縄文が施文されている。No 10には焼成前の穿孔がなされ、No 13には縄文地面上に半截竹管状工具による有節沈線が横位に施文される。胎土はNo 6~9と同様である。

第26図No 1、5、1~12は羽状縄文を呈するものである。No 1・5・12は口縁部破片であり、No 1については口縁を復元することができた。推定長径は24.5cm、胴部から口唇にかけては直口する。器面にはR |七、L |長縄文原体による羽状縄文が施文される。これらR |七及びL |長原体はそれぞれ別原体であり、L |長原体の方が節が大きく条間が開く。羽状縄文は正位、逆位が用いられ菱形の文様となる。胎土には纖維、砂粒を多く含む。No 5は器面表まで纖維痕がみられ、不鮮明ではあるが節の大きく粗いR |七、L |長縄文が見られる。口縁は波状口縁を呈するようである。

No 12は丁寧な作りの土器で、口唇がやや内側に尖り気味になる。器面表には結束第2種による羽状縄文が施文されており、口唇端に及ぶ。結束部には燃りのほどけたI縄文原体による施文が見られる。内外面とも丁寧にナデられ、胎土には砂粒をほとんど含まない。No 11は結束節第1種R |七・L |長原体により羽状縄文を呈する。縄文の節は大きめで粗い。

第27図No 14・15は附加条縄文により施文されているものである。No 14は口唇が内側にやや尖り気味で、器面にはL |長+Lの附加条1種が施文されている。No 15はR |七の無節縄文が施文されている。末端はIの縄により結縛されている。

第27図No 16・18は単軸絡条体1類により施文されているものである。No 16は一部口唇部が残る。絡条体にはL縄文が巻かれており、単軸絡条体1A類の可能性もある。胎土内に石の粒等はほとんど見られない。No 18にはR縄文の条が4条見られ、一部には燃りがほどけている条が見られる。



第26図 第6号住居址出土遺物(1)

また上端には縄文の結束部が見られる。

第27図No17・19は単軸絡条体1A類により施文されているものである。No17の土器には、軸にRの撲糸を2本組にして巻き、縄の中央を繊維束により軸に縛り付けたものによって施文されており、施文方向は一定しない。胎土には多量の繊維が含まれる。軸の中心に見られる繊維束は、軸に穴を開けて縄文を縛り付けているようである。No19にも頭部の屈曲部下に単軸絡条体1A類による施文がなされる。縄文の原体は不明である。頭部には半截竹管状工具によるコンパス文が巡る。器壁は荒れている。

第27図No20は単軸絡条体5類により施文されているものである。No20の施文具は軸の上にまずL縄文を巻き、その上に傾きを変えてJ縄文を巻いている。胎土中には小石及び砂粒を含んでいる。

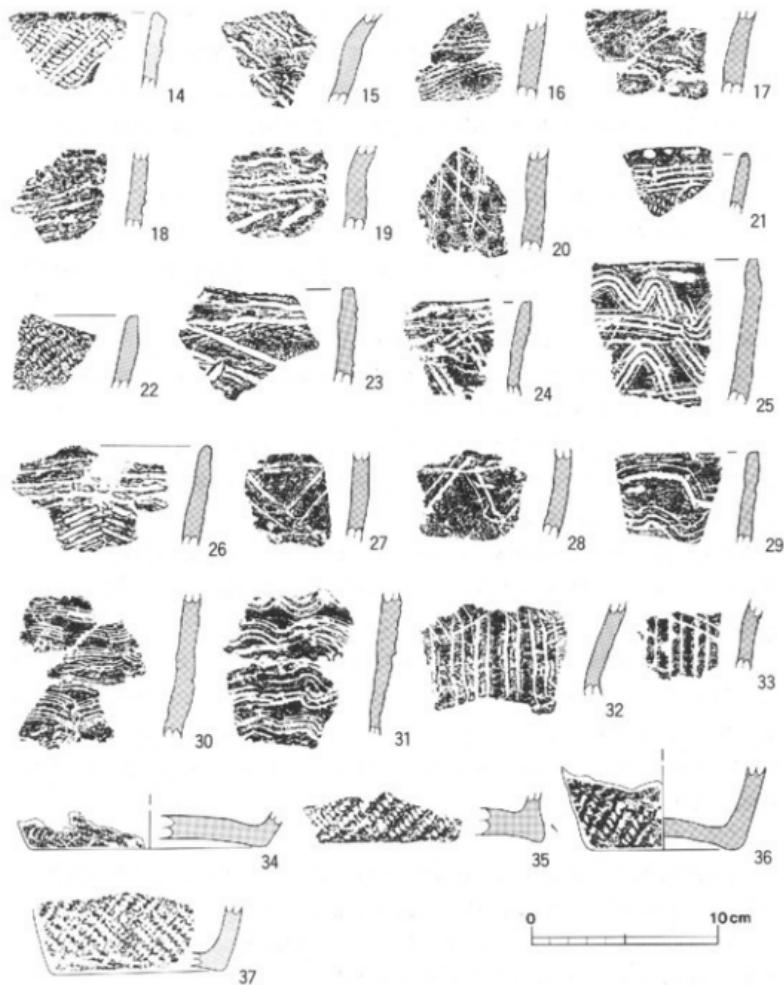
第26図No3は単沈線による格子目文が施文されているものである。口縁部は非常に緩い波状を呈し、口唇上には刻み目を持つ。胴部上半部には単沈線（一度に一本の線を引くもので平行沈線とは区別している）による雑な格子目が見られるが、下半部には格子目が全く見られず、R+J縄文のみが施文されている。先に縄文が施文されている。外外面には繊維痕が非常に多く見られる。全体的な器形としては、胴下半まではほとんどまっすぐ立ち上がり、上半部は外反する。

第27図No32・33は平行沈線及び櫛齒状工具による格子目文が施文されているものである。No32・33は同一個体であり、一部頭部と思われる屈曲部が見られ、その上部には半截竹管状工具により平行沈線が引かれる。口縁部は屈曲部より大きく開くようである。一部格子目状を呈する施文が見られる。胎土中には砂粒を多く含む。

第26図No2・第27図23・26は波状文が他の施文により区画されているものである。No2は大型の破片で口径を復元すると、20.6cmとなる。現存胴部下半部より口縁に向かって直線的に開く。上半部には半截竹管状工具により平行沈線が幾重にも引かれ、一部は緩く波うっている。平行沈線は縄文地文上に及んでいる。胴下半部にはR+J縄文が施文されている。胎土には繊維を含むが、堅敏で器面も丁寧にナデ、磨きが施されている。

No23・26は口縁部が波状口縁を呈し、口唇上には平坦面が作り出されている。口唇に沿って半截竹管状工具による緩い波状文・コンパス文が引かれる。胴部の文様としては平行沈線による山形の文様が施文されている。残存部のみでは山形であるが、本来は菱形である可能性もある。No23の地文には単軸絡条体1A類（Rの縄文を絡げたもの）の横位回転が見られる。内面は両土器とも磨かれている。

第26図No4・第27図24～25・27～31は崩れたコンバス状文が施文されているものである。No4は径を復元し得た土器である。直径は18.1cmを測り、口縁部は平縁をなす。口唇下約2cmのところには、焼成後に穿たれた補修孔が1箇所ある。補修孔は土器の表裏から孔を穿ったようであり、



第27図 第6号住居址出土遺物（2）

裏面からの孔は一度穿ち損ねている。器面の文様は、巾が4mm程度の半截竹管状工具により波状文を描いている。波状の波は一部不規則なところも見られる。規則的な部分では、上下の波状文は対称形となり、結果として菱形が描き出されている。波状文は半截竹管状工具を2つ一度に持って描くか、あるいは2回に分けて描いている。波状文上には口唇直下に円形刺突文が2列口縁に沿って巡り、さらに口唇から5cm位下の部分にも一列の円形刺突文が巡る。No31もNo4と同一個体であろう。

No25・30はNo4と同様に平行沈線による波状文が描かれる。No25は、口唇部近くで若干内傾する。一つの波状文は2本の半截竹管状工具を一度に持って描いているようである。上下の波状文の間には、波状文と同様の原体により平行沈線が横位に引かれる。波状文と横位の平行沈線では、波状文が先に施文されている。

No27・28は平行沈線により直線的な波状文が描かれている。No27には波状文の上下に同原体による横位の平行沈線が引かれる。No29には3本一組の波状文が描かれており、3本の内一番下の一本は太い原体による。口唇上には平坦な面を持つ。

第27図No21は地文に繩文が施文され、口唇直下に連続する施文がなされているものである。No21は口唇上に刻みが付され、口唇直下には半截竹管状工具による有節沈線が2本引かれる。

地文にはR |七繩文が施文されている。

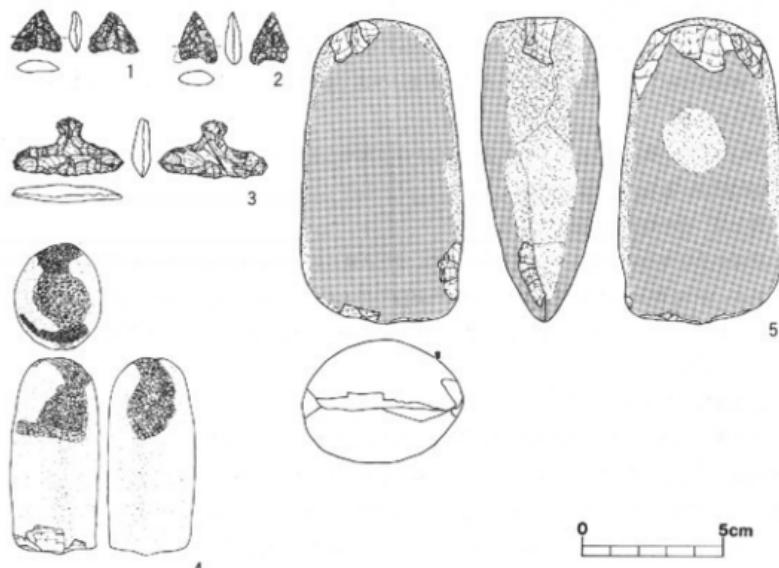
第27図No22は口縁部文様帶内を縦位に区画しているものである。No22は波状口縁を呈する口縁部であり、地文にL |長を施し、口唇に沿って円形刺突文が巡る。波頂部から下にも円形刺突文が施文される。

第27図No34～37は底部である。No34・36・37は径を復元したものである。径はそれぞれNo34が12cm、No36が8cm、No37が9cmである。底面の状態は、程度の差はある全て上げ底となっていて、磨かれており、赤褐色の色を帯びている。No34はR |七・L |七による羽状繩文をなし、No35・36にはL |長繩文が施文されている。No37にはL |長とR |七を組み合わせた結束第1種による羽状繩文が施文されている。

#### 出土石器（第28図）

1は凹基の石鑿で、両側縁がやや直線的で基部の抉り込みは僅かである。2も凹基の石鑿で、両側縁はやや曲線を描き、基部の抉り込みは1よりも深く作出されているが緩やかな弧状を呈している。素材の剥片は比較的幅が厚く、そのためか、全面の調整加工がかなり綿密に施され、両側縁は急峻な剥離となっている。1・2は共に黒曜石製。

3は横型石匙で両面加工が施されている。つまみ部分は両側片からの急峻な剥離によって作り出され、かなりしっかりしている。主要剥離面には第一次加工痕が中央部に残されているなど、比較的平滑な剥離が多いが、主要剥離面からの連続的なコーンタイプの調整加工によって、鋭い



第28図 第6号住居址出土遺物（3）

エッジが作出されている。チャート製。

4は蔽石で敲打痕が上端とその付近の側縁に見られるものである。特に上端の敲打が著しい。素材は断面形がほぼ円形の棒状の礫を用いている。砂岩製。

5は完形の磨製石斧で、刃部には細な剥離痕が残っているがいわゆるはまぐり刀である。側縁部及び頭部には明瞭な敲打痕が残置しており、いずれも研磨前の器面調整と考えられる。ただし、片面の中央部に存在する円形の敲打痕は、ゆるやかな皿状の凹みを呈しており、蔽石的な機能が付加されていたものか、あるいは刃部をかなり損失している点などから、蔽石へ転用されたものとも考えられる。結晶片岩製。

### 第8号住居址（第29図）

本住居址はI-42区を中心に確認され、北10mに12号住居址が存在する。平面は不整円形を呈し、規模は3.9×3.5m、深さ0.25mを測る。床面は平坦で軟弱であり、壁は外傾する。壁溝は確認出来なかった。

Pitは12ヶ所検出された。中央から北側にかけて集中している。P1は0.5m、深さ0.3m、P2～P12は径0.15～0.3mと小規模である。

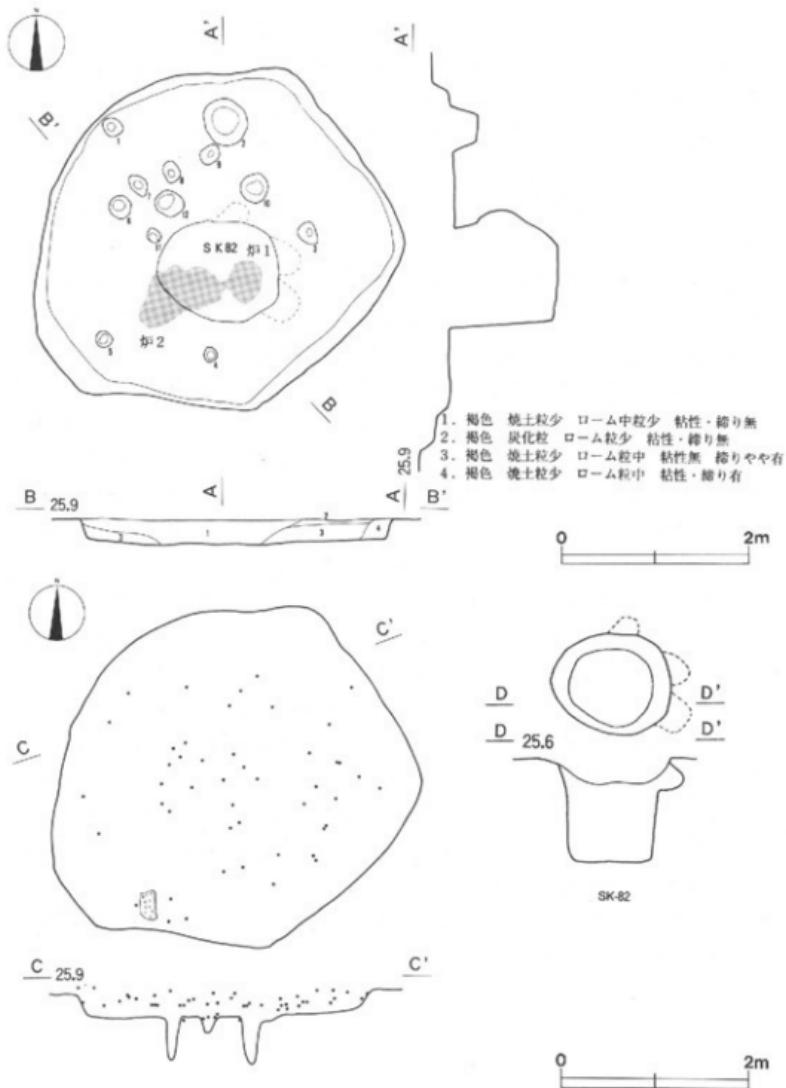
覆土は、焼土粒を含む褐色土である。

炉は中央よりやや南から2ヶ所検出された。炉1は東に位置し、0.45×0.3mの範囲に焼土が見られる。炉2は炉1の西に位置し0.95×0.5mの範囲で焼土が見られる。床面を約5cm掘り込んで構築している。炉の下には1.2×1.05m、深さ1.1mの梢円形の土坑（第82号土坑）が存在する。本址より古い土坑である。

### 出土遺物（第30・31図）

本遺構から出土した土器は前期前半の土器が3,701g出土し、前期前半が1,485g、前期末～中期初頭が10g出土している。No1～31・55～56は前期前半である。No1～3は口縁部破片で、No1・3は口唇部に平坦面を持つ。No1の口唇部には凹凸文が付され、器面にはR|LとL|Rが施文されている。No2は口縁部が緩く外傾しており、口唇部は舌状を呈する。No5・6はR|Rと縦回転施文の土器である。No5の一部には幅広の平行沈線が浅く施文されている。No7～9は羽状繩文が施文されるものである。No7・8はR|R・L|R別原体により施文されそれぞれ、繩文原体の閉端の結縛の痕跡が残り、No7には1の縄が巻かれている。No9はL|R・R|Rを組み合わせた結束第一種によるものであろう。No7は頸部付近で緩く括れ、表面には炭化物の付着が見られる。No7・9は胴下半部の破片で器面が赤色化している。No10は口唇部に平坦な面を持ち、緩く外傾する口縁部である。No10・11はある軸の中央にL・Rを1組みにした繩文を縛り付けて、木目状燃糸文を描出している。No12はL2本を1組みにしている。No13はRを軸に巻き付けた後、Rの巻き方とは逆の巻き方でrを巻きつけている。施文は網目状を呈する。

No14・15・17はヘラ状の工具により格子目文を施文している。No14の口唇上には竹管の外側で押したような凹凸文がある。No16・18・19・20は地文に回転繩文を持つ。No21以外は波状の口縁を持つものや持つ可能性のあるものである。No16・20・21は口縁部が微妙に内湾ぎみである。No16・18・19の口唇部は上面に平坦面を持ち、No16に関しては竹管状工具により口唇上に凹凸文を施している。No21・26を除けば状態の差こそあれ、半截竹管状工具内側による有節平行沈線が2条から3条施文されている。No18には波頂部下に円形刺突文が二ヶ所、No26にも波頂部下と考えられる部位に円形刺突文が施文されている。No20には大きめの円孔文がやはり波頂部に見られる。No21には口唇部から下につまみ状の突起がつけられている。No18には補修孔が付されている。（1回失

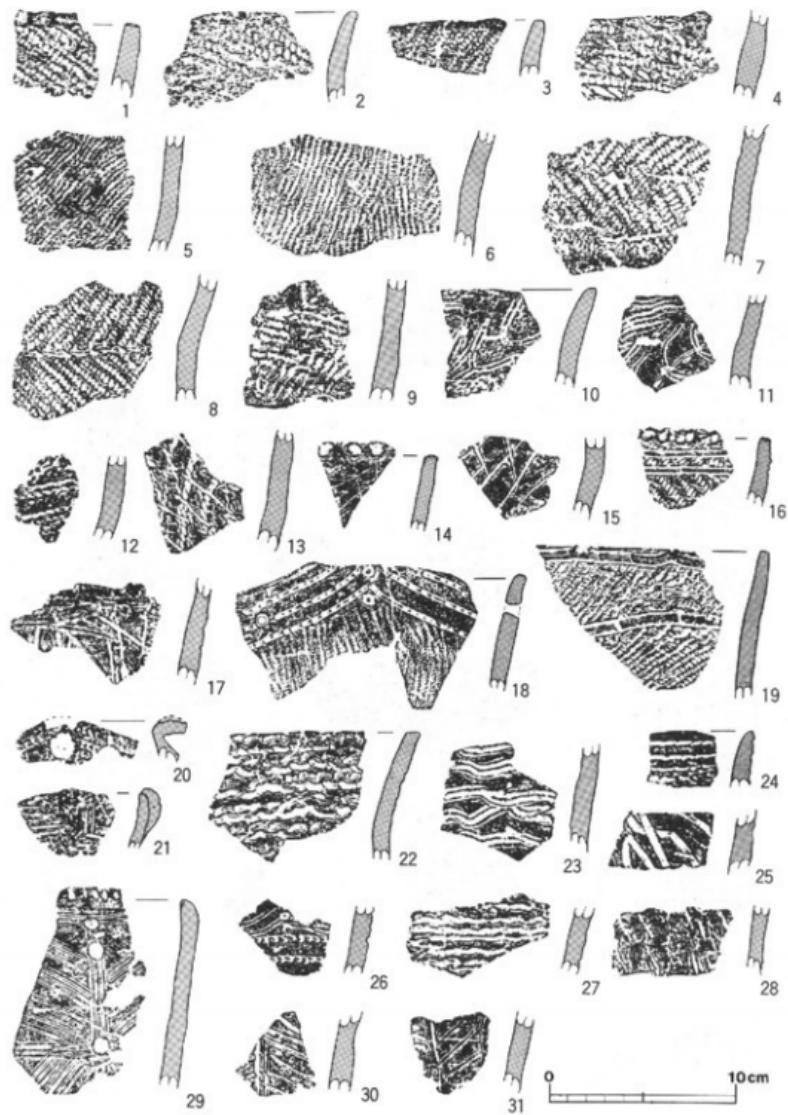


第29図 第8号住居址・第82号土坑

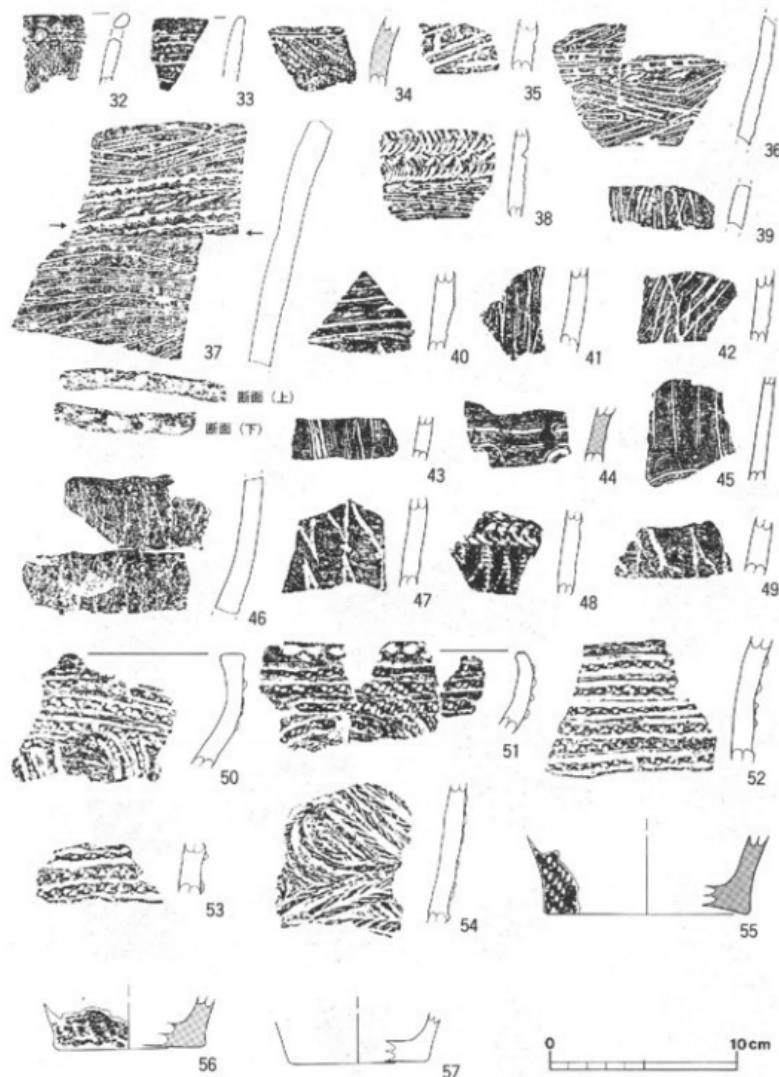
敗し開けなおしている。No22・24・27は半截竹管状工具内側により、支点を交互に変えて施文されるコンバス文である。No22・24は口縁部破片で、口唇部の断面形はNo24は丸味を持ち、No22は口唇上面に平坦面を持つ。又No22は頸部付近が緩く「く」の字状に括れる土器で波状口縁を呈するものと考えられる。No23は3本単位の波状文、No254は一本単位である。No29は口縁部で口唇部が外そぎ状を呈し若干内溝する。口唇端には刻み目を持つ。器面にはいわゆる「ユニオンジャック」状、或いは「米」字状文様が櫛歯状の工具（6本単位）により施文される。No30・31は木葉文である。No28は貝殻施文がなされる土器である。

No32～33・35～43・45～54・57は前期後半のものである。No32・33が口縁部でいずれも平縁と考えられ、No32は丸味を持って肥厚し、その下に半截竹管状工具による有筋沈線が一条施文される。地文にはR+七縄文が施文される。No33は舌状の口唇部を持ちやや外傾する。器面にはNo36同様の半截竹管状工具内側で平行沈線を引いた上に同工具によりC字状の刺突文（爪形文）が見られる。No36には上記以外に平行沈線により菱形の文様も描かれている。又刺突文も一定間隔で横位に一巡している。No37も同様な文様を持つが有筋平行沈線（変形爪形文）が引かれる意味では異なる。有筋平行沈線を上下に、一列の刺突文が一巡している大型の土器である。2個の土器が接合したものであるが、接合面には凹凸が見られる。No40にも平行沈線間に刺突文が見られ同文様が施文される部分は若干盛り上がっている。刺突文の工具は有筋平行沈線（変形爪形文）の工具と同一のものようである。No39・41～43・35にはRの縄を使用した単軸絡条体による文様が、施文されておりすべて条間が開いている。No46・49の地文にアナグラ属の貝殻により波状文が施文されている。No47・49にはハマグリ等の肋の無い貝類による波状文が施文されている。

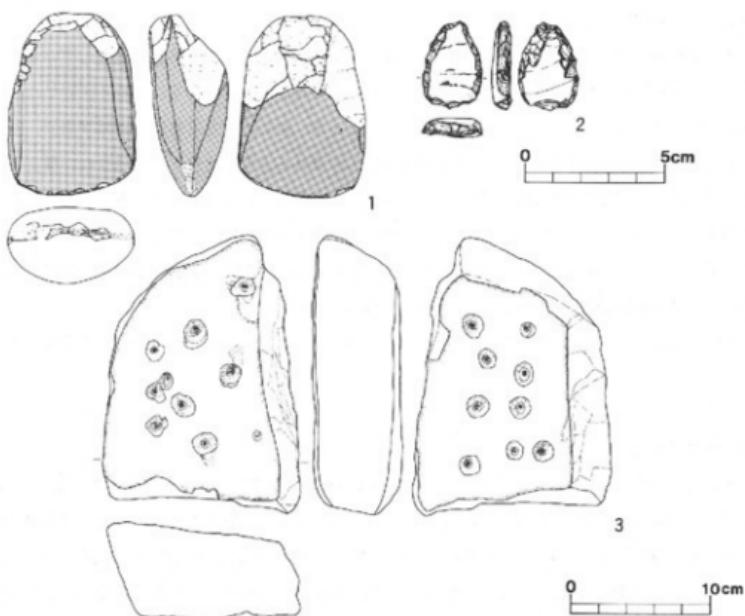
No50～54は浮線文が付されるもので、浮線文には二種類あり、No54には浮線文上に斜めの刻み目が施され、No50～53には地文と同様の縄文原体により回転施文がなされている。No54は地文にR+七が施文され、平行する浮線文同志で刻み目方向が逆になっている。No50～53は同一個体と考えられ、No50・51は口縁部破片である。平縁の土器と考えられるがNo50には突起が付き、口縁部は頸部から大きく開き、やや内溝する形態を持つ。口唇部に凹凸文が施文されている。口縁部には地文が見られず、No52の胴部片には縄文が施文されているが、ナデられている。No54以外の土器には多量に青灰色の婬母片が含まれる特徴を持つ。No57は同群内の底部であろう。胎土内に赤色粒が含まれ、内面は平滑に磨かれている。



第30図 第8号住居址出土遺物(1)



第31図 第8号住居址出土遺物（2）



第32図 第8号住居址出土遺物（3）

出土石器（第32図）

1は磨製石斧であるが、原形から大きく欠損した刃部を剥離整形によって再加工したものである。刃部は両刃であるが、先端部には刃こぼれやつぶれが著しく観察され、その鋭さには欠けている。結晶片岩製。

2はエンド・スクレイバーで背面に自然面を残したままで、ほぼ全周に亘って急峻な剥離が施され、それは鋸歯状を呈するに近いものである。主要剥離面は打点周辺にステップタイプの調整加工がなされ、平坦に整形されている。チャート製。

3は完形の石皿と思われる。両面が使用面であり非常に平滑である。また、両面には著しい敲打による凹部が合計で18ヶ所存在している。特に実測図右のそれは規則的に配列されているようである。花崗岩製。

#### 第10a号住居址（第33図）

本遺構は調査区の西端、E-34区を中心に確認され、西側が10b号住居址と重複している。また、第67・71・74号土坑と重複している。調査進行途中で10a号住、10b号住居址と区別した。平面形は不整円形を呈し、部分的に壁は削平してしまった。壁の立上りは緩い。床は平坦で、踏み固められた部分は見られなかった。本遺構は1層と呼ばれる遺物包含層下に確認され、覆土は2層に分かれ、一部壁により3層と呼称する土層が確認された。炉は2ヶ所確認され、住居址の床面中央に径35cmの円形プランで炉1が確認された。掘り込みがほとんど無く、炉床は固く焼しまってない。炉2は東南壁よりに確認され、若干の掘り込みを持ち、長軸60cmの楕円形を呈する。炉の中の焼土範囲の周辺部は固くなっていた。Pitは確認されなかった。

10b号住居址との重複関係は、遺物の内容や遺構の形態から10a号住居址のほうが新ものと考えられる。

#### 第10b号住居址（第33図）

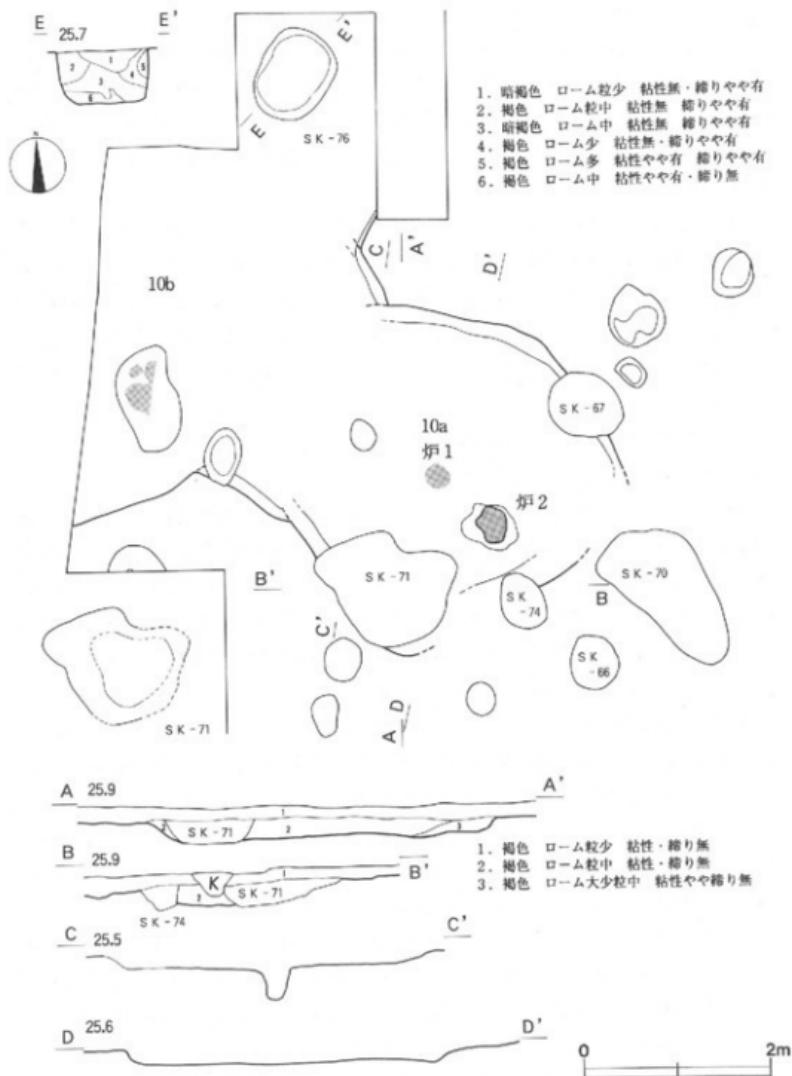
本遺構は調査区の西端、D-34区を中心に確認された。東南側が10a号住居址と重複している。住居址の平面形は方形を呈するものと考えられる。床面は平坦で踏み固められた部分は確認されなかった。壁は東側と南側の一部が確認されたのみであり、ほとんどの部分は調査区外となる。炉は遺構内の南よりに確認され、長軸1mの長楕円形を呈し内側が若干凹んでいる。ピットは確認されなかった。10a号住居址との重複関係は、10b号住居址の方が古いと思われる。

#### 出土遺物（第34・35図）

発掘調査の当初は第10a・10b号住居址を1つの遺構として把えていたため、両遺構からの出土遺物が区別できず、1~4区の調査時の表記を用いて掲載してある。一応1・4区は10a住、3区は10b住と考えて良い。

##### 第10a住居址(1・4区出土土器)（第34図No1~3・第35図29~51）

No29~40・42は前期前半の土器である。No29~31・33~34は縄文のみの施文である。No29・30・34・35は口縁部で、No29は波状口縁であり、緩く外傾する。口唇部は平坦面を持つ。縄文原体はL型の0段多条のものである。胎土に含まれる纖維の量は少ない。No30・33・34は結束第一種L型とR型による羽状縄文が施文される。No31も結束第一種R型とL型によるものである。胎土には纖維をあまり含まなく、砂粒を多く含む。No35は小型の波状口縁を持つもので、R型地文上に、口唇部下と、波頂部下に下垂する半截竹管状工具内側による押し引き列が施文される。施文具は土器面に対しほば直角に当たっている。口唇部は平坦面を持つ。No36は口唇部上に凹凸が見られ、その直下には幅6mmの幅広の沈線を巡らせ、同沈線により「く」の字状の施文が見



第33図 第10ab号住居址・76号土坑

られる。胎土には繊維より砂粒が目立つ。

No32・36～40は沈線のみによって施文される土器である。No38は幅広の半截竹管状工具内側により支点を変えて波状文を描く。No39は平行沈線により区画された中に2組の平行沈線により曲線状の櫛齒文が施文される。No40は4本単位の櫛齒状の工具で描かれる。No42はR+L地文地上に平行沈線を十字、斜めに引き、その上を同工具の先端で有節沈線状の刺突を行い、平行沈線の交叉した部分を凹ませている。

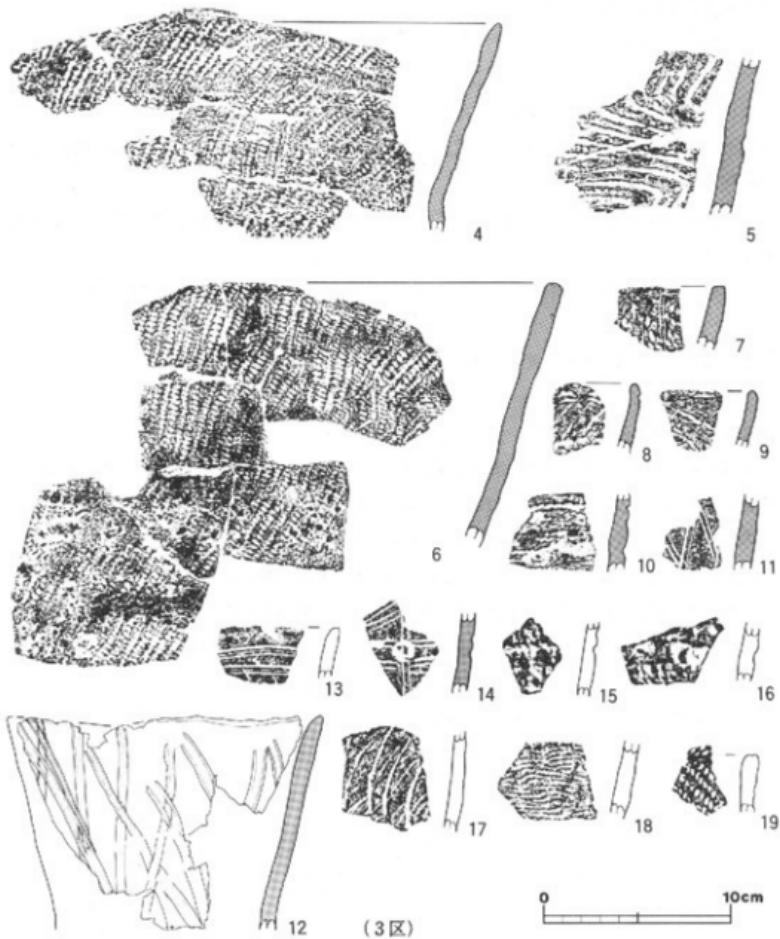
No1・2・41・43・44・48は前期後半の土器である。No2・43は地文に單軸絡条体による撫糸文が施文されNo2はしとRにより、No43はrによる。No43は葉脈状の文様が平行沈線により引かれ、中央に押し引き文が引かれる。No44は口縁部で口唇部は平坦面を持ち器面にはアナグラ属貝殻股縁による波状文が地文となり、有節沈線が口縁と平行に引かれる。No48にはハマグリ等の貝による波状文が施文される。No1はヘラ状の工具により施文される。No2・41・43・44の胎土中には赤色粒が含まれる。

No3・No50は前期末から中期初頭のもので他地域の特徴を持つ土器であり、R+L+Lの結束第一種による縱回転の羽状繩文である。

No45・46・49は前期末から中期初頭の土器であり、No45にはLの繩文原体側面圧痕やS字状結節文が施文される口縁部で、No46は輪積痕を持つ口縁部で、しの縄を使用し縱回転のS字状結節文が描かれる口唇部には側面圧痕が施文される。No3・51は中期初頭の土器としたものである。細い竹管状工具の外側で沈線を引き、それに沿って刺突を加えている。No3はL+LのS字状結節文。いずれも胎土に纏かい雲母片や砂粒（特に石英粒）が多く含まれ、ザラザラした感触がある。

#### 第10b 住居址（3区）（第34図No4～19、第35図20～28）

No4～12・14・28は前期前半の土器である。No4・6～9・14は口縁部が残る破片である。No4は舌状に先端が尖り、4単位の波状口縁を呈し頸部で括れを持ち、胴部上半に肩部の張りを持ち底部へ向けてすぼまる器形であろう。器面に炭化物の付着が見られる。No6はやはり波状口縁を呈するが、頸部の括れはない。O段多条のL+Lが施文される。No7・8は口唇上に平坦面を持ち、7は平縁、8は波状口縁である。No7は地文R+L上に縦にヘラ状工具による沈線が引かれる。表面には炭化物が付着している。No8・9は口唇部が若干内湾するもので、いずれも地文に附加条繩文が施文されている。No8は口縁に沿って半截竹管状工具内側による、短い平行沈線が、一巡する。No12は径16cmの深鉢で、口縁は平縁で、口唇は舌状を呈する。胴下半部で緩く括れる可能性がある。器面には平行沈線により、雑な格子状の文様が描かれている。垂直線が先に引かれ、右下がりの斜線が後に引かれている。No14は波状口縁を呈する土器と考えられ、平行沈線により十字状の沈線及び、口縁に沿った平行沈線が引かれる。十字の交叉部分には円形刺突文が施文される。胎土に含まれる繊維の量はNo8・9・14が少なくNo14はことのほか少ない。



第34図 第10号住居址出土遺物（1）

No13・15～18は前期後半の土器である。No19～22は前期末から中期初頭の特徴を持つ土器である。No19には口唇上に回転縄文が施文される。No23・24は、口唇部はNo20～22と同様な形態を持つが縄文は施文されていない。No26～27は中期初頭の土器である。

#### 第10 a 住居址出土石器（第36図）

1は石匙であるが、小形で周縁やつまみ部の調整加工がやや粗雑であり未製品の可能性が高い。チャート製。

2は小形で扁平な磨製石斧である。片面は丁寧に研磨されているが、その裏面には剥離面が広く残置している。このことからこの磨製石斧は、欠損した磨製石斧の刃部付近を調整剥離によって再加工したものであろう。結晶片岩製。

3は磨石で円形の扁平な礫を素材にしている。摩耗痕は全体に及び、縁辺の一部には敲打痕が観察される。

4は蔽石で断面形が稍円形を呈する棒状の礫の上端部及び両側縁に敲打痕が観察される。砂岩製。

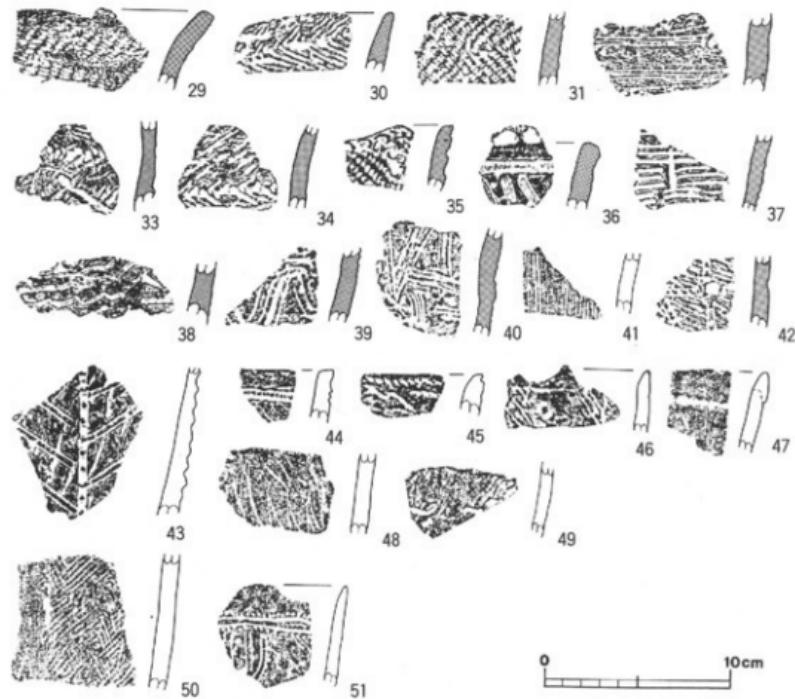
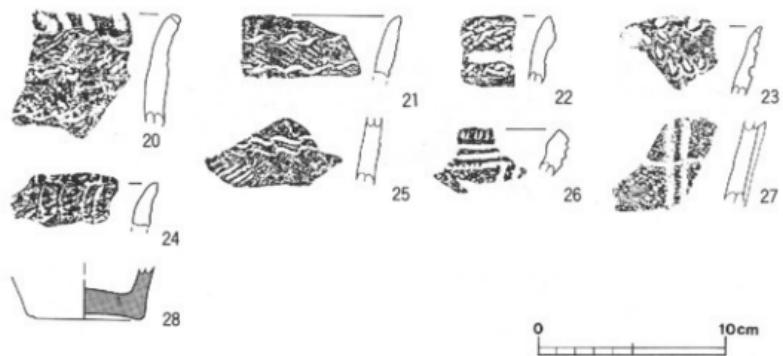
5は石皿片である。両面が使用され非常に平滑である。花崗岩製。

#### 第10 b 住居址出土石器（第36図）

6は凹基の石鎚である。基部の抉り込みは深くて鋭いが、両脚を欠損している。黒曜石製。

7は楔形石器で、やや扁平の小凹礫を二分割したものを素材とする。加工は上下両面に施され、その打点は細かく渋され鋭角な稜線を描いている。安山岩製。

8は楔形石器で、かなり厚みのある縱長剥片を素材にその超軸方向の両側辺に、両極打法によって加工されたと考えられる剥離痕が微細なつぶれと共に観察される。両側辺はほぼ平行して階段状の剥離痕が密集し、それ以外の器面には比較的大きめの面的調整が施されている。



第35図 第10号住居址出土遺物（2）



第36図 第10号住居址出土遺物(3)

第11号住居址（第37図）

本住居址はH-36区を中心に確認され、2m東に5号住が存在する。67号土坑と重複し、北西コーナー、西壁は擾乱を受けている。平面形は不整円形を呈し、規模は4.0×3.8m、深さ0.3mである。壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦で軟弱である。pitは2ヶ所検出された。径0.3m、深さ0.2mを測る。

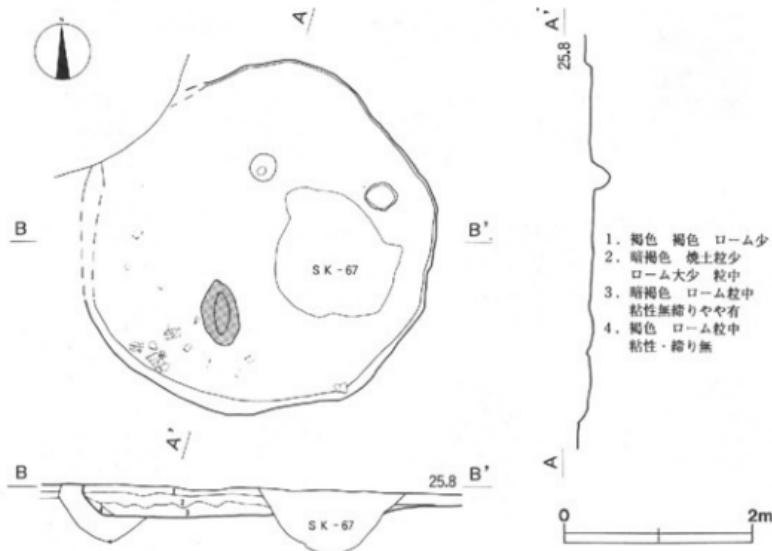
覆土は、ローム粒や焼土を含む暗褐色土である。

炉は南寄りの位置から検出された。規模は0.7×0.4mで、床面をわずかに掘り込んでいる。長軸方位はN-10°-Wである。

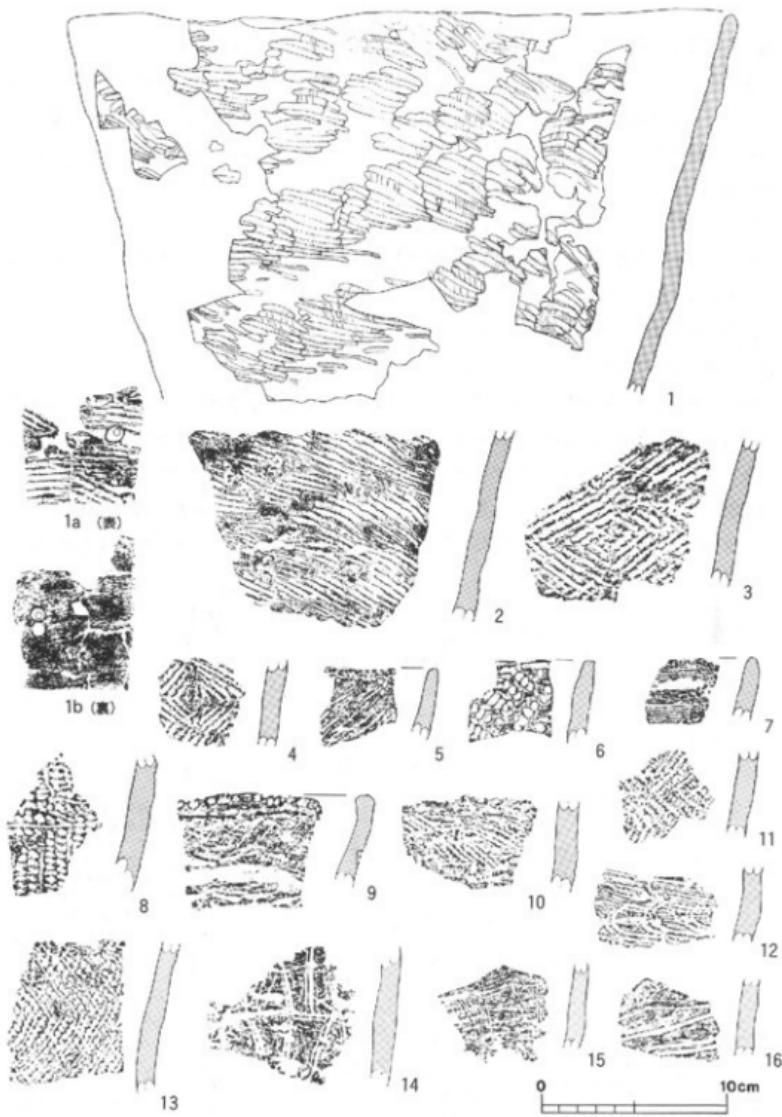
遺物は前期前半の土器が全体の75%を占める。

出土土器（第38・39図）

No 1~20は胎土に纖維を含む土器である。No 1は大型の深鉢で、胸部から口唇部にかけて緩やかに開く土器である。口唇部は丸味を持ち平縁である。器面にはL字の無節繩文が横位に施されている。無節繩文は5cmの幅で帯状をなし、繩文帯間は無文部が見られる。口縁部付近には炭化物の付着が見られる。胎土には多くの機繊が含まれる。内面は縦横の磨きが施されており平滑である。個体右端部には、補修孔と考えられる穿孔が1ヶ所見られる。孔径は最大で9mm



第37図 第11号住居址



第38図 第11号住居址出土遺物（1）

最小で4mmである。土器焼成後に器面の表裏より穿孔し、裏面同所直下には穿孔途中の凹みが存在する。穿孔具は先端の尖りの鈍いもので回転して開けたものであろう。紐等による結縛の痕跡等は観察し得ない。No.2はNo.1と同一個体であり胴部下半部分と考えられ、被熱により表面が赤色化している。

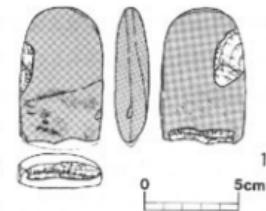
No.5～7・9は口縁部であり、No.5～7は皆直口する口縁を持ち、口唇端部ほど幅が狭くなる。No.9は口縁部がやや内湾し、口唇部が丸味を持つ。口唇先端は凹凸文が見られる。

No.3・4・11は結束第一種L |+·R ||による羽状繩文で、同一原体を上下逆にして施文することにより、菱形の文様構成を生み出している。No.4には「ミミズ腫れ状の隆起」が見られる。No.11はL |脣とR |脣を結束している。No.8・13は附加条1種L |脣+rとR |脣+|によるもので、結束してあるか否かは不明である。No.5・6はL |+とR |脣、R |脣とL |脣によるものである。No.10・12は単軸絡条1A類（木目状撲糸文）によるものでしの繩2本を一組みとし、軸の中央に穴をあけ通し、左右に巻いた原体のようである。No.12は同類のものであるが、軸の中央に紐を纖維により縛り、左右にそれぞれ巻いたものである。巻かれた紐はLとRの繩2本を一組みとしている。軸中央を縛った纖維痕が見られる。



第39図 第11号住居址出土遺物(2)

No 7・14～16・18～19は沈線のみにより施文されるものである。すべて平行沈線により施文される。No15は一見するとヘラ状工具による単沈線かのようであるが、二本一組となっている。No20は頸部破片で頸部で外傾し広がる口縁を持つものである。頸部付近に半截竹管状工具内側による2本の有節沈線により口縁部文様と脇部文様が区画されるものと思われる。口縁部には同原体による鋸歯文が描かれている。



第40図 第11号住居址出土遺物（3）

No21～33は前期後半～中期後半の土器である。No21～24・27は前期後半の土器である。No23はR・L・H・U・V・W・X・Y・Zの縄文地上に浮線文が付される。No24はハマグリ等の貝による波状文である。No26は胎土からすると前期後半に位置付けられよう。No29底部には網代痕が見られる。

#### 出土石器（第40図）

1は磨製石斧で形態は楔状を呈する。全体的に入念な研磨が施され、表面・側面・裏面・頭部とはっきり磨き出されている。刃部は両刃であるが、表面側からの加撃によって大半を欠損している。両面には研磨以前の調整加工痕が僅かに残されている。結晶片岩製。

#### 第12号住居址（第41図）

本住居址はK-40区を中心に確認され、6m南西に8号住が存在する。平面形は橢円形を呈し、規模は4.7×3.4m、深さ0.1m、主軸方位はN-90°-Wを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦で軟弱である。pit、壁溝は確認できなかった。

炉は南壁寄りから検出された。床面を掘り込んでおり、規模は1.0×0.55mを測る。焼土は少なく、炉床はあまり火を受けていない。

覆土はローム粒を僅かに含む明褐色土である。

#### 出土遺物（第42図）

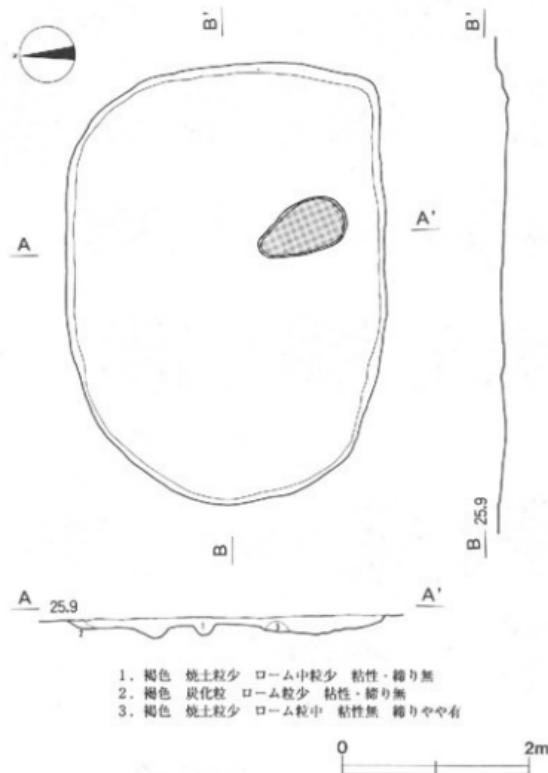
No 1～13が胎土に纖維を含む土器である。その内No 1・2は大型破片である。出土した土器片の内多くは住居内の東側より出土している。No 1は平縁の口縁を持つ土器で、口唇部には緩やかな凹凸が見られる。ほぼ円筒形の土器であろう。器面には単軸絡条体6類（網目状撲糸文）が全面にわたり施文されている。絡条体は2本の条を用い、1本は右巻きに他方は左巻きに、それぞれの条の交点を結げている。施文方向は斜めであり太い下垂する沈線を界に施文方向の変化が見られる。又、No 1の土器の器面に施文された、網目状撲糸文は全体的に菱形を模したようである。口唇部下と脇下部にはそれぞれ一条及び二条の半截竹管内側による太い沈線が巡っている。下部は被熱を受けており、赤色化している。胎土には小石等が目立つ。

No 2は緩やかに開く器形を持つ波状口縁の土器と考えられ、Lの0段多条の原体により、器面全体に繩文が施文されている。条はほぼ垂直方向に施文されている。地文の上にはヘラ状工具による雑な格子目文が描かれ、右傾する沈線の方が先に施文される。胎土は非常に緻密なものといえ、その中には赤色の粒子が目立って含まれる。他の同時期の土器と比べ異質な胎土を持つものといえる。

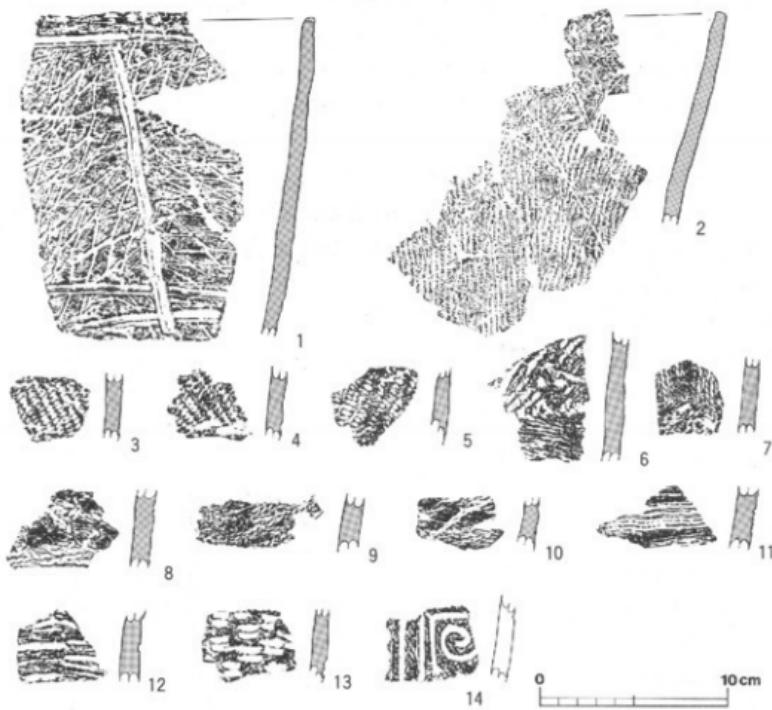
No 3～6は回転繩文により施文された土器である。No 3・4はR Ⅰ・Ⅱ繩文が横回転施文されたものであり、No 4に関しては条間が若干開く。それぞれ赤褐色を呈する。No 5は器面にL Ⅰ・Ⅱ長繩文が施文され断面の形態より口唇部近くと考えられる。内面は緻密な化粧土を用い丁寧な作りといえる。No 6は結

束第一種による横回転繩文である。原体は太めのL Ⅰ・Ⅱと細めのR Ⅰ・Ⅱを結合させ施文している。繩維は含むが堅密な土器といえる。

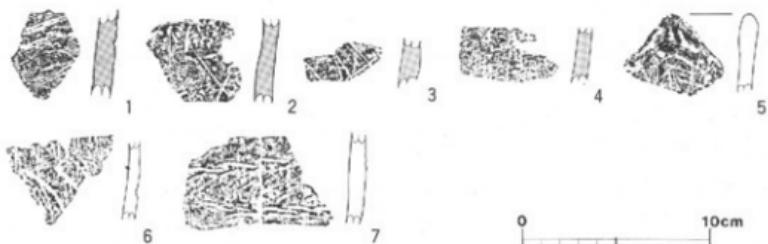
No 7～10は単軸絡条体により施文された土器である。No 7・10は単軸絡条体1類により施文されていると考えられる。No 7はRの撚糸を使用し、No 10は撚糸のほどけたLの撚糸を使用している。No 8・9は単軸絡条体1A類により施文されている。No 8は軸にLとRの繩を組みし巻きつけ、条は矢羽根状を呈す。



第41図 第12号住居址



第12号出土遗物



第14号出土遗物

第42图 第12·14号住居址出土遗物

No9はR2本の繩を組にし軸に巻きつけている。No9は胎土中に繊維をあまり含まず内面は平滑に磨かれている。

No11は櫛歯状の工具により緩やかな横位の波状文が描かれる。No12・13は粗い平行沈線（短沈線）が施文されるものである。No13は断面が赤色化している。

No14は中期初頭の土器と考えられ、地文には細いし巻原体を結節した結節回転文が見られる。同施文は継回転されている。竹管状工具の外側による沈線により四角い区画文が中央の隆起部分をはさんで見られ、その区画内には渦巻き文が描かれている。又区画の一部には三角彫刻文が見られる。胎土には石英・長石を多く含む、内面は丁寧に磨かれている。

#### 第14号住居址（第43図）

本住居址は調査区の北、2E-14・2F-14区を中心に確認された。

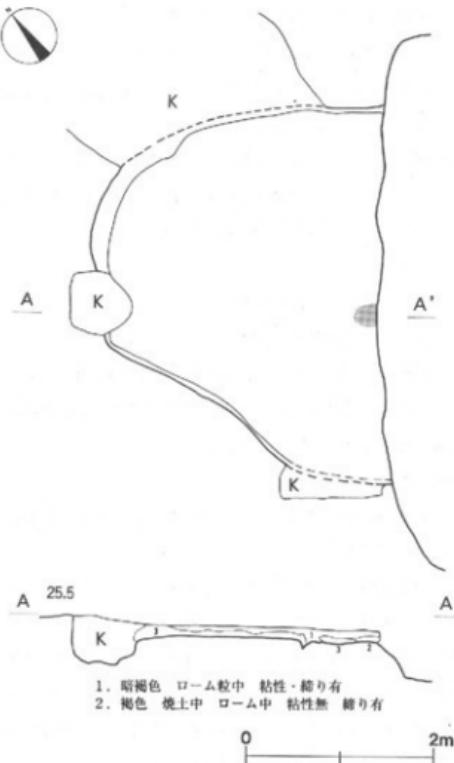
住居の東側は半分以上1号住に切られている。また、北壁や西壁の一部は擾乱を受けている。平面形は不整形を呈し、規模は南北最大長4.0m、東西残存長3.1m、深さ0.15mを測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが軟弱である。pitや壁溝は確認できなかった。

覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

炉は1ヶ所検出されたが、大部分は1号住に切られているため遺存状態は悪い。

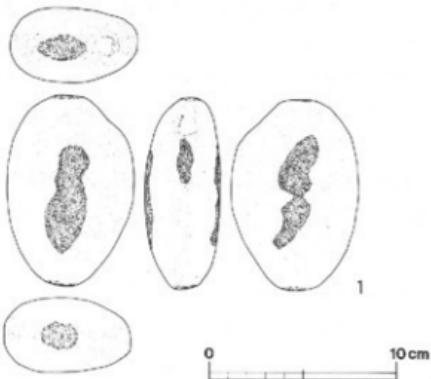
遺物は少量の繩文土器片と敲石が出土した。



第43図 第14号住居址

#### 出土石器（第44図）

1は敲石である。素材は楕円形の扁平な砾で、その上下両端・側縁・器面に敲打痕が観察される。特に上下両端の敲打痕は個々が大きく深いが、側縁と器面の敲打痕は微細でつぶれのような状態である。砂岩製。



#### 第15号住居址（第45図）

本遺構は調査区の西端、E-36区を中心確認され、北に17号住居址、10

a・b号住居址、1号柱穴列が存在する。また、72-75-77号土坑と重複し、

2ヶ所検出された炉址はこれらの土坑に切られている。上層の包含層からは黒曜石のチップが大量に出土した。壁は確認作業により削平してしまったため、平面形や規模については不明である。土層セクションベルトに掘り込みが確認されることや、炉址と思われる焼土がみられることから住居址とした。

覆土は、3層から構成される。

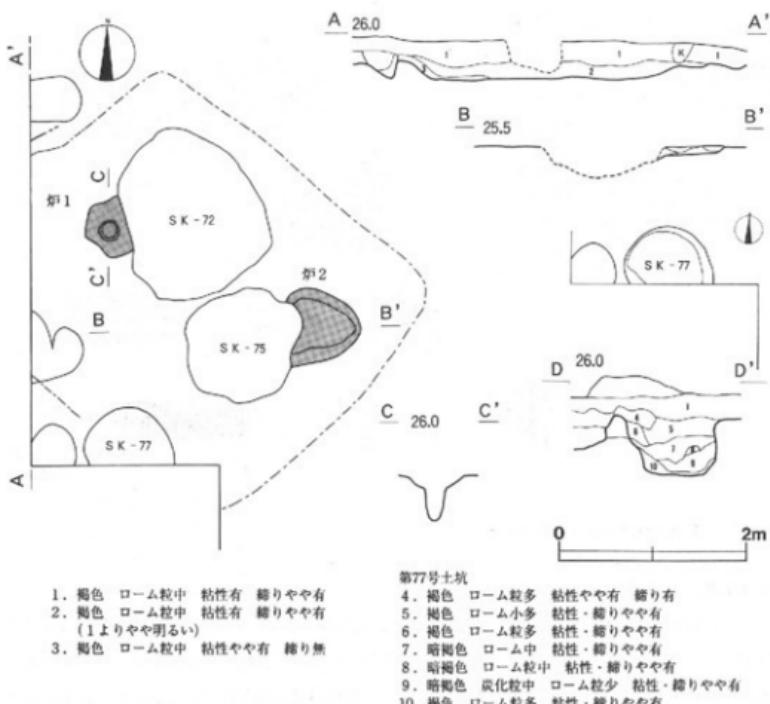
炉は2ヶ所検出され、炉1は西側に位置し、72号土坑に切られている。断面は皿状を呈し、現存する規模は $0.6 \times 0.4$ mである。炉の下には径0.2m、深さ0.35mのpitが存在する。炉2は東に位置し、75号土坑に切られている。平面は楕円形と思われ、断面は浅い皿状を呈する。現存する規模は $0.86 \times 0.74$ m、深さ0.1mを測る。

#### 出土土器（第46図）

本遺構からは重量にして前期前半の土器が54g、前期後半の土器が62g、中期初頭の土器が30g出土している。

この遺構から出土した土器は、繊維を含むものとしてNo 2・3であり、No 2は4単位の波状口縁を持つ、小型の深鉢である。口縁部に沿って半截竹管状工具内側による平行沈線が2条巡り、その上に有筋沈線が巡る。その後、波頂部、波底部の下垂する平行沈線付近から右下がりの平行沈線が幾条も引かれ、肋骨文に類似した文様構成を持つ。最終的に波頂部、波底部下に円形刺突文が縦に2個付される。胎土には、繊維を含むが、硬質な薄手の土器である。No 3はL型縫文地上に2列の円形刺突文が施されている。

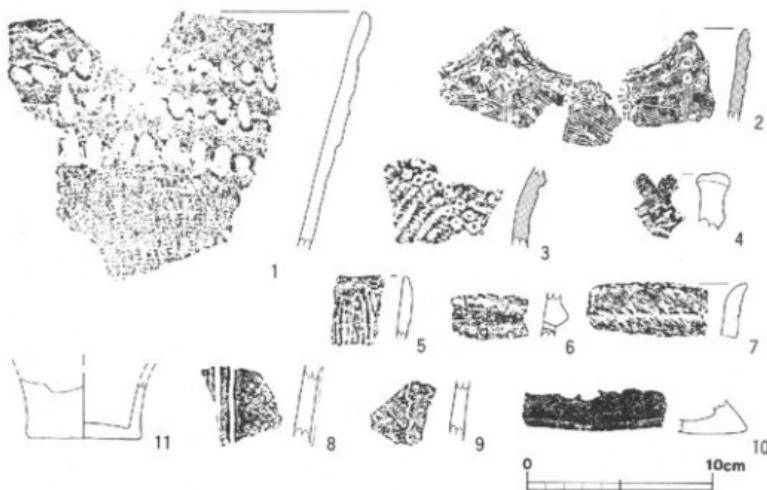
No 1・4～7は前期後半の土器である。No 1は平縁の深鉢で、上半部は幅の広い輪積み痕を残



第45図 第15号住居址・第77号土坑

し、その上を指頭により押圧している。胴下半部アナグラ属貝殻腹縁による波状文が横走する。口唇部は外側が丸味を持つ。胎土には径2mm程度の赤色の粒が含まれるが表面には見られない。

No 8・9は中期初頭の土器である。No 8は竹管の外側による沈線で挟まれた隆起線があり、地文にはR | 七の縱回転が施される。No 8・9ともに胎土に金雲母を含む。No 10-11は底部で前期後半～中期初頭の土器のものである。No 4は波状口縁波頂部の突起であり、突起中央部が凹んでいる。突起下には口縁と平行したかたちで、斜めに刻み目に入った隆起線がありその下には平行して有筋沈線文が巡るものと思われる。No 5は口縁部であり小型の土器である。No 6は有孔浅鉢の一部と考えられ、横位に巡る隆帯下に平行して完通孔が3つ見られる。No 1・No 4～6は胎土に石粒を多く含む。No 7は輪積痕を残す口縁部でアナグラ属の貝による貝殻波状文が、輪積痕上を中心として斜に展開している。口唇部は外側につまみ出したような舌状のものである。



第46図 第15号住居址出土遺物(1)

#### 出土石器（第47図）

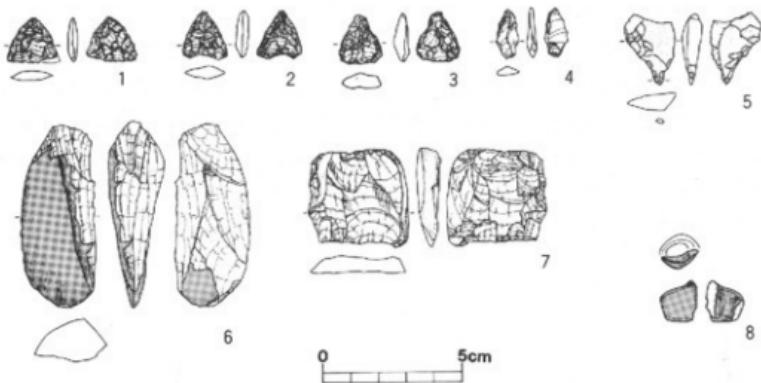
1・2は石鎚、3は石鎚の未製品と思われる。1は平基で一部を欠損しているが、形態はほぼ三角形を呈する。チャート製。2は凹基で基部の抉り込みは浅く、緩やかな弧を描いている。黒曜石製。3は石鎚の未製品と思われ、両面にわたって調整剥離が施されているが、未だ幅が厚く断面形もやや不定形である。頁岩製。

4は二次加工を有する剥片であり、幅長に剥離された非常に小さい剥片を素材に、両面から同じ部分に微細な調整が加えられている。形態は尖頭器状を呈する。チャート製。

5は石錐である。素材は自然面を残す小形の不定形の剥片と思われ、調整剥離は全面には及ばず、錐部の周辺などにわずかに行なわれている。安山岩製。

6は磨製石斧である。これは一度欠損した磨製石斧の破片を調整剥離によって加工したものである。その調整剥離された部分の研磨はわずかで刃部の研磨也非常に少ないのが特徴である。断面形も不定形でその実用性に疑問が残る。結晶片岩製。

7は楔形石器で薄く幅広に剥離した両端に、両極打法によって生じた剥離痕が明瞭に残されている。しかし、両面の比較的大きな剥離は両極打法によるものではなく、自然面などを排除するための調整加工と考えられる。両端のエッジは鋭く平行で、微細なつぶれのような加熱痕が観察される。チャート製。



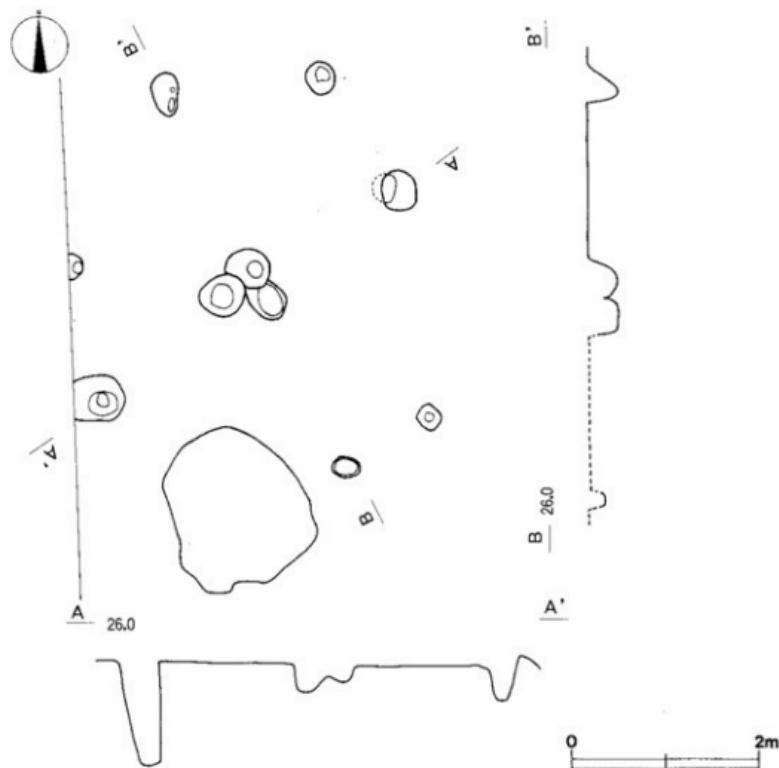
第47図 第15号住居址出土遺物（2）

8は滑石製の玉である。原形のほぼ半分の残存であるが、内外面とも非常に良く研磨されている。

第17号住居址（第48図）

本住居址はE-35区を中心に確認され、南は15号住居址と重複し、北0.5mに10号a住居址が位置する。床面は削平されているため、柱穴のみ検出された。柱穴は椭円形に配列されており、中央にも3本重複して位置する。平面形や規模は不明であるが、Pitの間を結んだ規模は、長軸4.3m、短軸3.7mである。Pitの規模はP<sub>2</sub>が径0.4m、深さ1.1m、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>～P<sub>7</sub>は径0.5～0.3m、深さ1.1～0.5mである。中央のP<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は径0.5m、深さ0.3mである。

炉は床面前平のため、不明である。

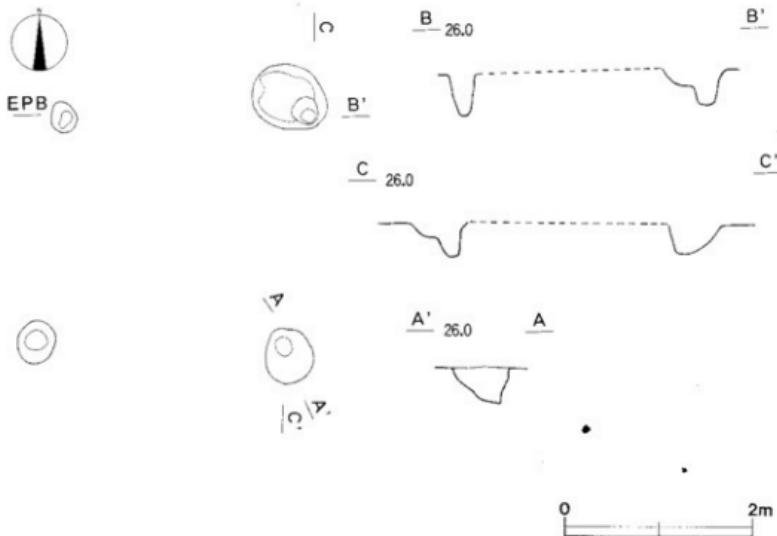


第48図 第17号住居址

第1号柱穴列（第49図）

本遺構はE-35区を中心に確認され、第10号住居址と重複している。

Pitは4本検出され、ほぼ正方形に配列されている。規模はP<sub>1</sub>は0.85×0.7m、深さ0.35mで、2段に掘り込まれている。P<sub>2</sub>は0.6×0.5m、深さ0.3m、P<sub>3</sub>は径0.4m、P<sub>4</sub>は径0.3m、深さ0.45mを測る。Pit間の距離はP<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>は2.7m、P<sub>2</sub>～P<sub>3</sub>は2.7m、P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>は2.4m、P<sub>4</sub>～P<sub>1</sub>は2.6mである。



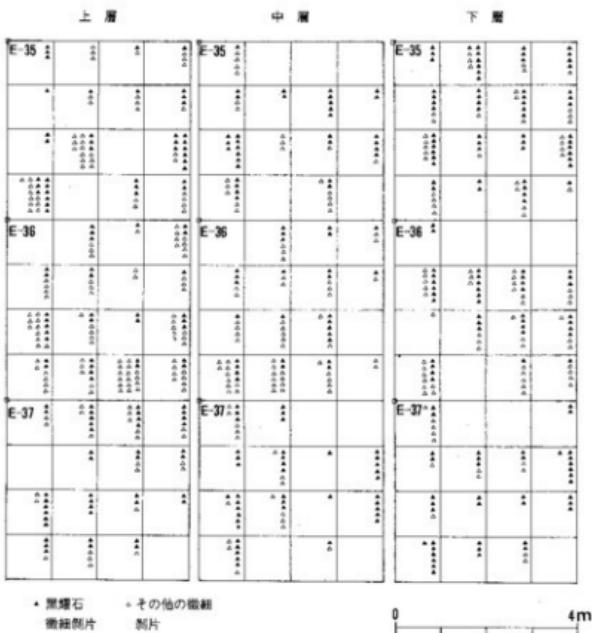
第49図 第1号柱穴列



第50図 石器微細剥片分布図

石器微細剝片集中域（第50・51図）

本遺構は調査区の西端、10a住、15住、17住の遺構確認前に検出された。遺構確認作業時に黒曜石の微細剝片が多数見られ、一定範囲に分布している状態が確認された。その範囲はE-35、E-36、E-37区周辺である。調査区の設定にあたっては、より集中している部分（E-35、E-36、E-37区）を調査することにした。4m四方の各区内を1m間隔で細分剖し、それぞれの確認面から5cmごとに上中下の3段階（各5cmの深さ）で土層のサンプリングを行ない、それぞれ取り上げたサンプルを水洗い選別し、石器微細剝片の検出を行なった。水洗い選別の結果は第51図に示した通りである。各層位、各1m枠ごとに微細剝片の出土点数をドットにより記入した。記入にあたっては、黒曜石と他の石材（チャート、頁岩、安山岩など）を区別した。当初は黒曜石が多いように思えたが、場所によっては他の石材が黒曜石の点数を上回っている。特徴としてはE-36区上層で多くの微細剝片が確認されている。この他、分布には一定のまとまりがあり、まとまりとまとまりの間には微細剝片が全く確認されない部分も見られた。



第51図 石器微細剝片集計図

## (2) 土坑（第52図～第59図）

当遺跡からは23基の縄文時代の土坑が検出された。特に住居址や包含層からの遺物が集中する地区に見られる。出土する遺物は前期前半から中期初頭が多く、その時期の土坑と思われる。54号については早期後半の土器が出土している。平面形は不整形、規模は長軸1m前後、深さ0.3m前後が多い。

### 第2号土坑（第52図）

本土坑はK-38区で確認された。北西4mに4号住が存在する。平面は不整長方形を呈する。北西コーナーに径0.7m、床面からの深さ0.3mのpitが存在する。また、中央に径0.35m、床面からの深さ0.4mのpitが存在する。規模は2.4×1.2m、深さ0.3m、長軸方位はN-15°-Eである。覆土は黄色土ブロックを含む暗褐色土である。

遺物は前期前半のものが3,368g、前期末から中期初頭にかけての土器片が2,518g出土した。ここからほぼ一體の深鉢が復元された。

### 第7号土坑（第52図）

本土坑はM-36区で確認された。平面は円形を呈し、規模は径0.9m、深さ0.4mを測る。覆土はローム粒を含む褐色土、暗褐色土である。

遺物は前期前半から後半にかけての土器片が281g出土した。特に前期後半が多く229g出土し、深鉢1点が復元された。

### 第8号土坑（第52図）

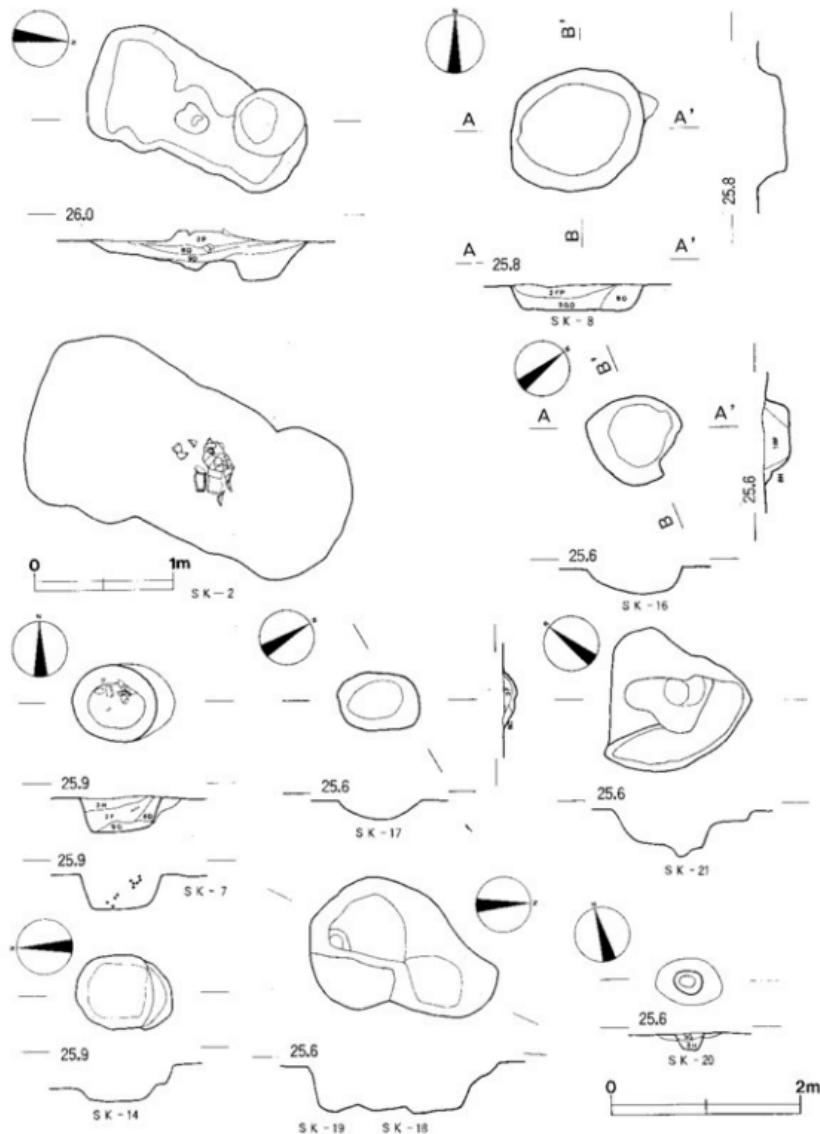
本土坑はL-37区で確認され、南西3mに2号土坑、西4mに4号住が存在する。平面形は円形を呈し、規模は1.4×1.3m、深さ0.3mを測る。壁は外傾して立ち上がり、床は平坦である。覆土はローム粒や黄色土ブロックを多量に含む暗褐色土である。

遺物は前期前半から後半にかけての土器片で、総重量45g出土した。

### 第14号土坑（第52図）

本土坑はM-37区で確認された。平面は楕円形で、南側は段を持つ。規模は1.0×0.8m、深さ0.2mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底は平坦である。

遺物は前期前半の土器片が29g出土した。



第52図 土坑（1）

#### 第16号土坑（第52図）

本土坑はK-36区で確認され、南西2mに4号住、周辺に17~21号土坑が存在する。平面は不整形円形を呈し、規模は0.9×1.1m、深さ0.3mを測る。床面は皿状で緩やかに立ち上がる。

覆土はローム粒や黄色土ブロックを多量に含む黒褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第17号土坑（第52図）

本土坑はL-37区で確認され、南西3mに4号住、西5mに5号住や土坑群が存在する。平面形は梢円形を呈し、規模は0.9×0.6m、深さ0.2mを測る。床面は皿状で緩やかに立ち上がる。覆土はローム小を多量に含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第18号土坑・第19号土坑（第52図）

本土坑群はK-36区で確認され、南1mに4号住、西3mに5号住が、周辺には土坑群が存在する。2基は重複しており、北が18号、南が19号土坑である。平面形は2基とも不整形円形を呈すると思われ、2基の長軸は2.1m、18号の短軸は1.4m、19号は0.8mを測る。深さは、18号が0.4m、19号が0.5mである。覆土は黄色土ブロックを多量に含む暗褐色土である。

遺物は、18号は前期前半の土器片が20g、19号は前期前半から中期初頭にかけてが、261g出土した。19号は前期前半が圧倒的に多い。

#### 第20号土坑（第52図）

本土坑はJ-36区で確認され、4号住と重複している。また北に5号住、西に土坑群が隣接している。平面は円形を呈し、規模は径0.3m、深さ0.2mを測る。覆土はローム小～中を含む暗褐色土である。

遺物は前期前半から中期前半にかけて62g出土した。前期末から中期初頭が多い。

#### 第21号土坑（第52図）

本土坑はJ-36区で確認され、4号住・5号住・17~20号土坑が隣接する。平面は不整形を呈し、規模は1.7×1.5m、深さ0.5mを測る。

遺物は前期前半から中期初頭にかけて72g出土している。

#### 第22号土坑（第52図）

本土坑はN-32区で確認され、24~26土坑と隣接している。平面は不整円形を呈するが、pitの切り合いとも考えられる。規模は0.9×0.9m、深さ0.4mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第23~26号土坑（第53図）

本土坑群はN-31区、M-31区で確認された。それぞれ平面は円形、不整円形を呈する。規模は約0.5~0.8m、深さ0.2~1.0mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

遺物は24号土坑から、早期から中期前半にかけて182g出土した。

#### 第27号土坑（第53図）

本土坑はM-30区で確認され、南には23~26号土坑が存在する。平面は不整梢円形を呈しており、規模は1.5×0.9m、深さ0.3mを測る。ほぼ中央に浅いpitがあり、径0.5m、深さ0.1mを測る。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第28~31号土坑（第53図）

本土坑群はN-34区、M-34区で確認され、北には23~26号土坑が存在する。平面は円形を呈し、規模は径0.5m~0.8m、深さ0.2m~0.35mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第34号土坑（第53図）

本土坑はD-31区で確認された。平面は不整梢円形を呈し、北側に0.4×0.3m、深さ0.1mの浅いpitが存在する。規模は1.2×0.7m、深さ0.25mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第38号土坑（第53図）

本土坑は2A-15区で確認された。周辺に縄文期の遺構は存在しない。平面は円形を呈する。規模は0.9×0.7m、深さは1.2mと深い。覆土はローム粒や黄色土ブロックを含む黒褐色、暗褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第41号土坑（第53図）

本土坑はT-30区で確認され、3号住と重複している。平面は不整円形を呈し、規模は $1.0 \times 0.8$ m、深さ0.25mを測る。覆土はローム粒を多量に含む褐色土である。

遺物は前期前半、中期前半が出土しているが量は少ない。

#### 第42a・b号土坑

本土坑はW-29区で確認された。2基は重複しており、西をa、東をbとする。新旧関係はb → aである。平面は梢円形を呈し、規模はaが $1.0 \times 0.7$ m（推定）深さ0.4m、bは $0.8 \times 0.6$ m、深さ0.15mを測る。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は前期末から中期前半を中心に60g出土している。

#### 第43号土坑（第53図）

本土坑はT-7区で確認された。周辺には縄文期の遺構は存在しない。平面は梢円形を呈している。規模は $2.2 \times 1.3$ m、深さ0.5mを測る。壁は、北は垂直に立ち上がり、南は緩やかに立ち上がる。覆土はローム粒や黒色土ブロックを含む褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第44号土坑（第54図）

本土坑はX-30区で確認され、北西10mには土坑が存在する。平面は不整梢円形を呈する。規模は $1.3 \times 0.6$ m、深さ0.2mを測る。北側に径0.5m、深さ0.2mのpitがある。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第45号土坑（第54図）

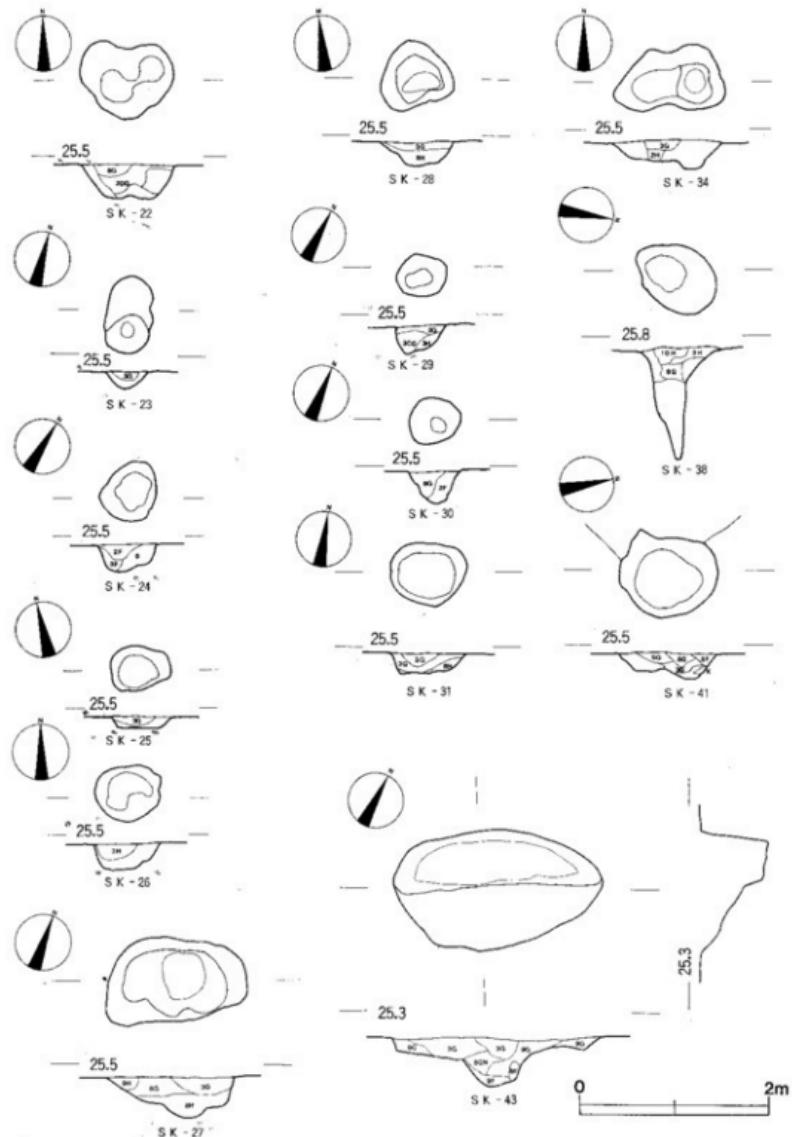
本土坑はU-30区で確認され、西5mに3号住が存在する。平面は不整円形を呈し、規模は $0.5 \times 0.4$ m、深さ0.3mを測る。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第46号土坑（第54図）

本土坑はO-27区で確認され、南6.5mに54号土坑が存在する。平面は円形を呈し、規模は $1.2 \times 1.0$ m、深さ0.45mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は出土していない。



第53図 土坑 (2)

#### 第47号土坑（第54図）

本土坑はP-18区で確認された。平面は梢円形を呈し、規模は $2.9 \times 1.6m$ 、深さ1.2mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部は外傾する。

遺物は前期前半の土器片が12g出土している。

#### 第48号土坑（第54図）

本土坑はJ-28区で確認された。南7mには6号住が存在する。平面は不整梢円形を呈している。規模は $2.3 \times 1.5m$ 、深さ0.4mを測る。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は前期前半の土器片が73g出土している。

#### 第52号土坑（第54図）

本土坑はH-37区で確認され、北3mには11号住、南1mに53号土坑が存在する。平面は円形を呈する。規模は径0.9m、深さ0.3mを測る。

覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は前期前半と中期前半が多く、141g出土している。

#### 第53号土坑（第54図）

本土坑はH-37区で確認され、北3mに52号土坑が存在する。平面は円形を呈し、壁は東側に段を持つがほぼ垂直に立ち上がる。規模は径1.0m、深さ0.8mを測る。

遺物は出土していない。

#### 第54号土坑（第55図・第59図）

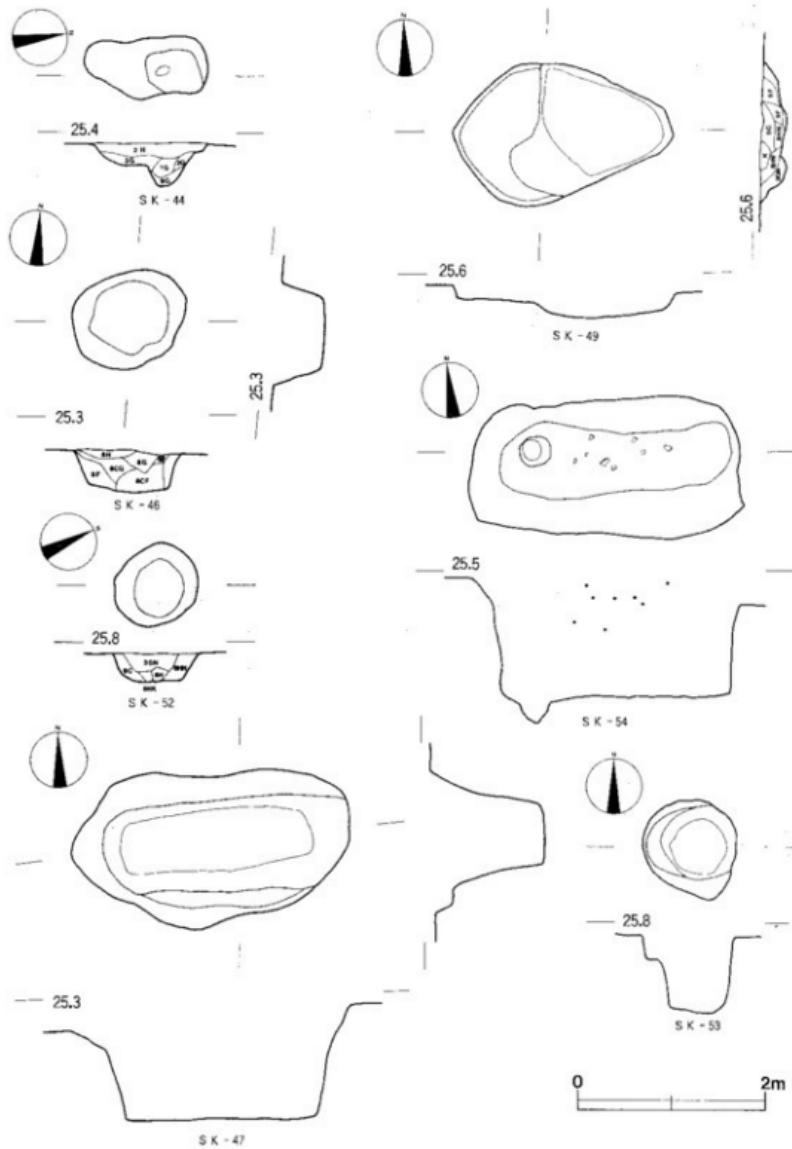
本土坑はO-28区で確認され、南9mに土坑群、南西13mに6号住が存在する。平面は不整方形を呈し、規模は $2.8 \times 1.4m$ 、深さ1.3mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁際には径0.3m、深さ0.25mの円形のpitが存在する。

遺物は早期後半の土器が304g出土している。ほとんどが覆土上層からの出土である。

#### 第56号土坑（第55図）

本土坑はM-17区で確認された。平面は不整円形を呈し、規模は $0.8 \times 0.6m$ 、深さ0.2mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。



第54図 土坑（3）

#### 第57号土坑（第55図）

本土坑はL-17区で確認された。平面は円形を呈している。規模は径0.7m、深さ0.2mを測る。断面は皿状である。覆土は黒色土粒や黄色土粒を含む褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第60号土坑（第55図）

本土坑はF-34区で確認され、北西1mには61号土坑が存在する。平面は不整円形を呈する。規模は径1.3m、深さ0.35mを測る。覆土はローム粒や黄色土ブロックを含む褐色土である。

遺物は前期前半の土器片が48g出土している。

#### 第61号土坑（第55図）

本土坑はE-34区で確認され、南東1mに60号土坑が存在する。平面は円形を呈する。規模は0.5×0.4m、深さ0.2mを測る。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 第62号土坑（第55図）

本土坑はF、G-35区で確認され、東3mに11号住が存在する。平面は不整円形を呈する。規模は径1.0m、深さ0.2mを測る。覆土は焼土粒やローム粒を含む褐色土で、上層に焼土を多量に含む暗赤褐色土が堆積している。

遺物は出土していない。

#### 第64号土坑（第55図）

本土坑はF-37区で確認され、北東6mに11号住が存在する。平面は円形を呈し、規模は径0.8m、深さ0.8mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はローム粒を多量に含む褐色土である。

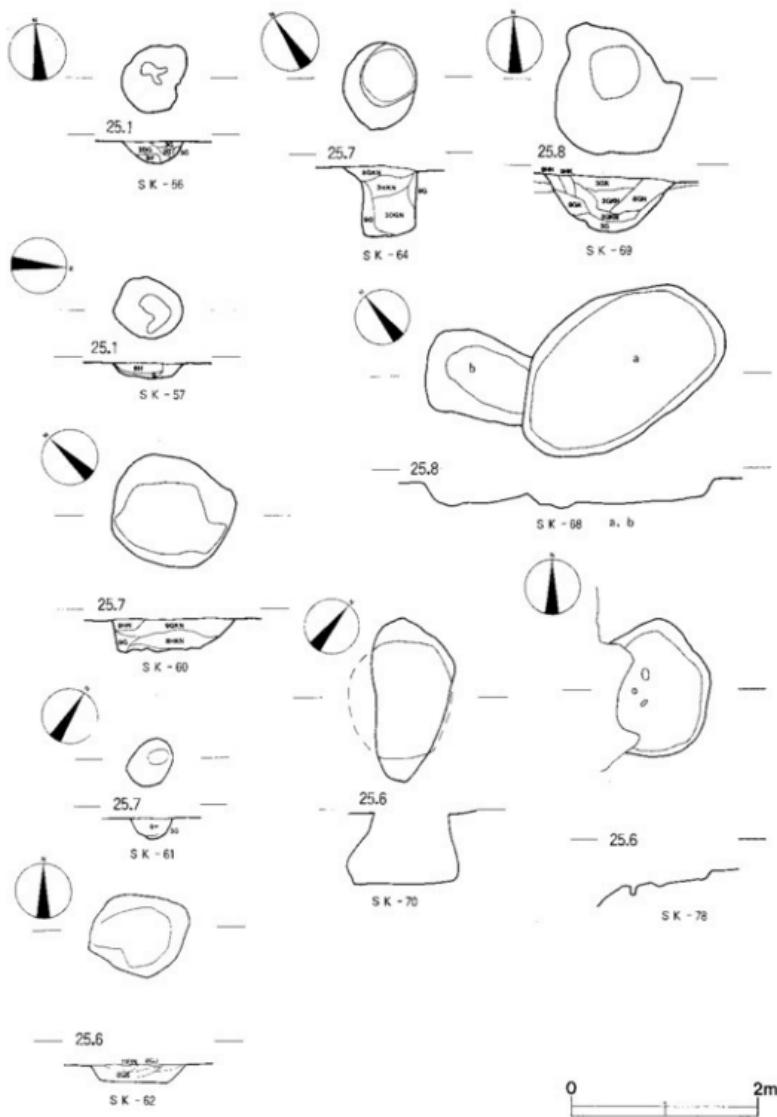
遺物は出土していない。

#### 第68a・b号土坑（第55図）

本土坑はH-39区で確認され、平面は稍円形を呈し、規模はaが2.4×1.5m、深さ0.3m、bは現存長軸1.2×短軸0.9m、深さ0.2mを測る。

覆土は黄色土ブロックを多量に含む暗褐色土である。

遺物は前期前半から中期前半まで131g出土している。



第55図 土坑 (4)

#### 第69号土坑（第55図）

本土坑はH-36区で確認され、11号住と重複している。平面は不整形を呈し、規模は径1.5m、深さ0.15mを測る。覆土はローム粒や黒色土粒を含む褐色土、暗褐色土である。

遺物は前期前半から後半にかけて56g出土している。

#### 第70号土坑（第55図）

本土坑はE-35区で確認された。平面は不整楕円形を呈するが、底面は円形である。底面は平坦で、壁はフラスコ状に立ち上がる。規模は1.8×1.8m、底面は1.3×1.1m、深さ0.8mを測る。覆土はロームを含む褐色土である。5層より下層は締まり、粘性のない土である。

遺物は早期前半から中期前半にかけて371g出土している。半数以上が前期前半の土器片である。

#### 第72号土坑（第59図）

本土坑はD-36区・E-36区で確認され、15号住と重複し、炉を切っている。平面は不整円形を呈する。規模は径1.2×1.1m、深さmを測る。覆土はロームを含む褐色、暗褐色土で、下層はローム塊を多量に含有し、締まり、粘性はない。

遺物は前期前半から中期前半にかけて426g出土している。ほとんどが前期後半である。

#### 第74号土坑

本土坑はE-35区で確認され、10号と重複している。平面は楕円形を呈する。規模は0.6×0.5m、深さ0.56mを測る。

遺物は出土していない。

#### 第75号土坑

本土坑はD-36区、E-36区で確認され、15号住と重複している。平面は不整円形を呈し、規模は1.8×1.4m、深さ0.3mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。15号住居址の炉を切っている。覆土はローム粒を含む褐色土である。

遺物は前期前半が32g出土している。

#### 第76号土坑（第33図）

本土坑はE-35区で確認された。南には10a・b号住が存在する。平面は楕円形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.55mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はロームを含む褐色、暗褐色土である。

遺物は前期前半の土器が出土している。

#### 第77号土坑（第45図）

本土坑はD-37区で確認され、15号住と重複している。南側はエリア外となっている。平面は円形を呈すと思われ、規模は径0.9m、深さ0.6mを測る。覆土はロームを多量に含む褐色、暗褐色土である。

遺物は前期前半から中期前半にかけて180g出土している。ほとんどが前期である。

#### 第78号土坑（第55図）

本土坑は2H-17区で確認され、7号住と重複している。平面は不整円形を呈する。規模は0.85×1.45m、深さ0.15mを測る。

遺物は出土していない。

#### 第82号土坑（第29図）

本土坑はI-42区、8号住居址床面の下から確認された。上部は住居址の炉によって搅乱されている。平面は円形に近い橢円形を呈し、規模は長軸1.25m、短軸1.1m、深さ1.15mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁の途中に3か所ほど横穴が掘られている。規模は幅0.3m、高さ0.3m、奥行0.3m程度である。土坑の覆土は、ローム粒や炭化物を多量に含む褐色土である。遺物は前期前半の土器が出土した。

#### 土層注記

1	5 YR3/1黒褐色土	6	7.5YR2/1	A ローム大極多	F ローム多量	K 焼土少量
2	7.5YR3/3暗褐色土	7	7.5YR3/2・2/2	B ローム大多量	G ローム中量	L 炭化物多量
3	7.5YR3/4暗褐色土	8	7.5YR4/4・4/3褐色土	C ローム大中量	H ローム少量	M 炭化物中量
4	5 YR3/4暗褐色土	9	7.5YR4/6褐色土	D ローム大少量	I 焼土多量	N 炭化物中量
				E ローム極多量	J 焼土中量	

#### 出土土器（第56図～第58図）

文章中の分類は遺構外一括土器の分類に準じている。

#### 第2号土坑（第56図No1～4）

No1は同遺構中央付近の底面に横位に潰れた状態で出土した。口縁部を西方に向いている。口径は約30cm、底径は13cmで、胴部下半より外反する器形である。口縁部は舌状でやや内そぎぎみである。口唇部には竹管状工具により刻み目が付される。器面には燃りのほどけたし「」による結節文が施文されている。一つの原体により2種類もしくは3種類の結節文が見られる。①Z字状のもので1つの結節の中に筋が三つ見られるもの、②は①と同様であるがその痕跡に接して列点状の痕跡が付随するもの。③は、①、②とは異なり細めの結節文で筋が明瞭でない。

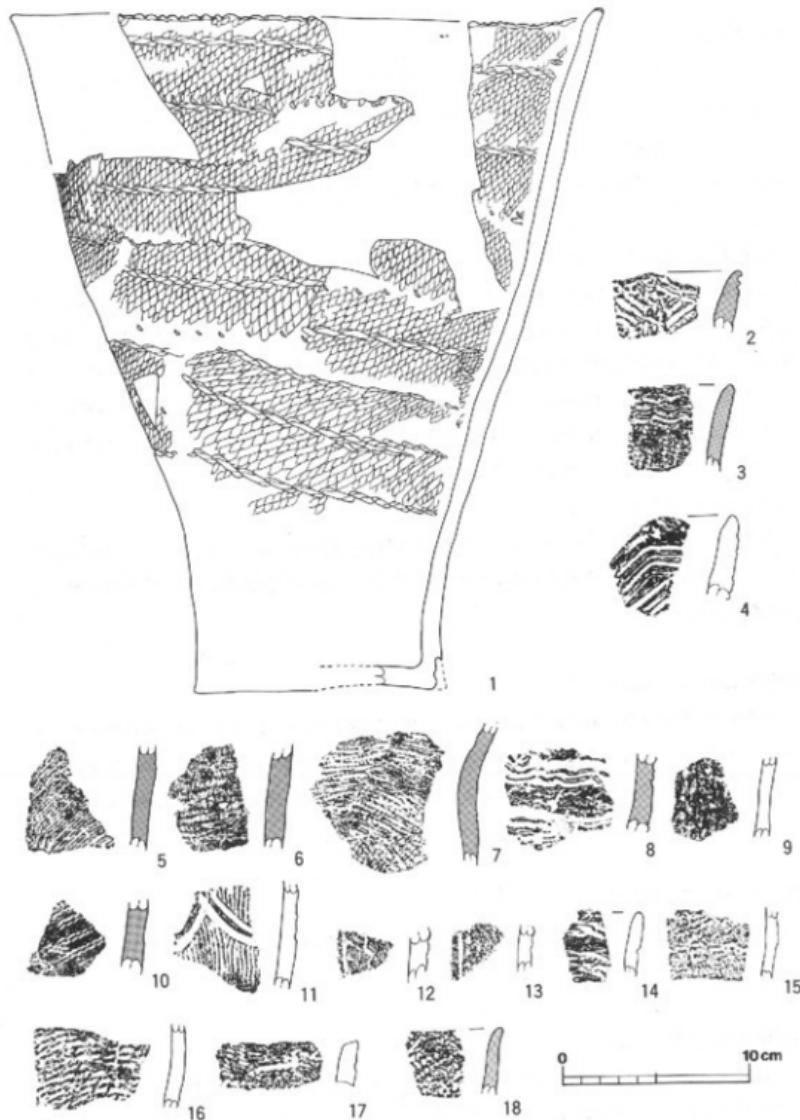
一つの結節の条は同一場所で一周するものではなく、一定施文するとその位置を変えている。土器胴部上半部には炭化物の付着が見られ、口唇部には一定幅での押し付けがなされているようである。底面は磨かれている。No2・3は第5群土器であり、No4は第6群土器である。

#### 第7号土坑（第57図No19～22）

No19は第6群土器で、底部から外傾して立ち上り、口縁部近くで微妙に括れる器形である。復元径は約34cmで、口唇部は舌状をなし半截竹管状工具の内側により刻み目が付される。口唇部下の部分には器面の1/4にのみ、半截竹管状工具内側による施文が巡る。それは工具内側の押し付け、工具先端の刺突列、平行沈線による鋸歯文、曲線文である。この口縁部の施文後にアナグラ属の貝殻による波状文がほぼ全面にわたり施文される。貝殻自体の肋の凹凸は細かいため一見するとハマグリ等の貝による施文にも類似する。施文の方向は斜めであり、波状文の中央部分には施文が途切れる部分があり繰り返し現れる。又波状文の下方には三角文のようなものが連続して現れる。部分的には通常の貝殻波状文も施文されている。口縁部下には炭化物の付着が一部見られる。胎土には砂粒を多く含む。No20・21も同群の土器の口縁部である。No20は口縁部がラッパ状に開く深鉢であろう。口唇部は丸味を持つ。口唇直下には幅の狭い半截竹管状工具による平行沈線が縦に施文されている。その後幅の広い平行沈線により菱形を描くように施文がなされる。No21は凹凸の激しい口唇部の刻み目がある。器面には輪積み痕が見られ、縦に太い沈線を引いた後にアナグラ属の貝殻による波状文が、輪積み痕を潰すように施文されている。同貝殻文は完全な波状文にはなっていない。

#### 第18号土坑（第56図No5）

第5群土器であり口の細かいし「」縄文が施文されている。



第56圖 土坑出土遺物（1）

#### 第19号土坑（第56図No6～10）

No 9を除いて皆胎土に纖維を含む第5群土器である。No 7・8は単軸絡条体1類1A類により施文がなされている。No 7は頸部付近で、括れる器形を持つ。No 8は三本単位のコンパス文が施文される。一定の間隔で支点を変え施文している。No 9は第6群土器であろう。胎土には纖維を含まず、砂粒を多く含み、赤色の粒を含む。内外面には煤が付着している。

#### 第24号土坑（第56図No11～13）

本遺構からは第9群土器のNo12～13、第12群土器が出土している。No12～13は胴部破片であり竹管状工具外側による継の沈線が引かれたわきに、同原体による刺突文や、三角形刻文を配している。No12には継回転のS字状結節文が見られる。胎土には多量に細かい石英粒を含み、ザラザラした感触がある。No11は器面に単軸絡条体1類により施文がなされた上に、太めの竹管状工具により弧線文が二重に引かれ、その線の間は磨り消されている。単軸絡条体にはRの繩が密に巻かれている。内面は丁寧に磨かれ、胎土は堅緻である。

#### 第41号土坑（第56図No14・15）

本遺構からは第8群土器が出土している。No14は口縁部で折り返し口縁を持つ。口唇部は舌状をなし器面にはR | | によるS字状結節文が施文される。No15は胴部破片でL | 長繩文原体による結節文が見られる。

#### 第42号土坑（第56図No16・17）

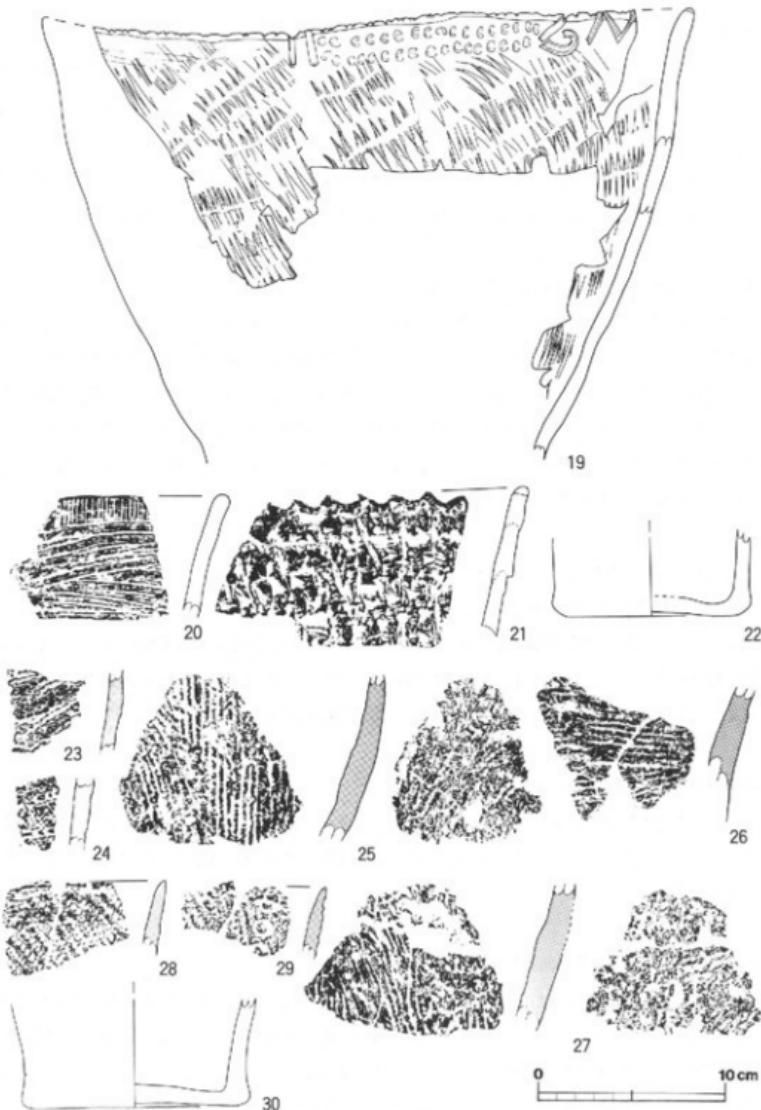
本遺構からは第8群土器が出土している。No16・17は胴部破片でNo16の器面には輪積み痕があり、燃りのほどけたL | 長が施文されている。胴部下半部と考えられ赤変している。胎土には砂粒を多く含む。No17は器面にR | | によるZ字状の結節回転文が施文される。又同繩文原体により半置半転状態の施文部分も見られる。

#### 第47号土坑（第56図No18）

No18は第5群土器である。波状口縁を呈する、内そぎ状の口唇部を持つものであり、器面にはL | 長が施文されている。

#### 第49号土坑（第57図No23）

No23は第5群2類B種の土器である。器面にはし・Rを束ね軸に巻いた原体により木目状の撚糸文が施文される。胎土に纖維が多く含まれる。器面には段差が見られる。



第57図 土坑出土遺物（2）

#### 第54号土坑（第57図No25～27）

本遺構から出土した遺物は、ほとんどが第2群土器である。土坑内の上層よりまとまって出土している。No25・27は胴下半部のもので、いずれも土器片の上縁より下端の方が厚みを増す。又土器下縁の方が断面観察において、より被熱を受けているようで赤色化している。外面においては上半部の方が器壁の崩落が激しい。下半部は表面上は茶褐色（白茶）を呈する。No25の内外面にはサルボウ属の貝による条痕文が縱方向で施文されている。No27も同様である。

#### 第52・57・60・67号土坑（第57図No24・28～30）

第52土坑はNo30が出土した。ほぼ直立する底部で、胎土には長石、石英を含む。第57号土坑はNo28の口縁部が出土した。やや内そぎ状の口唇部形態を持ち、器面にはR | L縄文が施されている。第5群である。第60号土坑はNo29が出土した。口縁部が緩く外反する波状口縁で、器面にはR | L縄文が施文された後、波頂部下に縱に連続した円形刺突文が施文されている。第5群である。第67号土坑はNo24が出土し、器面に地文R | L + r | の附加条2種が施文されている。第5群土器1類C3種である。繊維の混入率は少ない。

#### 第70号土坑（第58図No33～38）

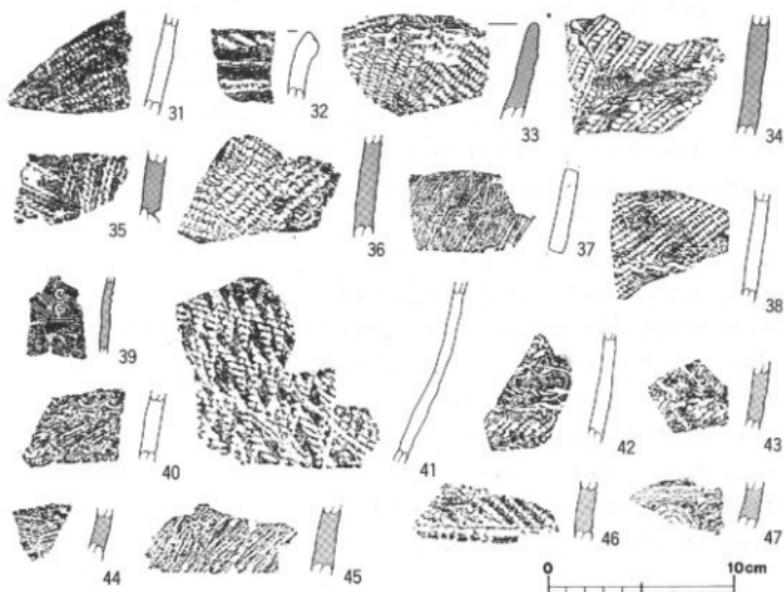
No33～36は第5群土器であり、No33のみが口縁部破片で、他は胴部破片である。No33・36は同一個体と思われ第6類A種と同様である。二種類の縄文原体を使用し羽状構成をなす。No34は1類E種である。一部「ミミズ腫れ状」の隆起が見られる。No37はrの単軸絡条体が条間を開けて施文されている。胎土に赤褐色の粒が含まれ、第6群土器である。

#### 第68・69号土坑（第58図No31・32）

第68号出土のNo31は第9群土器であり、器面にはR | L縦回転施文がなされる。胎土には雲母片や石英粒が含まれる。第69号出土のNo32は第6群土器3類A種と同様のものであり、若干口唇下が肥厚する。

#### 第72・75～77号土坑（第58図No37～47）

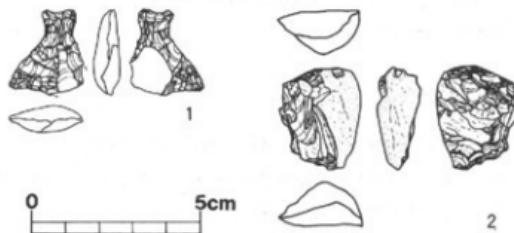
第72号土坑からはNo39～42が出土した。No39は第5群、No41は第6群、No42は第8群土器である。第75号土坑はNo43が出土し、第5群1類C種の土器であり、L | 長 + r | の縄文原体である。第76号土坑はNo44・45・47が出土し、すべて第5群土器である。L | Lの縄文により施文されている。第77号土坑はNo47が出土し、第5群8類A種同様施文がなされる。



第58図 土坑出土遺物（3）

出土石器（第59図）

No 1は第52号土坑出土のもので、横型石匙であるが大きく欠損している。つまみの部分は比較的太くて抉り込みも浅い。また、つまみの上端にも丁寧な調整が施され、やや凹みを呈している。チャート製。No 2は第72号土坑出土のもので、横型石器で小円礫の分割剥片を素材とする。主として加工は上下の主要剥離面に施されているが、背面や左右の両面にも観察される。チャート製。



第59図 土坑出土遺物（4）

### (3) 遺構外一括出土土器

以下の1~13の土器群に分類した。分類に当たっては時間的な変遷、地域的な性格も考慮している。

- 第1群 繩文時代早期前半 (撚糸文系土器群 夏島式、無文系土器群)
- 第2群 繩文時代早期後半 (条痕文系土器群 芽山式)
- 第3群 繩文時代早期末葉
- 第4群 繩文時代前期初頭
- 第5群 繩文時代前期前半 (黒浜式)
- 第6群 繩文時代前期後半 (浮島式、諸磯式、興津式)
- 第7群 繩文時代前期末~中期初頭 (他地域の特徴を持ち散発的に出土する土器)
- 第8群 繩文時代前期末~中期初頭 (栗島台式、下小野式)
- 第9群 繩文時代中期初頭 (五領ヶ台式)
- 第10群 繩文時代中期前半 (阿玉台式)
- 第11群 繩文時代中期前半 (勝坂式)
- 第12群 繩文時代中期後半 (中峠式、加曾利E式)
- 第13群 繩文時代晚期前半 (安行式・姥山式)

#### 第1群 早期前半 (撚糸文系土器群 夏島式、無文系土器群) (第60~62図No1~No65)

当土器群は早期前半撚糸文系土器群の中の夏島式及び無文系土器群とされる土器を一括した。調査区エリヤ内南部に多く分布し、特に出土の多い地点が4箇所みられる。それぞれ出土量はF-37区331g、G-37区219g、J-39区136g、P-38区147g、N-31区129gである。これらの地点からは同時期の遺構と思われるものは確認されなかった。また同図中には示されていないが、第1号方形周溝墓墳丘下の包含層及び周溝中よりまとまって出土した。墳丘下の包含層でも北東部で188g、北西部で168g、南西部で71g、南東部で39gであり北半に多いことがわかる。方形周溝墓付近においては同時期の遺構は確認されなかった。

以下第1群土器について述べるにあたって次の小分類を用いた。

#### 第1群土器

- 1類 器面に条を縱にした回転繩文の施文された土器
- 2類 器面に条を縱にした單輪絡条体回転文(撚糸文)の施文された土器
- 3類 1、2類に比べ、器厚が薄い土器
- 4類 無文で器面に擦痕が見られる土器

全体の器形を復元し得る土器はないが、部分的特徴から総合して特徴を描きだすと、口唇部先端は円みを持ち、若干肥厚する傾向が見られ、口唇部先端より口唇最大肥厚部にかけては、丁寧にナデられ無文部が見られるものが多い。器面への施文は、回転縄文による縄文施文のものがほとんどを占める。縄文原体を器面上に約45°の傾きで施文し、継の条を描きだす。回転縄文の原体はR Ⅰヒのものがほとんどであるが、他の撚りのものも少数見受けられる。

1類とした土器の中で、部位や施文原体によりA・B・Cの3種類に分類した。

- A種 回転縄文施文がなされる口縁部
- B種 R Ⅰヒ回転縄文の施文された胴部
- C種 R Ⅰヒ回転縄文の施文された土器

1類A種 回転縄文施文がなされる口縁部（第60図No.1～第61図No.17）

No.1～No.17はR Ⅰヒ回転縄文施文土器の口縁部である。No.1は口縁部の径を復元したものである。径は29.8cmを計り、器厚は第1群土器中一番厚い1cmを計る。口唇端は尖りながら丸味を持ち、やや肥厚しながら外側に膨れる。[No.5・12も同様な断面形態を示す]口唇最大肥厚部より縄文施文がなされる。それより口唇部先端にかけては整えられ、無文部となっている。施文されている縄文はR Ⅰヒであり、原体を土器器面に斜めに置き施文することによって、継の条を描く。施文された縄文は或る間隔ごとに、他より深く押された条が見られる。この深く押された条を観察すると、口唇下2cm位を境にして上下に喰い違いが見られ、その前後関係は下の施文の方が新しいようである。胎土中には砂粒が多く含まれ、石英粒のような透明なものや白色の鉱物が目立つ。それらの粒形は角張っている。胎土に含まれる石英粒状のものは口唇端では目立たず、一方縄文施文部では多く観察される。No.4も、口縁部断面形は若干異なるが、同一個体と思われ、器面に焼成後の穿孔がなされる。

第60図No.5・7・8・12・13は、口唇部がやや肥厚し、器厚がやや薄手の土器である。No.8は縄文施文前に口唇下をへこませて縄文を施文し、その上をなでている。

第60図No.4・6・11は、口唇端があまり丸味を持たない。それぞれ口唇部は外側にやや膨れている。No.11も口唇肥厚部下をナデしている。器面に施文された縄文は条が斜めになる。

第60・61図No.2・3・8～10・13～16の口唇部はほとんど肥厚が見られず、直行し尖った丸味を持つものが多い。器面は荒れているものが多く、施文も不鮮明なものが目立つ。胎土には粒のそろった砂粒が多く含まれる。色調は7.5YR 7/6～7/4（にぶい橙）色に類する色調のものが多い。

口縁部を通してよく見られる特徴として、口唇部の最大肥厚部上より施文が始められることが

挙げられる。口唇肥厚部下の括れ部はナデられているものが見受けられる。口唇最大肥厚部以上の無文部については整えられており、大粒の白色の鉱物等もほとんど含まれていないが、下方の部位に関しては鉱物粒が非常に多く器面に現れているものも見受けられる。裏面に関しては、口唇端より1cm以内の部分の器面が口唇部先端同様整えられているのに比べ、それ以下の部分については左右にナデられ、さらにその下は上下の動きのナデが見られる。

No17は器面にL+I+Jが施文される。施文は口唇上端近くまで及び、口唇最大肥厚部下で施文される条は、粗い。施文は同一面で2回にも及ぶ。裏面には右から左へナデた痕跡が小石の移動となって現れている。

#### 1類B種 R 17回転繩文の施文された胴部（第61図No20~31）

施文された繩文には節が大型のもの（No19-23-24）や小型のものも見られる。No19は異条繩文のような雰囲気が見られる。繩文は単位として観察することができ、斜位に施文されていることが解る。単位間は繩文圧痕が浅く、単位中央付近は圧痕が深い。No28は節が観察しにくいが、節が纏い原体のようである。No21はNo1と同一個体であり、No25はNo5と同一個体と思われる。

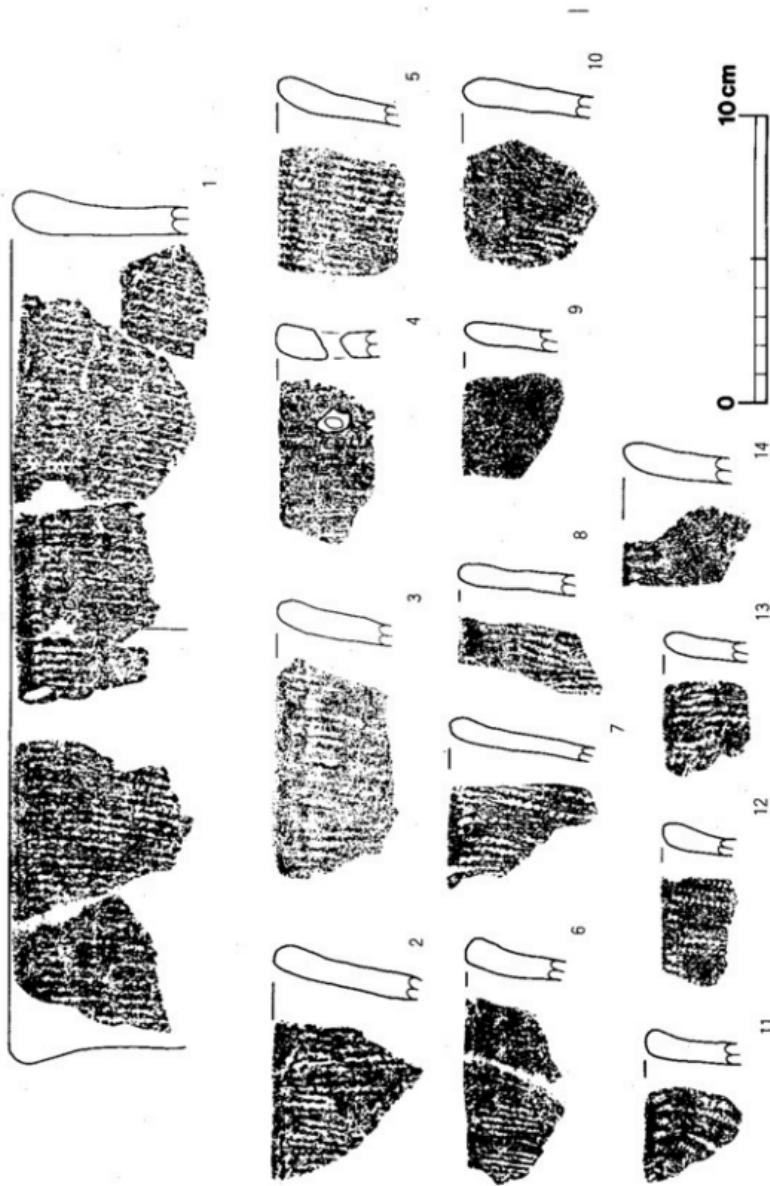
No27~29は回転繩文の帯が明瞭であり、帯と帯との間は無文部が見られる。繩文原体はいずれもR+I+Jであり、器面に対して若干斜位に押しつけている。No28-29は繩文原体を器面に対し横に置き、上下方向に施文している。それ故に条が左下がりとなっている。No27は繩文原体を器面に対して横に置くことは同様であるが、1単位が終わると左右に動かし、横方向の繩文の帯となっている。

器面の状況は、表面が平滑であり、丁寧にナデたか混じりものない粘土を水で解き、ゆるくして器面に塗ったような状況を呈す。この特徴はほとんどのものに共通する。裏面については表面同様に滑らかなもの（No20-25等）あるが、No18-21-22-26については、表面ほど丁寧ではない。ほとんどのものが、砂粒が現わとなりザラザラしている。使用により擦れたものではなく、製作の当初よりのものと思われる。

胎土については、口縁同様大きく分けて2系統観察される。等粒の砂が胎土のほとんどを占めるものと、前者よりは堅緻な白色の角張った鉱物を多く含むものとである。白色の鉱物は大きさが不揃いである。

#### 1類C種 R 11回転繩文の施文された土器（第61図No17-30~35）

口縁部破片はNo17のみであり、他は胴部である。No17の口唇部は円頭状を呈し、外側に若干膨らむ。口唇の肥厚部下には繩文の施文が希薄になっており、胴部の繩文は幾度か施文を繰り返したようで、重なり合う条が見られる。裏面には右から左方向への砂粒の動きが見られる。No30は



第60図 通構外出土土器第1群(1)

No17と同一個体と思われ、裏面にはやはりナデによる砂粒の動きが見られる。やはり口唇部の表面には、粘土を溶いたものを塗っている。No31・35は他の同種土器に比べR縄文原体が太いものであり、条間にすき間が見られない。No33に関しては縄文施文後に水を器面につけるか、水で溶いた粘土を薄く塗りつつナデしているようである。土器裏面の状況は、No32、35が平滑に整えられている他はザラつきが見られ、No34・35にナデによる砂粒の動きが見られる。

## 2類 器面に条を縱にした単軸絡条体回転文(燃糸文)の施文された土器 (第62図No36~44・63)

口縁部破片はNo36・37の2点、No38~43は胴部破片であり、No63は底部破片である。

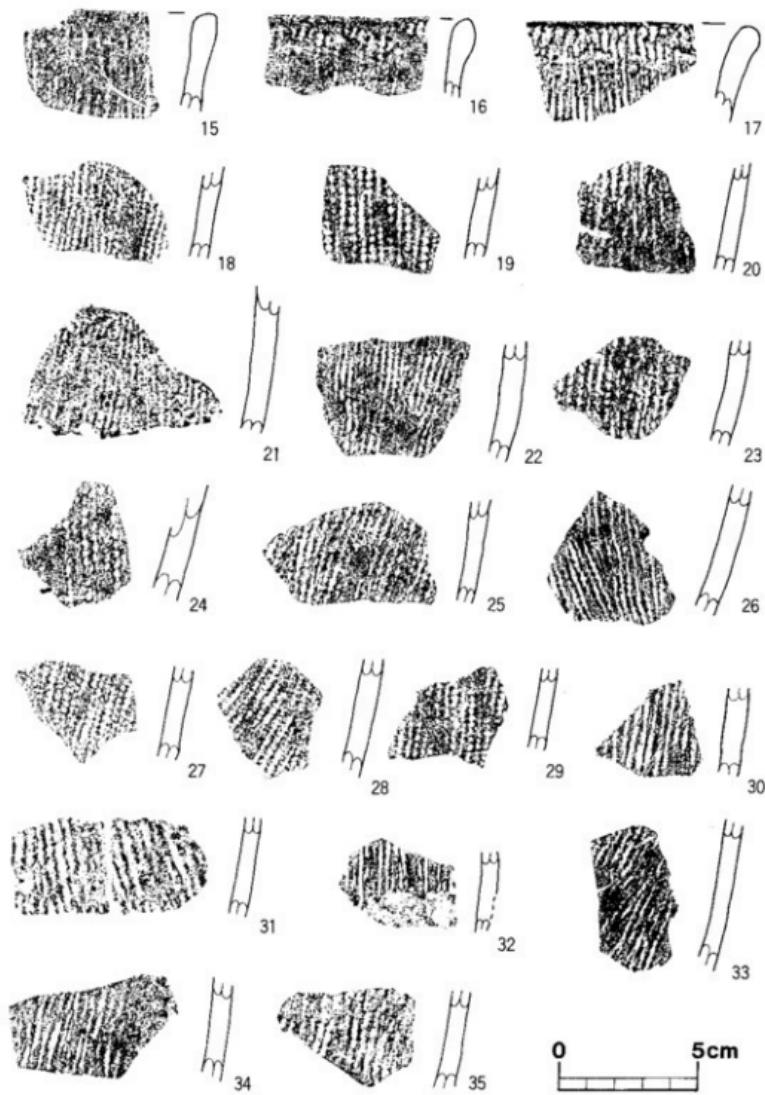
No36は口唇部が緩く、少しだけ肥厚し、先端は丸味を持つ。絡条体の原体にはし原体が用いられているようであり、節は不鮮明であるが細長いものが見受けられる。条が縱走することから、原体は右巻きにされたものを利用し、器面に原体をやや右上がりの状態に置いて施文したものと思われる。No37は胴部よりほほ直口し口唇端がやや尖っている。節等が不鮮明なため原体の縄は不明である。No38・39は細かいRの筋が見られる。条間は密な状態となっている。No40・41はやや大きめのRの節が見られる。本類の土器片の中で大粒の筋が見られるもののうち、No42はR原体であり、No43はL原体のようである。No43は底部付近の破片と思われ、尖底土器の形態に規制され、施文単位が重なり合っている。No63は同類の土器の底部であると思われる。施文は器面が荒れているために不鮮明となっているが、絡条体の圧痕が見受けられる。胴部から尖底端部に至るほど器厚を増している。器厚は最高で1.4cmを測る。

裏面はNo38・41のみ平滑であり、他は胎土中の含有物によりザラザラする感触を覚える。No38は特にきめの細かい胎土により製作されている。1群土器に共通して言えることであるが、裏面のザラザラした土器であっても、口唇部及び表面に関しては「化粧土」とも言うべきものが塗られているようであり整えられている。あたかも大粒の石英粒等の含有物が表面に出ることを防いでいるようである。

## 3類 1、2類に比べ、器厚が薄い土器 (第62図No45~60)

ここに提示した資料はすべて薄手の土器であり、器厚は最大で(口唇肥厚部)7mmを測り、最小(狭)で1.5mmを測るが、大半は2.5mmである。口辺部と胴部のみであり、底部は確認し得なかった。ほとんどのものは器面に縄文原体R「」による施文がなされる。

No45~50は口縁部であり、No45~48は断面形が、口唇部にかすかな膨らみが見られるがほほ直口していると言つて良い。No49は口唇部肥厚下にくぼみが見られる。No50は裏面も表面同様緩く外反している。それぞれ口唇の最大肥厚部より下は、縄文の施文されない部分が見られる。口唇最大肥厚部上数mmのところ(口唇先端までは及ばない)には縄文が施文されている。すべてR



第61図 遺構外出土土器1群(2)

|七であり、No46を除いて密な条となっている。縄文の筋は小さめが多い。

No51～60は胴部破片であり、それぞれ小破片であるが、器面などの崩落はない。No60を除きすべて縄文原体R |七であり、そのほとんどが、縄文が縦に密に施文されている。No55は斜縄文となっており、R |七縄文原体を器面對して縦に置き、横回転した可能性がある。No57は縄文の条がまばらに施文されたものであり、下端に焼成後の穿孔の痕跡らしきものがある。

No60は絡条体によるいわゆる撚糸文の土器である。条が重なり合っている。

この類においても胎土に等粒の細砂が含まれ砂っぽいものと、大きさのまばらな石英等の白色の鉱物が含まれ堅緻な感じを与える土器とがある。表面はきれいにナデられた上に施文がなされ、裏面は平滑なものとザラザラとして含有物があらわとなっているものとがある。

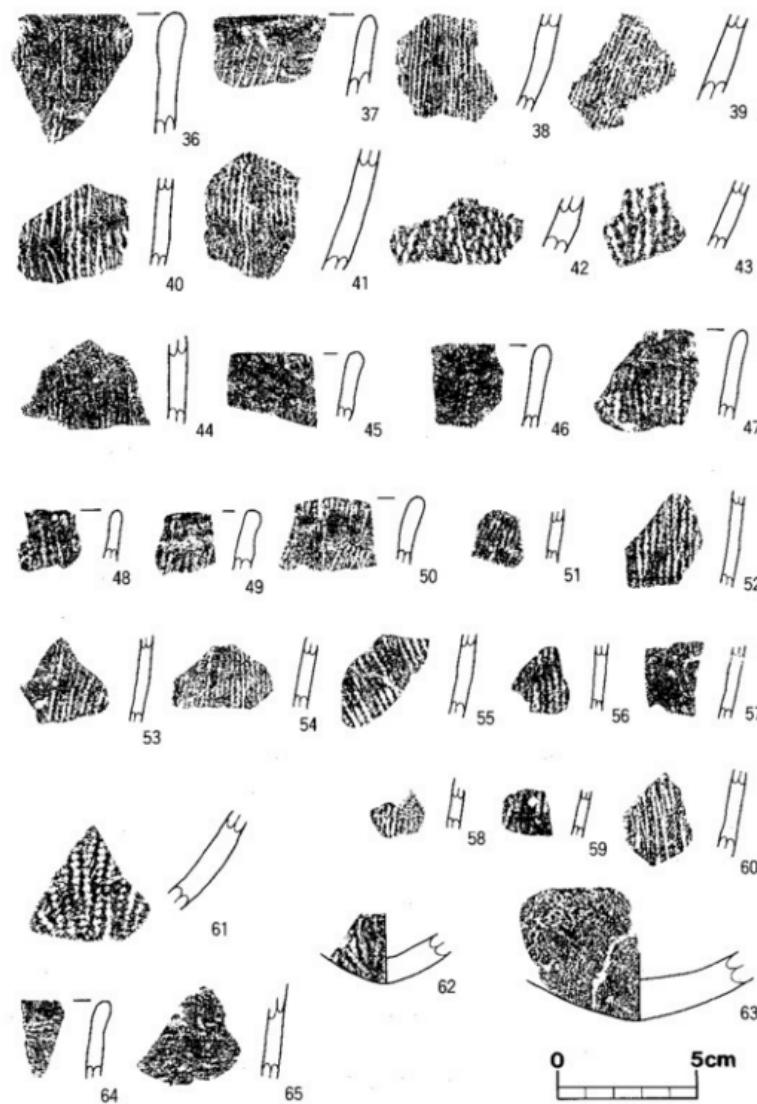
#### 4類 無文で器面に擦痕が見られる土器（第62図No64～No65）

2点のみ提示した資料のうち、No64が口縁部、No65が胴部である。No64は薄手のもので口唇部端が丸味を持ち、緩く外反し、かすかに肥厚している。口唇部はきれいにナデられ、肥厚部下は横方向の調整痕が見られる。No65は器面にヘラ状工具でナデたような横方向の調整痕が全面に見られる。同類の土器の胎土はそれなり異なり、No64はほとんど細かな粘土により成り立っているようである。No65は砂粒を若干含み、砂粒の動きによって調整の方向がわかる。第1群土器中では異質な感じを持つ土器である。

#### 第2群土器 早期後半（条痕文系土器群 芽山式）（第63図No1～6）

同群の土器はP-26区に一番多く出土している。同地点より南南西方向に同時期の土器を出土した54号土坑が存在する。全体的には調査区エリア中央部付近に北東-南西方向で遺物が散在している。

No1・3・5は細かい条痕文が右下がりに施文され、内面には横方向の条痕が施文されている。胎土は堅緻であり、纖維を含む。No2・4は器面にかすかに条痕が施文されている。胎土は堅緻であり纖維を含む。No6には太い条痕が施文されている。条痕は、表面で縦方向に、裏面では複多な方向に施文されている。黒褐色を呈し、纖維の混入が多い。



第62図 遺構外出土土器1群(3)

### 第3群土器 早期末葉（第63図No.7～9）

No.7・8は同一個体と考えられる。胎土内には纖維が多量に含まれている。土器表面には粒子の細かな粘土が塗られ、丁寧にナデられている。表面の条痕は斜めに施文されている。条痕はまばらで、無文部が目立つ。内面には条痕は見られない。No.7には貝殻背部の圧痕が数ヶ所見られる。他の条痕施文原体の貝殻に比べ、極めて小型の貝殻のようである。No.7・8の土器は下方ほど被熱し赤色化している。No.9は器厚が厚く、表面にL・T・長縄文が施文され、内面には左下がりの条痕が施文されている。胎土中に纖維の混入する量が多い。器面は赤褐色であり、二次的な加熱を受けたものと思われる。

### 第4群土器 前期初頭（第63図No.10～28）

本群に位置付けられている土器は、重さにして230g出土している。遺構別にみると第6号住居址、第1号方形周溝墓から多く出土している。

本群の土器は口縁部の装飾により以下のように分類した。

1類 口縁部に突帯が2条巡り、上方の1条は口唇端に付され口唇部の平坦面を作るもの

2類 口唇部下に突帯が1条巡るもの

A種 突帯を挟み半截竹管状工具腹部による刺突・沈線が施文され、縄文原体が多用されるもの

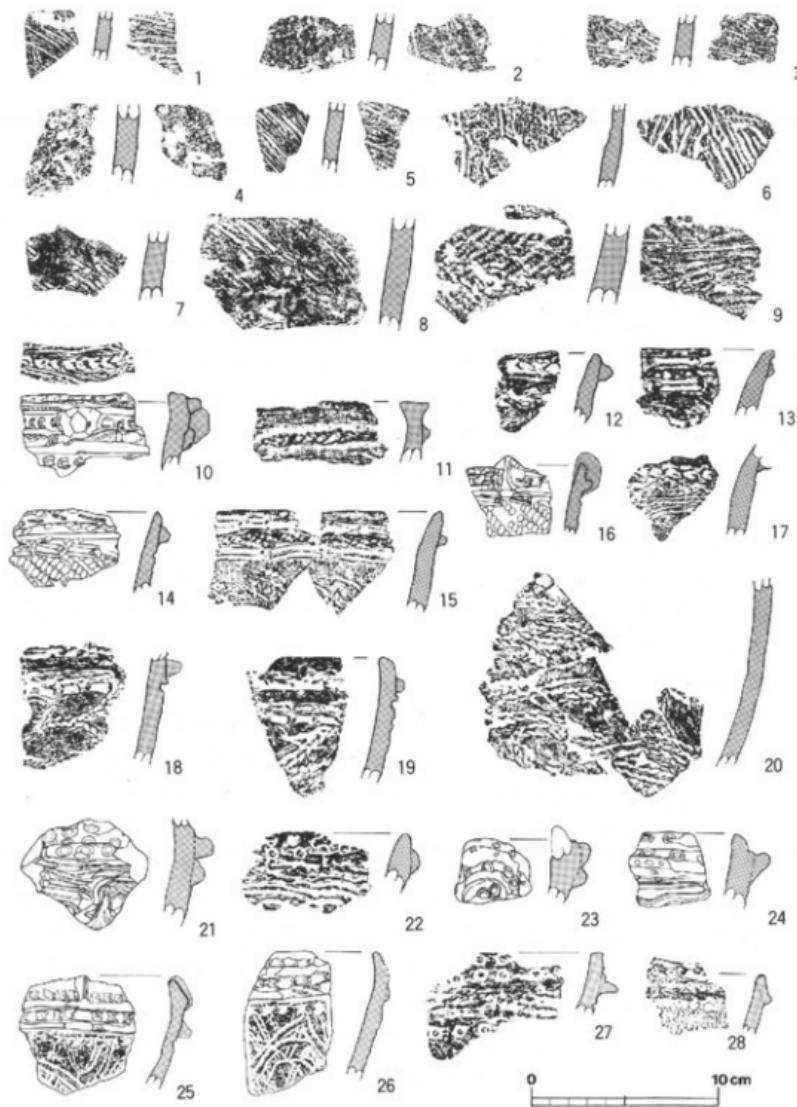
B種 突帯下に隆起線が周曲しているもの

3類 口唇部下に2条の突帯を持つもの

4群1類 口縁部に突帯が2条巡り、上方の1条は口唇端に付され口唇部の平坦面を作るもの

（第63図No.10・11・17）

No.10とNo.17は同一個体と考えられ、口縁部には2条の突帯が付される。その突帯の間には丸い粘土が貼り付けられ、両突帯間をつないでいる。口唇部は若干内向し、口唇部端は突帯上面と同一の平坦面をなす。平坦面上には縦条体の回転文が横位に施文される。縦条体は単軸縦条体1A類であり、縄はLとRを一組にして巻かれ、圧痕が矢羽根状を呈する。その平坦面の中央には、一列の半截竹管状工具による刺突文が左から右へ施文される。突帯上にも口唇端同様の縦条体回転文が施文される。突帯間には口唇部同様の刺突列が巡り、さらに突帯を挟んでその下にも、刺突列が1条巡る。丸い粘土を貼り付けた部分の突帯下にも、刺突がなされる。内面は入念に磨かれたせいか光沢がある。No.17は、突帯の残欠が1条残る胴部片である。器面には単軸縦条体1A類原体による回転施文がなされ、その上に突帯下の刺突列及び縱方向の刺突列が観察される。突帯間の丸い粘土の貼り付けと同様の単位で施文されているものと思われる。No.11も口唇部の断面



第63図 遺構外出土土器 2群～4群

形がNo10と同様な形態を示す。口唇部は平坦であり、内彎する。下方の突带上には「」による回転繩文が施文される。突帶間、突帶下はナデられているのみであり、織維痕が目立つ。

4群2類 口唇部下に突帶が1条巡るもの（第63図No12~16、18~24）

2類A種 突帶を挟み半截竹管状工具内側による刺突・沈線が施文され、繩文原体が多用されるもの（第63図No12~16・18~20）

No13・14・15・16は地文に回転繩文が施文される。No13はNo15と同一個体と思われ、口唇部端には部分的に平坦面を持ち、他はやや丸みを持つ。突帶は口唇端より約1cm下に付けられ、潰れてなだらかな部分もある。器面上にはR「」繩文が、突帶上を含めて施文される。R「」の条には節の大小が見られ、太さの異なる繩文を擦り合わせているようであるが、異なる条はほとんど見られない。その後に突帶を挟んで半截竹管状工具の凹部による短い平行沈線が左から右へ引かれる。胎土に織維を含むが堅緻である。器面は丁寧にナデられ、特に裏面には磨きも加わる。

No14・16は同一個体と考えられる土器である。器厚は他の土器と比べ薄手であり、小型の土器であろう。口唇端は尖り、突帶は1条巡る。同一突帶にも幅の広狭がありNo16では狭く、小さい。No16の口唇部には突帶につながる小突起が付される。小突起の裏面もやや粘土が付される。繩文はR「」が回転施文され、口唇部、突起部、突帶部、胴部にまで及ぶ。その後に突帶を挟んで上下に半截竹管状工具の凹部による短い沈線が左から右へ引かれる。器面を念入りに整えた上へ施文しており、内面は丁寧に磨かれている。

No12・18・19・20には単軸絡条体による施文がなされている。No12の口唇部は尖った状態のもので、波状口縁を呈するものと思われる。突帶の位置は一定しない。繩文は単軸絡条体による施文がなされている。細いRが巻かれているようである。同施文は口唇端、突帶上、胴部に及ぶ。その上に突帶を挟んで上下に半截竹管状工具による刺突がなされる。刺突は器面を左から右へ施文されている。内面は化粧土らしきものが剥がれている。

No18・19・20は同一個体片と思われる。口縁部は全体的に緩く内彎し、口唇端は外そぎ状を呈し、尖っている。口唇端下1cm付近に突帶が付され、指頭による潰れが見られる。繩文は単軸絡条体1A類が斜に施文され、胴部にのみ見られる。繩は太いRとLが1組になっていて、節の圧痕は矢羽根状を呈し、条としては木目状を呈する。繩は輪の中心で縛り両側へ巻いている。繩文施文の上に、太い半截竹管状工具内側による刺突が突帶を挟んで左から右へ施文される。刺突の原体は均一に削られてはいないらしい。No20の一部にも刺突及び短い沈線が引かれる。胎土には織維を含むが堅緻である。器面は丁寧にナデられ内面は磨かれている。No20の器面の下部は赤褐色化している。No19の内面も赤褐色化し荒れている。

2類B種 突帶下に隆起線が周曲しているもの（第63図No21~24）

No21～24は同一個体と考えられる。口縁部は波状を呈し、突帯も同様な貼り付け方がされる。口唇部は先端が尖っており、胸部より緩く内彎している。突帯には緩いものから急なものまで様々である。突帯より上の部分に円形竹管列が施文されるものと、突帯上にまで施文が及ぶものがある。突帯上に円形竹管列が施文されないもののなかには、No23・24のように小さな丸い凹みが数ヶ所見られるが、それが縄文の筋であるかは不明である。No21・23は、突帯下に隆起線文が付されている。No21は波状部付近の破片、No23は波頂部下の破片であると思われ、隆起線文が波頂部と関連を持つことが考えられる。No21・22・24の胸部には半截竹管状工具による平行沈線が引かれる。そのほとんどが横位に引かれているが、No23に関しては、隆起線で閉まれた内側は円を描いているようである。No23の隆起線の内外には円形竹管文が沿うように施文されている。胎土には纖維が多く含み、器厚が厚い。器面には赤色の顔料が塗られているようである。

No27・28は隆起線が付されないが突帯上に円形刺突がなされるものであり同種に類似する。

#### 4群3類 口唇部下に突帯が2条巡るもの（第63図No25・26）

同種の遺物はNo25・26の2点であり、これらは同一個体と思われ、特徴として、口唇下1cm位のところに2条の突帯が巡る。突帯は全体的に貧弱なものである。No25の突帯の上には一部、緩の突帯が付される。口唇断面の観察によれば、突帯付近までは胸部より外に開き、その後やや内彎する。最大径は突帯部付近にある。胸部には地文として単輪絹条体1A類が継位に施文される。撲糸はLとRを組にし、矢羽根状を呈する。さらにそれらが全体として木目状の文様を形成し、突帯上にも横位に施文される。胸部の絹条体施文上には半截竹管状工具内側による直曲線文が描かれる。

口縁部には、直曲線文を描いたものと同様な原体による刺突文が巡る。刺突文は上中段が左から右へ、下段は逆に刺突され、右から左へ施文されている。

## 第5群土器 前期前半（黒浜式）

本土器群は、当遺跡の出土土器の中で大多数を占める。

遺跡内における出土状況は、調査エリア内南半部分西寄りに分布の中心があり、周辺部に行くほどまばらになる。

以下、第5群土器（前期前半・黒浜式）について述べるにあたって、施文方法や部位により以下の14類に分類し、また各類ごとに数種類の細分類を行った。

### 1類 回転繩文により施文されているもの

A種 単節繩文及び無節繩文により施文されているもの

B種 羽状繩文を呈するもの

C種 附加条繩文により施文されているもの

D種 異条繩文により施文されているもの

E種 直前段反撚りにより施文されているもの

F種 その他の回転繩文により施文されているもの

### 2類 単輪絡条体により施文されているもの

A種 単輪絡条体1類による施文されているもの

B種 単輪絡条体1A類により施文されているもの

C種 単輪絡条体5類により施文されているもの

D種 単輪絡条体6類により施文されているもの

### 3類 繩文原体及び絡条体原体によって側面圧痕が施文されているもの

A種 繩文原体によるもの

B種 絡条体原体によるもの

### 4類 格子目文が施文されているもの

A種 単沈線による格子目文が施文されているもの

B種 平行沈線及び櫛歯状工具による格子目文が施文されているもの

### 5類 平行沈線による波状文・コンバス状文が施文されているもの

A種 波状文が他の施文により区画されているもの

B種 崩れたコンバス状文が施文されているもの

C種 密な平行沈線が施文されているもの

### 6類 地文に繩文が施文され、口唇直下に連続する施文がなされているもの

A種 連続する刺突文が施文されているもの

B種 有節平行沈線が施文されているもの

C種 平行沈線が施文されているもの

- 7類 頸部付近に地文繩文を施文し、その上に円形刺突を行うもの
- 8類 頸部屈曲部に区画の意味を持つ文様が施文されているもの
- A種 刺突（押し引き）文が施文されているもの
  - B種 平行沈線又は有節平行沈線が施文されているもの
- 9類 口縁部付近に沈線により横に区画された文様帯を持つもの
- A種 区画内に鋸歯状を呈する文様が描かれているもの
  - B種 その他の文様が施文されているもの
- 10類 口縁部文様帯内を縦位に区画しているもの
- A種 沈線により施文されているもの
  - B種 刺突文により施文されているもの
- 11類 磨消繩文が施文されているもの
- 12類 貝殻文が施文されているもの
- A種 肋のあるアナダラ属の貝殻により施文されているもの
  - B種 肋のない貝殻により施文されているもの
- 13類 無文のもの
- 14類 底部

5群 1類 回転繩文により施文されているもの

1類 A種 単節繩文及び無節繩文により施文されているもの（第64図2～4・11～22）

No2～4は口縁部破片であり、No2・3は先端が尖り、No4は口唇上に平坦な面を持ち、波状口縁波底部に小突起が2つ付されている。No2と4は同一個体と思われる。文様に関しては、No2・4が節が大きめのR |<sub>上</sub>繩文横回転であり、No3も同様にR |<sub>上</sub>繩文横回転と考えられるが、…見継回転のような圧痕をとどめている。No2・4の胎土中には赤色の粒が入る。

No11～22は胴部破片である。No11～19はR |<sub>上</sub>繩文が施文されている。R |<sub>上</sub>繩文の中にはNo12・14・16のように繩文の条間が空くものや、No12・No16のように繩文の節の形が2種類見られ条中において交互に繰り返し表れる。No18は条が斜行せず、横走する繩文が施文された上に巾1cm程もある平行沈線を縱に施文している。No16・19は底部近くと思われ、被熱したせいか赤変している。No17には繩文原体の結東部圧痕が見られる。No20・21はL |<sub>長</sub>繩文が施文されており、No21は0段多条撚りの繩文のようで節が細長くなっている。No22はL |<sub>短</sub>繩文原体による無節繩文が施文されており、下部には若干R |<sub>上</sub>繩文が見られる。

### 1類B種 羽状縄文を呈するもの（第64図No 5～10・23～24、第65図25～28・31）

No 5～10は羽状縄文が施文された口縁部破片である。No 5・7・8はR ||・L |フ縄文原体を結束第一種の状態にして施文している。No 9は口唇部につまんだような突起が付く。文様はR ||・L |フが用いられているが別原体であり、L |フが後から施文されている。No 8の器面には赤色の塗彩がなされているようである。

No 6は単節縄文により羽状縄文が施文されているが、結束であるか否かは不明である。薄手で小振りの土器である。No 10は焼成後の穿孔が施された土器であり、頭部より上が外に開いている。縄文はR |ヒとL |長の別原体を用い、羽状縄文を施文する。頭部上は被熱により赤化している。

No 23～28・31は羽状縄文が施文された胴部である。No 23・28・31は無節縄文を使用したものである。No 23はR ||・L |フの別原体により施文され、No 28・31はR ||・L |フ結束第一種により施文されている。No 31は結束第一種の縄文を施文したのち、その原体を上下逆さにして施文している。その結果として羽状縄文による菱形のモチーフが出来上がる。

No 24～27は単節縄文を用いた羽状縄文である。No 24はR |ヒ・L |長それぞれ別の原体を施文することで羽状縄文としている。R |ヒ原体とL |長原体との間には節の違いが見られ、R |ヒ原体の方は節がつぶれており細長い。No 25～27は結束第一種による羽状縄文である。No 27は頭部のようであり、緩く屈曲している。

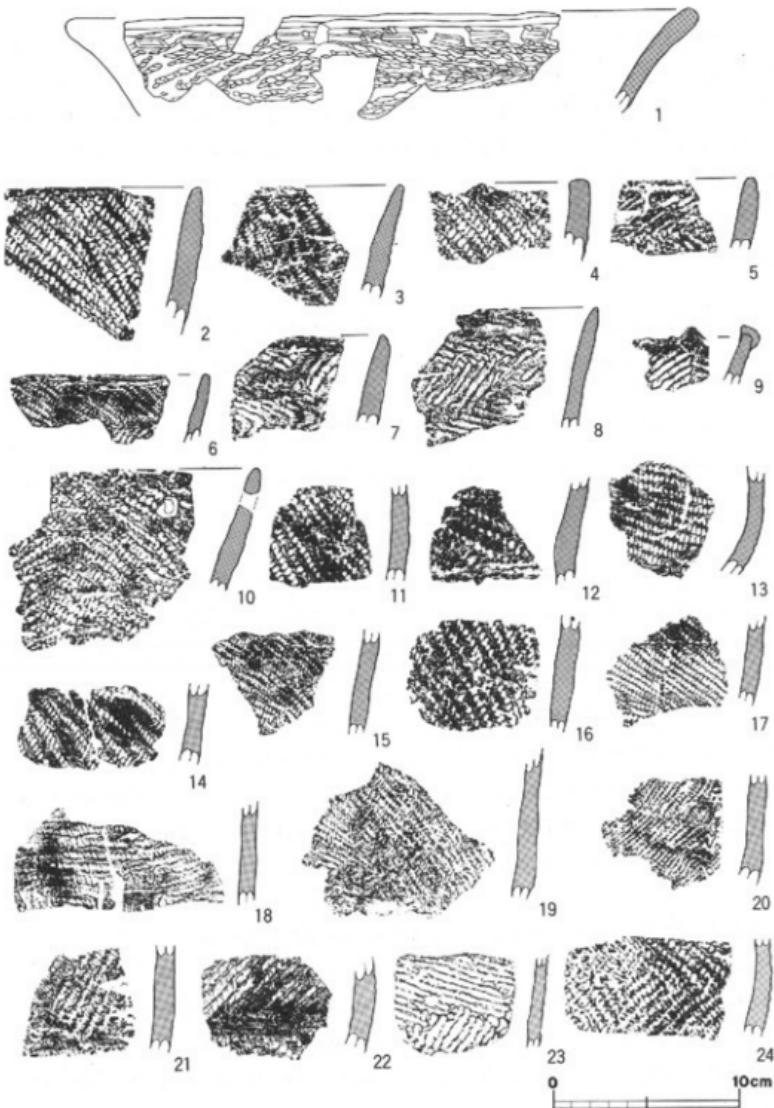
### 1類C種 附加条縄文による施文（第65図No 29・30・32～51）

#### C1種 附加条の巻き方が軸の燃りと同方向のもの（No 29・32～35・43）

No 29・32～35・43は軸になる縄の燃りと同方向に別の縄を1本巻いている。縄文の状況は3条に1条、附加条が現れる。No 29は波状口縁の波頂部であり、口唇上には平坦面がある。施文された附加条縄文の原体はL |長+Rであり、ほとんどの部分は条が縱方向に施文される。No 32もNo 29と同一個体と思われる。No 33もL |長+Rの附加条縄文である。No 34はL |長+rの原体とR |ヒ+Iの原体を使用している。結束か否かは不明である。No 35はL |長+Rの附加条縄文であり、附加条Rの圧痕は単節縄文の節のような状況を呈す。上部には、附加条を軸にとめるためであろうか、繊維痕が見られる。No 42・43もIの細い縄により結束している。附加条はR |ヒ+I（太）である。

#### C2種 附加条の巻き方が軸の燃りと逆方向のもの（第65図No 30・36）

No 30は口唇部が平坦であり、その上に縄文原体を押し付けた跡が見られる。口縁部全体は頭部から口唇へ大きく開く。器面にはR || + L |ヒが施文されているが、施文は整然としてはいない。No 36はR || + Rが施文されている。



第64図 遺構外出土土器 5群(1)

C3種 附加条の巻き方が軸の燃りと同方向、逆方向の二種併存するもの（第65図No37～41）  
No37はL | 縦 + r rである。先に巻きつけたr縄は、逆巻きのせいか条がゆがむ。No38はL | 縦  
+ r rである。No39・40・41は同一個体と思われる。原体はL | 縦を軸として、軸と同様な燃り  
方向にr縄（太）を附加する。その上に軸の燃りとは逆方向にl縄（太）を巻き、さらにその上  
に軸と同じ燃りのR附加条（細）を巻き、最後にはぐれないように全体を止めるための結束がr  
の細い縄によってなされている。No37のみが厚手で、他は薄手の土器である。No37・38は内面を  
磨いている。

#### 1類D種 異条縄文により施文されているもの（第65図No45・46・48～49）

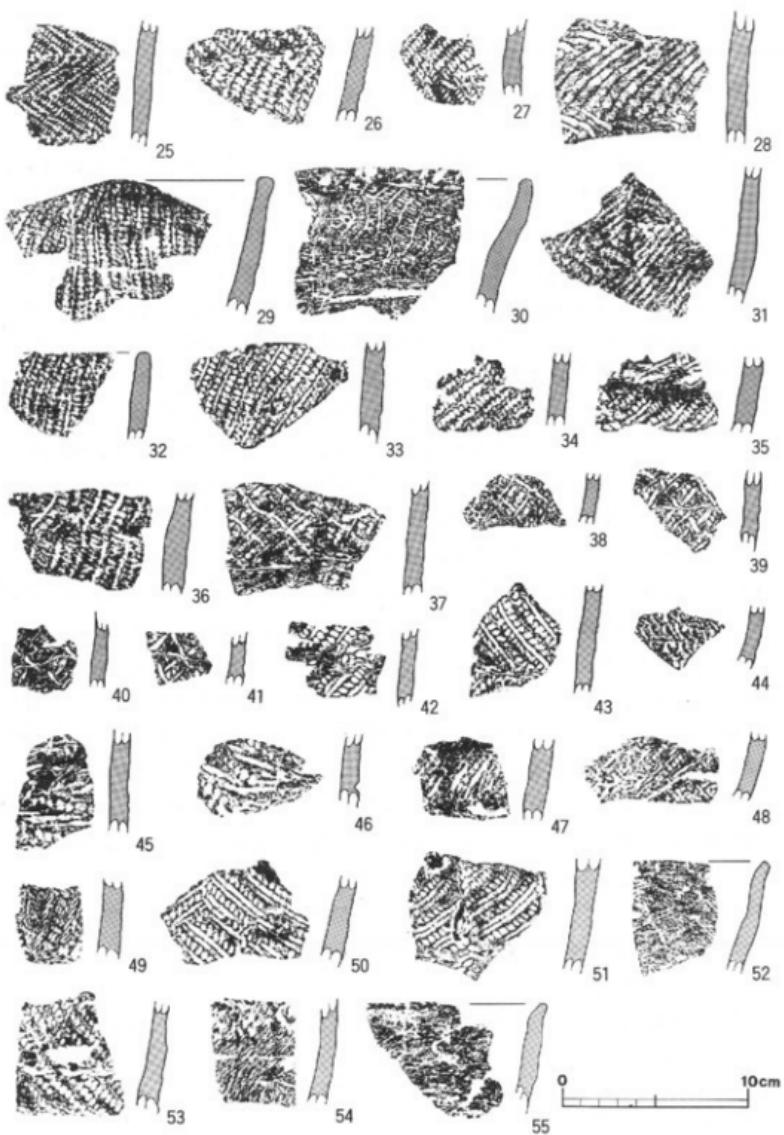
No45・46は同一個体と思われ、器面には太い紐を使用したR | 縦が施文されている。内面は平  
滑にナデられ、磨かれている。No48は底部近くの部位であり、L | 縦が施文されている。内面は  
丁寧にナデられている。胎土に透明な石英粒（1mm）が見られる。No49は砂粒を多く含む土器で  
ある。器面にはL | 縦 | 縦が施文されている。縄文施文の上に刺突文が加えられている。胎土には  
白色の粒子が多く含まれる。

#### 1類E種 直前段反燃りにより施文されているもの（第65図No50～51）

No50は纖維が入っているものの堅緻に作られている。表面の色調は肌色（5YR6/6）を呈する。  
縄文はR | 縦 | 縦及びL | 縦 | 縦が使用され、一見菱形を意識しているように見受けられる。上下に  
縄文の施文単位の切り合いがあり、上方が古く、下方が新しい。No51はNo50に比べ非常にもろさ  
を感じさせる。内外面の纖維痕も目立つ。L | 縦 | 縦が施文されている。中央には回転縄文によっ  
てできる「ミミズ腫れ状の粘土隆起」が見られ、先に左半分が右から左へ施文され、その後に右  
半分が同じく右から左へ施文されているようである。また、原体の末端の一方は纖維束により縛  
られているようである。縄文施文後、丸い粘土塊が貼り付られている。器面の色調は明赤褐色  
(2.5YR5/6)を呈するが、それは表面だけであり、内部は黒色を呈する。

#### 1類F種 その他の回転縄文が施文されているもの（第65図No44・53・54）

No44は小破片であるが器面にループ文が施文される唯一のものである。小型の土器と思われ、  
縄文原体はR | 縦であり、ループ文が三段に施文される。胎土には纖維を含むが、非常に堅緻で  
ある。No53にはR | 縦の一部を結節して施文したS字状結節文が施文されている。土器片下端に  
も結節文が一部見られる。纖維痕が目立つ。No54には細い原体のL | 縦が施文されている。胎土  
には砂粒を多く混入している。



第65図 遺構外出土土器5群(2)

5群2類 単軸絡条体により施文されているもの（第64図No1、第66図56～87）

2類A種 単軸絡条体1類により施文されているもの（第65図No1・58～59・64・65・67～70・77）

No1は厚手の土器で、復元径は33cmを測る。口縁部がラッパ状に外に開き、口唇部は丸味を持つ。器面にはしの繩を卷いた単軸絡条体が横回転施文されている。口唇直下には半截細竹管状工具による押し引き文が左から右へ施文されている。同一個体と思われる土器片の施文状況からすれば、頸部にも口唇直下同様の押し引き文が巡るようである。全体的には、胴部から底部にかけてまっすぐ立ち上がる器形と考えられる。胎土に纖維が含まれる量は少なく、内外面とも丁寧にナデられ、纖維痕はほとんど見られない。表面の色調は赤褐色を呈し、被熱しているようである。No65はL+ヒを軸に巻き継回転したものである。細長くなった節内にさらに小さい筋が入れ子状に入る。No67は、横回転に近いもので、撲糸にはしが使用され、その圧痕は一部交叉し網目状を呈す。No68にはLの繩が巻かれた絡条体が軸に回転され、その上に角棒状の工具により綫に刺突が行なわれる。胎土には砂粒が多く含まれる。No69の器面には軸にしの繩を二組にして巻いた施文がなされる。Lの繩の一部はRの細い繩により軸に縛り付けられている。内面は丁寧に磨かれている。No70には条間が狭いRの絡条体が施文され、一度施文した上に方向を若干変え施文している。No77は軸にRの繩を2本組にし、間隔をあけて巻いたものである。回転の方向を変えて施文しているため、単軸絡条体1A類のような状況を呈す。下端部には横位の刺突が巡る。

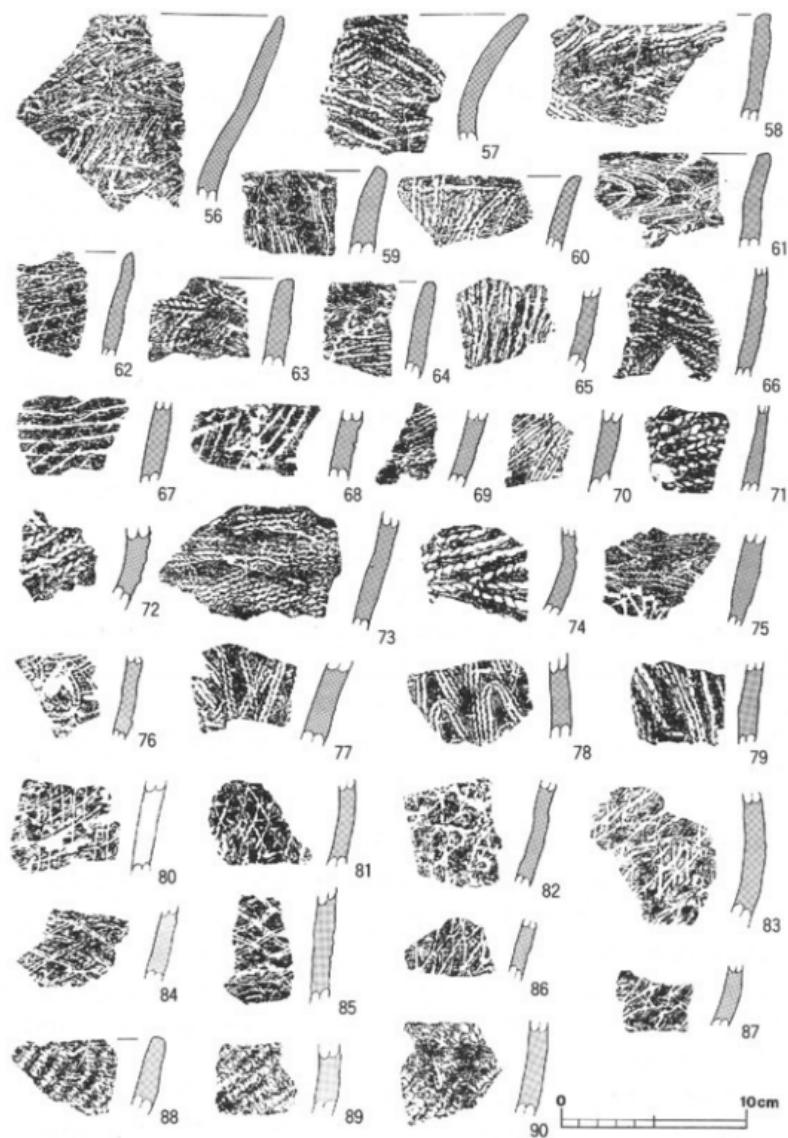
No58・64・69は軸と軸に巻いた繩の末端を他の繩や纖維によって縛り付けたものである。No58は波状を呈する口縁部であり、口唇上には平坦面があり、一部に小突起が付される。器面には軸にRの繩を巻いて施文している。Rの繩は一部燃りが戻っている。下部には同原体によって異方向に施文されている。内外面とも丁寧にナデされている。No64は直口の口縁部であり、軸にしの繩を巻いている。原体の末端はrの細い繩によって結縛されている。一見すると木目状撲糸文のように見えるが、結縛している部分より上は繩の余りである。No69も同様で、繩にはしを2本組にして巻いている。軸に縛り付ける繩は細いRである。

No59は外削ぎ状を呈する口縁部である。口唇端は平坦である。器面にはし繩文が2本組に軸に巻かれて継回転されている。胎土には2～3mm程度の小石を含む。

2類B種 単軸絡条体1A類（木目状撲糸文）により施文されているもの（第65図No56・60～61・63～65・67～79）

B1種 軸にL・Rという対になる繩を組にし、条自体は矢羽根状を呈する（第65図No56・60～61・63・72～73・75～78）

No56・61・73・76・78はLとRの繩を組にして軸中央で纖維により結縛し、一方の条を右巻き、他



第66図 遺構外出土土器5群(3)

の条を左巻きにするものである。中央の繊維痕はNo61に顯著に見受けられる。施文原体の回転方向は一定していないが、概して縦方向は少ない。No56は頸部から大きく開く口縁を持つ深鉢である。口唇上には斜めに棒状のものを押しつけた痕がある。木目状撚糸文が重なりあっていて、軸に巻いている繩は細いものを使用している。内外面ともに繊維痕が目立つ。No60は直口する口縁部で口唇上に平坦面を持ち、若干外側にめくれる。器面には縦の施文がなされる。内面は磨かれている。No61は若干緩く括れる部分がある。口唇上には平坦面を持つ。器面には横位の木目状撚糸文が左から右へ施文されている。内面には繊維痕が目立つ。No63は頸部からやや開く口縁を持つものと思われ、口縁は波状を呈する。口唇端には平坦面を持つ。No73も同様のものと思われ、裏面には幾条も筋の入ったナデ痕がある。No75は単沈線により格子目文を描いた上に一部粘土を貼り付け、木目状撚糸文を横位に施文している。No76・78も同様の原体による施文である。No78は継回転の施文である。軸中央の結縛部は巻いた繩の上に繊維により結縛しているため、条のへこみは残るもの節は消される。

單軸絡条体1A類における軸中心の繩の取り付け方には様々な方法があるが、当遺跡の場合、ほとんどのものは中央部で結縛しているようである。

#### B2種 B1種と異なり2本組にならないもの（第66図No71・74・79）

この種に含めたものは軸の中央を界にして一方にはRの繩を巻き、他方にはLの繩を巻いているようである。B1種のようにLとRの繩が組になっていない。しかしながらどれも木目状のような効果を呈しているためB2種として分類した。

No71・74は互いに同様な繩文が施文されている。繩文の節は大きめである。No79はLの節は大きめでRの節は小さめである。これら2本の異なる繩文がいかに軸に取り付けられているかは不明である。

#### 2類C種 単軸絡条体5類（網目状撚糸文）により施文されているもの（第66図No62・80～85）

##### C1種 軸に左右どちらかの巻きで条を一度巻いた後に、さらに逆巻きで巻いた原体で施文されているもの（第66図No62・80～83）

No62・80・82は軸にLを巻いた後、逆巻きでLを巻いている。ほとんどは横回転をしているものと思われる。No62は口唇部が内削ぎ状を呈し先端の尖る薄手の土器である。No82は色調が明赤褐色を呈し、もろくなっている。No81・83は同一個体と考えられる。原体の軸にはRを正位の状態で巻き、逆の巻き方でLの繩を巻いている。L・Rの繩は太めである。No83の一部は明赤褐色を呈し、断面内部まで及ぶ。繊維痕が目立つ土器である。

##### C2種 軸に右巻きと左巻きされる条が交叉するたびに交互に他の条を又ぎくぐる原体で施文されているもの（第66図No84・85）

No84・85は同一個体の破片であり、器面には、軸に2本の細いRの繩をそれぞれ右巻き、左巻きに巻き、それぞれが交叉するごとに他の条を又ぎくぐるように作製された原体によって施文されている。No85の下端は明赤褐色を呈する。

2類D種 単軸絡条体 6類（網目状撚糸文）によって施文されているもの（第66図No86・87）

2本の条を用い、1本を右巻き、他方を左巻きにし、それぞれの条の交点で絡げている。

No86はLとRの繩を使用し綴回転による施文である。No87は条の繩は不明である。

5群3類 繩文原体及び絡条体原体により側面圧痕が施文されているもの（第66図No57・88～90）

3類A種 繩文原体による側面圧痕が施文されているもの（第66図No57）

No57の土器は波状口縁を呈し、全体的なプロポーションとしては、胴部が膨らみ頭部で括れ、そして口縁部が開くものであろう。器面にはR・L繩文原体側面圧痕を使用して菱形のモチーフを描き出している。絡条体施文のような条の縁にできる粘土盛り上がりのつぶれが見られず、そのまま盛り上がっているため、繩文原体によるものとした。圧痕の度合いは一定していない。この施文は、羽状繩文と同様に、上下の繩の圧痕が異なる。菱形モチーフの中央部には、無節繩文や附加条L+Rのような施文が、側面圧痕より古い施文として若干残っている。内面は平滑にナデられており、纖維痕はほとんど見られない。

3類B種 絡条体の側面圧痕（第66図No88・89・90）

本種の絡条体の軸となるものは、棒状のものではなく軟質のものではないかと思われる。巻き方もすき間がなく密に巻かれている。No88は口唇上に平坦面を持ち、絡条体の圧痕が斜に施文される。一部は弧状を呈し、軸が柔軟性を持つものであることが伺える。No89・90も同様な施文がなされる。砂粒を多く含む土器である。

5群4類 格子目文が施文されているもの（第67図No92～101）

4類A種 単沈線による格子目文が施文されているもの（第67図No92～97・99・101）

この類の格子目文は施文原体が一本の角棒状（竹管状のものを多截したものか？）の工具により描かれている。提示したもののほとんどは口唇下から頸部を意識している部分にかけて格子目文が施文されている。

No92は口縁部がやや内彎するもので、口唇はいびつな作りとなっており一部凹んでいる。本個体はNo80の土器と同一個体らしく、同一の絡条体回転圧痕が格子目文下に施文されている。絡条体回転文は格子目文より先に施文されている。格子目文の下限付近に施文されている横位の沈線は区画の意味を持つようである。器面の最大径部分は橙色（5YR7/6）を呈するが、熱を受けて赤変したのではないようである。裏面は一部表面の化粧土が磨かれた状態ではげており、平滑である。No93・96は同一個体であり、波状口縁を呈する丁寧なつくりの土器である。器厚は薄手で、頸部より大きく開く口縁を持つ。口唇上には平坦な面を持つ。格子目文の沈線は主に縦と左下がりのものが目立ち、一部右下がりの沈線も見られ、全体として雑な菱形を描いているように見える。No96には貫通途中の穿孔が表裏より穿たれている。丁寧なつくりの土器である。No95は薄手の土器で、これも波状口縁を呈するものと思われ、一部に穿孔が見られる。No97は平縁の上器であり、縦の沈線が強調されている。胎土中には小石の粒が多く含まれる。表面の一部には黒色の炭化物が付着している。No101は橙色（2.5YR6/6）を呈し、もろくなっている。No99は胎土がNo97と類似している。No94は直口する口縁部である。格子目文施文後に口唇直下に刺突文及び太い沈線を巡らせている。口唇部は平坦であり、一部棒状の工具による圧痕がある。

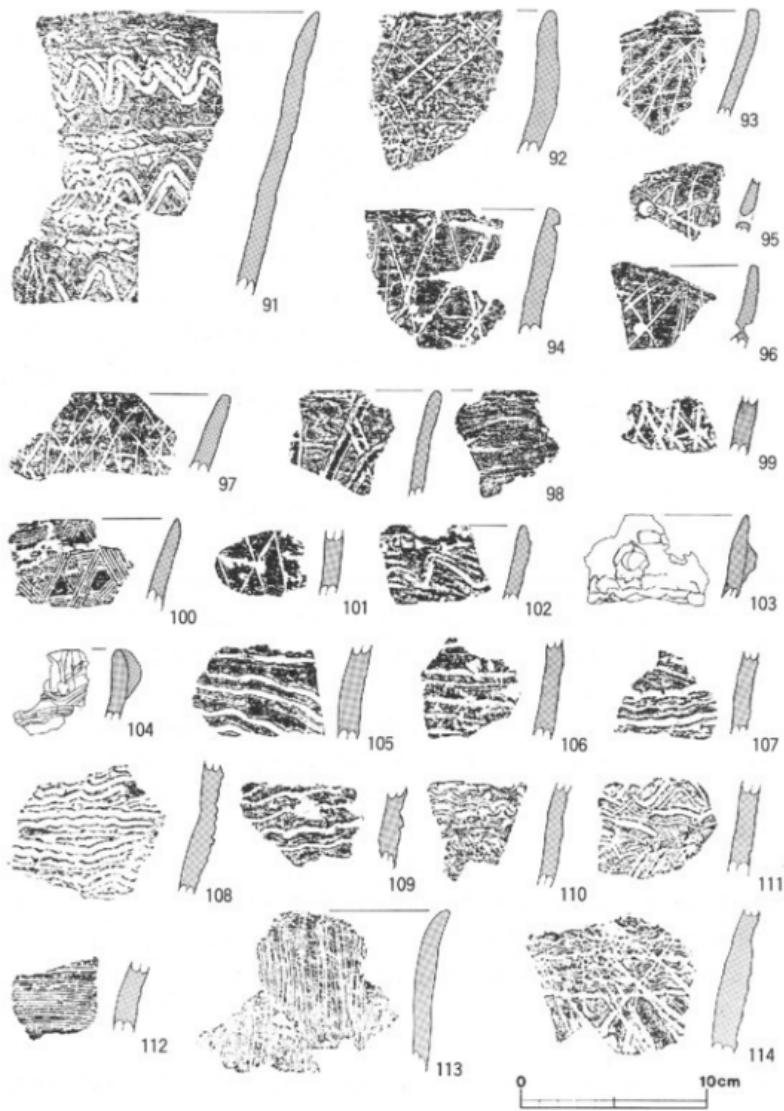
4類B種 平行沈線及び櫛歯状工具による格子目文が施文されているもの（第67図No98・100）

No98は薄手の土器であり、凹部の浅い半截竹管状工具により平行沈線が引かれている。No100は櫛歯状工具により格子目文が施文される。

5群5類 平行沈線による波状文、コンパス状文が施文されているもの（第67図No91・102～114）

5類A種 波状文が他の施文により区画されるもの（第67図No91・102・104・111）

東北地方南部大木2a式土器の特徴といえる要素を持つもの。大めの竹管状工具により施文されるものが多い。No91はK-37区（4号、5号住居址が一部かかる）から出土したものであり、4号・5号住居址出土として考えてよい。胴部から口縁部まで直口する器形を持ち、口唇部は内削ぎ状になり尖っている。口縁は平縁である。口唇下1cmのところから刺突をしながら支点を変えしていくコンパス状文が施文されており、その内側に波状文が施文される。この文様の繰り返しにより全面施文されている。コンパス状文も波状文も同一原体により施文されている。施文工具は



第67図 遺構外出土土器5群(4)

半截竹管状の施文工具ではなく、棒状の施文工具を2本、まるで箸を手で持つように持って施文したようである。それは施文工具の接地面の観察で、施文工具の2本がきっちり固定されたものではなく、器面と施文工具の角度などにより融通がきく状態で施文されているようである。口唇に近いコンパス状文を除き、他のコンパス状文は同じ場所を重ねて施文し直している。施文の方向は左から右へ施文されている。胎土には白色の粒子（径1mm）が目立つ。繊維痕も非常に残っている。他の土器とは胎土が異なる土器である。

No102は口縁部であり外側が削がれたような状態を示す。器面にはR 丶 丨 が施文された上に半截竹管状工具外側による押し引き文と半截竹管状工具の内側による波状文が施文される。その下にも一部押し引き文と思われる部分が見られる。No104は波状口縁の波頂部と思われる。手でつまんだような粘土の貼り付けがなされる。細い施文工具による波状文の下に筋のある平行沈線が引かれる。No111には山形の波状文が上下に施文され、その中央に崩れたコンパス状文が描かれる。一部0段多条のLが施文されている。

#### 5類B種 崩れたコンパス状文が施文されているもの（第67図No103・105・106～108・110・114）

No103には平たい半截竹管状の施文工具によりコンパス状文を施文し、その上に粘土塊の貼り付けを行なっている。口唇端は尖っている。No105・107・109には巾広の崩れたコンパス状文が施文される。No105は頭部と思われる。No106は平行沈線の施文される土器である。No108も上端が頭部付近にあたると思われる。No108はNo91の施文方法と同様なことが言え、崩れたコンパス状文を密に施文しているが、その単位と単位の間には一本施文の深いコンパス状文が見られる。繩いコンパス状文の工具は巾広のものを縱にして使用しているようである。No110は頭部片である。頭部から上にはコンパス状文、下にはR 丶 丨 が施文されているが、繩文の方が先に施文されている。No114はコンパス状文の上に単沈線により格子目文が施文されている。繊維は含まれているが堅緻な土器である。

#### 5類C種 密な平行沈線によって施文されているもの（第68図No112・113）

No112は頭部辺りと思われ、密な集合沈線が引かれる。一部沈線が開いた部分もあり、一見磨り消し文瓶になる。No113は波状口縁波頂部をで、縦に半截竹管状工具により集合沈線が施文される。No114同様の堅緻な土器といえる。

#### 5群6類 地文に繩文が施文され、口唇直下に沿って連続する施文がなされているもの（第68図No115～135）

#### 6類A種 連続する刺突文が施文されるもの（第68図No115～119・121・122・132）

地文が縄文の上に刺突（押し引き）を行なう。刺突の方向は全て同じであり、左から右へと施文されている。刺突が一条巡るものが多く、No115・132のみが口唇下に沿って刺突が二条巡っている。刺突は半截竹管状の工具の内側を使用しているが、器面への工具のあて方により施文の雰囲気も異なる。No115は頸部から大きく開き、口唇部で若干内彎する波状口縁である。口唇部に至るほど薄手になる。器面にはR |<sup>ヒ</sup>縄文が全面に施文される。内面には丁寧にナデ・磨きがなされている。器面表には纖維痕が目立つ。No116～119・121・122は口唇下に一条の刺突が巡るものであり、No122以外は平縁の土器と思われる。No116は一部緩く内彎する口縁部である。口唇端はやや丸味を持っている。6類の中で唯一、単輪絡条体による地文が施文され、上半部では輪を斜めにして施文し、木目状の一方の条が水平になるように施文している。刺突文は巾広の竹管状工具により施文している。No117も緩く内彎する口縁部である。口唇上には平坦面を持ち、内側に緩い稜を持つ。器面にはL |<sup>タ</sup>長と0段多条と考えられるR |<sup>ヒ</sup>別回転による羽状縄文が施文される。このうちL |<sup>タ</sup>長の方が先に施文されている。刺突文は巾広の半截竹管状工具によるものであり、一部工具が割れた状態で施文している。胎土中には径1mm程度の小石を多く含む。No118・119・121・122は巾の狭い半截竹管状工具により刺突されている。No118・119の器面にはL |<sup>タ</sup>とR |<sup>ヒ</sup>の結束による羽状縄文、No121には0段多条と考えられるL |<sup>タ</sup>長、No122にはR |<sup>ヒ</sup>が施文される。それぞれ口唇上には平坦面を持つ。No119には継方向の刺突も見られる。No132は緩く内彎する口縁部を持ち、波状口縁を呈する。波頂部は内側に突起を持つ。地文は附加条1種R |<sup>ヒ</sup>+L・L |<sup>タ</sup>長+Lにより羽状を呈する。口唇部下には、竹管状工具による2条の刺突文が巡る。胎土には砂を多く含む。

#### 6類B種 有節平行沈線が施文されているもの（第68図No120・123～129）

本種の施文には有節の平行沈線を1条巡らすもの、2条巡らすもの、3条巡らすものがある(B1)。その他に連続刺突の結果沈線となるもの、コンパス状文のように工具の支点を変えて施文するもの(B2)も含めた。

##### B1種 有節平行沈線が施文されているもの

有節平行沈線が1条施文されるものとしてNo123・124・125がある。No123と124は同一個体と考えられ、直口の口縁を持つ。口唇上には平坦面を持つ。L |<sup>タ</sup>長・0段多条のR |<sup>ヒ</sup>が使用されているようであり、別原体による羽状縄文を呈する。縄文の施文は口唇直下までは及ばず、ほとんど有節平行沈線下で終わる。有節の平行沈線は縄文を施文した後に施文されている。No125は口唇近くで緩く内彎し、口唇端に行くほど薄手となり丸味を持つ。地文にはR |<sup>ヒ</sup>が施文され、その上に緩く弧を描く平行沈線が引かれる。No126・127は口唇下に2条の有節平行沈線が巡る。

同種の中でNo126のみ右から左へ施文されているようである。1条巡るものに比べ有節の間隔が狭くなっているようである。口縁の形態はNo128も含めて緩く内聳している。No126にはR |七が口唇直下まで施文され、No127にはL |七が施文される。No126の有節平行沈線間には繩文が見られるが、No127の同部位は繩文が磨り消され、一部かすかに痕跡を留めているのみである。No127の結節平行沈線は平行沈線を引いた後に刺突のみ行なう。No128は口唇上に平坦面を持ち、器面上にR |七が施文される。施文は有結節平行沈線の最下条までで、その上は最初から施文されていない。胎土に纖維を含むものの外面に纖維痕はほとんど見られない。

#### B2種 その他のもの

No129は口唇部の内側に稜を持ち、口唇端の一部には突起が付される。地文にはL |長が施文されたようであるが、3条の有節平行沈線を施文した後に条間は磨り消され、その後丸い刺突がなされている。No120は口唇が内削ぎ状を呈し、端部が丸味を持つ。器面上にはL |Fが施文されるが口唇下のコンパス状文部位下までである。

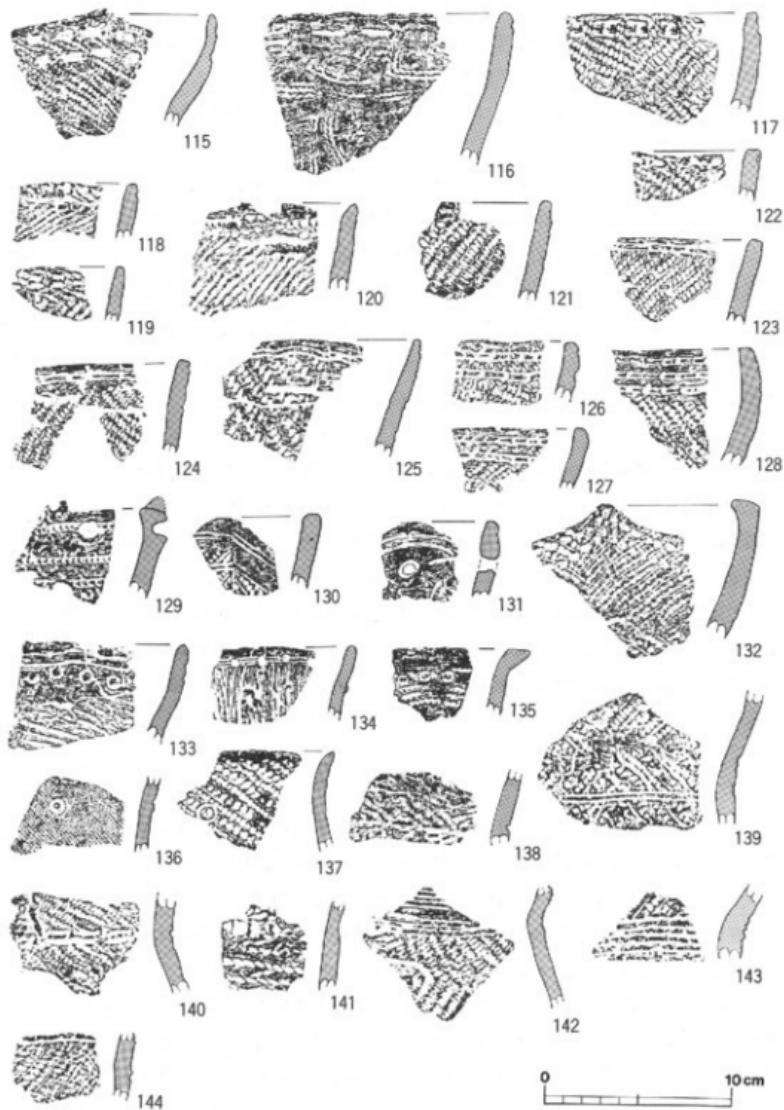
#### 6類C種 口唇下に平行沈線が巡るもの（第68図No130・131・133・134）

No130は波状口縁を呈する土器で、地文にL |長+r、R |七+lを施文している。一部「ミミズ腫れ状の粘土隆起」が見られる。その上に口唇に沿って平行沈線が間隔をあけて2条引かれ、波頂部右半分は条間が磨り消されている。No131はやはり波状口縁を呈し、口唇に沿って平行沈線が引かれる。地文はなく、波頂部下に焼成前の穿孔がなされる。両方ともに胎土に纖維は含むものの、表面には纖維痕がほとんど見られない。

No133・134は平行沈線と円形刺突文が施文される土器である。No133は口唇端が丸味を持ち、口縁はやや緩く開く。地文にはR ||+、L ||+が別々に施文され、口唇下に平行沈線、その下に円形刺突文が巡る。No134は薄手の土器で、器面上には幾条もの条線が縦に引かれ、その後口唇下に平行沈線が巡り、円形刺突文が巡る。

#### 5群7類 頸部付近に円形刺突文を施文するもの（第68図No135～137）

No135は口縁部が外側に屈曲し、円形刺突文が横位方向に巡る。No136・137は繩文が施文された上に縦に円形刺突文が施文される。No136は器面上に節の細かいR |七繩文が施文されている。繩の末端は結節がなされていて、S字状の結節文が見られる。円形刺突文は縦に2ヶ所見られる。内外面は丁寧にナデられている。No137は口縁が緩く外反する土器で、口唇端部は丸味を持つ。外面にはR |七の異条繩文（一方が太くもう一方が細い）が施文されている。内面は丁寧にナデられている。



第68図 遺構外出土器5群(5)

##### 5群8類 頸部屈曲部に区画の意味を持つ施文がなされるもの（第68図No138～144）

本類に含めたものは頸部屈曲部に刺突（押し引き）文や平行沈線を巡らすものである。屈曲部内面には明瞭な稜を持つものが目立つ。それぞれ屈曲部の上下で同じ地文が施文されているようである。本類を次の2種に分けた。

###### 8類A種 刺突（押し引き）文が施文されるもの（第68図No138・140・141）

No138はR ||とL |;の結束第1種による羽状縄文が施文された上に刺突文を巡らせている。刺突文は半截竹管状工具によるもので、結束部の上を刺突している。胎土に小石を含み、砂質の土器である。No140は屈曲部より胴部がやや膨らみを持つ土器であろう。上半部には回転縄文により生じる「ミミズ腫れ状の粘土隆起」が見られる。土器下端部は橙色（2.5YR6/8）を呈し、その上部には炭化物が付着している。R ||;が施文されている。No141は同群No71と同一個体と考えられるものである。頸部の屈曲はほとんどない。

###### 8類B種 平行沈線又は有節平行沈線が施文されるもの（第68図No139・142～144）

No139・142・144に平行沈線が引かれ、No143のみに有節平行沈線が施文される。

器形は全て、屈曲部下がやや膨らみ、屈曲部の内縁を経て口縁が聞くものと思われる。総じて堅緻な土器といえる。No139の地文にはL |; + r · R |; + f の縄により原体の末端を結束)別々の原体により羽状縄文を呈する。No142は頸部の屈曲が激しく、地文には0段多条のR |; · L |; 結束第1種による羽状縄文が施文されている。屈曲部には中央部を開けるように上下二本づつの平行沈線を引き、中央部は磨り消しを行なっている。内外面とも繊維痕が目立つ。No144には地文にR |; + 1 の継回転施文がなされ、上端には平行沈線が引かれ。内側に緩い稜を持つ。

##### 5群9類 口縁部付近に沈線により横に区画された文様帯を持つもの（第69図No145～154）

###### 9類A種 区画内に鋸歯状を呈する文様が描かれているもの（第69図No145～152）

No145～147は同一個体であり、器厚は全体的に薄く、口縁部は逆「く」の字状をなし内傾する。口唇端には平坦面を持つ。屈曲部の上部と下部とでは施文が異なり、上部には沈線文、下部には単軸絡条体による施文がなされる。屈曲部上部の文様帯中には3本の施文工具を2回繰り返してそれぞれの沈線を引いている。上下の平行沈線と鋸歯状の沈線は、先に平行沈線を引いている。胴部の縄文は、口縁部の平行沈線を引いた後に、単軸絡条体1類にしの繩を巻いて、継回転の施文を行なっている。外面には繊維痕が目立つが、内面はナデられている。No148は波状L1縁を呈する。口唇部は外側が削がれたような状態になっている。口唇直下及びその下方にも角棒状の工具による沈線が間隔を開けて2本づつ平行に引かれ、その間に一本の沈線により鋸歯状の文様

が施文される。胎土の繊維は目立たなくなっている。内面にはナデ・磨きがなされている。No149はかすかに内彎する土器で、器面にはまずコンバス状文あるいは平行沈線が施文され、その上に鋸歯状の文様が描かれている。No152は脣部に丸味を持ち頸部で括れ口縁部が広がるものである。頸部の地文にはR「ヒ」が施文されており、その後2本の刺突具により押し引き文を施文し、口縁部の文様帶に同刺突具2本による平行沈線を引く。胎土の繊維は少ない。胎土には白色の小石を含む。

No150・151は地文に縄文が施文されている。No150の地文にはR「ヒ」が施文され、その上に半截竹管状工具による横位沈線が引かれ、その後鋸歯状の沈線が引かれる。No151には地文にR「長」が施文されているようで、その上に鋸歯状の沈線が引かれれる。沈線中には同一原体による刺突がなされる。この土器片の部位は底部近くであるようである。

#### 9類B種 その他の文様が施文されるもの（第69図No153～154）

No153は斜位の単沈線の組み合わせにより文様を描いている。胎土に白色の粒が目立つ。No154は地文にR「ヒ」とL「長」による結果第1種の羽状縄文が施文され、指頭文を中心に2条の円形竹管文が4方向に施文されている。円形竹管文は上から下へ施文されている。

#### 5群10類 口縁部文様帶内を縱位に区画しているもの（第69図No155～161）

##### 10類A種 沈線により施文されているもの（第69図No155～158）

それぞれ地文に縄文を持たず、直線的な表現の組み合わせによるもの。No155は復元口径が約18cmのもので厚手の土器である。口唇上は尖り、口唇下の横位沈線部分で外側に傾く。最初に横位の単沈線（半截竹管状工具の一方の端によって施文か）あるいは平行沈線により口唇直下及び口唇下3cmのところに施文し、その上に縦の平行沈線及び斜の単沈線を施文している。内面は化粧土が剥げ落ちている。No156は波状口縁を呈するもので波頂部に当たるものである。口唇端は丸味を持つ。口縁部はやや内彎する。器面には木葉文状の沈線が半截竹管状工具により施文される。施文は斜の沈線が施文された後に縦の沈線を引き、口唇に沿って上下2条の刺突を巡らせている。内面には繊維痕が見られる。No157も波状口縁であり、口唇上には平坦な面を持ち、波頂部は若干内彎する。口縁全体としては直口する形態を持つ。施文ははじめに波状口縁に沿って口唇下の単沈線が引かれ、次に横位の沈線が平行に施文される。その後縦に沈線を引き、さらに斜に引く。No156同様に繊維痕が見られる。No158は潰れたような半截竹管状工具による施文の土器である。はじめに横位の沈線、次に縦の沈線を引き、さらに区画内に斜の沈線を引いて、不整な菱形を呈するような文様を描きだしている。それぞれ沈線は2条づつ引かれている。区画の下には擦痕が見られ、同部位周辺は橙色（2.5YR6/8）を呈し、器面内部4mmのところまで及んでもろ

くなっている。全体的に砂粒を多く含む。No159は薄手で非常に整っており、胎土には纖維をあまり含まず器面にも纖維痕がほとんど見られない。次の時代への無纖維化の経過を伺わせるような土器である。器面に描かれた文様の要素は、円形刺突を除きみな半截竹管状工具による平行沈線である。同種の他の土器と同様に、はじめに横位の沈線で区画しその区画内に斜の沈線を引いている。円形の刺突文は最後に刺突されたようである。主要な文様要素は平行沈線が2条づつ引かれている。

#### 10類B種 刺突文によって施文されているもの（第69図No160）

同種に含めたものはNo160一片である。頭部から口縁部の及ぶ部位と考えられ、頭部から外反して開く口縁を持つものと思われる。地文はR | Lによる斜繩文がほとんどであるが、上端と横位の円形刺突文列付近にはL | 肢斜繩文が見られ、羽状繩文を呈するものである。頭部に刺突文列を施文するという点では7類に類似するものであるが、同種は加えて縦に3条の円形刺突文列を施文している。胎土には砂粒を含む。

#### 5群11類 磨消繩文が施文されているもの（第69図No161～167）

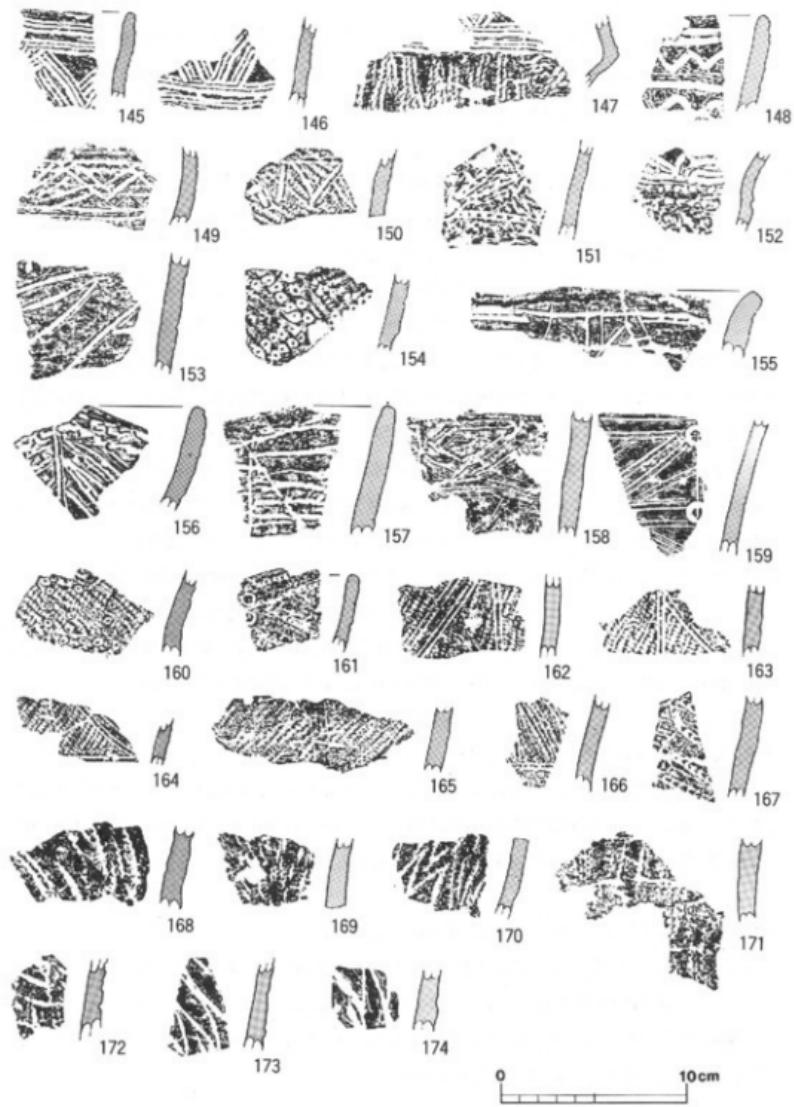
本類の土器は磨消繩文手法がとられるものであるが、施文するに当たって磨り消す部分を平行沈線で区画して磨り消すものと、有節平行沈線により区画した中を磨り消すものとがある。以上をA種・B種として分類して述べる。

#### 11種A類 平行沈線により区画されているもの（第69図No162～166）

No162～164は同一個体と考えられ、地文にはL | 肢 + Lの附加条繩文が施文されている。磨消繩文は巾の狭い半截竹管状工具によって2条の平行沈線を引き、その間を磨り消している。磨り消された部分は、全て斜の磨り消し帯となっている。その他に1条の平行沈線が組み合わさっている。内面は縦方向のナデが見られる。胎土には細かな石英粒子を多く含む。No165はR | 上に平行沈線を2条引いてその間を磨り消している。平行沈線の施文が浅いためか、磨り消された部分には平行沈線の痕跡は明瞭には残っていない。縦の磨り消し部を中央に配して菱形を呈する磨消文が施文されている。磨消文の交点には指頭文が残る。No166はNo162～164同様、斜の平行沈線間が磨り消され、縦・横の平行沈線は1条のみである。

#### 11種B類 有節平行沈線により区画されているもの（第69図No161・167）

No161・167は同一個体である。No161は波状口縁を呈し、口唇は外側が丸味を持ち内側が尖るものである。地文にはR | L + Tの附加条繩文が施文されている。附加条繩文は軸と同じ撚り方向のT繩を巻き、次に逆の方向でLの繩を巻いている。磨り消しは2条の有節沈線間を行ない、口唇に沿って巡る部分と斜位に区画された部分とがある。両方の磨り消し文が交叉した部分には、



第69図 遺構外出土土器5群(6)

円形刺突文が縦に2ヶ所施文されている。No167には2条の有節平行沈線が弧を描いて施文されている部分があるが、その内側は磨り消されていない。磨消文の一部には円形刺突文が施文されている。器面は橙色(2.5YR6/6)を呈し被熱している。

5群12類 貝殻文が施文されているもの（第69図No168～174）

12類A種 肋のあるアナグラ属の貝殻（殻表面が放射肋で刻まれ殻内面の腹縁には刺みを持つ）により施文されたもの（第69図No168～172）

No168・172は胎土の状況等により同一の個体と思われる。No168はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、とくに下端においては内部にまで同色調が及ぶ。貝殻文の肋の大きさから、大きめの貝殻を用いて刺突しているものと思われる。No172は器面が明赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、下端はより内部まで同色調を呈す。貝殻腹縁圧痕による刺突を方向を変えて行なっており、一部網目状を呈する。胎土に纖維を含むが非常に堅緻な土器であり、器面にヒビが入っている。No169も刺突による施文を施した土器である。貝殻腹縁でのみ刺突している。纖維痕が目立つ。No170・171は貝殻波状文が施文された土器である。No170には波状文及び刺突文による施文がなされている。No171は波状の間隔が狭い土器である。器面に纖維痕が目立ち、胎土にも多く含まれる。

12類B種 肋のない貝殻（殻表面は放射肋で刻まれないが、殻表面の腹縁に細かな刺みを持つ。オキシジミ・ワスレガイ）により施文されたもの（第69図No173、174）

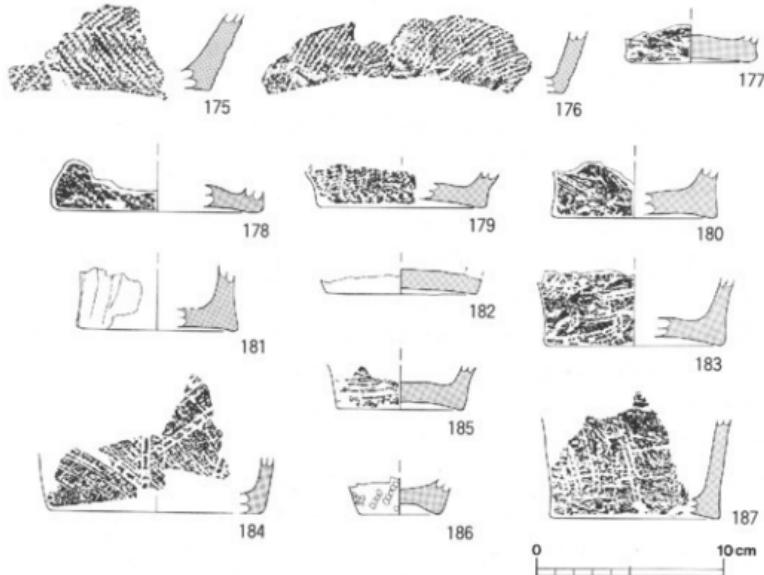
No173・174は同一個体である。施文は貝殻波状文を呈し、貝内側は細かい筋がついているようで、波状文の溝の一方にのみ、その痕跡が残される。非常に堅緻な土器である。

5群13類 無文のもの（第65図No52、55）

No52・55は無文の土器として一括した。No52は口唇がやや尖り、外側につまむようにして成形したようである。No52はNo52と同様の口唇を持つが、口唇上は平坦である。器面には横方向の削りが幾段か見られる。削りによる砂粒の動きが見られる。

5群14類 底部土器片を一括したもの（第70図No175～187）

本類に含めたものは胎土中に纖維を混入する底部片である。これらは大きく2つに分けられ、一つは表面、特に底部縁辺が被熱により赤褐色を呈し（底面はそれほど被熱していない）、内外面には纖維痕が目立ち、胎土中に纖維が混入する割合が多いもの。底面は上げ底のものが多く、丁寧にナデられているもの（No177～183・185～187）。



第70図 遺構外出土土器5群(7)

またもう一方は底部側面がほとんど被熱しておらず、底面の上げ底も見られないもの。内面は丁寧にナデ・磨きがなされ、胎土に纖維を含む割合は前者に比べて少なく、より堅致な土器である。形態的には、底部直上のゆるい内縁は見られないようである (No.175~176・184)。

#### 第6群土器 前期後半 (浮島式・諸磯式・興津式) (第71図~第73図)

本土器群の中には前期後半に位置付けられる浮島式・興津式土器に分類されるものの他、諸磯式土器として把握できるものも含めている。この中で主体的な出土量を示すのは浮島式土器である。本群土器は調査区南半部でまんべんなく出土している。特に多く出土しているのは、調査区内D-36区 (2,032 g)、E-35区 (1,209 g)、E-35区 (853 g)、F-35区 (846 g)、H-40区 (892 g)、I-42区 (1,069 g) 等である。さらに西南方向エリア外からも多く出土するものと考えられる。I-42区に遺構の約半分がかかる8号住居址の覆土中からは同時期のものが1,485 g出土している。一方、10号a住居址覆土中でも1,096 g出土しているが、グリッド区一括土器を他の時期のものと比較すると際立った値は示さない。

本土器群は以下の、分類により記述する。

- 1類 口縁部文様帶の区画に微隆起線（その上部に斜めの刻み目を持つ）や細い半截竹管状工具による有節平行沈線等の施文を行なうもの
- 2類 口縁部文様帶区画内に平行沈線による鋸歯状のモチーフを描くもの
- 3類 口縁部に巾広の有節平行沈線、変形爪形文やコンパス状文が巡るもの。多くは口唇上に斜の刻み目が施されている
  - A種 有節平行沈線文が施文されているもの
  - B種 変形爪形文が施文されているもの
  - C種 コンパス状文が施文されているもの
- 4類 地文に単輪絡条体（撚糸文）による施文がなされているもの
  - A種 輪に巻かれた繩が細く、条間が狭い絡条体によるもの
  - B種 輪に巻かれた繩が太く、条間が開く絡条体によるもの
- 5類 沈線のみ施文されているもの
- 6類 口縁部に輪積痕を有し、その上に凹凸文等を加えているもの
  - A種 明瞭に輪積痕を残し、その上に指先による凹凸文が施文されているもの
  - B種 明瞭な輪積痕を持たないもの
- 7類 地文に繩文が施文されているもの
  - A種 巾の狭い半截竹管状工具による有節平行沈線、平行沈線等が描かれているもの
  - B種 浮線文が施文されているもの
  - C種 繩文の条が横に近い状態で施文されているもの
- 8類 突帯状の粘土貼り付けを持つもの
- 9類 貝殻によって施文されているもの
  - A種 表面に肋のある貝殻による貝殻波状文が施文されているもの
  - B種 表面に肋のない貝殻による貝殻波状文が施文されているもの
  - C種 三角文が施文されているもの
  - D種 貝殻磨消文が施文されているもの
  - E種 その他の貝殻文が施文されているもの
- 10類 集合沈線（4本以上の沈線）が施文されているもの
- 11類 ヘラ状工具による斜の沈線が施文されているもの
- 12類 底部

6群1類 口縁部文様帶の区画に微隆起線（その上部に斜めの刻み目を持つ）や細い半截竹管状工具による有節平行沈線等の施文を行なうもの（第71図No1～5）

No2・3・5は隆起線の上面に斜めの刻みを持ち、その上下を挟み込むように有節平行沈線が施文されている。No2・5は同一個体である。口唇部は外側が丸味を持ち、内側はやや尖る。有節平行沈線間の無文部は他の無文部に比べ砂粒の動いた痕跡が明瞭に見られ、その上にかすかに爪形文状の施文が残っている。微隆起線上の刻みに使われた工具と有節平行沈線の施文具は別なものである。No5において微隆起線下の短い平行沈線が施文されている部分には、地文に単輪絡条体1類しが施文されている。No3は口唇が丸味を持つ波状口縁の土器である。口縁部文様帶は有節平行沈線によって区画され、その中には葉脈状のモチーフが描かれて入る。施文工程から述べれば、まず微隆起線に沿って有節平行沈線が描かれ、隆起線上に刻み目を入れ、文様帶内のモチーフを描きだしている。葉脈状のモチーフは縱の平行沈線が描かれた後、斜の平行沈線を引き、最後にD字状の爪形文を刺突している。地文には単輪絡条体1類Rが施文されている。No4もNo3同様の口唇部形態を持つ。地文に単輪絡条体1類Rが施文され、円形刺突文及び短い平行沈線が引かれる。No1は微隆起線を平行沈線で挟み、その上には平行沈線に用いる工具とは別のもの（ヘラ状工具）により刻み目を施文している。区画内には平行沈線による弧線文が描かれる。口唇は細く丸味を持つ。地文はない。No1・3は口縁部が頸部より大きく外反する深鉢であろう。全体的な傾向として胎土には砂粒が多く含み、内面には丁寧なナデ・磨きがなされる。No3の胎土には暗赤褐色(2.5YR3/4)の粒を含む。

6群2類 口縁部文様帶の区画内に平行沈線による鋸歯状のモチーフを描くもの（第71図No6・10・12）

No6・10・12にはそれぞれ半截竹管状工具による鋸歯状のモチーフが描かれる。No6には有節平行沈線（1類のものに比べ有節の間隔が広く、節は刺突に近い状態で施文される）の部分を挟んで上下になだらかな鋸歯文が施文される。No10は微隆起線を持ち断面形は1類No1・3などに類似する。微隆起線上にはC字状の爪形文が施文される。微隆起線の上方に巾の広い半截竹管状工具による鋸歯文を持つ。微隆起線の下方には平行沈線を引いた後刺突文が施文され、さらにその下部には平行沈線・変形爪形文が見られる。No12は直口する口縁を持つ土器で、口唇下に3条の平行沈線が巡り、雑な鋸歯状のモチーフが描かれている。No6・10の胎土には赤色(10R5/8)の径約2mmの粒が含まれ、砂粒も多く含まれる。

6群3類 口縁部に巾広の有節平行沈線・変形爪形文やコンバス状文の施文が巡るもの。多くは口唇上に斜めの刻み目が施文されている。（第71図No7～9・11・13～21・28）

### 3類A種 有節平行沈線が施文されているもの（第71図No11・13～18）

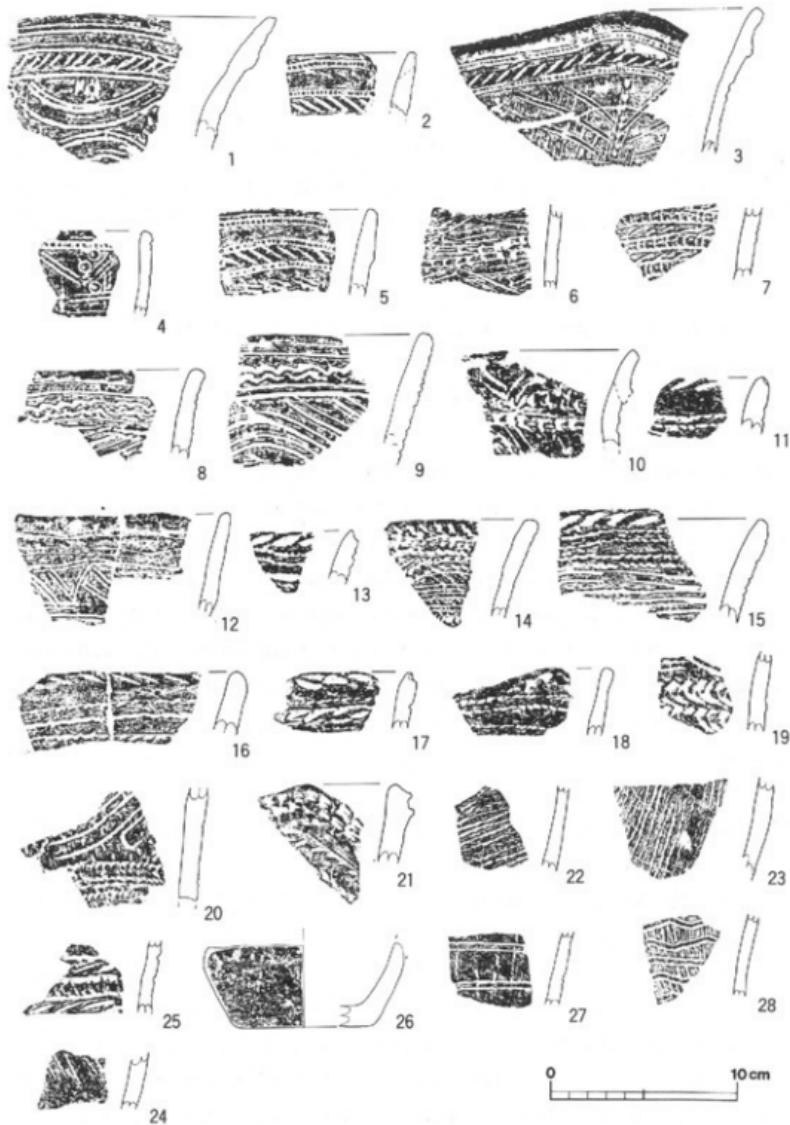
No11・13～18は全て口縁部破片でそれぞれ口唇下に2条の有節平行沈線が巡り、口唇上外側には、No18を除いて斜めの刻み目文が施文されている。変形爪形文の工具と刻み目文の工具とは別なものを使用している。器形は全て外側に開くものと考えられ、No14・18は波状口縁を呈する。口唇断面は全体的に指頭のような形態を持つ。No14は口唇がやや肥厚する。本種の土器に施文されている有節平行沈線は、半截竹管状工具の先端のみを器面に押しつけ、支点を変えて交互に刺突を繰り返し施文している。ほとんどのものは左から右へ施文している。No14の有節平行沈線は、先に同じ原体で施文された平行沈線に沿って施文されている。No14・17は、2条の有節平行沈線の間に口唇の刻み目と同様のものを施文しており、刻みの方向は口唇の刻み目とは逆方向となっている。有節平行沈線は区画として使用されているようで、No14・15はさらにその内側に平行沈線が引かれている。

### 3類B種 変形爪形文が施文されているもの（第71図No7・19～21・25）

No7の施文は巾広の有節平行沈線とも言えるものであるが、No20・25と同様に半截竹管状工具による連続施文が刻み目と交互に施されているという点で共通するため同種に含めた。No19～21、25は、巾が1cmを超す半截竹管状工具により変形爪形文を巡らせている。変形爪形文の施文の方法は基本的に有節平行沈線と同様であるが、半截竹管状工具による刺突部間に爪形の圧痕が残ることが特筆される。No19～21は振幅の大きな変形爪形文が施文されている。No19は2条横位に巡り、No21は波状口縁に沿って巡っている。No21の変形爪形文は施文前に同原体によって平行沈線が引かれ、それに沿って変形爪形文が施文されている。口唇部の内側が尖りぎみになり、外側にやや肥厚している。口唇上には刺突が2条巡る。胎土には赤色の粒を含む。No20・25の変形爪形文には斜・横方向の刻み目が交互に施文されている。変形爪形文と刻み目文の工具は、No20においては同様なものを使用しているようである。変形爪形文によって区画された内側には、同じ施文工具により弧線文が描かれている。一部弧線文間に刻み目が施文されている。地文には刺突文が施文されている。No25には3条の変形爪形文が巡っている。

### 3類C種 コンバス状文が施文されているもの（第71図No8・9）

No8・9は同一個体であり、口縁部が開く形態を持つものと考えられる。口唇部は丸味を持つ。2条の平行沈線の間にコンバス状文が巡っており、コンバス状文は2条の平行沈線のうち下部のものより先に施文されている。区画内には弧線文等が施文されている。器面の文様は全て同一原体によって施文されているが、一部地文に繩文R上が見られる。



第71図 遺構外出土土器 6群(1)

6群4類 地文に単輪絡条体（撚糸文）による施文がなされているもの（第71図No3～5・22～28、第72図・29）

4類A種 軸に巻かれた繩が細く条間が狭い絡条体によるもの（第71図No22～26・28・第72図29）

No22・23・29は同一個体である。巻かれた繩は撚りがいくらか戻ってしまったLである。Lの繩を巻いたものとしては、他にNo5・29がある。No27にはRの繩が巻かれている。他にRの繩を巻いたものとして1類No3・4類No25がある。No28・29は口縁部の文様帶の部分であり、弧線文や山形文が施文されている。

4類B種 軸に巻かれた繩が太く条間が開く絡条体によるもの（第71図No4・27）

No4にはRが巻かれ、No27にはrが巻かれているようである。

全体として砂粒・赤色の粒を多く含み、内面はナデ・磨きがされているものが多い。

6群5類 沈線のみ施文されているもの（第72図No30～31・33～34）

No30・33は半截竹管状工具による施文がなされている。No30の器面の表には縱、裏面には斜の削りがなされている。表面には葉脈文が描かれていたようである。No33の表面にも削りが行なわれているらしく、砂粒の動いた痕跡が残る。平行沈線は土器片中央で一度止めている。

No31・34の施文には半截竹管状工具を用いておらず、先端の鋭いヘラ状工具を用いている。No31には3本づつ単位となった直線及び弧線を施文している。No34は本群の他の上器とは若干異なる雰囲気を持つ土器である。口縁部が緩く内側する土器で、口唇には半截竹管状工具による刻み目が浅く残る。器面には格子目文が施文されている。No31・34の胎土中には細かな石英粒が多く含まれる。

6群6類 口縁部に輪積痕を有し、その上に凹凸文等を加えているもの（第72図No32・35～36・39・42、第73図No70～71）

6類A種 明瞭に輪積痕を残し、輪積痕上に指先による凹凸文が施文されてるもの（第72図No32・36・39・42、第73図No71）

凹凸文が施文される部位には器面の隆起が見られる

ほとんどの凹凸文は指先により右から左へ穿るように施文されており、一部には爪の痕跡が残る。No32の器面には粘土帶接合痕が残る。No39・42は凹凸文の施文される他の土器とは雰囲気の異なる成形、施文をするものであるが、同類に分類した。No39は巾の狭い輪積痕を残し、凹凸文は縦に並ぶ。一部爪による刺突も見られる。裏面にも若干輪積痕が残る。No42は巾の広い粘土帶による輪積痕が残るもので、輪積痕上には同群3類A種土器の口唇部に見られるような刻みが施され



第72図 造構外出土土器 6群(2)

ている。他の土器に比べると厚手の土器である。No71は凹凸文が施文されている輪積痕の残る最下段の部位と考えられ、明瞭な輪積痕は残していないが隆起している。凹凸文下には9類A種と同様の施文がなされている。本種の胎土に見られる傾向として、赤色の2mm程度の粒が含まれることが挙げられる。これは本群他類の土器と共通する特徴であり、本種もNo39を除いて全ての土器に当てはまる。土器内面の磨きの行なわれている部位では赤色の粒がつぶれ、磨き方向にじんでいる。

#### 6類B種 明瞭な輪積痕を持たないもの（第72図No35、第73図70）

No35は口縁部破片であり、口唇は内側が尖る。口唇上には刻み目を持ち、口唇内側には緩い稜を持つ。器面にはA種と同様に指先による凹凸文が横に並んで見られるが、穿るのではなく浅めに搔くようにして施文しており、粘土がめくれている。

No70は輪積みの部位と思われるところに隆起がありA種と同様の凹凸文が見られるが、輪積痕間のA種においては無文となっていたところが、細い半截竹管状工具による重層する連続刺突がなされている。多段化しているようである。No36の胎土はA種のものとは明瞭に異なる。

#### 6群7類 地文に縄文が施文されているもの（第72図No37～38・40～41・43～51）

7類A種 巾の狭い半截竹管状工具によって有節平行沈線文、平行沈線文等が描かれるもの  
(第72図No37～38)

No37は緩く外反して開く口縁を持ち、口唇下に2条の有節平行沈線文が巡る。有節平行沈線内に見られる節の間隔は一定ではない。同沈線が引かれた後、その周辺及び文様帶内には爪による刺突文が各所に施文される。一部には地文として細かい節のR|Lが施文されている。地文上には短い平行沈線が重層する。No38には地文にR|Lを施文し、隆起する部位を上下にはさんで重層する平行沈線が施文される。No38の胎土中には大きさが2mm～5mmに達する雲母片が多量に含まれている。

#### 7類B種 浮線文が施文されているもの（第72図No40～41・43～49）

地文に使用されている縄文原体はすべてR|Lであり、回転施文を行なっている。No41は浮線文の施文前に縄文を施文しているが、その上をナデてしまっている。No43・44・46も浮線文などにおいて同様な傾向が見られる。浮線文は、その形態によって大きく2つに分けられる。すなわち、浮線文の縁が丁寧にナデられているもの（No40～44・46）と、あまり丁寧にナデされていないもの（No45・47～49）である。さらに前者は浮線文上にヘラ状工具によって斜の刻み目が加えられているのに対し、後者は無文となることが指摘される。ただし、No40の口唇部の浮線文は後

者と同様である。

No40・41は口縁部が内擣する形態を持つ。No40・46はキャリバー形を呈する深鉢である。No41は屈曲する口縁を持つ。No40の口唇部の浮線文はNo47・49の浮線文モチーフに類似し、菱形の中に縦の浮線文が数本加えられている。No41は屈曲する上面にも浮線文が施文されている。全体的に器面の浮線文上の刻み目は刻みの方向が上下で異なり、矢羽根状を呈する部分が多い。

No47～49は同一個体であり、浅鉢と思われる。No49には屈曲部の他、底部も見られる。

No45は他のものと雰囲気が異なるもので浮線文も細い。口縁部はキャリバー形を呈するようで口唇端は尖り、内面には稜を持っている。口縁の形態は中期初頭の土器に類似する。

#### 7類C種 縄文の条が横に近い状態で施文されているもの（第72図No50・51）

本種の土器は縄文の条がほぼ横位に近い状態にまで傾いている。縄文原体にはR | Tを用いており、3条ごとに深い条が現れる。縄文原体は45°ぐらい傾けた状態で施文しているようである。深い条の末端には結束の圧痕が残る。No51上端には半截竹管状工具内側により波状文が施文される。No50には赤色の粒が含まれる。

#### 6群8類 突帯状の粘土貼り付けを持つもの（第72図No52～53）

No52・53は同一個体であり、突帯の縁辺は棒状のものによりなぞられている。口唇部は丸味を持ち、厚手の土器でやや外反する。粘土紐を貼り付けて施文するという点では浮線文に類似するが、あまりにも太い粘土帶を貼り付けていて、粘土带上には爪による刺突や半截竹管状工具による刺突を加えているため、6類B種とは区別した。両者とも口縁部破片であり、粘土帶は口唇部より弧を描いて下る部分と連結する菱形の部分が見られる。口唇より始まる部分の真下に菱形モチーフの連結部が来るよう施文されている。胎土には赤色の粒を含む。

#### 6群9類 貝殻により施文がなされるもの（第73図No54～69・71・84）

9類A種 表面に肋のある貝殻（ハイ貝・サルボウ貝等）による貝殻波状文が施文されているもの（No54・55・59～63）

No54・55は口縁部破片であり口唇上には刻み目が付される。No54は口唇上に、No55は口唇表面に丸い棒状のものにより施文される。No54に施文されている貝殻文は他のものにくらべ肋の幅が広い。本種の貝殻文は貝殻腹縁を刺突しながら引きずるようにして支点を交互に変え波状文をなしている。No59は波状文の間隔が広いもので上端には沈線の痕跡が残る。胎土に赤色の粒が含まれるものが本種には多い。また、細砂粒が多量に含まれる。

9類B種 表面に肋のない貝殻（ハマグリ等）による波状文が施文されているもの（第73図No57・66）

No57は口唇が舌状になるもので、やや外反する。No66には一部角棒状の工具による短い沈線が描かれる。

9類C種 三角文が施文されているもの（第73図No67～69）

施文されている三角文は、ほとんどの場合、三角形の部分が下を向いていて、上部の刺突文状の施文と連動しているようである。三角文と三角文の間の上方に、刺突文状のものが施文されている。同文様施文原体は半截竹管が想定されているが、No68は貝殻による施文のように見える。

No67は器面に削りがなされ、下部は被熱により赤褐色を呈している。全体的に細砂粒を多く含む。

9類D種 その他の貝殻文がなされるもの（第73図No56・58・65）

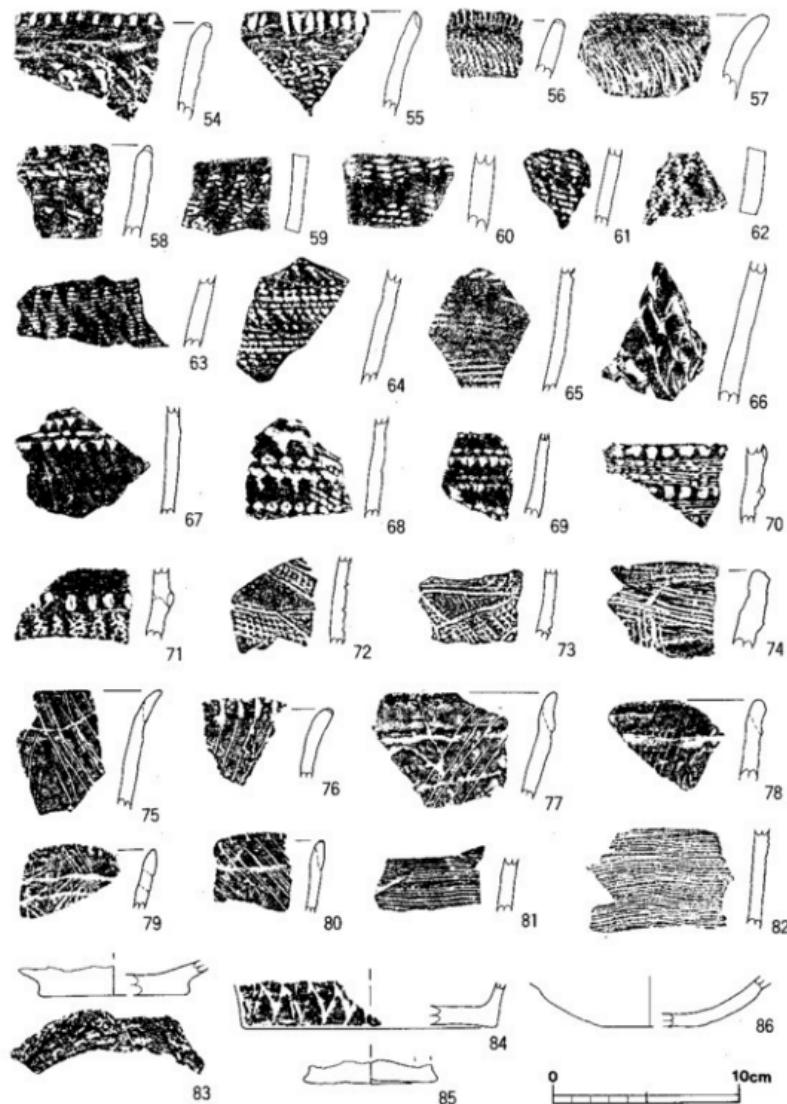
No56は丸味のある口唇部を持ち、口唇部には極薄の工具により刻みが加えられている。器面には小刻みに刺突文を施文している。No58はNo54同様、口唇部に刻み目を持つもの。器面には貝殻腹縁によりコンパス状文風の施文がなされ、途中から波状文となる。No65表面に肋のある貝殻腹縁を器面に押し引いて施文がなされており、節のある条が出来る。上端には刺突文が見られる。下端はにぶい赤褐色の部分が見られ、胎土内部まで及んでいる。全体に砂粒を含む。

6群10類 集合沈線が施文されているもの（第73図No74・81・82）

No74は口縁部破片であり、口唇部には平坦面を持ち、3本単位の沈線が引かれる。器面には縱と横に集合して引かれている。No82・83は同一個体であり、3本単位の施文具で横位の施文が密になされる。胎土中に暗赤色の粒が含まれる。

6群11類 ヘラ状の工具による斜の沈線が施文されているもの（第73図No75～80）

本類の土器は、それぞれ鋭い先端を持つヘラ状工具によって、器面に複数の沈線がまとまって施文されている。ほとんどのものは一方向の斜沈線であるが、No75・79は別方向の斜沈線も引かれる。すべて口縁部であり、No77・78・80は折り返し口縁を持ち、No78は波状口縁を呈する。No78は輪積痕上に施文されており、波頂部には2ヶ所に刻みがなされる。この他に口唇上に刻み目が施文されるものとしてはNo76・80がある。No79・80は小型の土器のようで器厚も薄手である。No80の内面には緩い稜を持つ。No77・78の胎土には細砂粒が多く含まれる。



第73図 遺構外出土土器6群(3)

#### 6群12類 底部（第73図No83～86）

No83・86は浅鉢の底部であり、No83には高台が付き、高台の径は7.8cmである。器面にはR | L が施文され、原体の末端は他の紐で縛られているよう圧痕が残る。胎土は黒色を呈する。No85は底部からそのまま緩く立ち上がるるもので器面は無文である。No84・85は深鉢の底部である。No84の復元底径は13.6cmを測る。器面には9類B種同様の施文がなされ、その一部には9類C種に見られた三角文のような施文を持っている。胎土には暗赤色の粒を含む。

#### 第7群土器 前期末～中期初頭（他地域の特徴を持ち散発的に出土する土器）（第74図）

本群土器の分布状況は、調査エリア南半に散在し、とくに15号、16号住居址付近に多く見られる。

本群土器は、次のように文様の描出技法等の違いによって分類して記述する。

##### 1類 浮線文及び有節浮線文が施文される土器

A種 鋸歯状及び山形のモチーフが描かれるもの

B種 集合する有節浮線文等が描かれるもの

C種 その他

##### 2類 口縁の輪積痕上（折り返し口縁部）に三角形の彫刻文が描かれるもの

##### 3類 その他

##### 4類 底部

##### 1類 浮線文及び有節浮線文が描かれるもの（第74図No 1～13・19～20・23）

###### 1類A種 鋸歯状及び山形のモチーフが描かれるもの（第74図No 1～2・4～5・19～20・23）

No 1はやや厚手の土器で、口唇端はやや丸味を持ち波状口縁を呈するものと思われる。波状口縁に沿って2条の有節浮線文が施文される。有節浮線文は細い粘土紐上に細い半截竹管状工具内側の刺突が繰り返されている。2条の有節浮線文の内側にはハート形を逆さにしたような粘土貼り付けがなされ、その縁辺には刺突がなされる。さらに、この貼り付けの下の付近には、左右から山形の粘土紐の貼り付けがなされている。No19～21もNo 1と同一個体と考えられ、一部横方向の有節浮線文が残る。地文にはR | L と L | R の結合による羽状繩文が施文されている。繩文原体の開端は結節されている。No 2にも2条の有節浮線文が施文され、その条間に削りの痕跡が見られ、地文にはR | L が施文されている。No 4・5は同一個体であり、波状口縁を呈し、その波頂部には突起が付されるようである。器面には鋸歯状及び山形の有節浮線文が施文され、粘土紐の貼り付けがなされる。本種土器の特徴として、波状口縁波頂部下に文様モチーフの中心となるようなものが施文されているようである。胎土には石英粒等を多く含みザラザラした感触を持つ。



第74図 遺構外出土土器7群

### 1類B種　集合する有節浮線文等が描かれるもの（第74図No 7～11・13）

本種土器は十三菩提式土器の特徴を持つものである。本種土器の特徴としては、有節浮線文状の条線が集合したり、ヘラ状工具により一定間隔で沈線を引いてその上に幅15mm程度の爪形の工具によって刺突を繰り返し、有節浮線文的な表現を施しているものがある。No 7・10・13には集合した有節浮線文が見られる。No 7は上下を区画している。No 10は口縁部付近であり、波状を呈し、ラッパ状に開くようである。地文にR | LとL | 線が見られる。No 8・9は同一個体である。爪形の工具により刺突がなされ、縱方向の粘土紐の添付が見られる。No 9は底部であり、底面付近より急激に内彎する器形を持つ。No 11も同様な器形を持つ底部片である。竹管状工具の外側による集合する刺突が見られる。3条づつ単位となって施文されているようである。No 7・8には三角形等の彫刻文が施文されている。本種土器は全体的に胎土が緻密である。

### 1類C種　その他（第74図No 3・6・12）

本種の土器は分類上その他としてあるが、皆同一個体である。口縁部は一見平縁のようであるが、断面がコの字状になっている部分もある。平縁の部分にはX字状の粘土紐が貼り付けられている。口縁の断面は外側に突帯のように張り出している。器面には幅の広い半截竹管状工具による横位の有節浮線文が付される。各々の条間は開き、条間部には爪による刺突が見られる。有節浮線文と呼んでいる施文方法は、粘土紐の上を竹管状工具により刺突を繰り返すものを呼んでいるが、粘土紐を貼り付けていないものもあるように思える。器形は胴下半部より口縁部に向けて緩く内彎しながら開くものと考えられる。胎土はA種土器の胎土に類似するようである。

### 2類　口縁の輪積痕上（折り返し口縁部）に三角形の彫刻文を持つもの（第74図No 14～18）

本類土器は胎土の状況や雰囲気からすると、8群土器（下小野式）に類似するものである。口縁部に折り返し口縁を持ち、口唇部や口縁内側に施文がなされるものもある。折り返し口縁部には三角形の彫刻文が施文されている。No 15・18は同一個体で、No 18にはL | 線繩文原体による側面圧痕が見られる。内面には横位の沈線が施文される。No 17にはS字状の結節回転文が施文されている。No 14にはヘラ上工具による弧線文や直線文が描かれる。口唇上には刻みが見られる。

### 3類　その他（第74図No 22）

No 22の土器胎土の質感は1類A種・C種に類似する。口縁が屈曲するように内彎する。屈曲部の外面には太い粘土紐が貼り付けられ、凹凸文が付されている。口唇部にかけては山形等の粘土紐が貼り付けられている。胴部の器面には竹管状工具による刺突がなされる。

第8群土器 前期末～中期初頭（栗島台式・下小野式）

第1類 回転繩文が施文されているもの

第2類 結節繩文や繩文原体側面圧痕文が施文され、口唇部やその裏面に刺突文や回転繩文等が施文されるもの

A種 口唇部や裏面に刺突文が施文されてるもの

B種 口唇部や裏面に回転繩文が施文されてるもの

C種 内面に繩文原体側面圧痕が付されるもの

第3類 口縁部文様帶に繩文原体側面圧痕による直曲線文が施文されているもの

第4類 器面に結節回転繩文のみが施文されているものの

A種 器面に結節回転繩文のみが施文される口縁部

B種 器面に結節回転繩文のみが施文される胴部

第5類 その他

8群1類 回転繩文が施文されているもの（第75図No 1～6）

No 1は器面に輪積みの接合部をナデた痕が見られ、接合部と粘土紐部の凹凸が見られる。裏面は横位方向で丁寧にナデられている。施文は器面の凸部に横位に施される。繩文原体は0段多条のL型と思われ、節が綱長く密接している。口唇部には、同原体の側面圧痕が縦方向に3条押捺される。口唇断面はやや厚みを持った円頭状を呈する。No 2はやや外反する口唇部で、器面にはL型繩文が横位に施文され、口唇上に沿うように同原体の側面圧痕が見られる。No 4は緩く外反する口辺部で、口唇端は尖り、器面にはR型回転繩文が施文される。同繩文は太い繩と細い繩の燃り合わせのようで交互に深い条、浅い条が現れ、また原体の閉端の痕跡も現れる。口唇端には不明瞭ながら同原体による回転施文が見られる。No 5はNo 4と同一個体であり、やはり圧痕の深い条と浅い条が交互に現れる。No 6は雑な作りの土器で内外面に擦痕、荒れ等が認められる。器面にはL型横位回転繩文が施文される。繩文は帯状に施され、無文部も見られる。口唇上にも同原体による回転繩文と思われるものが観察される。No 3は、口縁部が折り返し口縁でやや外反し、胴部が膨らむ形態をとるものと思われる。折り返し口縁部は無文で、それ以下がL型繩文原体による結節回転文となる。口唇端は指頭圧文が斜位に施される。

胎土は全体的に砂粒を多く含むようで、ナデた面であってもザラついた感触が得られる。口縁部はNo 1・6のように直口するものと、緩く外反するものがある。

8群2類 器面に結節回転文や繩文原体側面圧痕文が施文され、口唇部やその裏面に刺突文や回転繩文が施文されるもの（第75図No 7・9～18）

## 2類A種 口唇部や裏面に刺突文が施文されているもの（第75図No7・9～13）

No7は口唇端が平坦で頭部に比べ肥厚を増す。口唇端には2列の刺突文が施文される。地文にはL | Lの結節回転文が施文され、閉端の痕跡が見られる。No9は、口唇端に1列の刺突が加えられ、器面には撫りの緩いL繩文原体の側面圧痕が横位に3条見られる。口縁は折り返し口縁である。No10は頭部がくの字状に外反する土器で、口唇先端及び内面には円形竹管状工具による刺突文が施文される。Lの繩文原体の結節回転文上に、同原体による側面圧痕文が施文され、結節の圧痕も見られる。貫通しきらない刺突文や横位に並ぶ刺突文も見られる。No11・12はNo10と同一個体である。No12の小波状口縁の下には円形竹管状工具による貫通孔が穿たれ、波頂部にも同原体による押し付けが見られる。No13も口縁内側に刺突文が施され、口唇上には刺突による刻み目文が付される。器面にはL | Lの結節回転文が付される。太い繩文原体である。

## 2類B種 口唇部や裏面に回転繩文が施文されているもの（第75図No14・No16）

No14、16がこれに相当する。口唇の内面にも結節回転文が施文され、やや内側に括れる頭部を持つ。口辺は波状を呈し、口唇部は円頭状を呈す。繩文原体はL | L長である。

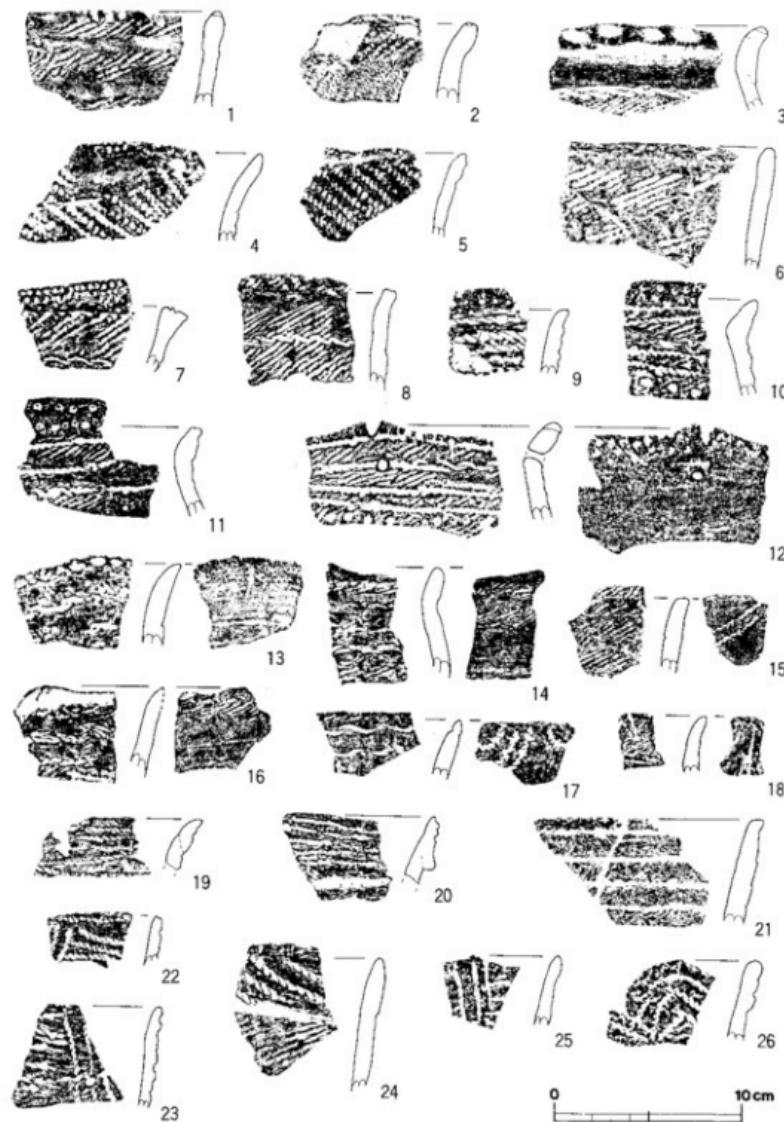
## 2類C種 内面に繩文原体側面圧痕が付されるもの（第75図No15・17～18）

No15・17・18がこれに相当し、それぞれLの繩文原体による側面圧痕文が付される。No15は口唇端に平坦な面があり、その上にL | L長原体による回転繩文の施文がなされている。内面には繩文原体の側面圧痕が2条斜めに付され、器面には結節回転文が施文される。No17・18は両方とも口唇端が尖る口縁部で、器面に結節回転文が施文され、内面には繩文原体側面圧痕による直曲線文が描かれている。No17の口縁部には同原体による回転施文がなされてる。胎土には細かい石英粒が入り込んでいる。No18にもL繩文原体の側面圧痕が内外面に施文されている。

## 8群3類 口縁部文様帶に繩文原体側面圧痕による直曲線文が施文されているもの（第75図No19～26）

No19～21は繩文原体側面圧痕が口唇に対し水平に施される。No19・20は繩文原体側面圧痕施文部が隆起線により脇部と区画される。脇部には側面圧痕に使用された原体によると思われる結節回転文が施文されている。No19・20はL繩文原体であり、結節している部分も見られる。No21はR | L原体のようである。口縁部断面はNo19・20が先細りに尖り、No21は口唇端に平坦面を有する。また、No21は胎土中に1～3mm程度の長石、石英を多量に含む。

No22～24は、口縁部の文様帶及び口唇上に、L繩文原体による側面圧痕が縦横に施文されている。横位の圧痕が先に施文される。No23の側面圧痕には結節部が観察される。各口縁部断面は指



第75図 遺構外出土土器8群(1)

でつまみ上げられたように先端が尖っており、緩い波状を呈する。No23の内面は横位のヘラ削りが見られる。

No24は、口縁部が折り返し口縁となり、口縁部の文様帶にはLの縄文原体が斜に圧痕される。折り返し口縁下には、L原体による回転縄文が施文される。口唇上には縄文原体の側面圧痕が見られる。胎土には石英粒を多く含む。No26は波状口縁を呈するもので、口縁部の文様帶は器面の隆起によって区画されているようである。区画内にはL縄文原体による側面圧痕が波状口縁の形状に沿って施文されている。波頂部には口唇に対し直角方向にR縄文原体による側面圧痕が施される。

#### 8群4類 器面に結節回転縄文のみが施文されるもの（第76図No27～50、第77図No51～53）

##### A種 器面に結節回転縄文のみが施文される口縁部（第76図No27～44）

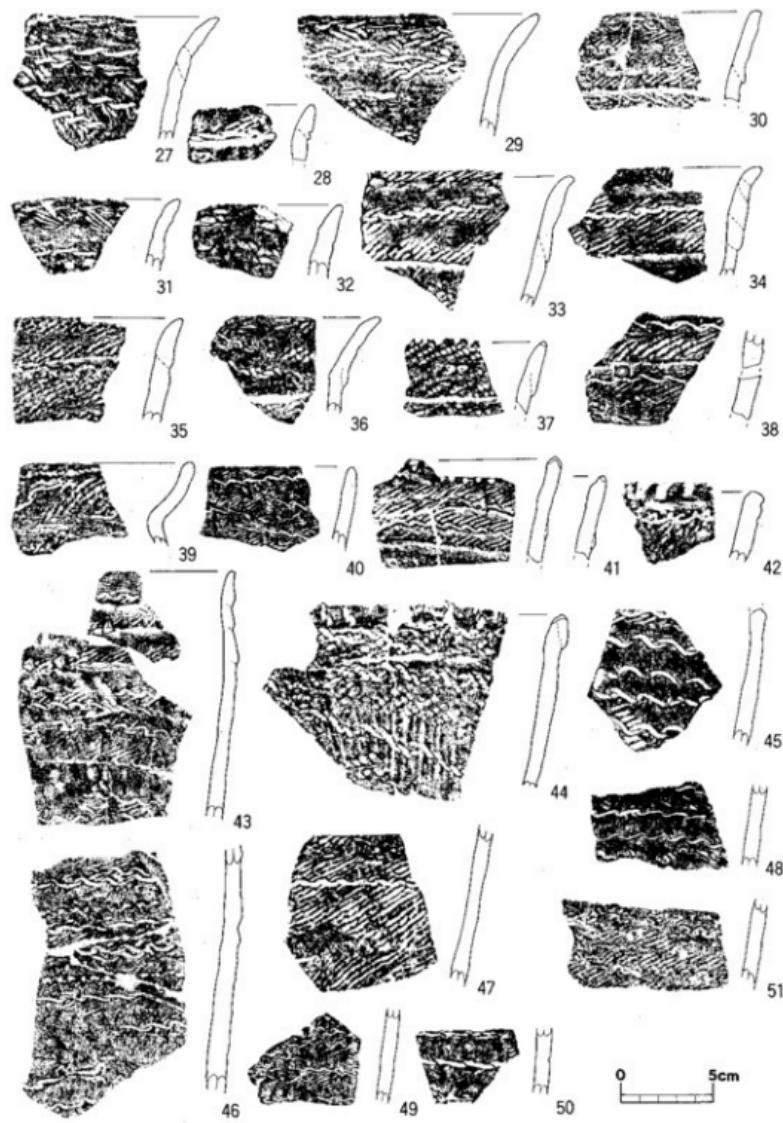
同類の土器は緩く外反する口縁部を持ち、口唇部は丸味をおびた舌状をなしているものが多い。平縁のものよりは、口縁の一部が小波状をなしたり、小突起が付くものも多い。口縁部は折り返し口縁（折り返しといつては輪積み痕）を持つ。器面には、縄文原体を結節させ回転施文した結節回転縄文が横位に施文されている。結節回転縄文の原体はその圧痕から、縄文原体をそのまま結んで節を作るよりは前段階（一段階低い）の状態で、一方を軸として他方を巻き付けて節を作っているようである。縄文原体は一段の繩による無節縄文が多い。

No27・29・33・35・36・38・41は口縁が緩い波状・もしくは小突起が付される。No33の口唇上にも回転縄文が施文されている。No37・41・42・44の口唇上には刻み目が付される。No42・44は縄文原体によるものである。折り返し口縁はNo30・33～38・41・43・44で見られる。No43の口縁部には3段の輪積み痕が残る。その上に三角形刻文がみられる。

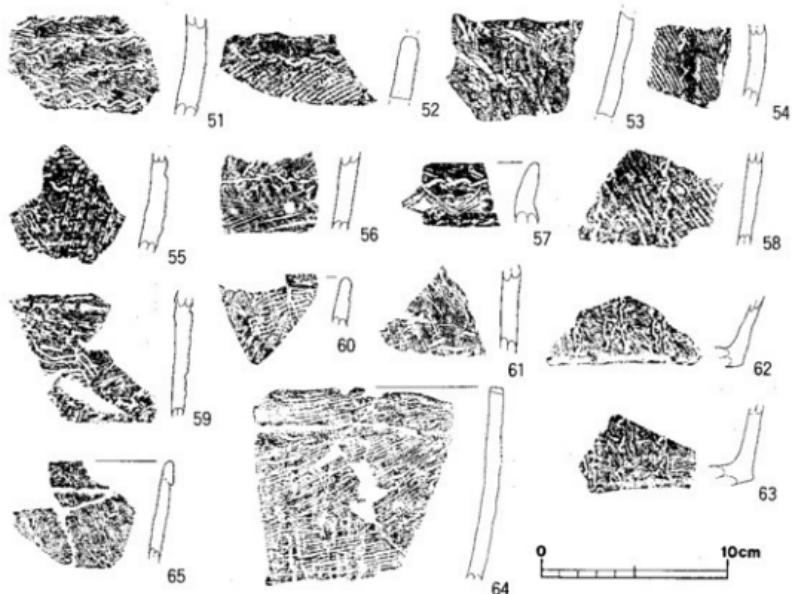
縄文原体はNo27・29・31で無節縄文R 丨 が使用され、No28・33～36・38～43はL 丨 が使用されている。No37・41・44は単節縄文L 丨 長が施文される。No39には口唇下に縄文原体側面圧痕が見られる。器面調整にかかわっては、No43・44に見られる縱に連続して残る筋が特徴的なものといえる。内面の調整はなでられているものと削られているものとがある。胎土に関しては全体の中で、No41のみ細かな金雲母が含まれている。

##### B種 器面に結節回転縄文が施文される胴部（第76図No45～50・第77図No51～53）

同種の土器はすべて器面に結節回転縄文が施文されている。No45～47・49～50は縄文原体はL 丨 が使用され、No48・52はR 丨 、No53はL 丨 長、No52はR 丨 短が使用されている。No27・29・47は接合はしないが同一固体であり、No8とNo30とNo34も同様である。



第76図 遺構外出土土器 8群 (2)



第77図 遺構外出土土器 8群 (3)

8群 5類 その他 (第77図No55~57・59~61・64~65)

同類の中には地文に結節回転繩文を持ち、その上に他の施文原体により施文されたものや、結節回転繩文が施文されないものを含む。

No55・No59は同一固体であり、半截竹管工具に水平・斜めの集合した刺突文が見られ、一部蛇行した平行沈線も施文されている。No56~57・60にヘラ状工具により山形及び幾何学的な沈線が引かれる。No61には貝殻波状文が見られる。No65は絡条体のようであり、繩の撓りが緩いせいか、施文された条が結節回転繩文のようになる。No64は無節繩文L字が施文され、繩の一方が太く他方が細い。口唇部は平坦で刻み目が付される。

## 第9群土器 中期初頭（五領ヶ台式）

今回の発掘調査において、本群土器はエリア内の南半部分より出土が目立つ。それぞれの区の出土量の大半は数十gから400gの重さを量る。一番多く出土した区はD-37区で1,074g出土している。

本群の土器を次の7類に分類した。

1類 口唇部先端の内外に粘土帯の折り返しがなされるもの

A種 区画文に上下2列の三角刺突文が施文されるもの

B種 区画文内に沈線による円形・方形・三叉文等の文様が描かれているもの

C種 その他

2類 口唇部先端に刻み目を持つもの

3類 波状口縁を持ち、波頂部付近に彫刻文を持つもの

4類 口縁部に無文部を持つもの

5類 沈線に沿って竹管状工具による刺突文が巡るもの

A種 口縁部

B種 脇部

6類 地文に縄文が施文され、曲線文が施されるもの

7類 隆起線文の施文されるもの

8類 その他

1類 口唇部先端の内外に粘土帯の折り返しがなされるもの（第78図No 1～11）

本類に含まれる土器は、口唇部が粘土帯の折り返しにより内外に肥厚し、断面形が三角形を呈するものである。口唇下には沈線・隆起線によって区画文を持ち、その一部分には横状把手が付けられる。沈線・隆起線による区画文は、区画内に上下2列の三角刺突文が施文されるもの（A種）と、沈線による円形・方形・三叉文等が描かれるもの（B種）がある。脇部には沈線・隆起線による区画文等が描かれている。本類の土器は、ほとんどの場合地文に縄文が施文されている。

A種 区画文に上下2列の三角刺突文が施文されているもの（第78図No 1～4・7・10）

No 1は口唇部に刻み目を持ち、2列の三角刺突文は上下がやや交互に刺突されている。

No 2・3・10は同一固体である。No 2・3は2列の三角刺突文が上下に並ぶように施文されている。No 2の口唇部にはL字長を縱横に回転して施文している。No 3の一部には横状把手の貼り付け痕跡が残る。

No 4と7も同一個体であり、上下2列の三角刺突文が整然と施文され、結果として交互文とな

っている。

No 2・3とNo 4・7における胎土の違いは明瞭で、前者は2.5YR8/4（淡黄色）を呈し器面は非常に荒れているのに対し、後者は10YR7/3（にぶい黄橙色）を呈し堅緻で焼成は良い。

B種 区画文内に沈線による円形・方形・三叉文等の文様が描かれているもの（第78図No 6・8～9・11）

No 8・11は同一個体である。No 8には橋状把手が、口唇部の粘土帶貼り付け以前に取り付けられており、把手上には沈線により三角形を意識したような文様が描かれている。同様な施文は口唇部の粘土帶貼り付け部下にも見られる。No 11にも同様な施文が見られ、両者を総合すると三叉文を描いているものと考えられる。No 11の隆起線下には三角刺突文が見られる。

No 6はA種のNo 4・7と同様の胎土である。巾広の区画文内に二重の円形・方形の文様が描かれている。区画内的一部分には三角刺突文が小さく施文される。No 8の縄文は節の小さなL型が器面のほぼ全面に施文され、橋状把手表面にはL型縄文原体を継回転している。

C種 その他（第78図No 5・9）

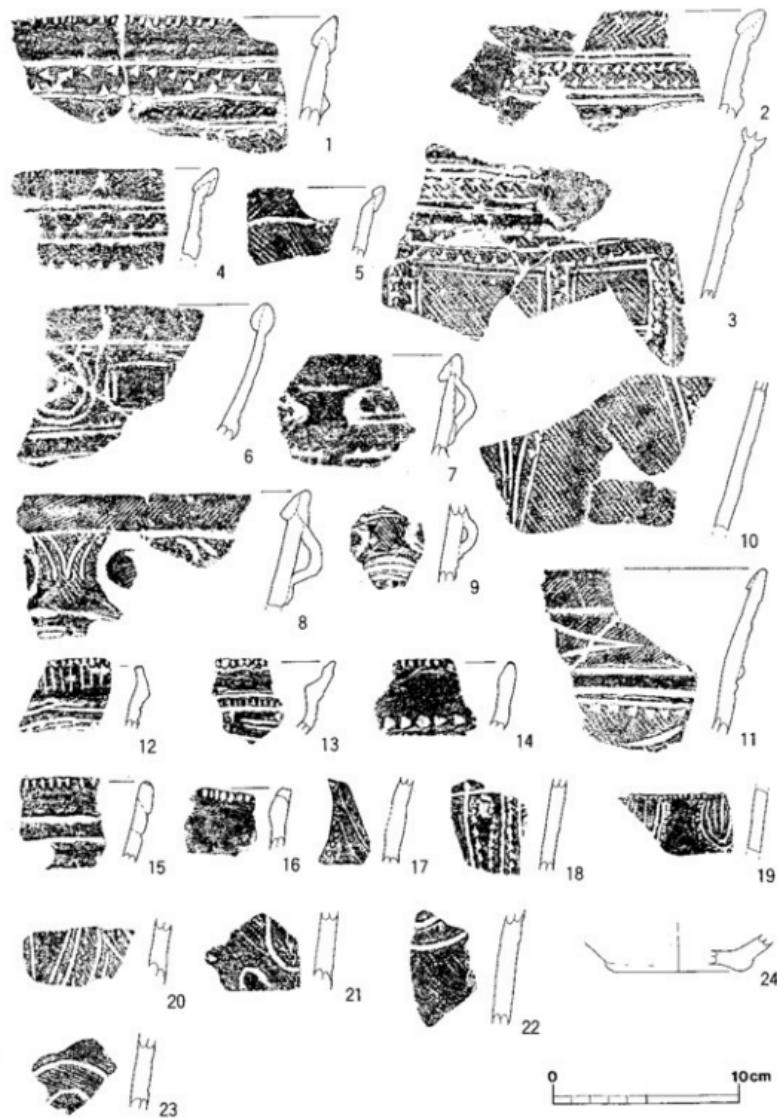
No 5は、口縁部が粘土帶の貼り付けによって作られており、口縁の内側は2段の稜を持つ。器面上の施文は、粘土帶貼り付け部にL型が施文され、それ以外の部分にはL型縄回転が施文されている。No 9は橋状把手である。

2類 口唇部先端に刻み目を持つもの（第78図No 12～14・16）

本類の土器は、口唇部端に細かい刻み目を持つものを一括した。断面形の形態はそれぞれ異なる。No 13・14・16は土器内面に稜を持ち、とくにNo 13は2段の稜を持つ。No 12・13は一部三角刺突文が施文され、とくにNo 12のものは三角刺突文が交互互的な状況を呈する。No 13の口唇下には結節縄文が施文されている。またNo 14には凹凸文が施文されている。No 16は口唇部に小突起が付される。小突起は2つ並べて付けられていたものと考えられる。

3類 波状口縁を持ち、波頂部付近の表に三角彫刻文を刻むかまたは、裏に粘土貼り付けによる隆起文が施文されるもの（第79図No 27～30・32～33）

No 27は地文にR型が施文され、その上に波状口縁の縁辺に沿って、単沈線が2本づつ引かれる。裏面には崩落の痕跡が見られ、本来は粘土貼り付けによる隆起文があったものと思われる。No 28は地文にR型縄回転の縄文が施文され、その上に2重の単沈線による「M」字状のモチーフが描かれる。波頂部には右側に寄って粘土貼り付けによる突起が付けられている。突起の裏面



第78図 遺構外出土土器9群(1)

にはC字状の隆起文が付けられ、その中央には三角彫刻文が刻まれる。No29は地文に擦りの不明な縄文が施文され、その上に波状口縁の縁に沿って2重の單沈線が引かれる。土器片の中央には三角彫刻文が刻まれている。波頂部には粘土の貼り付けがなされ、突起となっている。裏面には粘土の貼り付けによる渦巻き状の隆起文が付される。No30は口唇部縁辺に刻みが付され、波頂部下には梢円形の渦巻き文が隆起線及び沈線によって施文されている。沈線は隆起線の縁辺に施文される。渦巻き文の内部には三角彫刻文が刻まれる。No32は薄手の土器である。波頂部には左側に寄って突起が付けられ、その上部には刻み目が施文されている。表面には有節沈線による渦巻き文が施文される。裏面には先端の刻みが伸びた三角彫刻文が付される。No33はキャリバー型を呈する口縁を持つ。裏面には稜を持つ。地文にはR 1ヒ縄文原体の縦回転施文を行なった上に、竹管状工具の背部による2条の沈線及び有節沈線による円形文が施文される。円形文の四方には三角彫刻文が配されるため同類に入れた。

#### 4類 口縁部に無文部を持つもの（第79図No25～26）

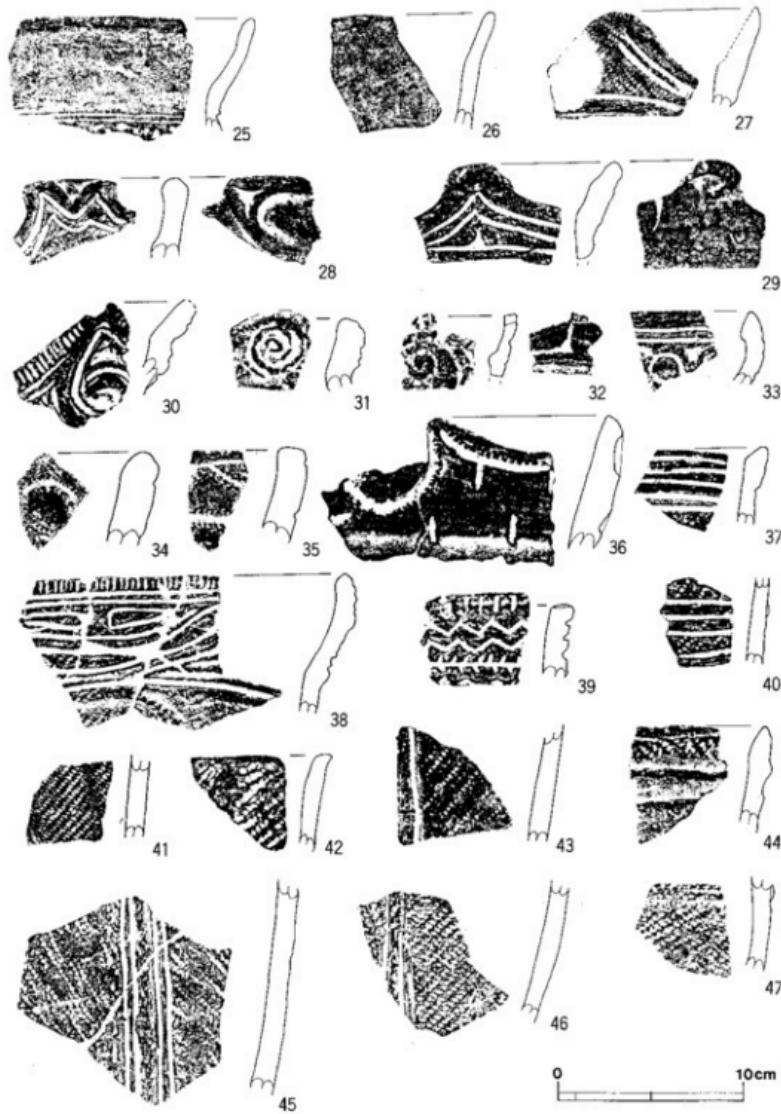
No25は口唇先端が丸味を持ち、全体的に緩く内彎する。No26は口唇先端に平坦面を持ち、やや外反する。No25は内面の口唇下と頸部に稜を持ち、No26は一段の稜を持つ。No25の頸部に三角刺突文による交互文が巡る。粘土には石英粒等が多く含まれる。

#### 5類 沈線に沿って竹管状工具による刺突文が巡るもの（第78図No17～20、第79図No31・34～36）

本類に含めた土器は口縁部と頸部破片があり、前者をA種、後者をB種として以下に述べる。

##### A種 L縁部（第79図No31・34～36）

No34・35は同一個体である。No34は波状口縁波頂部であり、太い沈線により円形のモチーフを描き、その沈線の縁辺に半截竹管状工具の内側による刺突文を巡らしている。No35も同様な施文方法を探っている。土器の器厚は厚手であり、胎土中に石英の粒を大量に含んでいる。No36もNo33・34と同様な形態を持つ口縁部と考えられる。波状口縁波頂部に深く刻まれた沈線による円形のモチーフがあり、縁辺に半截竹管状工具内側による刺突文を施文する。また頸部付近には稜を持ち、交互文風の刺突がなされる。口縁部は頸部で外反する。胎土中にはNo34・35ほど石英粒を含まない。No31はやはり波状口縁を呈する破片であり、波頂部は丸味を持つ。波頂部の下には細い粘土紐を貼り付けて渦巻文を描いている。粘土紐を貼り付けた後に、その間を竹管状工具によりなぞっている。口唇上の一部には粘土紐が付され、その上に半截竹管状工具内側により刺突を加えている。他の土器と同様に頸部より外反する。



第79図 遺構外出土土器 9群(2)

#### B種 脣部（第78図No17～20）

同種の土器は先のA種と施文方法、器厚の状況が異なる。施文の点では、A種が太い沈線の縁辺に半截竹管状工具内側による刺突を加えていたのに対し、B種のものは細い沈線に沿って竹管状工具外側による刺突がなされる。器厚はA種に比べて薄手である。

No17はヘラ状工具により沈線を引き、沈線の内側に刺突を行なう。No18は沈線により区画した内側に、上端が渦を巻く刺突文が見らしている。一部に三角刺突文が見られる。No19は沈線による椭円形のモチーフの外に刺突を加えている。No20は地文には原体R 七の綱文施文がなされ、二又の沈線内に刺突が加えられている。

#### 6類 地文に綱文が施文され、曲線文が施文されるもの（第77図No54・58・62～63、第78図No21～23）

No21～23はすべて同一個体と考えられる。すべて地文に節の細かなL 七原体の綱回転施文がなされ、一部には結節回転綱文も見られる。沈線は太い。胎土には石英粒を多く含む。No58・62・63には、R 七綱回転の結節回転綱文がみられ、No54にはL 七を使用している。胎土には雲母細片が目立つ。同じ結節回転綱文を施文している8群土器とは異なる。

#### 7類 隆起線文が施文されるもの（第79図No37～38・40・43～47）

No38はキャリバー型を呈する口縁部であり、口唇部は尖り、内面に稜を持つ。口唇部の外面には細い帯で縫の沈線帯があり、その下には沈線により区画された口縁部の文様帯が横に巡る。文様帯内には隆起線や沈線による文様が描かれる。頸部からは隆起線が下方へ施文されている。地文にはR 七綱文原体の綱回転がなされている。No44は口唇がやや尖り、内面に稜を持ち、口唇下に2条の隆起線が施文されている。

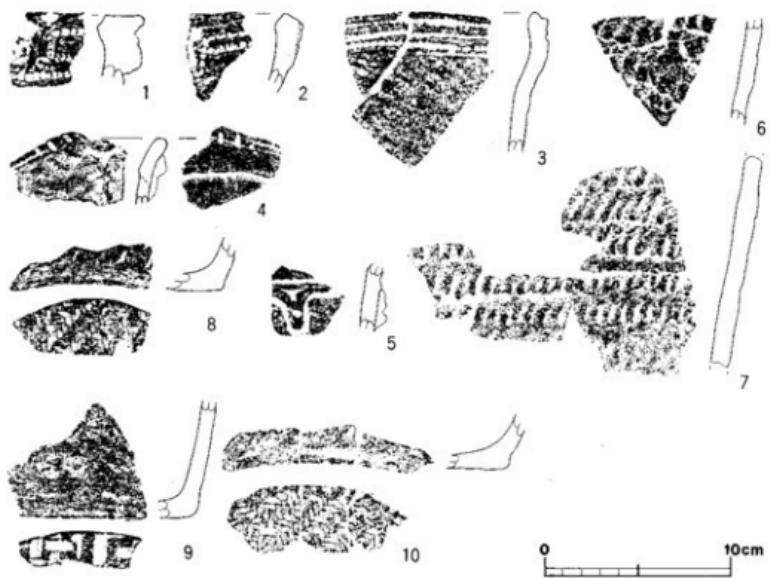
No43・45～47は胴部破片であり、No45・46は縫の隆起線が施文され、No47には横方向の隆起線が施文されている。隆起線は沈線により挟まれた形状をとる。No46・47には沈線上に刺突文が見られる。No37・40・43は同一個体と考えられる。胎土には細かな金雲母を含む。No40には横位の隆起線、No43には縦位の隆起線が付される。それぞれ地文にはR 七綱文原体により綱回転施文がなされる。

#### 8類 その他（第78図No24、第79図No39・41～42）

No24は底面に高台が付いたような底部片であり、胎土には小石（径1mm～2mm）を多く含む。

No39は沈線による施文がなされる。口唇は平坦で、刻み目が付されている。器面には鋭利な感じを持つ鋸歯状文が2条引かれ、その下に1本の沈線に向かって上下から刺突文を加えている。その下には鋸歯状文が施文されているようである。

No41～42は器面に縄文のみが施文される。No41は口唇部が平坦で、その一部が外側に張り出す。器面にはNo41・42ともR+七縄文原体の縱回転がなされる。



第80図 遺構外出土土器10群

#### 第10群土器 中期前半（阿玉台式）（第81図No 1～No10）

本土器群は阿玉台式土器を一括する。本土器群の分布は遺跡エリアの南半部に密で、北半部で散漫な状況である。なかでもL-30区が最も多く出土しており、重量として823gを量る。Lラインの観察によればL-27区付近より出土重量が増え始め、L-30・31区付近で最大となり、その後徐々に減少する。この傾向はJ-30区とO-36区を結ぶライン付近、K-30区とF-36区を結ぶライン付近、F-35区とH-40区を結ぶライン付近で見られ、結果として密な部分が逆「コ」の字状を呈す。

No 1～3は口縁部に円形竹管状工具による1条の有節沈線文（角押文）が棒状に描かれるものである。左右の棒状有節沈線文の間には、粘土貼り付けを行ない円形竹管文の側面で押捺文を施した部分が見られる。有節沈線文の周囲にも粘土貼り付けにより隆起帶がつくられている。No 3

の口縁部に3条の有筋沈線が引かれる。このうち、1条目と2条目の施文によって、その間は隆起線のような盛り上がりを見せる。内面はナデているが、器面には横位の削りが見られる。No.1～3それぞれ、口縁部がキャリバー型をなす深鉢と考えられ、口唇裏には稜を持つ。

No.4・5には「Y」字状の粘土貼り付けが見られる。No.4は波状口縁であり、口唇端には細い円形竹管状工具の側面圧痕及び同原体による刺突列が見られる。裏面には明瞭な段差を示す稜が作られる。No.5の「Y」字状粘土貼り付けの周囲には有筋沈線が巡り、その上には円形竹管状工具による側面圧痕が施文される。

No.6・7は胴部片であり、輪積痕に細工し横位のヒダを作り出している。

No.8～10は底部であり、それぞれ底面に網代痕を残す。No.8には横位のヒダが見られる。

全体的な特徴として、まず胎土には長さ2～3mm程度の白色の石片、半透明な石片が多く含まれることが挙げられるが、No.4・5のように目立たないものもある。雲母は量の多少はあれ、たいへいの土器に含まれるが、例外的にNo.5や6のように全くと言っていいほど雲母が含まれない土器も存在する。内面は、ナデが丁寧に施されておらず、粗雑な感じがする。

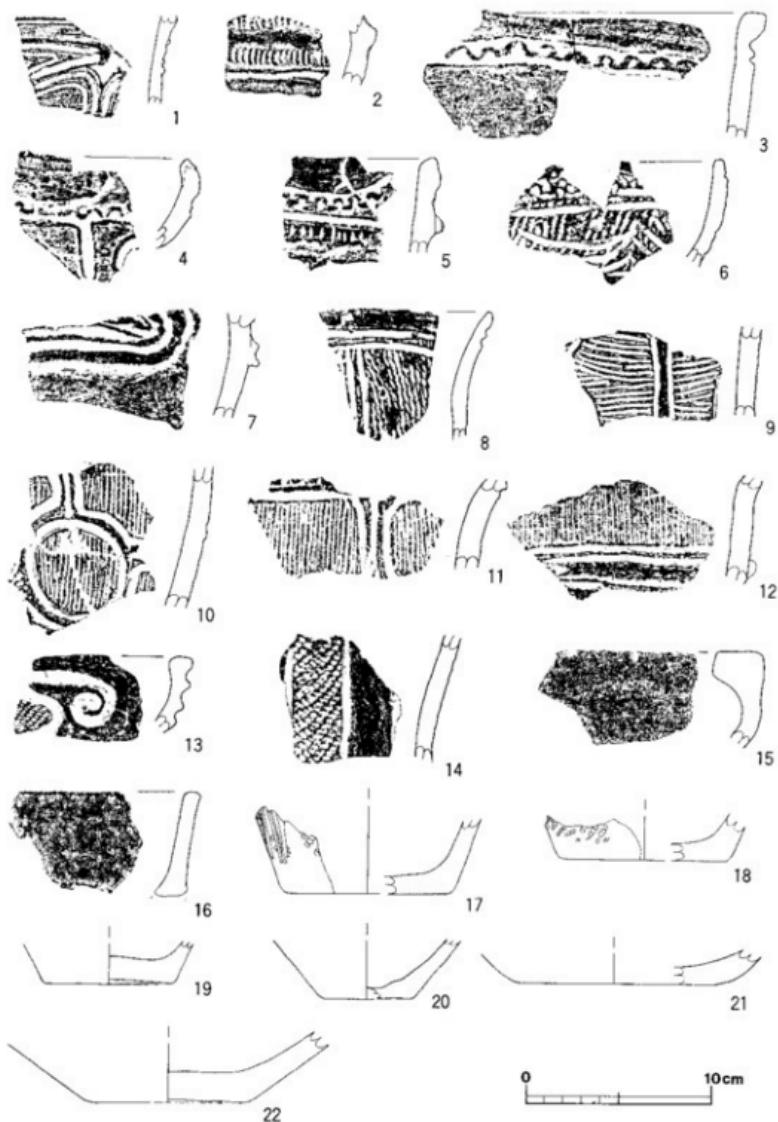
#### 第11群土器 中期前半（勝坂式）（第81図No.1・2）

第81図No.1は、「Y」字状の粘土貼り付けや区画状の隆起線文の内側に、二重の円形竹管状工具の刺突によって有筋沈線文を施文し胴部文様帯を構成する。胴部文様帯上には無文帯がある。胎土は緻密である。No.2は横位の隆起線の上下に巾広なキャタピラ文が施文され、竹管状工具外側による沈線が引かれる。胎土には砂粒が多く含まれ、器面は荒れている。隆起線上が赤褐色を呈し、被熱した状況を呈す。

#### 第12群土器 中期後半（中峠式・加曾利E式）（第81図No.3～15）

全体的に器厚が増し重量感のある土器である。器形は円筒形、キャリバー形を示すもの等がある。No.3は口唇部が肥厚し、頸部に交互文が横位に巡る。この交互文は、竹管状工具の刺突・引きずりを上下においてぐらして施文することによって描き出している。左から右へ施文している。口唇部には平坦面がありナデられている。

No.5には突帯が付され、突帯端にはヘラ状工具による刻み目が施文される。その上部には、沈線による区画内に細い円形竹管の上下刺突による交互文が施される。口縁部はほとんど平縁のようだが、一部把手が付されるようである。口縁部の変化に伴い、区画された交互文も変形する。No.4はキャリバー形を呈する土器であり、内面に稜を持ち、口唇端にはナデによる凹みを持つ。口唇無文部下には、半截竹管状工具の一支点を回転しながら変えていく手法によって交互文を施文する。その下には太い沈線による直曲線文が描かれる。器面の内外面は丁寧にナデられている。



第81図 遺構外出土土器10群・11群・12群

No 9は横位の条線文上に沈線を引き、その中を磨り消している。内面は黒色を呈し、磨かれている。No 8は口縁部がラッパ状に外反する土器であり、地文に単軸絡条体の縱位施文がなされる。撲り紐はRで若干撲りがほどけた状態になっている。地文施文上に横位に2本、縱位に3本の沈線が引かれる。No 10・11は地文にも単軸絡条体1類の縱回転がなされ、撲糸にはRが使用される。地文上には太めの沈線により区画文、円形の意匠文等を描く。No 12は、2重の沈線文間の地文が磨り消されており、地文に条線文を施文しさらに隆起線の上下には沈線を引いている。

No 13には太い渦巻き文が施文され、同沈線内には繩文R [七] の縱回転が施文されている。口縁はキャリバー形を呈する。No 14は脣部片で帯状の繩文帯と磨り消し帯が作り出される。繩文はR [七] の縱回転繩文である。No 15・21・22は浅鉢の破片で、No 17～20は深鉢である。No 16は器高の低い土器である。

### 第13群土器 晩期前半（安行式・姥山式）（第82図）

W-22区付近に分布の中心が見られ、出土土器の多くは中心より10数m四方内からより出土している。発掘調査時において、分布中心区域から遺構の検出はできなかった。

- 1類 粗製深鉢土器で口縁部から脣部にかけて条線文が引かれるもの
- 2類 沈線で区画した内側に細刻線を施文する粗製深鉢
- 3類 その他

#### 13群 1類 粗製深鉢土器で口縁部から脣部にかけて条線文が引かれるもの（第82図No 1～3）

No 1は接合はないが同一個体の土器である。器形は口縁部が内彎し、砲弾形を呈するものであろう。口縁部器面は脣部からほぼ真っすぐか、緩く括れる。口唇断面は脣部に比べ約3倍の厚さを持ち、先端は丸味を持つ。器面の施文前には削り・ナデが行なわれ、その上に条線が施文されている。条線は竹管状工具の外側を使用したようで、器面右より左へやや弓なりに描く。1単位は条線施文とは逆に左から右へ動いて一周する。胎土は緻密であり焼成もよい。

No 2・3は同一個体破片であり、No 1同様の条線が施文される。器厚は厚手であり、内面に急激な稜を持つ。口唇端は丸味を持つ。胎土には径2mm位の小石が含まれる。

#### 13群 2類 沈線で区画した内側に細刻線を施文する粗製深鉢（第82図No 4～7・9）

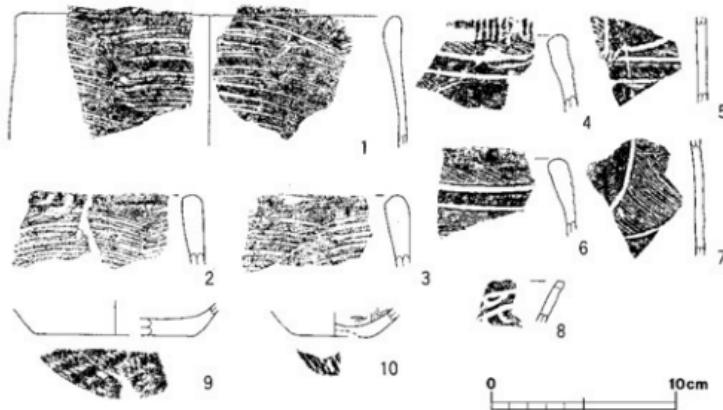
器形はA類同様の砲弾形を呈するものと思われ、口縁部は内彎するものであろう。No 4～7・9は各々同一個体ではあるが接合はしない。No 4・6は口縁部破片で、口唇上には等間隔で縦に沈線を数条施文する。口唇部は肥厚し、口唇端は丸味を持つ。

口唇部下には巾1cm位のヘラ状工具による細刻線を斜に施した帯が見られ、その下に竹管状工

具外側による沈線が2条平行に引かれ、その中を丁寧にナデている。No 5・7の胸部にも平行沈線内をナデた無文部があり、その上下には同様のモチーフが描かれているようである。モチーフはやはり竹管状工具外側によって半三日月状の形が描かれ、その中に細刻線が方向を変えて施文されている。平行沈線とモチーフとの接点には刺突文が付される。区画中の細刻線は底部にまで及ぶ。底部には網代痕がある。土器断面の観察によれば、断面の器面下1~2mmは赤褐色を帯びるが器面上は暗褐色を呈する。

#### 13群3類 その他（第82図No 8-10）

No 8は鉢または浅鉢の口辺部と思われる。口唇上に粘土を貼り付けている。口唇下には入組文が施文される。No 10は粗製土器の底部であり無文である。全体的に赤色化し、底面の一部が崩落しているが、網代痕が観察される。内面には磨きのような痕跡が見られる。



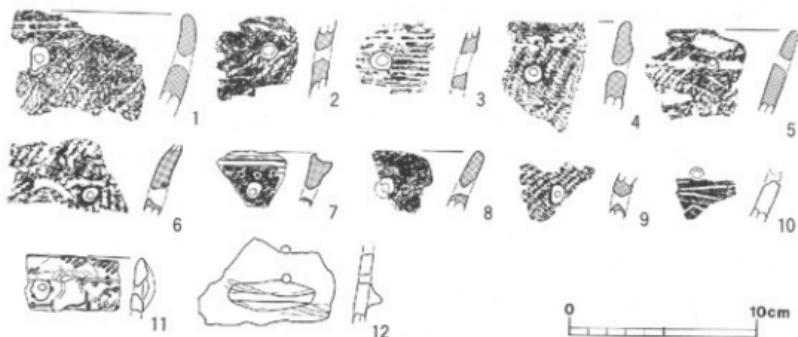
第82図 遺構外出土土器13群

#### (4) その他

##### 穿孔土器片（第83図）

No 1~9は第5群土器で、No 10・12は6群土器、No 11は9群土器である。No 12を除きすべて焼成後に穿孔されている。穿孔される土器の部位は口縁部近くが多い。穿孔の方法は先の尖った物により回転させながら、器面表裏より穿孔しているようである。

一緒に図示していないが6号住No 4、8号住No 18、11号住No 1・No 26、15号住No 6、第1群土器No 4、第5群土器No 10・95・131、第8群土器No 12も穿孔されている。



第83図 遺構外出土遺物(穿孔土器)

土製品 (第84図・第85図)

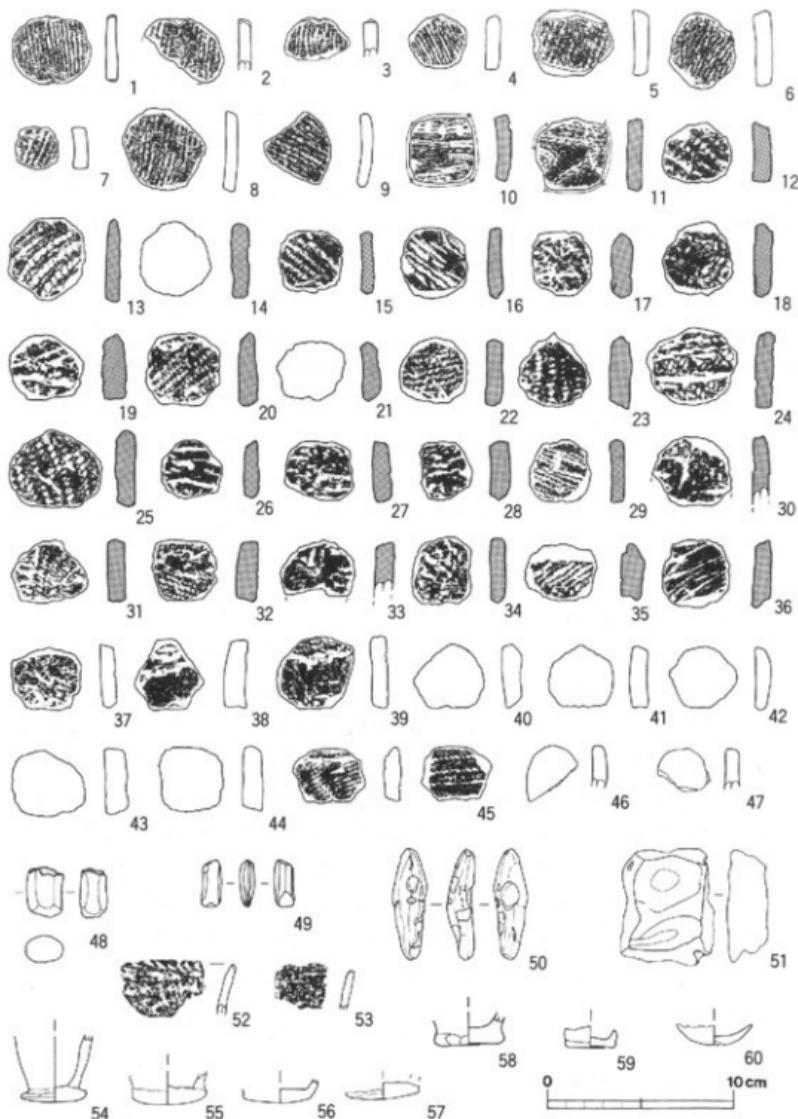
以下述べるものの中には、①土器片錘、②土器円盤、③ミニチュア土器、④土製抉状耳飾り、⑤焼成粘土塊、⑥その他の土製品が挙げられる。

①土器片錘 (第84図No 1～3)

本遺跡で確認された土器片錘は3点のみで、いずれも縄文時代早期夏島式の土器片を再利用して作られたものである。他の時期のものは確認されていない。

No 1は第1号方形周溝墓の周溝2区より出土し、形態は上下に潰れた楕円形をした完形品である。長軸は4cm、短軸は3.5cmである。上下の中央部付近に刻み目があり、糸をかけるためのものと考えられる。この土片錘の縁辺は、擦れて丸味を帯びている。No 2は0—30区より出土している。1/3が欠けている。形態は上下に潰れた楕円形をするものと思われる。長軸が4.5cm、短軸は3.4cm位を測るものと思われる。上部に刻み目が見られる。縁辺は擦れて丸味を持っている。No 3は、第1号方形周溝墓3区より出土している。上記2つのものに比べ小型のものである。約1/2の欠損品であろう。形態はやはり楕円形を呈するものと思われる。上部中央に刻みを持つ。やはり縁辺は擦れて丸味を持っている。以上3点はいずれも刻み目を上下の位置にして置くと、縄文の条が縦方向となっている。又それぞれの土器片錘の土器からの採取位置は胴部片である。No 1のみ若干頸部にかかるものである。それぞれの器面の色調は橙色7.5YR6/6を基調としている。重量はそれぞれNo 1-10g、No 2-9g、No 3-6.6g、である。

これらの土器片錘の出土位置は、No 2を除き第1号方形周溝墓付近より出土している。



第84図 遺構外出土遺物（土製品1）

#### ②土製円盤（第84図No4～No47）

土製円盤としたものの中には確実に縁辺を擦って円形にしたものや、縁辺を擦って成形していくなくても円形に近いものも含めてある。後者は土製円盤と呼ぶには疑問の残るものもあるが、大方のものは、土器片を利用して円形（中には隅丸方形、楕円形）を意識して作られたものようである。No4～6・No8～9は縄文時代早期夏島式の土器を利用していている。特にNo9は弧を描く縁辺が丁寧に擦られている。円形の1/4の残欠であろう。刻み目で割れてしまった土器片錐とも考えられる。No10～36は縄文時代前期前半黒浜式の土器を利用して作られたものである。No10・11のように縁辺が平滑になる程擦られているものもある。円形というよりは隅丸の方形である。他の物は先の2点のように平滑な面が出来る程に擦ったような痕跡はない。しかしながら、細かく打ち欠くか、これ自体で細かく何ものかを敲いたかとも思われる。No25は「栗」のような形態を持つものである。No37～47は胎土に纖維を含まないものである。No37～39・44は器面に縄文原体によるS字状結節回転文が施文されており、第8群下小野式に位置付けられる土器を利用していている。No37～39は緻密な胎土であるが、No44は長石・石英粒が多量に入り込む。縁辺の割れ方は粗い。No45は器面上にL字による縄文原体側面圧痕文が見られる。他のものは無文である。No46は楕円形を呈するものであり、1/2の残欠であろう。縁辺は丁寧に擦られている。

#### ③ミニチュア土器（第84図No52～60）

以下述べたものは口縁部片と底部片である。No52・53は口縁部を残す破片で、若干外に開きぎみに直口する。胎土には纖維を含まず、No52は砂粒を含み、No53は雲母片・砂粒（石英多）を含む。口唇部にはそれぞれ刻み目が付される。成形は輪積み粘土によって作られている。No52の刻み目には赤色の顔料残痕が見られる。No54・57・59は類似した胎土により作られている。これらはそれぞれ赤色又は暗赤褐色が目立って含まれる。No54の底径3.5cm、No57は3.7cm、No59は2.7cmを測る。No59の器面には細かい貝殻波状文が施文されている。No55・56は他の底部と胎土の具合が異なり、雲母片や石英粒が多く含まれる。No55は内面に輪積み痕を残す。底径はNo55が4.2cm、No56は3.8cmである。No58は胎土に纖維を含み、暗褐色を呈する。底径が3.5cmである。No60は浅鉢形の形態をもつものである。胎土に纖維は含まない。時期的にはNo52・54・57・59・60は前期後半の時期に位置付けられるものと思われる。No58は前期前半である。その他については、前期後半以降であろう。

#### ④土製抉状耳飾等（第85図No1～No11）

この中には土製の抉状耳飾と管状の耳飾（No11）が含まれる。土製抉状耳飾は皆破片である。形態的には円形（No1～3・5～10）と楕円形（No4）のものがある。円形のものの中でも側縁の

断面形によって大きく2種類に分けられる。A、巾が厚さより大きいもの、B、厚さが巾より大きいもの。AはNo1～3・5、BはNo6～10である。Aの中でも断面形において孔側より外縁側の方が厚さが厚くなるものとしてNo1～3・5である。Bでは断面が三角形を呈するものNo6～7、と断面の下方に重心があるものNo8～10がある。出土状況ではNo3がSI-11から出土している外は遺構外から出土している。(No7・10は10a号住の可能性あり) 遺構外出土のものに関しては、縄文時代の住居跡が密集するエリアの外側に、取り囲むように出土している。No1・6・9は若干ながら赤色の塗彩がなされた痕跡を持つ。

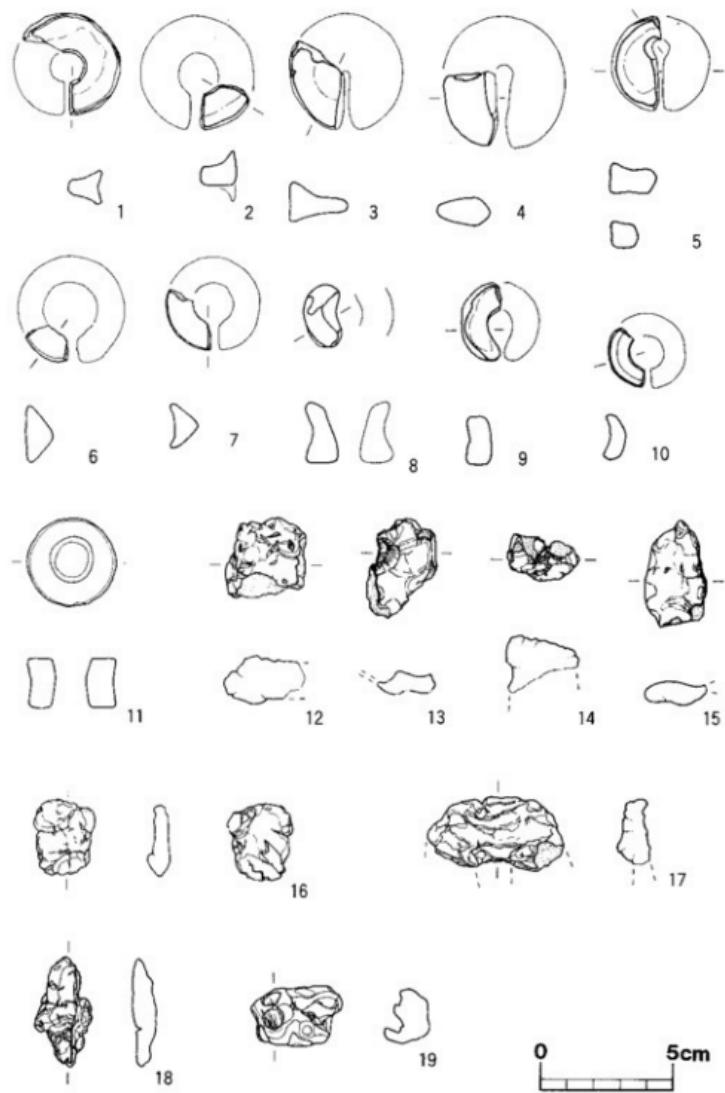
No11は孔径1.3cm、径4.3cm、器高1.9cmの完形である。

#### ⑤焼成粘土塊（第85図No12～17）

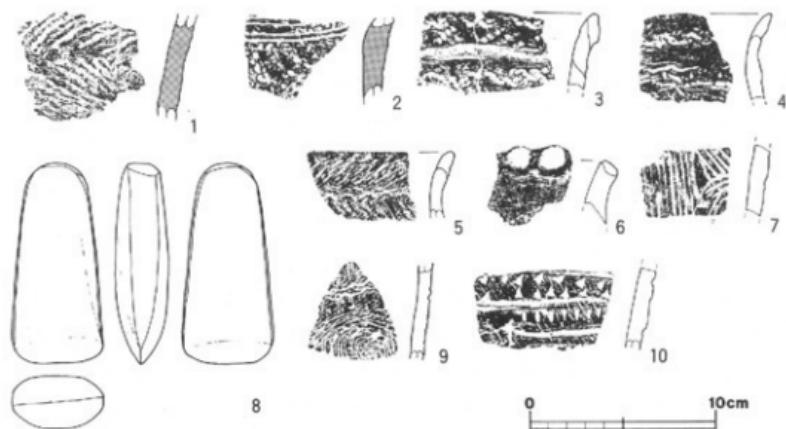
ここで取り上げたものには、ほとんどのものに竹管状の工具による刺突や、爪の痕跡等が残っている。形態的には一定の形態を持たない。おおかたは偏平なものが多いようである。No12、13は9号住より出土し、No15・16は8号住より出土している。

#### ⑥その他の土製品（第84図No48～51）

ここで取り上げた土製品はNo50を除きすべて破片である。No48・49は面取りがなされ、No51には凹みを持つ。No50は「ナメクジ」のような形態を持つが、意識して製作したかは定かではない。



第85図 遺構外出土遺物（土製品2）



第86図 試掘出土遺物

試掘調査遺物（第86図）

第86図に掲載した遺物は試掘調査時において出土したものである。試掘トレンチは調査エリア内中央付近に北西—南東方向で設定された。トレンチ内の南東よりに包含層が確認されている。

出土した土器は縄文時代前期から中期初頭のものが主なものである。No 1～2は縄文時代前期前半の土器で遠縄外一括土器の項で第5群土器としたものである。No 2は頸部片である。No 1はR ||とL |Fによる結束第一種による羽状縄文が施文される。No 2はR |Hが施文されている。No 3～6、9は第8群土器である。No 3～6は口縁部破片でNo 3以外は、口縁部に内彌する部位を持つ。器面にはそれぞれS字状結節回転文が施文されている。No 9は地文にR ||による結節回転文を持ち、その上にヘラ状の工具による溝巻文を描いている。それぞれ胎土に砂粒を含む。No 10は第9群土器であり、地文に細いL |FもしくはL |Hを縱回転施文しその上に沈線や三角彫刻文を配している。一部にはこの時期特有の小さい橋状把手の痕跡のような粘土の高まりも見られる。内面は丁寧に磨かれている。胎土には石英粒が多く含まれる。

No 8は定角式の磨製石斧である。緻密な砂岩のような石材で作られている。

### (5) 遺構外出土石器

縄文時代の石器には、尖頭器・石鎌・楔形石器・石錐・石匙・搔器・削器・石核・打欠石錐・磨製石斧・穀器・磨石・凹石・敲石・石皿・二次加工を有する剥片・使用痕を有する剥片などがある。また石製品としては滑石製の小形玉が15号住から1点出土している。ここでは遺構出土も含めて説明する。

#### 尖頭器（第87図No 1・2）

2点が出土している。

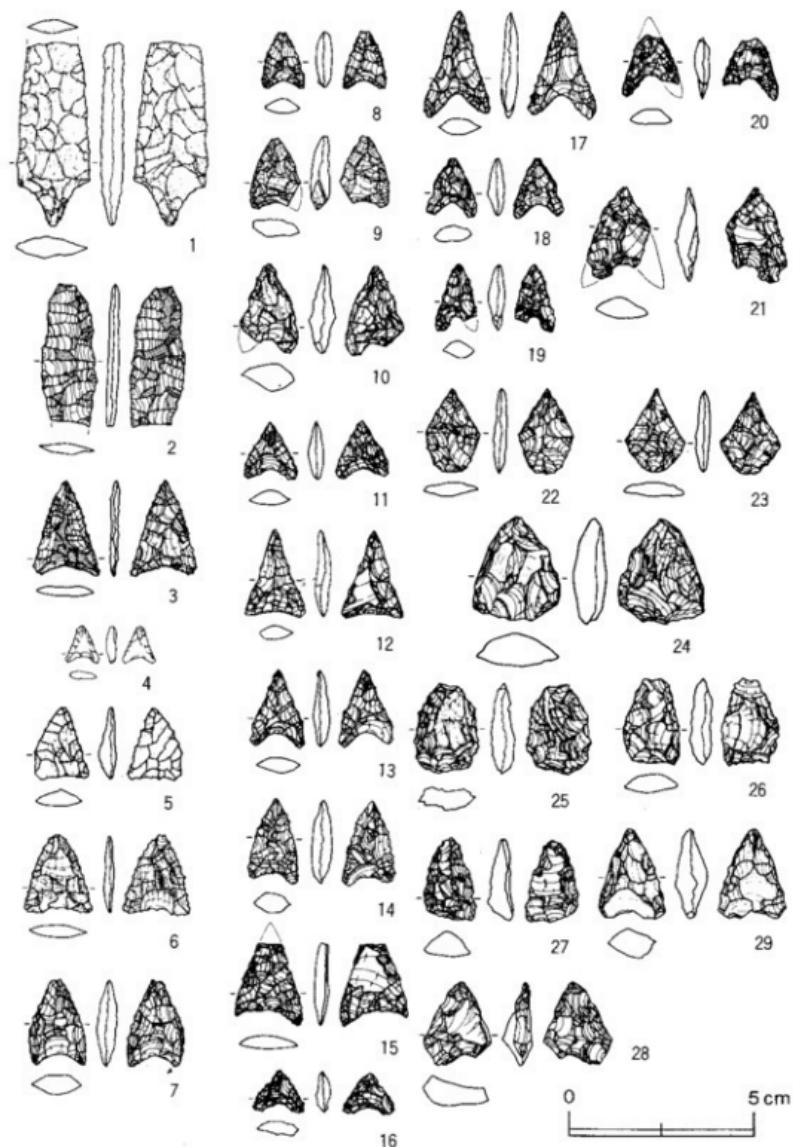
No 1は方形周溝墓の周溝覆土から出土した有舌尖頭器である。尖端から約半分弱を欠損する。基部の作出は丁寧で断面形は菱形を呈し、微細な周辺加工で形を整えている。基部のかえしは比較的鋭い。身部は両面に面的調整が施され奇麗な波状（ウロコ状）を呈する。両面とも微細な周辺加工が施された側縁とそうでない側縁からなり。最終的な平面形の仕上げの方法は片面側から細部調整によって全体的な平面形が整えられている。安山岩製。No 2は両面に押圧剥離の面的調整を施し非常に薄く整形された乳白色を呈する頁岩製の尖頭器である。特筆されることは両面の中央部が研磨されていることである。時期的な位置付けが問題となろう。先端を欠損する。

#### 石鎌（第87図No 3～29）

遺構外出土の石鎌は未製品を含めて24点あり、遺構出土を含めると33点を数える。いずれも無茎の石鎌であり、平基の石鎌は15号住から1点出土したのみである。ここでは次の4類に分類して説明する。

第I類－凹基で抉り込みが全長の約1/4を越えないもの	総数17点
第II類－凹基で抉り込みが全長の約1/4に届くもの	総数6点
第III類－凸基のもの	総数2点
第IV類－平基のもの	総数1点
石鎌の未製品	総数7点

第I類にはNo 3～16が含まれる。No 3は局部磨製石鎌で面的調整によって非常に薄く整形され、基部の部分には急峻な周辺加工が施されている。また片面の中央部付近の棱が研磨され平滑に整形されている。このように部分的に研磨された石鎌はこれ1点のみである。これも時期的な位置付けが問題となろう。No 4は安山岩製の非常に小形の石鎌でかすかに周辺調整が観察される。实用性には疑問が持たれる。全体の形態的特徴としては、片面に素材面を残置するものはNo 12・15で、他は両面に面的調整と周辺調整が施されている。No 9・10はその調整加工のあり方や断面形から判断して未製品であると考える。また、両側縁が曲線的なもの（No 4・5・8～10・14・15）が直



第87図 遺構外出土石器（1）

線的なもの（No3・6・13・16）の2倍であり、No12は側縁がやや内側に反るもので非常に少ない。

第Ⅱ類にはNo17～21が含まれる。No17は両側縁に特徴があり内側に弧を描くもので優美な石鎚である。No19は細みの形態で抉り込みが円形を呈している。No20・21は片面に素材面を残置している点や尖端や脚部を欠損しているため、未製品の可能性も高い。

第Ⅲ類はNo22・23の2点のみである。両者とも各側縁から求心的な面的調整によって断面形に反りなどのない均一的な厚みに整形され、22は平面形が五角形で側縁は直線的、No23は扇を逆さにしたような形態で側縁はやや内側に弧を描く。

第Ⅳ類は15号住（第47図No1）から1点出土したのみである。

石鎚の未製品と考えられるものは総数7点で、全体的には平面形がほぼ三角形を呈し、断面形が不定形であったり、側面形に反りや厚みのあるものである。No24は自然面を残置し片面に面的調整が施されている。とくに主要剥離面の三辺からの集中的な面的調整のあり方からは、厚みのある素材剥片を整形していく過程を窺うことができる。また、素材剥片の形態を考える上では、No26は横長剥片、No27は縱長剥片が利用されており、素材剥片の形態の多様性として理解できよう。No25～27や15号住（第47図No3）出土のものは大体断面形が凸レンズ状、平面形も大体三角形に整形された段階のものである。No28・29は尖端部と脚部が作出された段階のものであるが、断面と側面形があり不定形であり製品とはやはり言い難い。

#### 楔形石器（第88図No30～44）

本遺跡では石鎚に次いで多量に出土している剥片石器である。遺構外からは13点、遺構出土を含めると19点が出土している。ここでは次の2類に分類して説明する。

第Ⅰ類—平面形が四角形で対面する側縁に交錯する剥離痕があるもの ..... 総数5点

第Ⅱ類—平面形が不定形で対面する側縁に交錯する剥離痕があるもの ..... 総数13点

楔形石器から剥離された剥片 ..... 総数1点

第Ⅰ類の典型は10b号住（第36図No7）や15号住（第47図No7）出土の楔形石器である。No30・31は両者とも背面に自然面を、裏面には側縁付近に主要剥離面を残置している。両面にわたって、いわゆる両極打法によって加工されたと考えられる剥離痕が観察される。また、その対面する縁辺には微細なつぶれが看取される。

第Ⅲ類にはNo32～43が含まれる。No38・42・43を除いて他の背面には自然面が残置され、また、いずれの裏面にも主要剥離面や節理面が共通して観察される。第Ⅰ類との違いはその平面形に大きく依存するが、その他はほぼ共通している。また、第Ⅱ類に含めたNo42・43は他と比べて形態的にも剥離痕にも相違点があり、第Ⅲ類として分類することができる可能性を持つ。両者は両極打法によって加工されたと考えられる剥離痕が、剥片の長軸方向に長く伸びて交錯するものであった。ただし、部分的に主要剥離面を残してたり縁辺に微細なつぶれが観察される点などは他の



第88図 遺構外出土石器（2）

2類と共に通するが、第I・II類のほとんどのものは両極打法によって加工されたと考えられる剥離痕が階段状を呈していることとの相違は看過できないように思われる。しかし、資料的に僅少なため第II類に含めた。

No44は楔形石器から剥離された剥片と考えられ、上下端からの交錯する剥離を有する剥片で、上端には打瘤裂痕が観察され、下端からの剥離はヒンジタイプを呈する。

#### 石錐（第88図No45）

遺構内と遺構外からそれぞれ1点出土しているだけで、非常に少ない器種であると言える。No45はつまみ部が大きく、錐部は断面形が凸レンズ状で幅広で短い。つまみ部は比較的粗雑な作りであるが、断面形が偏平な台形状のため握りやすい。錐部の作出も丁寧とは言えないが片面の左右からの急峻な細部調整によって抉り込みがしっかりと作出されている。

#### 石匙（第88図No46～51）

未製品2点を含めて10点が出土している。遺構内と遺構外ではほぼ同数の出土であるが、特に52号土坑からはメノウ製のものが1点出土しており、その土坑の性格を考える上でも重要である。No46は唯一の綫形石匙で両面に素材面を残置していることから、素材は反りのかなりある綫長剥片であると考えられる。結果的には側面形に見るように「く」の字に整形されたことで、より一層の効果的な作業を可能にしたように思われる。全体的な整形加工については他の石匙にも共通することであるが、基本的に素材剥片を切断手法などを用いて大体の形を整え、後は執拗な周辺調整によって平面形を整形している。同様のことはNo47・6号住、9号住、10a号住出土のものからも窺うことができる。中でもNo46は台形状を呈し、先端部が抉り込まれるという希有な形態で、他の石器に比較して平面形の調整加工に重点を置く石匙の性格に興味が注がれる。No48・49は比較的粗雑な作りで微細な周辺調整は見られない。No50・51は未製品と考えられるが切断手法と周辺調整を明瞭に観察することができる。つまみ部の形態には大体丸いものと上端部中央に凹むものがある。

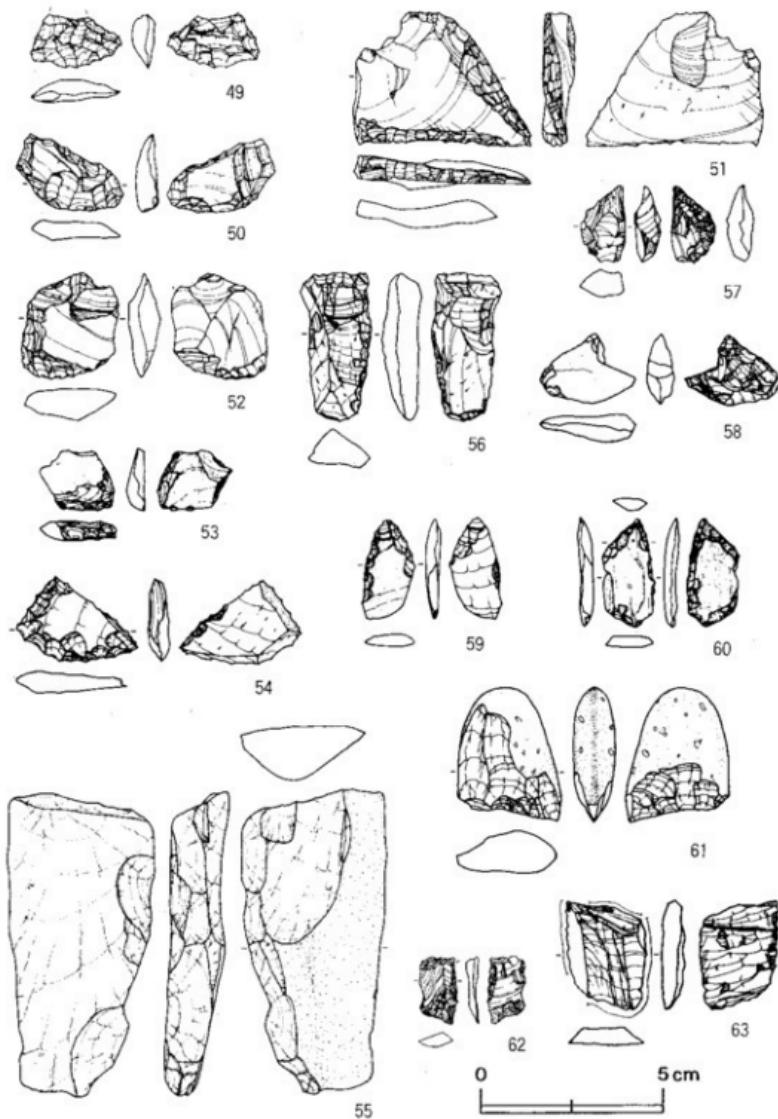
#### 搔器（第89図No52～54）

出土量は少なく總数4点である。

最も形態の整ったものは8号住（第32図No2）出土のものである。それに比較してNo52～54は規格性のない剥片の側縁に片面からの連続的で急峻な剥離があり、特に54はそれが鋸歯線状を呈す。

#### 削器（第89図No55・56）

やはり出土量は少なく2点を数えるのみである。



第89図 遺構外出土石器（3）

No55は縦長の剥片の一側縁に主要剥離面からの急峻な調整加工によって刃部を作出している。No56は横長の剥片を素材にして、その大体三角形を呈する断面形の一側縁に両面からの連続的な細部調整が施されており、その作出された縁辺は細かい鋸歯線を呈する。

#### 二次加工を有する剥片（第89図No57～62）

周知の定形的な石器以外で何らかの二次的な調整加工を有する剥片を一括した。出土数は45点である。

目立ったものとしては鋭い尖端部を作出したものでNo59・60や9号住（第96図No3）出土のものや、No61の非常に小形の礫器状のものなどがある。

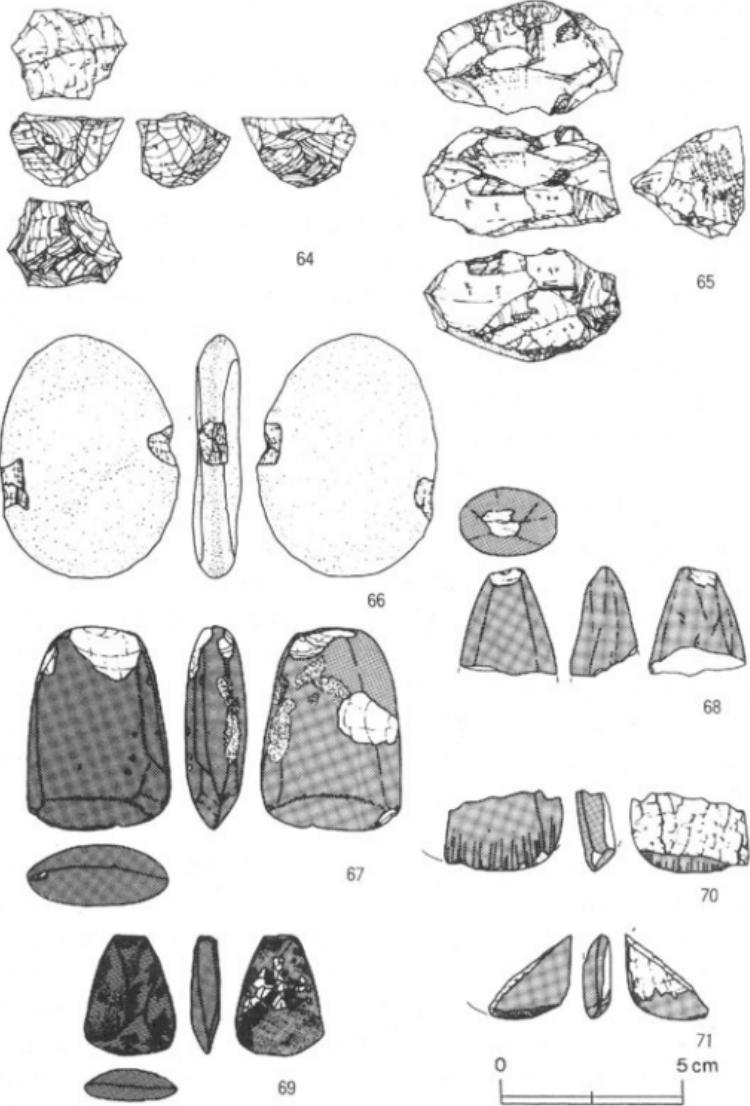
#### 使用痕を有する剥片（第89図No63）

肉眼的な分析によると使用痕を有する剥片はそれほど多くはない。さらに顕微鏡観察などの本格的な分析を加えれば、その数は大きく変動する可能性が高いことは言うまでもない。

ここに最も明瞭な資料としてNo63を紹介する。それは背面に自然面、裏面に打点を切断された主要剥離面をそのまま残置した四辺形の剥片で、いずれの縁辺にも微細な歯こぼれが観察され鋸歯様状になっている。断面形は奇麗な台形を呈する。

#### 石核（第90図No64・65）

15号住の覆土から1点と遺構外から2点の計3点が出土している。いずれも黒耀石製である。64・65は遺構外出土のものであるが、No64はやや丸みを帯びた円錐形の石核で、縦長剥片や不定形の剥片を剥離したことが観察できる。上面の平坦面はそれを二分するような打面の調整が施されているように一見思われるが、周辺の剥離痕の多くは打点がそれらの剥離作業によって排除されていることから、打面が再生されたと考えることも、あるいは、その平坦面も縦長剥片剥離の作業面であると考えることもできよう。No65は円錐を大体六分割したような状態の石核で、自然面がそのまま残置されている。その縁辺から交互剥離によって横長剥片の剥離作業を行い、そのため縁辺は山形状を呈して鋭い。こぶし大の円錐を分割した石核のため、縦長剥片を剥離することはもともと無理があるが、石錐などの代表的な剥片石器が多様な形態の素材剥片から作出されていることを考え合わせてみても、手頃な大きさの礫を分割して、その分割面を打面に設定するということで比較的簡単に石核を用意することができ、更にある程度の規格のとれた横長剥片を獲得することができるという優れた技術的側面を指摘することができる。



第90図 遺構外出土石器（4）

### 打欠石錐（第90図No66）

遺構外から1点が出土したのみである。

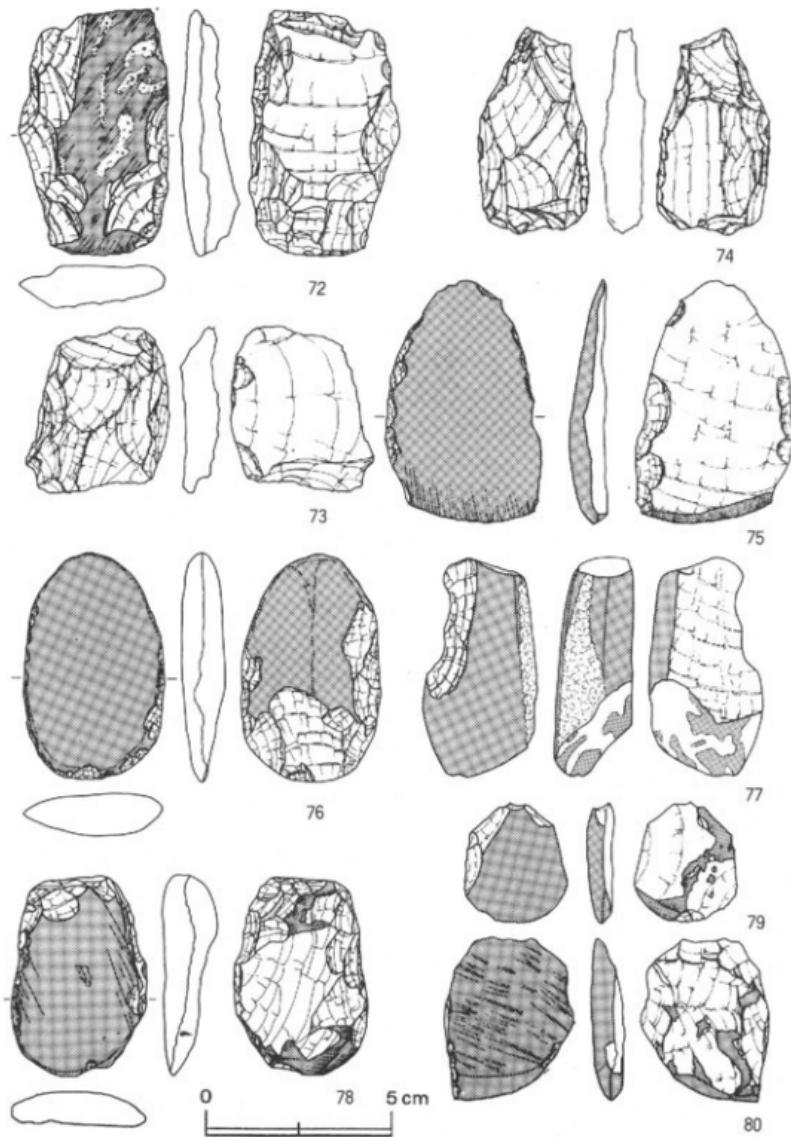
No66は砂岩製で、扁平な楕円形の礫の側縁の二か所に両面から打撃を加えて抉りを入れている。その礫の平面形に対して抉りの位置は左右非対称である。

### 磨製石斧（第90～92図No67～84）

製品・未製品・破片を合わせて遺構内から35点、遺構外から33点の合計68点が出土している。形態的には、第I類一長さが10センチ前後で3センチ前後の厚みを有するものと、第II類一長さ5センチ前後で1センチ前後の厚みの比較的扁平なものに大別できる。石質はほとんどが緑色片岩で、二形態の磨製石斧の関係を資料的に検討することを可能とする製作工程の段階別資料が出土している点は、特筆されることと考える。以下、その点に重点を置いて説明することにする。

第I類にはNo82～84や4号住（第19図No3）・5号住（第23図No3）・6号住（第28図No5）・8号住（第32図No1）出土のものが含まれる。第II類との大きな相違はその形態と製作技術に見ることができる。まず、4号住出土の磨製石斧に代表されるように、器面の研磨以前の敲打による素材の整形が施されていることが一つの大きな特徴である。中には研磨後に刃部や側縁などに敲打跡が観察されるもの～82や8号住出土のもの～もあるが、よく観察すればその区別は容易である。また、頭部付近を欠損するものや剥離痕を残置するもの、そして頭部再生のための調整加工が施されているものが比較的多く存在する。この点も第II類との大きな相違点で、実際的な使用段階での痕跡として第I類の用途や対象物を研究する上で看過できないことと考える。更に本遺跡からは僅かに13点の緑色片岩の剥片が出土しているだけで、第I類の素材や原石などは出土しておらず、遺跡内での第I類の磨製石斧製作活動は考えにくい。推定の域を出ないが製品、あるいは半製品として遺跡内に搬入されたものと考える。尚、No84は風化が著しいが通称筑波石という片磨岩製の局部磨製石斧であり、かなり異質なものである。磨製石斧の石材として筑波石の利用は、あまり報告を聞かないので類例を待ちたい。

一方で第II類はその素材の獲得や製作については、出土したその素材や未製品、製品の製作工程の分析などからある程度はっきりしたことを述べることができる。第II類の多くに研磨以前の敲打や剥離による調整加工の痕跡が残置されており、第I類とは異なり剥離による調整加工がほとんどである。形態が小形であることと関係すると考えられるが、最も重要な点は第II類の素材のほとんどが、第I類の欠損品から獲得したり、製作されたりしていることである。No69～71・75・77～80・10a号住（第36図No2）15号住（第47図No6）出土のものが、そのことを具体的に物語っている。つまり平面形がかなりいびつであったり、側面に厚みがなかったり、磨製石斧本体との剥離面の研磨がかなり部分的で刃部の再生だけが行なわれているものであったり、かつての



第91図 遺構外出土石器（5）

磨製石斧本体の一部分を残置しているものであつたりするのである。しかし、No67・68・76・11号住（第40図No1）出土のものなどは形態的には整っており、更に両面が丁寧に研磨されている。こういった第II類の中でもやや異質なものについて、一概に素材が第I類の欠損品から獲得されたとする見解に疑問が生じるかもしれない。しかし、その点を解決する資料としてNo72～74・4号住（第19図No2）出土の素材と考えられるものがある。いずれも第I類の欠損品に調整加工を施しているもので、特にNo72と4号住出土のものは形態的に長方形を呈し、両面にわたって面的調整が加えられている。つまり、第II類には第I類の欠損品をそのまま再研磨するものと、第I類の欠損品を素材に造り直してから製品に仕上げるものがあることが考えられよう。尚、No81は第I類とも第II類とも言えず、丁度その中間形態として把握できる。

以上の第I類と第II類との相違、また、第II類の二つの製作技術のあり方などは、まず、第一の条件として第I類が搬入品でかなり貴重な道具であったことが考えられる。つまり、製品に近い形で入手され、使用中に欠損品やある程度の破片が生じた場合には、それらを再加工して第II類の小形の磨製石斧を製作するという技術的体系が存在していたと考えられる。また、第I類と第II類とは同一の用途で製作されたとはやはり考えにくいくらいであろう。第I類に比較して第II類は重量も非常に軽く形態も様々であるため、「斧」としては向きであり「のみ」・「手斧」としての用途が考えられよう。この点は從来から指摘されていることである。そして第II類の製作技術の一つである素材を周到に準備する方法で製作されたと考えられる。No67・68・76・11号住出土のものなどの用途は、まさにそのようなことであったと言えよう。それ以外のもう一方の製作技術で仕上げられたものは、ある意味では磨製石斧・石材の需要と供給の不均衡から生じた社会的営約行為の表われとも言えるし、磨製石斧の実用性や対象物の多様性の問題とも換言できる。

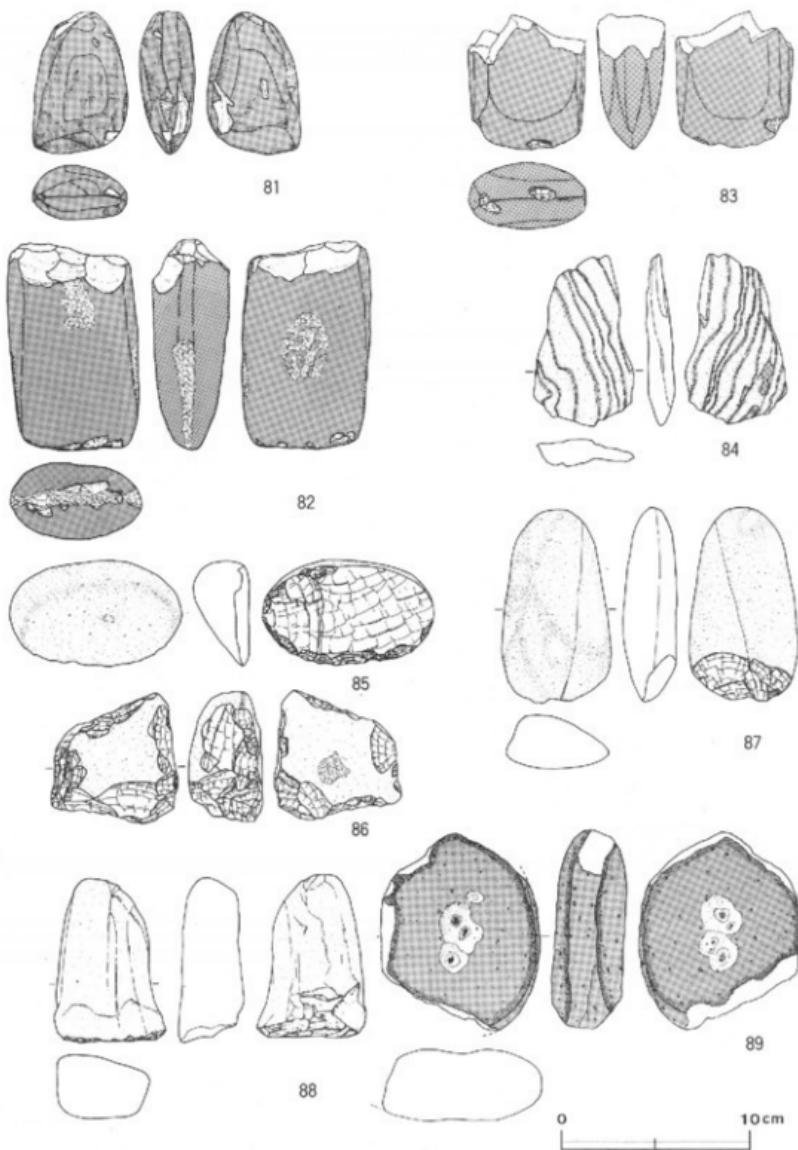
#### 礫器（第92図No85～88）

出土点数は僅か4点でいずれも遺構外出土である。

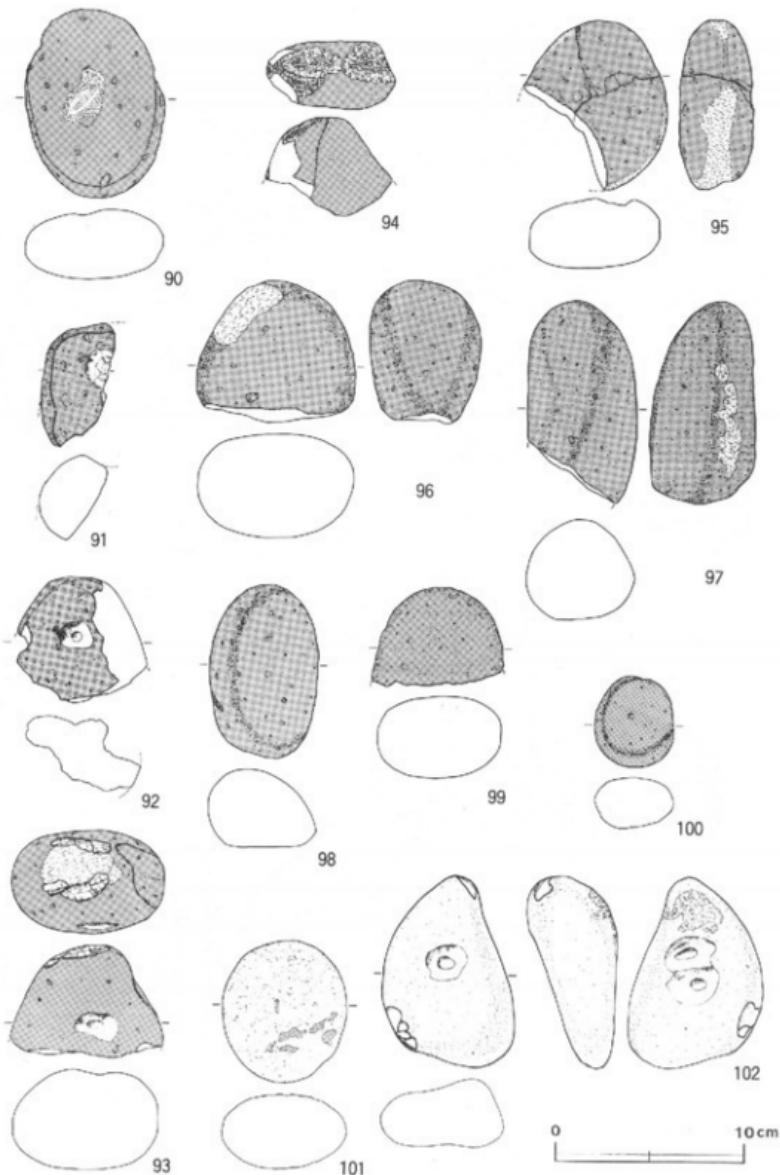
No85は搔器的な刃部を有するものでは二分割した礫片を素材にしている。86は両面に自然面を残置しながらも周辺調整が施されている。また、片面の平坦な自然面の方には微細な敲打痕状のものが観察される。性格は不明である。No87は比較的扁平な長楕円形の礫に片刃を付けたものである。88も断面形が長方形の長楕円形の礫に片刃を付けたものであるが、No87よりも刃のつけかたが鈍角である。

#### 磨石（第92・93図No89～101）

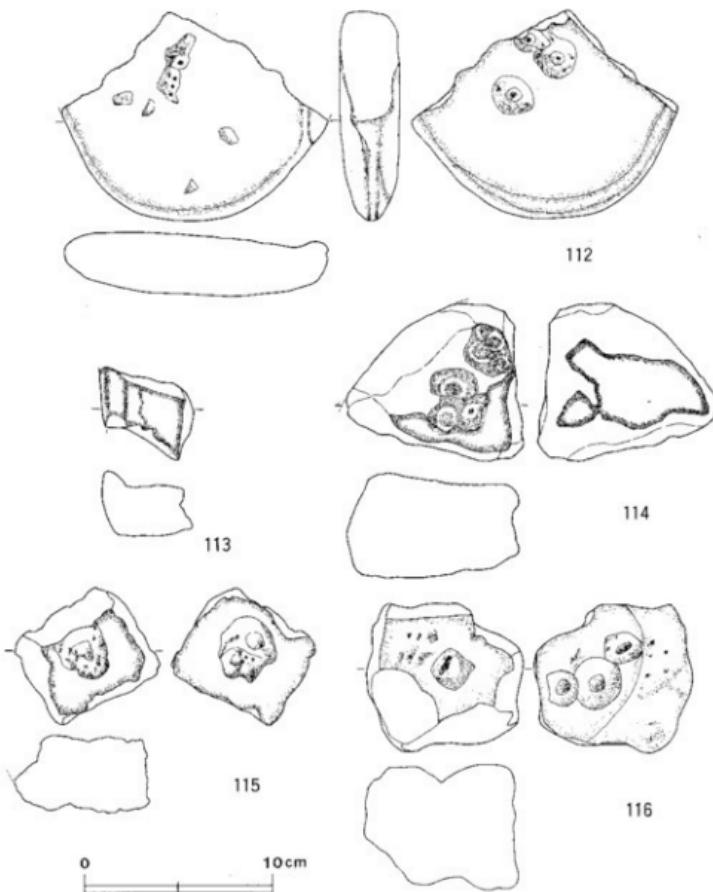
ここでは磨痕を有する凹石も含め、破片数では遺構内から4点、遺構外から22点の合計25点が出土している。その内ではっきりと凹石と判断できたものはわずかに5点のみである。



第92図 遺構外出土石器（6）



第93図 遺構出土石器（7）



第94図 遺構出土石器（9）

完形で出土したものはNo90・98・100・101・10a号住（第36図No3）出土のものを数えるだけで、大半が破損した状態で出土している。磨痕を有する凹石は、89～93で両面ないし片面に漏斗状の凹みを有する。凹みはそれほど深いものではないが、No91が中でもしっかりしている。No93はそれに加えて敲打痕も残置している。他の磨石も周縁に敲打痕を有するものが大半で、特にNo94・95はそれが著しく、その部分が浅く凹む程である。また、No101は磨痕部が極端に少なく、逆

に敲打痕がほぼ全面に残されている。全体の形態的特徴は断面形がやや偏平で長楕円形のもの（No89・90・94・95・100・101・10a号住出土のもの）と、断面形が丸みのある楕円で長楕円形のもの（No91～93・96～99）とがある。

#### 凹石（第93図No102）

磨痕を有する円石はすでに磨石に含めて説明したが、磨痕のない凹石は遺構外から、1点が出土したのみである。No102には縫の中央付近の両面に合計3個の凹みが存在し、いずれの凹みも皿状を呈する。また局部的に敲打痕が観察される。

#### 敲石（第96図No103～111）

遺構内から4点と遺構外から11点の合計15点が出土している。磨石とは異なり完形品がほとんどである。その形態から2類に分類して説明する。

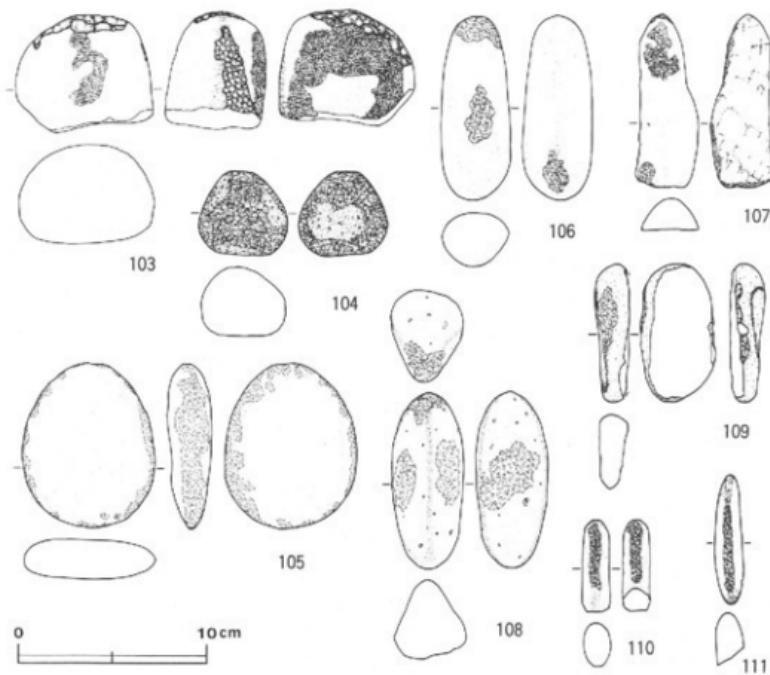
第Ⅰ類は楕円形の縫の器面や周縁、そして上下端に敲打痕を有するもので、比較的敲打痕を広範囲に残置するものでNo103～105・14号住（第44図No1）出土のものが含まれる。特にNo103・14号住出土のものの上端の敲打痕は他と比べてより大きくて深い。No104は縫面のほとんどに敲打痕を有するものである。また、No105の周縁の敲打痕は他と比較して微細で緻密であるが、それは硬砂岩という石質に関係するのであろう。

第Ⅱ類は棒状の縫の側縁や上下端に敲打痕があるもので、No106～111や6号住（第28図No4）・9号住（第96図No5）・10a号住（第36図No4）出土のものが含まれる。第Ⅰ類とは異なり敲打痕は部分的で器面の広範囲に展開するものはない。また、敲打痕は側縁では比較的微細であるが上端のそれは著しく一つ一つの敲打をはっきりと観察できる場合がある。つまりNo106・108・6号住・10a号住出土のものなどが相当する。

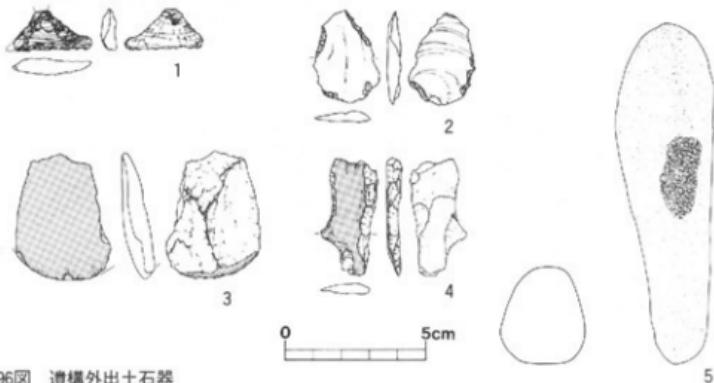
#### 石皿（第94図No112～116）

遺構内から3点、遺構外から5点の合計8点が出土している。ほとんどが破損した状態で出土している。

破損品が大半であるため推定の域を出ないが、大別すると縁とりの施されたもの（No112・113）とそうでないものに分類され、前者の共通として磨面が平滑で断面に厚みのない点が指摘できる。一方、後者のものはNo114・5号住（第23図No4）・8号住（第32図No3）・10a号住（第36図No5）出土のものに代表されるように磨面がなだらかに凹むもので、特にNo114・8号住・10a号住出土のものは花崗岩製で非常に重量感があり、磨面は平滑であるがほとんど凹みを形成していない。また、両者に共通する点として表面、裏面、両面の相違はあるものの複数の漏斗状の凹みを有することである。



第95図 遺構外出土石器（9）



第96図 遺構外出土石器

### 3 弥生時代

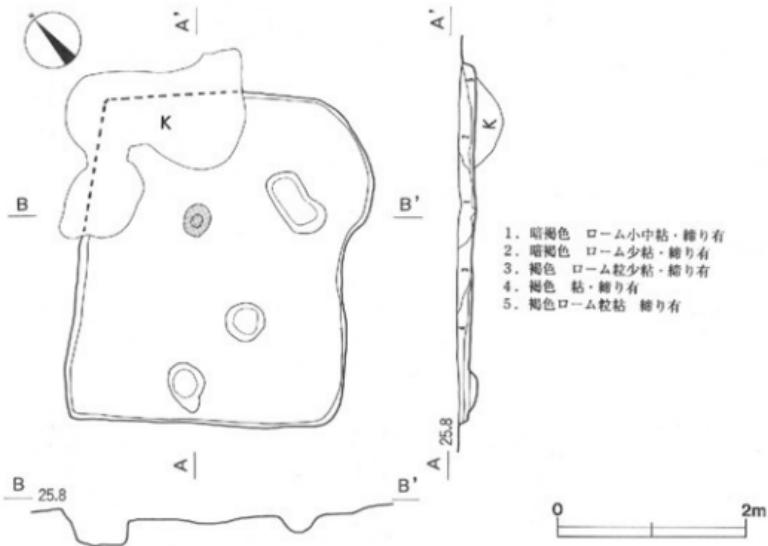
第9号住居址（第97図）

本住居址はH-40区、I-40区を中心に確認され、2.5m北東に12号住（縄文）が位置する。北コーナーは搅乱を受けている。平面は方形を呈するが、東コーナーは梢円状に張り出している。規模は3.6×2.9m、深さ0.2mを測り、主軸方位はN-37°-Eである。床面は平坦で、軟質である。壁は外傾して立ち上がる。pitは不規則に3ヶ所検出された。P1は梢円形で0.75×0.35m、深さ0.2m、P2、P3は円形で径0.4m、深さ0.1mを測る。壁溝は確認できなかった。

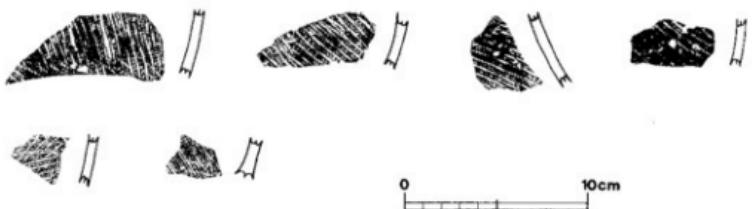
覆土は、ローム粒を少量含む暗褐色、褐色土である。

遺物は縄文前期前半から中期初頭にかけての土器片と、弥生後期の土器片が出土している。弥生土器はすべて胴部片で、附加条一種2条の原体が施文されている。（第98図）

本住居の時期について、出土遺物は縄文前期前半の土器片が圧倒的に多いが、弥生土器が少量ではあるが出土していることから、弥生時代後期の住居とした。



第97図 第9号住居址



第98図 第9号住居址出土遺物

#### 4 古墳時代

##### 第1号方形周溝墓（第99図）

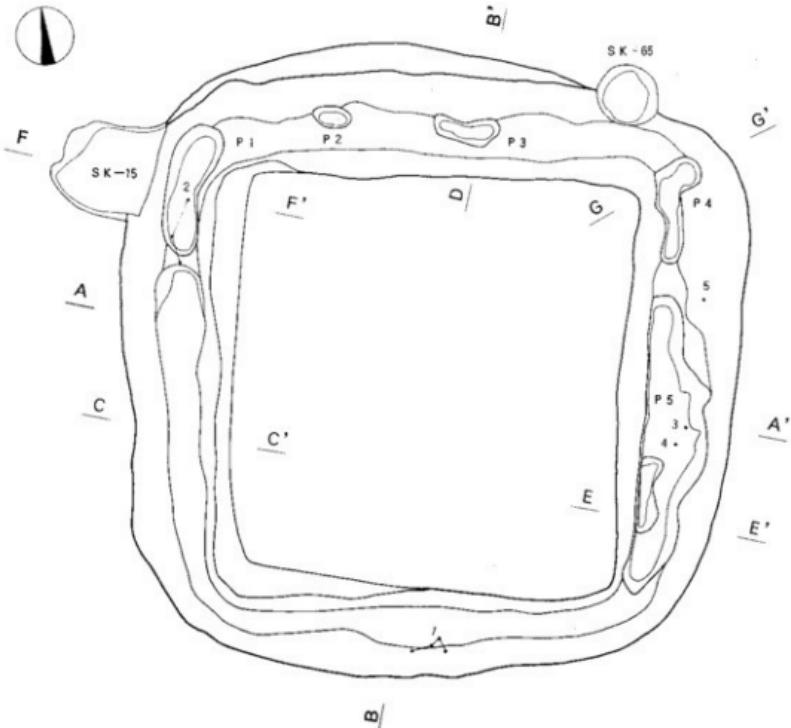
本周溝墓は調査区の南端、K-42~45区、L-41~46区、M-41~46区、N-42~45区、O-42~45区で確認された。立地は台地の縁辺部で、南側は斜面となり、東側の谷には、川尻川が流れている。周辺に同時期の遺構は存在しない。

形態は隅丸でやや膨らむ方形を呈する。規模は方台部（周溝含む）、南北11m（16.8m）、東西10.1m（16.5m）を測る。主軸方位はN-12°-Eである。墳丘の盛土は確認されなかった。表土の下は縄文の包含層が堆積し、その下はロームとなる。

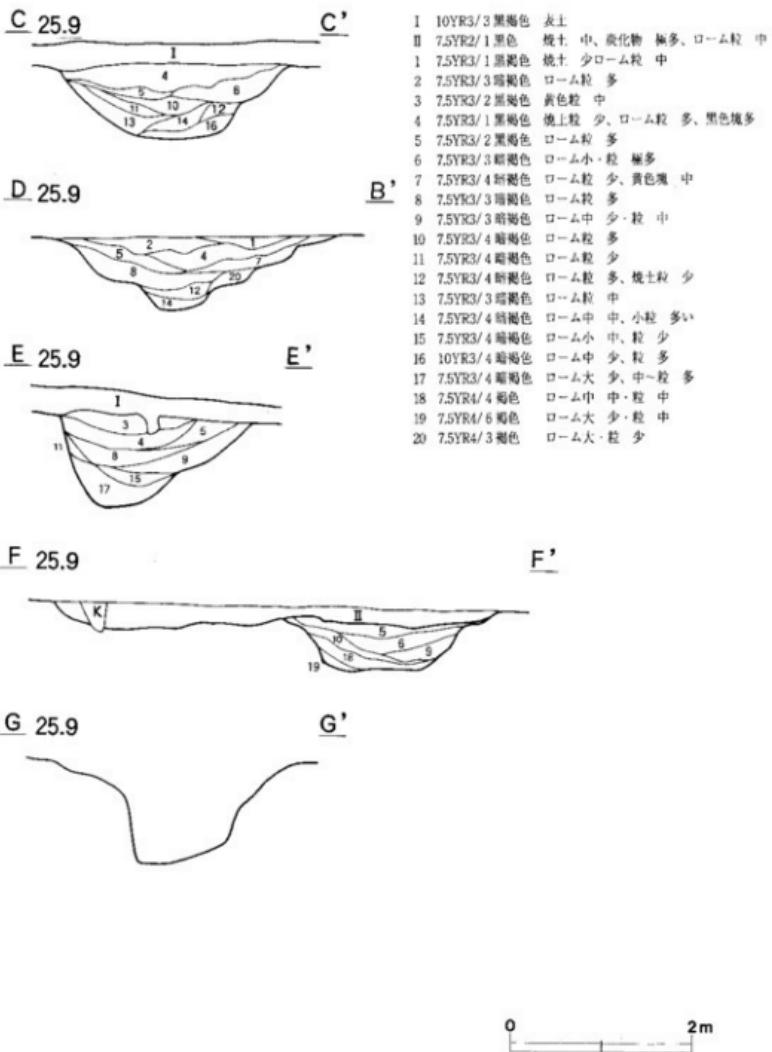
周溝は全周する。幅は、1.7~3.3mを測る。内側は直線的であるが、外側は曲線的なラインとなる。コーナーの外壁は丸味を帯びているが、内側はほぼ直角に屈折している。壁は、外側に比べ内側は急に立ち上がっている。深さは確認面より0.7m~1.1mである。周溝の底面は一定ではなく段差がみられる。比高差は5~20cm程度である。

また北側と東側、北西コーナーには土坑状の掘り込み（P 1~P 6）が見られる。P 1は北西コーナーに位置し、長楕円形を呈する。規模は長軸3.5m、短軸1.1m、周溝床面からの深さを測る。P 2・3は北側に位置する。P 2は梢円形を呈し、規模は1×0.6m、深さ0.2mを測る。P 3は不整梢円形を呈し、規模は1.3×0.7m、深さ0.1mを測る。P 4は北東コーナーに位置し、重複している。不整長方形を呈し、規模は2.6×0.7m、深さ0.2mを測る。P 5は東側にあり、規模8×1.7m、深さ0.2mと大きく掘り込まれている。その中に、2×0.6m、深さ0.05mの浅い掘り込みが存在する。覆土はロームブロックやローム粒を含む暗褐色土である。上面から掘り込んだ跡が確認出来ないことから、周溝墓構築時に掘られたと思われる。

周溝の覆土は、上層にローム粒を多量に含む黒色、黒褐色土、下層にロームブロックやローム粒を含む暗褐色土、褐色土が堆積している。



第99図 第1号方形周溝基



第100図 第1号方形周溝墓土層断面

団版番号	種類	法量	器形の特徴	手法の特徴	器質	備考
100-1	壺 土師器	A 18.4 C (21.7)	胴部は球形を呈し、頸部はくの字状に屈曲する	外一刷毛目 内一口縁は刷毛目	にぶい黄 橙、にぶい 長石、石英 普通	80% 周溝底面 一部吸炭
100-2	壺 土師器	A [18.0] C (16.0)	胴部は球形を呈し、頸部はくの字状に屈曲する。口縁は外傾する。	外一刷毛目 内一刷毛目	にぶい黄 橙、黒色 長石、石英 普通	30% 周溝 一部吸炭
100-3	壺 土師器	A 11.7 C 13.4	胴部は球形を呈し、頸部はくの字状に屈曲する。口縁は外傾する。底部はややあげ底。	外一ミガキ 外面と内面の口縁は赤彩	赤色、にぶい 橙、石英、 長石、小石 良好	80% 周溝覆土
100-4	壺 土師器	A 15.8 B 4 C 22.4	胴部は球状に大きく張り、口縁は外傾する。底部はやや上げ底。胴部を一部欠くが故意の穿孔かは不明。	外一口縁は刷毛目後、まばらにミガキ。胴部上位は刷毛目、下位は横位のミガキ。外面と内面の口縁は赤彩	にぶい赤褐色、 長石、小石、 良好	90% 周溝覆土
100-5	高杯 土師器	A 16.7 B 10.0 C 12.7	様部はややふくらみ、脚部は垂直。杯部は下端にわずかに後を持ち口縁は外傾。	外一裾部はミガキ 内一裾部は指頭ナデ、ヨコナデ	にぶい褐色 長石、石英 良好	60% 周溝覆土上層
100-6	壺 土師器	B 6.2 C (1.8)		外一刷毛目 内一ナデ	にぶい赤褐色、 長石、 石英、普通	周溝

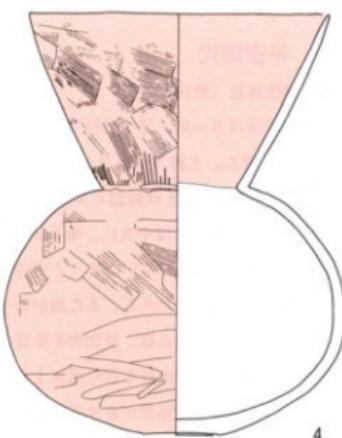
遺物は、南側周溝内より壺No1、北西コーナーより壺No2、東側周溝内よりNo3・No4・No5が出土した。No1は底面からで、胴部下位から底部を欠く。No2～No4は覆土中層から、No5は上層からの出土である。いずれも当周溝墓に伴う遺物と考えられる。No3・No4は赤彩されており、ほぼ同じ位置から出土している。

主体部は検出されなかった。周溝内の土坑からも主体部らしい痕跡は認められないことから、当周溝墓は当時、若干のマウンドを有し、その中に主体部が構築された可能性が強い。

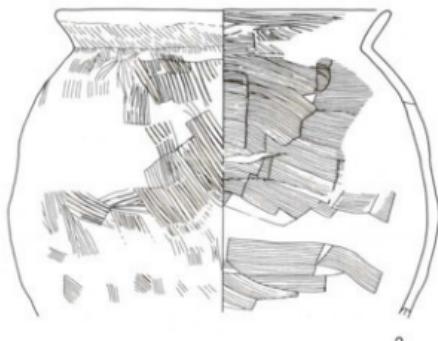
当周溝墓の構築時期については、出土遺物から判断すると4世紀後半と思われる。



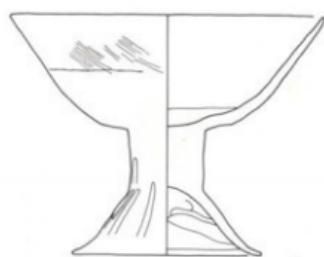
1



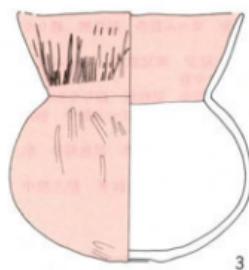
4



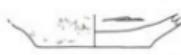
2



5



3



6



第101図 第1号方形周溝墓出土遺物

4 平安時代

## 第2号住居地（第102回）

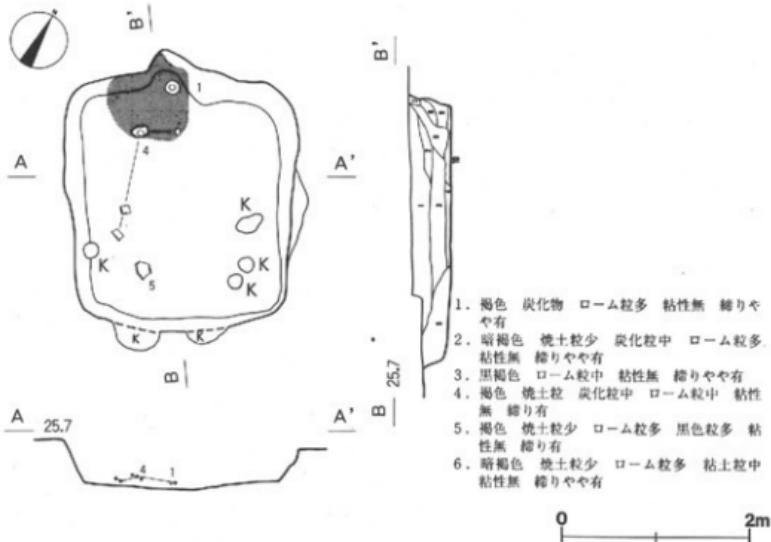
本住居址はS-35、T-35区を中心に確認された。平面は方形を呈し、規模は2.5×3.1m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN-40°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はやや硬く平坦である。壁溝やpitは確認できなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に、壁を掘り込んで構築されている。規模は全長0.6m、焚口幅0.6mを測る。袖部は残存しない。カマド周辺に砂質の白色粘土が堆積しており、天井部等は白色粘土で構築していたと思われる。また袖があったことも考えられる。

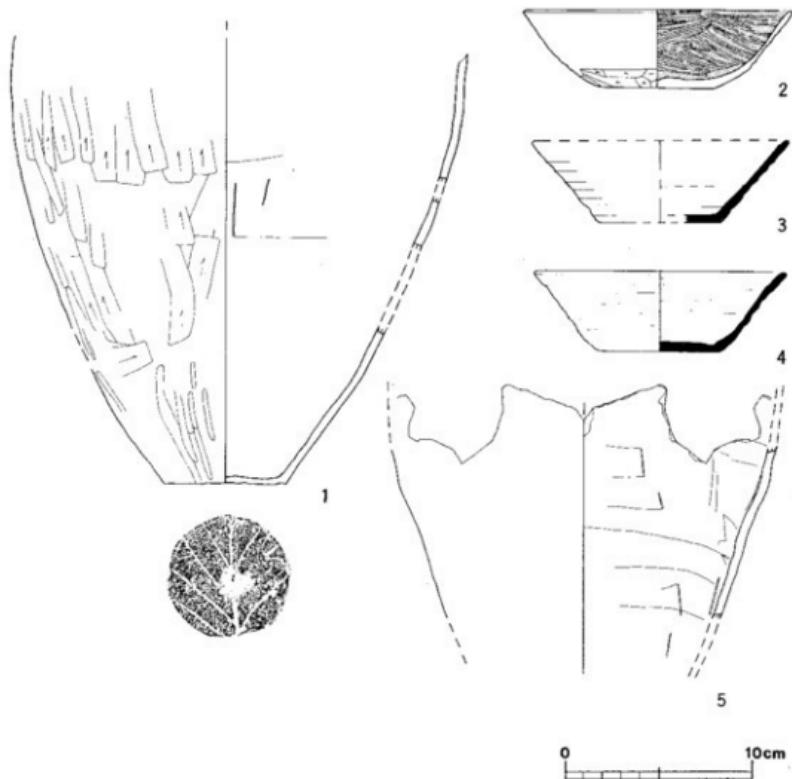
覆土は上層にローム粒、炭化物を多量に含む褐色土、中層にローム粒を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒や焼土粒を含む褐色土が堆積している。

遺物は土師器や須恵器がカマド周辺を中心に出土した。No.1はカマド内より出土した土師器の杯である。内面には黒色処理が施されており、外面も同様の色調を呈している。No.5は器面（外）に砂が付着しており、カマドの補強の可能性も考えられる。この他須恵器の杯や土師器の甕が出土している。また、覆土中に流れ込んだ遺物として縄文時代の石鏃（第87図No.12）がある。

本住居址の時期について、遺物などから判断すると9世紀後半と思われる。



第102図 第2号住居址



第103図 第2号住居址出土遺物

図版番号	種類	法量	器形の特徴	手法の特徴	器質	備考
103-1	甕 土師器	B 6.5 C (26.0)	口縁部欠損。底部 は半底。	外一胴部中位はヘラ削 り。下位はヘラ削り後ミ ガキ。内一ヘラナデ。 底部一本葉痕。	にぶい褐色。石英、 長石。 良好。	床面に 吸炭
103-2	甕 土師器	C (12.4) 20.6	底部、口縁部欠損。	内一ヘラナデ、指頭によ るナデ、輪積痕を残す。	にぶい橙、 黄褐色。石 英、長石少。 良好。	外面に砂付着

103-3	杯 土師器	A 14.2 B 6.0 C 4.1	平底。体部は外傾して立ち上がる。	外-ヨコナデ、体部下端ヘラ削り。 内-ヨコナデ後ミガキ、黒色処理。 底部一方向ヘラ削り。	黒色、底部は浅黄緑、石英、長石雲母多。不良。	90% カマド
103-4	杯 須恵器	A 11.3 B 6.2 C 4.3	平底。体部は外傾する。	外-ヨコナデ、体部下端ヘラ削り。 内-ヨコナデ。 底部一回転ヘラ切後一方向ヘラ削り。	灰褐色。 石英、長石・雲母少、不良	80%
103-5	杯 須恵器	A [13.6] B [6.5] C 4.3	平底。体部は外傾して立ち上がる。	外-ヨコナデ。 内-ヨコナデ。	にぶい赤褐色 石英、長石多、雲母、良好	25% 覆土中。

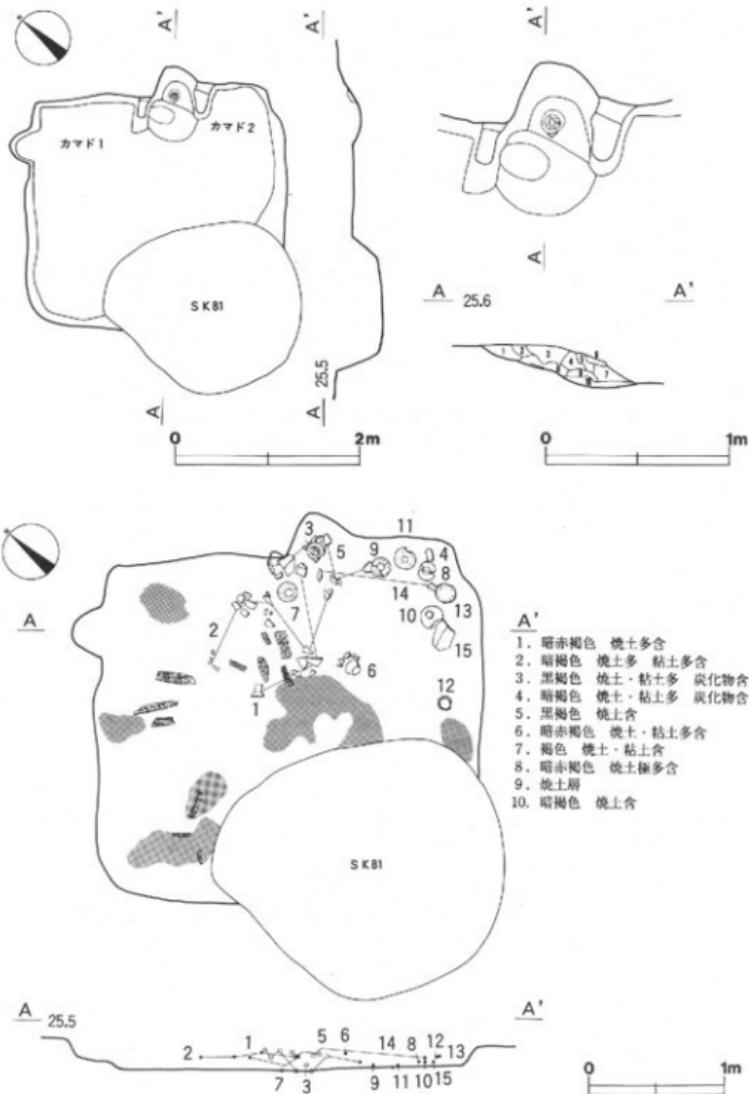
#### 第7号住居址（第104図）

本住居址は2F-17区を中心に確認され、北5mに1号住が存在する。また81号土坑に南コーナーを切られている。本住居は後述する16号住居址を人為的に埋め戻して構築している。平面は方形を呈し、規模は2.6×2.8m、深さ0.2m、主軸方位はN-50°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。埋め戻された土の上に構築されているため、硬さはないが、覆土とは容易に区別できる。壁溝やpitは確認できなかった。床面には炭化材がみられ、焼土が堆積している。

カマドは2ヶ所で確認された。古→新の順にカマド1、カマド2とする。カマド1は北西壁の北寄りに壁を掘り込んで構築しており、規模は全長0.3m、幅0.3mを測る。覆土はローム粒を含む。カマド2は北東壁のはば中央に壁を掘り込んで構築している。袖は全長0.4mで砂質の白色粘土を用いており、焚口は床面を0.05m掘り込んでいる。規模は全長0.8m、焚口幅0.05m、煙道の立上りは約20°である。煙道部には土器片の上に甕の底部が倒立して置かれ、また、火を受けていることから支脚の役割を果たしていたと思われる。覆土は、焼土や砂質の粘土を多量に含有する褐色土である。

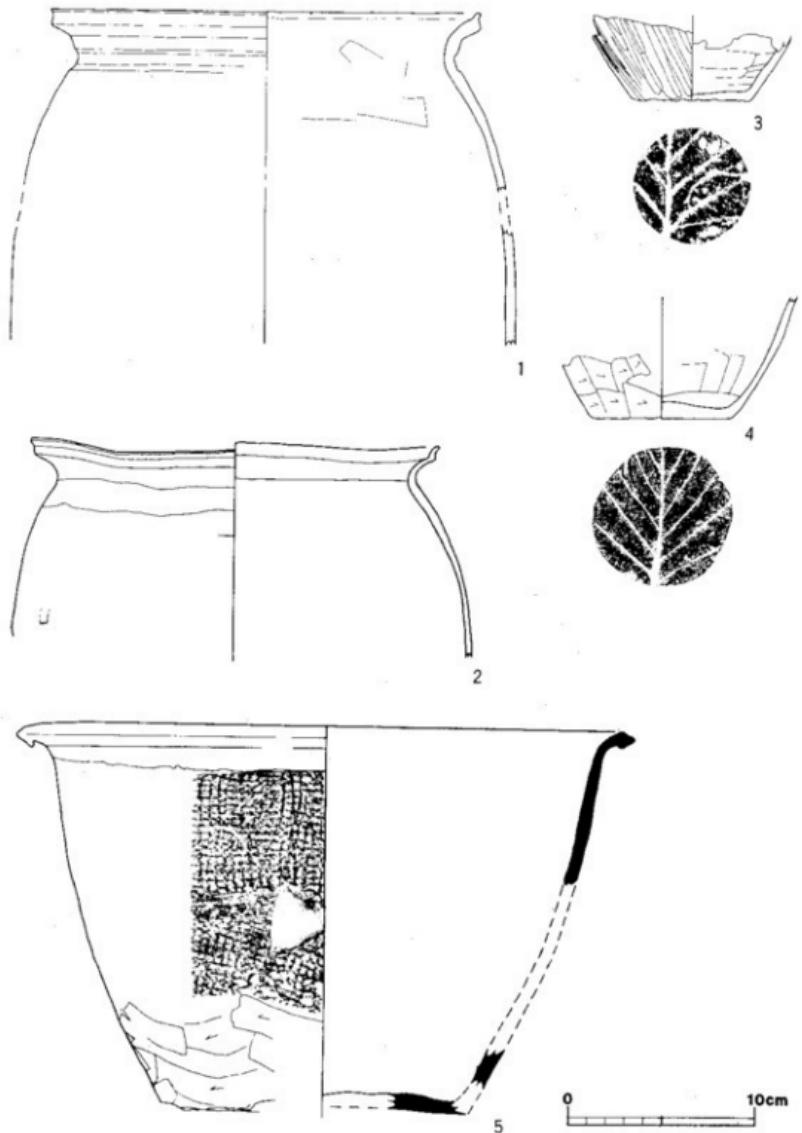
遺物はカマド2内や東コーナー付近から土師器や須恵器が多量に出土した。東コーナーからは杯（No.8）や土師器の高台付皿（No.10）、須恵器の大甕の胴部（No.15）、カマド内からは須恵器の杯や甕が出土している。No.12は床面から出土した須恵器の高台付杯である。体部は破損しており、内面には漆が付着し、底部外面には墨痕がみられる。硯として転用されたと思われる。（No.13）は高台付皿で、体部は破損し、底部には、墨痕や擦痕があり、硯として転用されている。No.8、No.11は陽書土器でNo.8は「□農」、No.11は黒色処理された杯で、「円」または「山」と書かれている。No.8・No.9・No.13は土師器の色調を呈するが、胎土や製作技法、器形が須恵器と同様であるため須恵器とした。

本住居は炭化材や焼土の堆積などから焼失した可能性が考えられる。時期については、遺物等から判断すると9世紀後半と思われる。

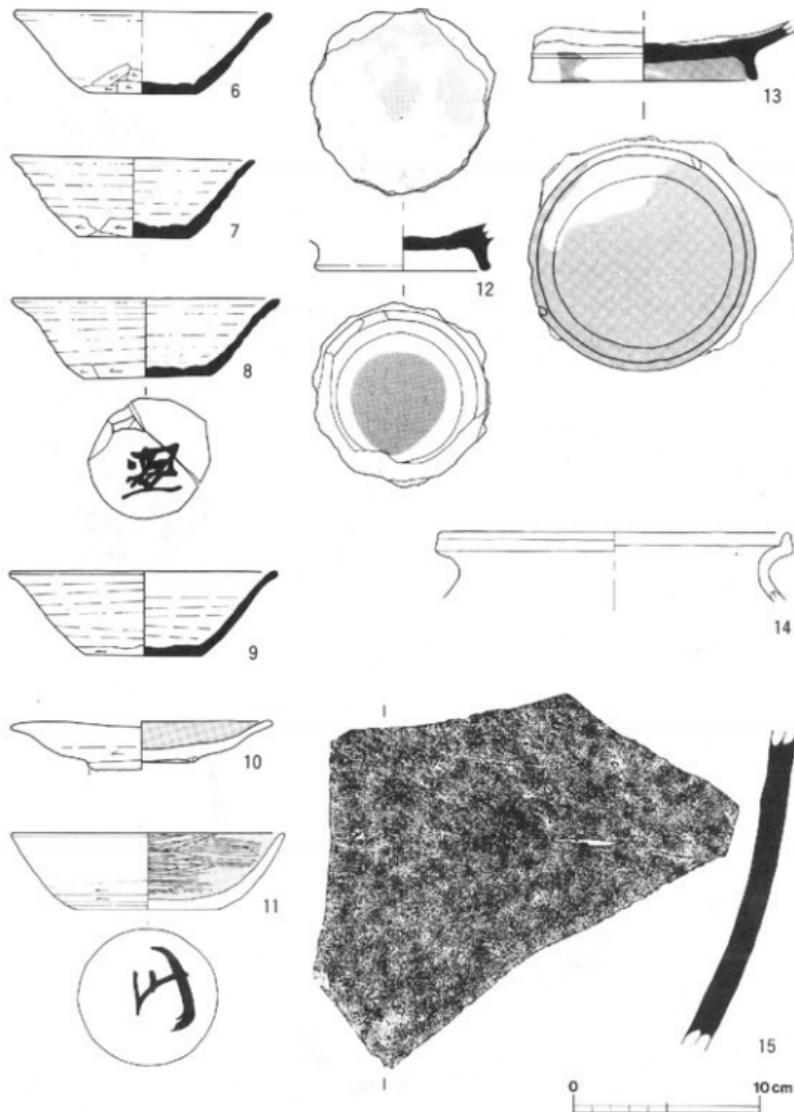


第104図 第7号住居址

図版番号	種類	法量	器形の特徴	手法の特徴	器質	備考
105-1	壺 土師器	A 23.0 C (19.0)	口縁は上方につまみ上げる。	頸部はヘラ状工具によるナデ。内へラナデ。	にぶい赤褐色。長石、石英多、雲母。普通。	
105-2	壺 土師器	A 21.8 C (14.8)	口唇部はつまみあげ外反させる。		明褐色。長石、石英。普通。	
105-3	壺 土師器	B 5.8 C (4.5)		外一ミガキ 内一指頭によるナデ。 底部一木葉痕。	橙。長石、石英多、雲母。良好。	カマド。 支脚に転用。
105-4	壺 土師器	B 7.1 C (6.6)		外へラ削り。 内へラナデ。 底部一木葉痕。	褐色、銹い赤褐色。長石、石英多。良好。	カマド。
105-5	鉢 須恵器	A 36.0 B 17.8 C 22.7	体部は外傾して立ち上がり口縁部は外反。口唇部は上方に突出。	外一格子状のタタキ目。下端はへラ削り。内へラ、指頭によるナデ。	灰褐色。長石、石英、雲母多。普通。	70%
106-6	杯 須恵器	A [13.6] B [5.8] C 4.4	半底では体部は外傾。	外、内一ヨコナデ。 体部下端は弱いへラ削り。 底部は回転へラ切後一方へラ削り。	にぶい黄橙 にぶい橙、長石、石英、雲母。良好。	40% 軟質。
106-7	杯 須恵器	A 12.7 B 6.0 C 4.3	平底で体部は外傾。	外、内一ヨコナデ。 体部下端はへラ削り。底部は回転へラ切後一方へラ削り。	褐色。長石多、石英、雲母。良好。	完形。
106-8	杯 須恵器	A 13.9 B 6.7 C 4.2	平底で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁はやや外反する。	外、内一ヨコナデ。 体部下端はへラ削り。 底部は回転へラ切後一方へラ削り。底部に「口豐」の墨書きあり。	にぶい橙、黒褐色。雲母多、長石、石英。	完形。
106-9	杯 須恵器	A 14.5 B 6.2 C 4.5	半底で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁はやや外反する。	外、内一ヨコナデ。 体部下端はへラ削り。 底部は回転へラ切後へラ削り(難)	暗赤褐色、黒褐色。長石、石英、雲母。	口縁一部欠。カマド。
106-10	高台付壺 土師器	A 13.0 B 5.2 C (2.6)	口縁部はやや外反する。高台は貼り付。	体部下端は回転へラ削り。内へラミガキ、黒色処理。底部は回転へラ切後回転へラ削り底部に「口」か「山」の墨書き。	にぶい褐色、黒色。長石、石英少、雲母少。良好。	高台部一部欠
106-11	杯 土師器	A 14.4 B 7.5 C 4.1	平底で体部は外傾。	体部下端は回転へラ削り。内一ミガキ、黒色処理。底部は回転へラ切後回転へラ削り底部に「口」か「山」の墨書き。	橙、黒色。長石、石英少、良好。	95%



第105図 第7号住居址出土遺物（1）



第106図 第7号住居址出土遺物（2）

106-12	高台付杯 (転用硯) 須恵器	C ( 2.6) D 8.8	平底で高台が付く。	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け。内面には漆が付着。底部は硯として利用。墨痕あり。	灰色。長石、石英多。	
106-13	高台付皿 (転用硯) 須恵器	C 3.2 D 12.2	平底で高台が付く。	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け。底部は硯として利用。擦痕、墨痕あり。	にぶい黄 橙。黄褐色。 雲母多。石 英、長石。 良好。	
106-14	甕 土師器	A [18.6] C ( 3.6)	口縁は上方につまみあげる		石英多、長 石、雲母。	
106-15	甕 須恵器			外一弱いタタキ目	黒色、灰色。 石英、長石、 黒粒多。良 好。	

#### 第16号住居址（第107図）

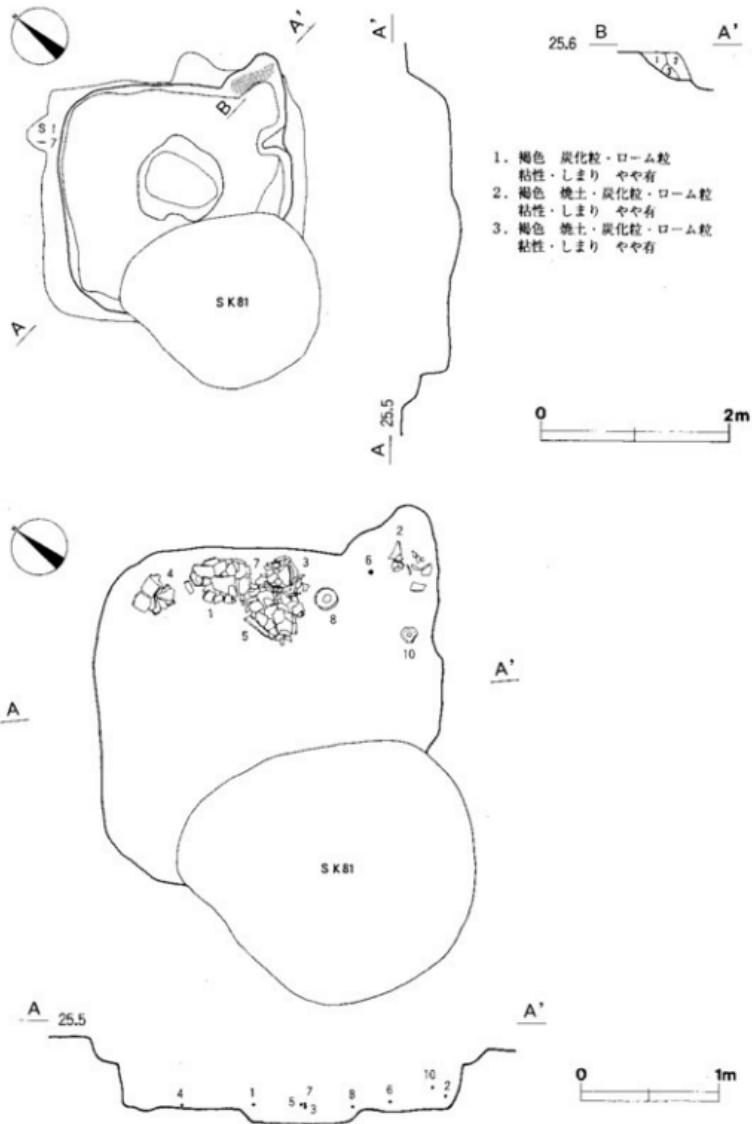
本住居址は2G-17区を中心に確認され、北5mに1号住が存在する。南コーナーは81号土坑に切られている。また本住居の廃絶後、直上に7号住がつくられた。平面は方形を呈し、規模は2.5×2.5m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN-50°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅い。Pitや壁溝は確認できなかつたが、住居中央に不整形の浅い掘り込みが存在する。規模は0.9×0.9m、断面は皿状で深さ0.1mを測る。

覆土は、多量のローム粒や焼土・炭化物を含む褐色土で人為的に埋めている。

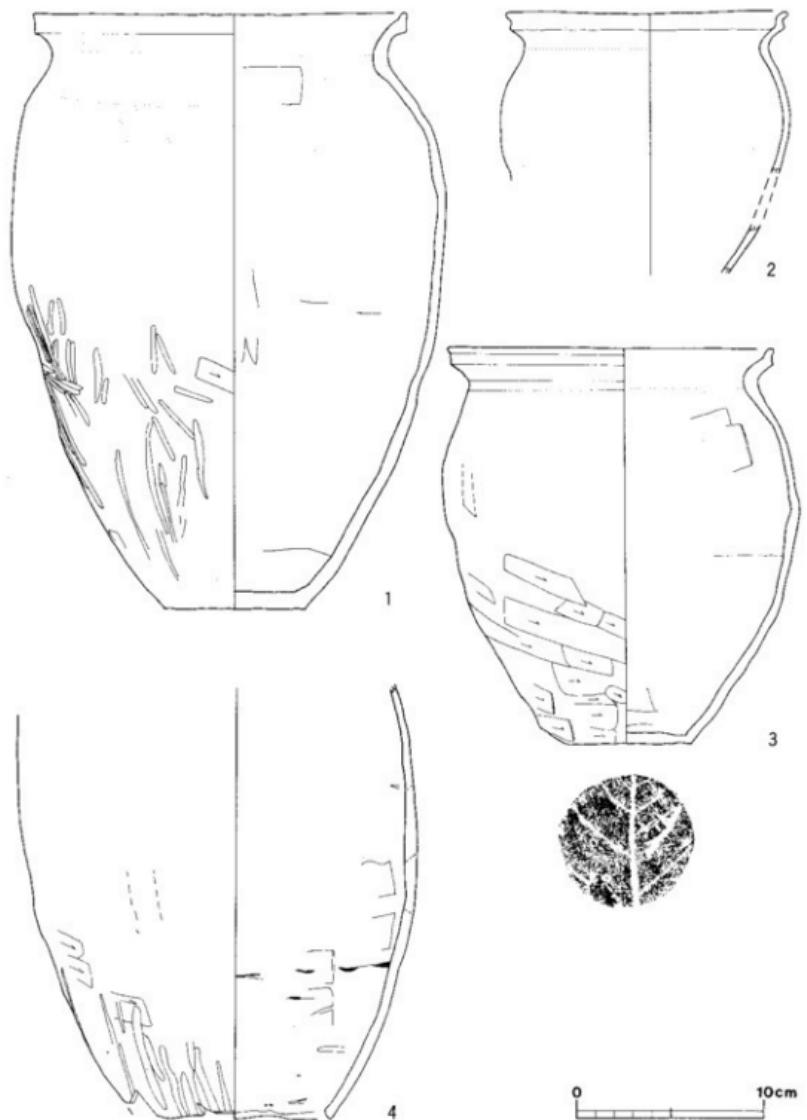
カマドは東コーナーに構築されている。袖は右側のみ存在し、ロームを削り出している。規模は全長0.7m、焚口幅0.4m、煙道部は約35°で立ち上がる。主軸方位はN-62°-Eである。覆土は、焼土粒やローム粒を含む褐色土である。

遺物は北東壁の床直上を中心に出土した。No1、No3は土師器の甕で、壁際の床直上から、押しつぶされた状態で出土した。短時間で破壊された状況を呈しており、埋め戻された時につぶされたと思われる。No8は土師器の色調を呈する須恵器の杯で、底部に「案農」の墨書きが見られる。No4は土師器の甕で、器形が甕に似ており、また孔の縁が打ち欠かれた様相であることから、甕からの転用が考えられる。この他須恵器の蓋No10、No11などが出土している。

本住居は廃絶後に埋め戻され、その上をわずかに拡張して新しい住居（7号住）を構築している。時期については遺物等から9世紀後半と思われ、重複関係から7号住よりは古く位置付けられるが、遺物についての時間差はほとんどない。

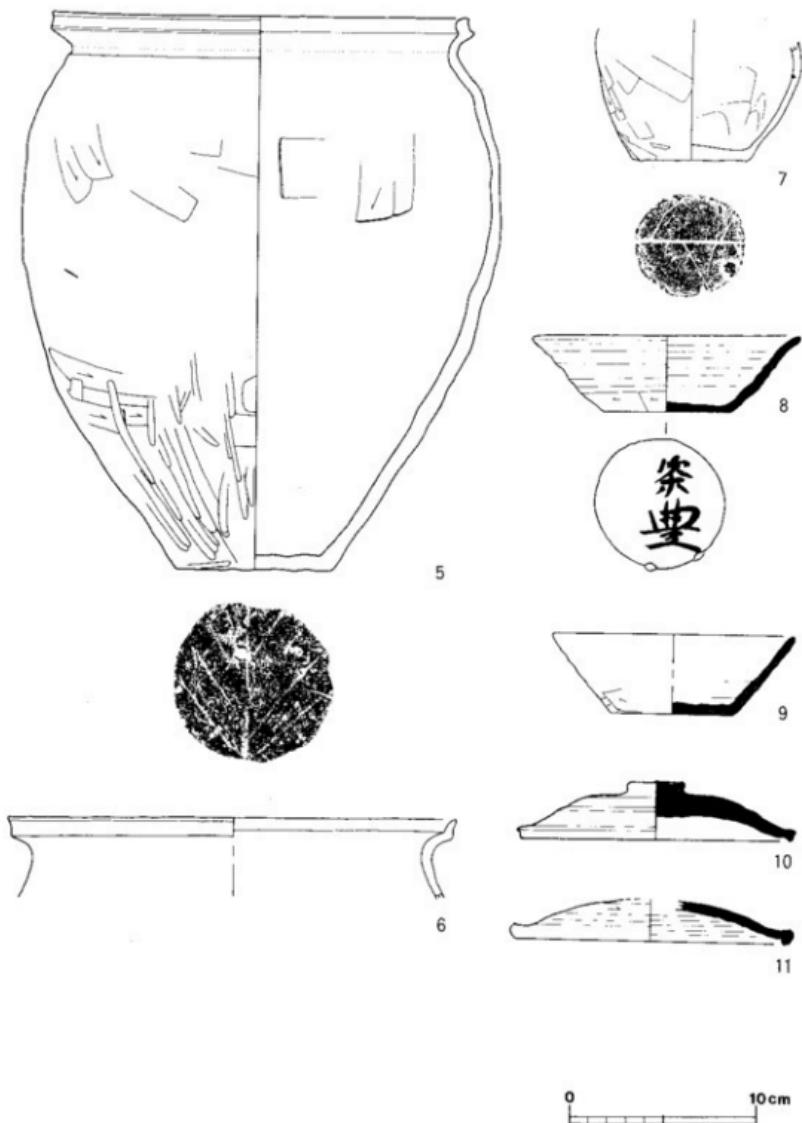


第107図 第16号住居址



第108図 第16号住居址出土遺物（1）

図版番号	種類	法量	器形の特徴	手法の特徴	器質	備考
108-1	甕 土師器	A 21.8 C 8.2 C 29.8	胴部上位に最大径を持つ。口唇部を上方につまみあげる。	胴部下部はヘラ削り後ヘラミガキ。胴部上部はヘラナデ。底部は木葉痕。	にぶい黄褐色。石英、長石、雲母。良好。	90% 床直。
108-2	甕 土師器	A 14.5 C 14.0	口唇部はつまみあげ外反させる。	胴部下部は横、斜位のヘラ削り。	暗赤褐色。石英、長石、雲母。良好。	40% 床直。
108-3	甕 土師器	A 17.2 B 6.6 C 21.3	口唇部を上方につまみあげる。	胴部下部は斜位のヘラ削り。底部は木葉痕。	明赤褐色、橙。石英、長石極多。良好。	90% 床直。
108-4	瓶 土師器	B 10.4 C 23.6	甕からの転用的可能性あり。	胴部下部は横位のヘラ削り後ミガキ。	にぶい黄褐色。小石多、雲母少。普通。	60% 床直。
109-5	甕 土師器	A 19.7 B 7.5 C 31.8	胴部は長呈し、口唇部は上方につまみあげている。	胴部下部はミガキ。底部は木葉痕。	にぶい橙、赤褐色。石英、長石極多。良好。	70% 床直。
109-6	甕 土師器	A 24.0 C 4.2	口唇部は上方につまみあげている。		にぶい黄褐色。明赤褐色。石英多、長石。良好。	70%
109-7	甕 土師器	B 6.1 C 7.0		外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。底部は木葉痕。	にぶい赤褐色。石英多、小石少。良好。	
109-8	杯 須恵器	A 14.0 B 6.8 C 4.1	平底で体部は外傾する。口縁部はやや反る。	内、外ヨコナデ。体部下端へラ削り。底部一方向のヘラ削り。底部は「案 <sup>シ</sup> 皿」の墨書き。	にぶい赤褐色。石英、長石、雲母。良好。	光形。
109-9	杯 須恵器	A (12.6) B 6.4 C 4.3	平底で体部は外傾する。	内、外ヨコナデ。体部下端へラ削り。底部は回転へラ切後へラ削り。	黄灰色。石英、小石多、雲母。良好。	30%
109-10	蓋 須恵器	C 3.2 E 14.4	つまみは扁平。	大井部へラ削り。	灰色。長石極多、石英。良好。	70%
109-11	蓋 須恵器	C ( 2.2) E [14.4]	口縁は折り返している。	天井部上位はヘラ削り。天井部下位はナデ。	灰色。長石、石英。良好。	30%



第109図 第16号住居址出土遺物（2）

## 6 中世以降・時期不明遺構

### 第1号住居址（第111図）

本住居址は2F-16区を中心に確認され、北西は14号住（縄文）と重複している。南5mには7号、16号（共に平安）が存在する。平面は方形を呈し、規模は6.4×6.0m、深さ0.6mを測る。長軸方向はN-35°-Eである。壁は外傾し、床面は平坦で軟弱である。pitは4ヶ所検出され、深さは約0.45m前後である。配置から柱穴と思われる。炉址やカマド、壁溝は確認されなかった。

覆土は上層がローム粒を多量に含む黒色土、下層はローム小を含む褐色土である。

遺物は覆土中から縄文土器片が数点出土

しただけに、本住居に伴うと思われる遺物の出土はない。

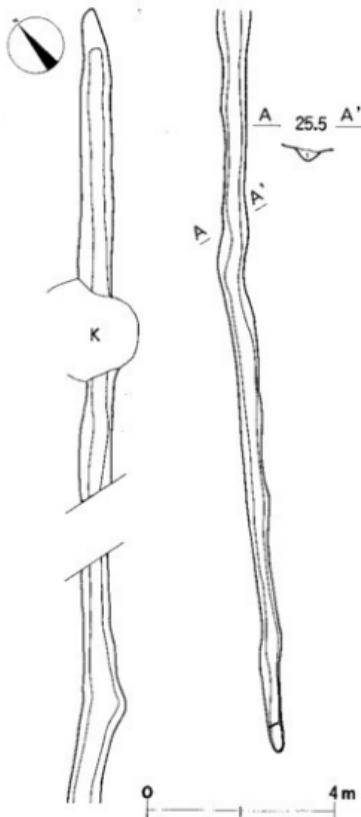
本住居址は生活の場としての痕跡が認められない建物址で、時期については、形態や覆土から推測すると古墳時代以降と思われる。

### 第1号溝（第110図）

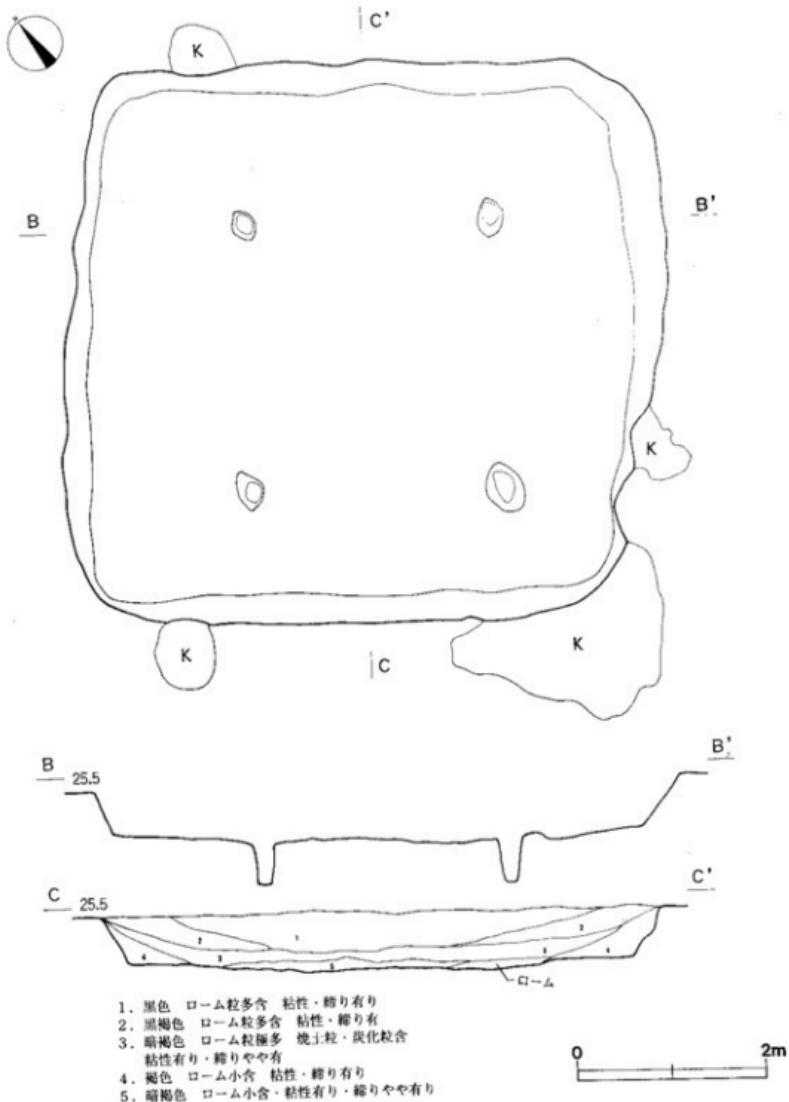
本溝は調査区の東端の縁辺部に位置し、南北に延びる。規模は幅0.3~0.9mを測り、とくに0.4~0.7mのものが多い。全長は39m、深さは0.2mを測る。

遺物は縄文土器が出土したが、本溝に伴うか同一時期と思われる遺物の出土はない。

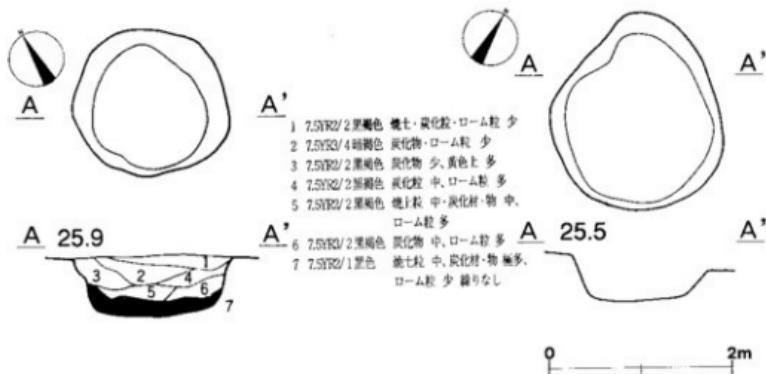
本溝の時期について、覆土から推測すると中世以降と思われる。



第110図 第1号溝



第111図 第1号住居址



第112図 第65・81号土坑

#### 第15号土坑（第99図）

本土坑はK-42区に位置し、第1号方形周溝墓西壁の一部を切っている。平面は長楕円形を呈すると思われる。規模は(4.8)×1.2m、深さ0.3mを測る。覆土上は、炭化物を多量に含む黒色土である。時期について、重複関係や覆土などから判断すると、古墳時代前期以降と考えられる。

#### 第65号土坑（第112図）

本土坑はN-42区、O-42区に位置し、第1号方形周溝墓北壁の一部を切っている。平面は不整円形を呈する。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は径約1.6m、深さ0.6mを測る。覆土は上層に炭化物、焼土、ローム粒を含む黒褐色土、下層に焼土や炭化物を多量に含む縞まりの無い黒褐色土である。出土遺物は縄文早期の土器片2点のみで、本土坑に伴う遺物は無い。時期について、重複関係や覆土などから判断すると、古代以降と考えられる。

#### 第81号土坑（第112図）

本土坑は2G-18区に位置し、第7・16号住居址の南コーナーを切っている。平面は不整円形を呈する。床面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。規模は2.1×1.9m、深さ0.5mを測る。覆土は、上層に多量の焼土粒や炭化物、ローム粒を含む黒褐色土、中層に多量の炭化物、ローム粒やローム塊を含む縞まりの無い暗褐色土、下層に炭化物やローム粒を多量に含む縞まりの無い暗褐色土が堆積している。出土遺物は土器片等であるが、重複している住居址からの流れ込みと思われる。時期について、重複関係や覆土などから判断すると、古代以降と考えられる。

## 第 4 章 結 語

今回調査した三遺跡について簡単にまとめてみたい。

三夜原東遺跡は、調査の結果、時期不明の溝2条（古墳時代以降）と、縄文時代前期の土器片などが少量出土した。未調査部分に於いても、集落や含層の存在する可能性は低い。

新堀東遺跡からは縄文後期（堀之内期）の土坑や土器片が発見された。これからは限られた狭い範囲から発見されており、それ以上大きく遺跡が広がる可能性は少ないと思われる。

壺清水西遺跡は、縄文時代前期を中心とした遺跡である。遺構は竪穴住居や土坑が検出された。多くは前期から中期初頭の遺構である。縄文期の住居址はローム暫移層や包含層を掘込んで構築されているが、ハードロームまで掘り込んでいる例は少ない。また、覆土も包含層に近い色調のため確認は困難であった。遺物は、早朝から晩期にかけての土器や土製品、石器などが、遺構内や包含層中から多量に発見された。特に早期前半（稻荷台・夏鳥式）や前期（黒浜式・浮島式・興津式）、中期初頭（下小野式）の土器群が注目される。また燃系文の土器片錘も発見されている。石器は、石鎌や磨斧、石匙等が多い。黒耀石細が集中している箇所もみられ、石器製作址の可能性が考えられる。旧石器時代については、調査区南端（第1号方形周溝墓周辺）を中心にナイフ型石器などが発見された。

古墳時代の遺構は台地南端から方形周溝墓が1基発見された。同台地上の未調査部分においても確認されないことから1基単独の存在と思われる。また、同時期の集落も周辺では確認されていない。主体部は発見されなかったが、おそらく盛土中に構築されたと思われる。遺物は周溝内より甕や赤彩された壺等が出土した。当周溝墓に伴う遺物であろう。

平安時代の遺構としては竪穴住居址が3軒（2・7・16号住）発見されている。7号住は16号住を埋め戻して建て替えている。2号住と7・16号住とは約80m離れており、また未調査区に集落が展開する可能性は少なく、まとまった集落ではない。7号住出土の「案農」と書かれた墨書き土器は、谷を隔てた台地に存在する寺畠遺跡からも数点発見されており、両遺跡の関連が窺える資料である。これらのことから、当遺跡は単独で機能していた集落ではなく、対岸の寺畠遺跡との関係で捉えられる遺跡であろう。

以上が三遺跡の概要である。この調査で得られた成果が当地域の歴史の解明に役立つことになれば幸いである。

なお調査から本書の作成にあたり、関係各位から多くのご助言、ご指導を頂いた。文末ながら厚く感謝の意を表して結語としたい。

註1. 川尻川左岸の台地も広範囲に調査されたが、古墳時代前期の遺構は住居址1軒のみである。

# 報告書抄録

ふりがな	さんやはらひがしいせき しんぼりひがしいせき いっぽいしみずにしいせき						
書名	三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壺杯清水西遺跡						
調査名	田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	1						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	黒澤春彦	著者名	関口満	黒澤春彦	駒澤悦郎		
編集機関	土浦市遺跡調査会						
発行機関	土浦市教育委員会						
所在地	〒300茨城県土浦市下高津2-7-36						
発行年月日	1997年3月						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
さんやはらひがし 三夜原東	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 田村町字三夜原	D-39 5376	36° 05' 25"	140° 15' 20"	19900801~ 19900806 19910225~ 19910228	12,500	土地区画 整理事業
しんぼりひがし 新堀東	土浦市田村町 あざさるはし 字申橋	D-40 5377	36° 05' 30"	140° 15' 27"	19900808	11,570	同上
いっぽいしみねこし 壺杯清水西	土浦市田村町 字申橋	D-42 5379	36° 05' 20"	140° 15' 32"	19900801~ 19910118	11,000	同上
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項		
三夜原東	散布地	縄文・他	溝 2条	縄文土器・土師器			
新堀東	散布地	縄文	土坑	縄文土器			後期
壺杯清水西	集落跡 墓	旧石器 縄文 古墳 平安	竪穴住居10軒・土坑 方形周溝墓1墓 竪穴住居3軒	ナイフ・剥片 縄文土器・石器 土師器壺・壇 須恵器・土師器			早期~中期初頭 墨書き用硯



遺跡周辺航空写真（昭和50年撮影 国土地理院）



三夜原東遺跡試掘



三夜原東遺跡 a 全景



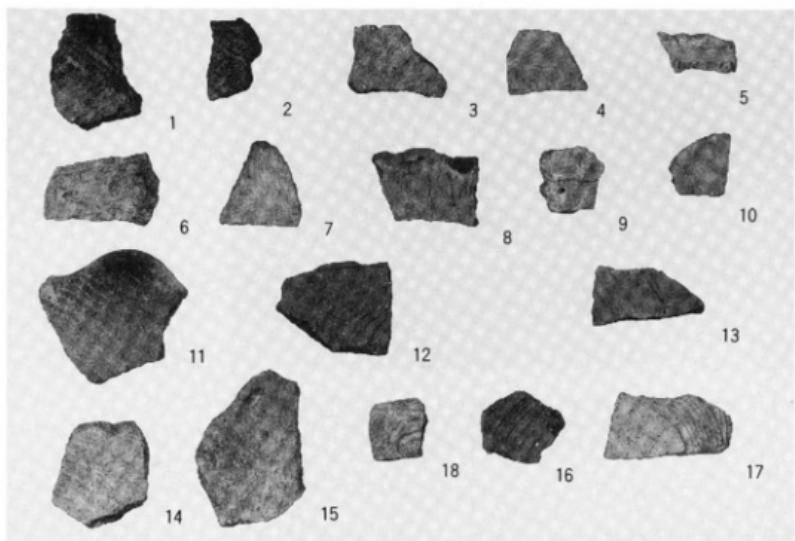
三夜原東遺跡 b 全景



第 1 号溝



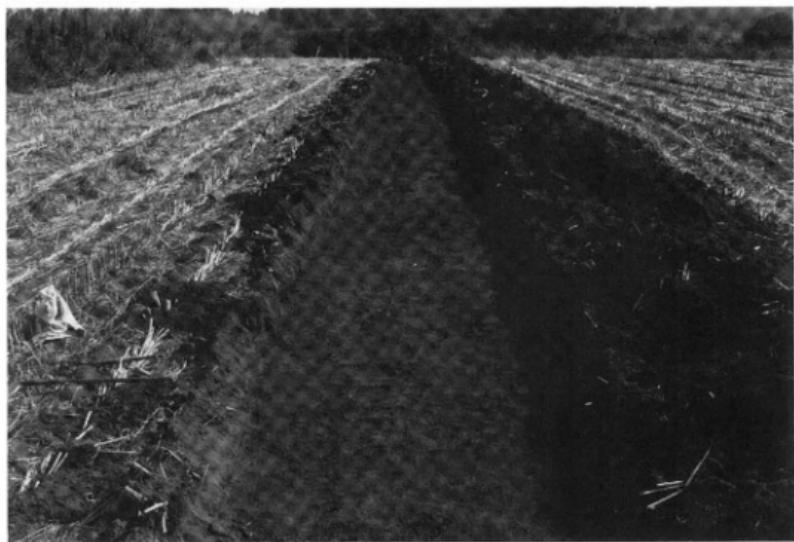
第 2 号溝



遺構外出土遺物



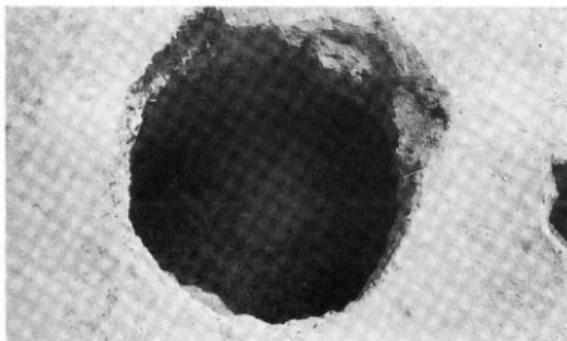
新堀東遺跡試掘



新堀東遺跡試掘



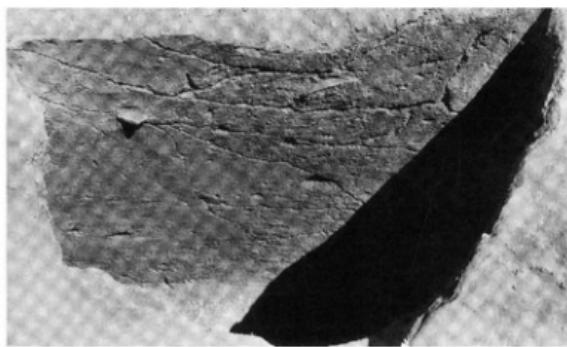
新堀東遺跡全景



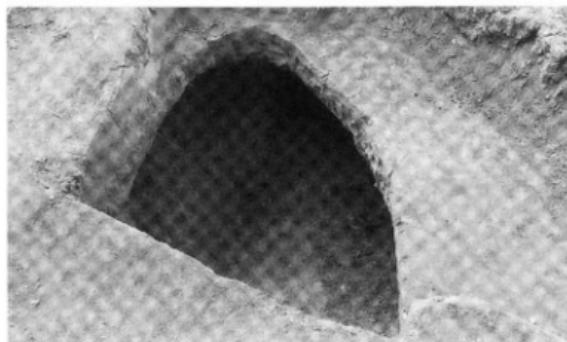
1号土坑



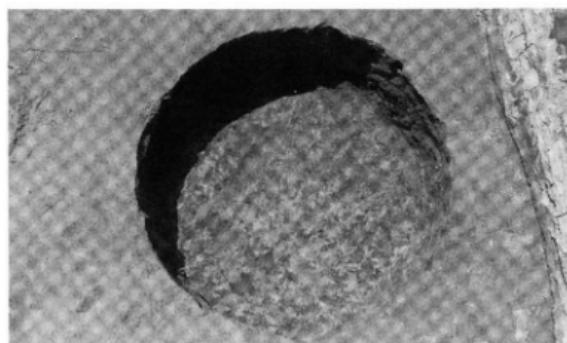
第1号土坑遗物出土状况



第1号土坑土层



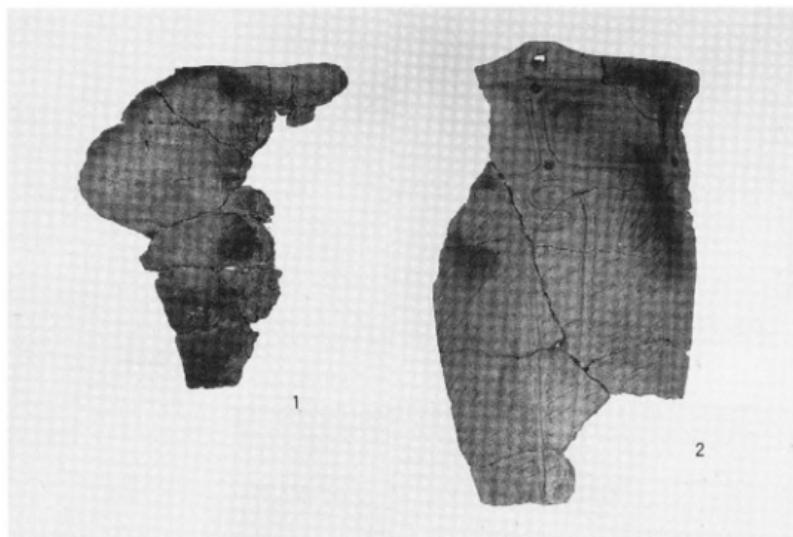
第2号土坑



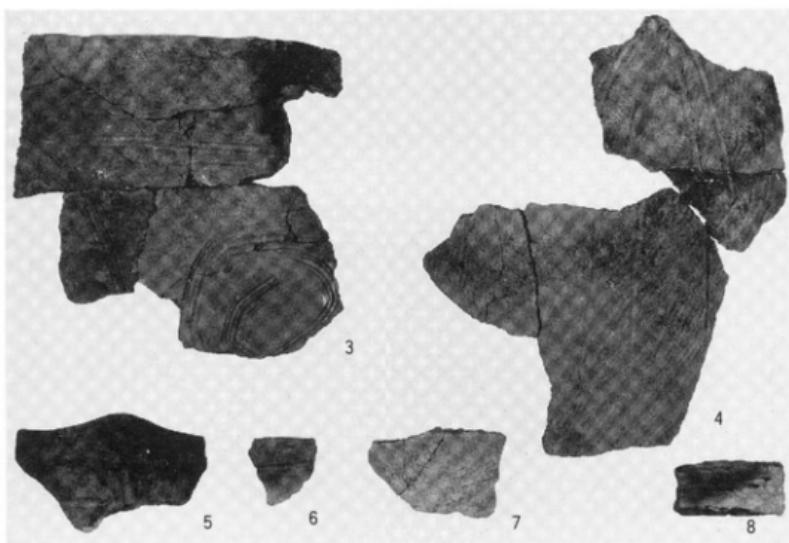
第5号土坑



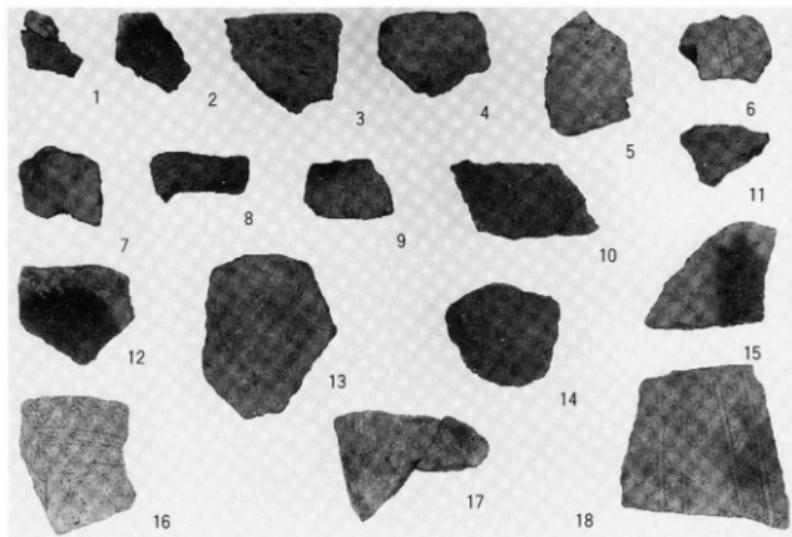
pit群



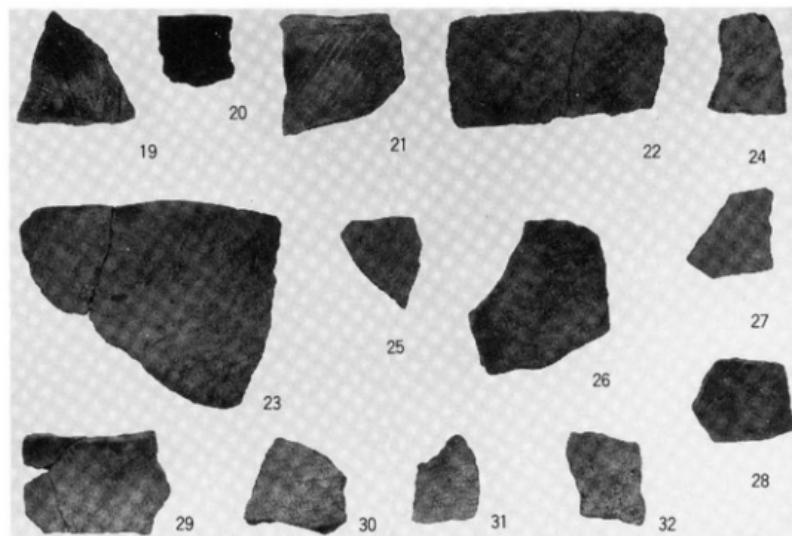
第1号土坑出土遗物



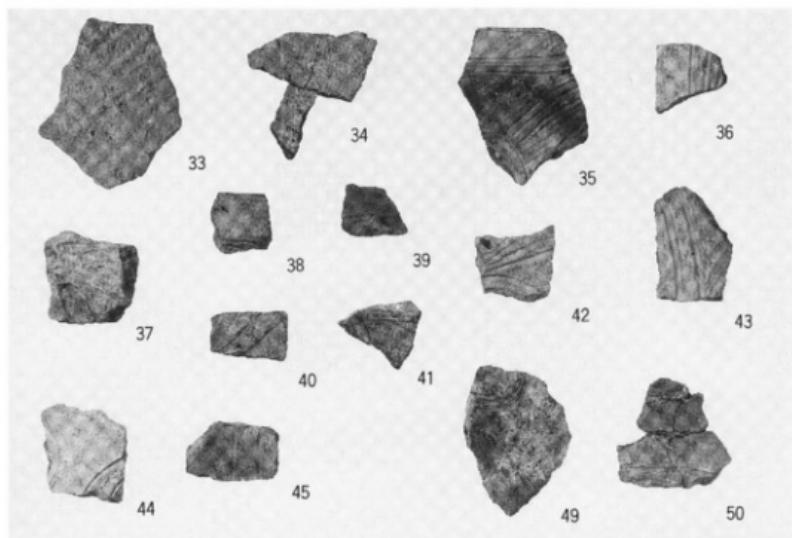
第1号土坑出土遗物



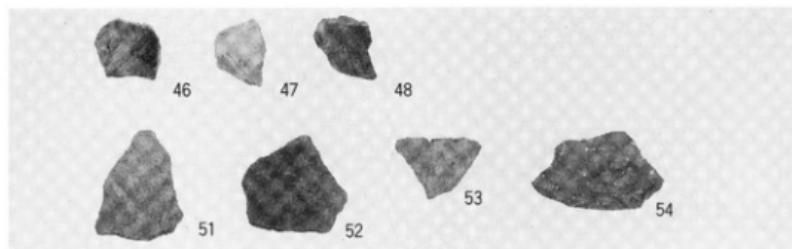
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



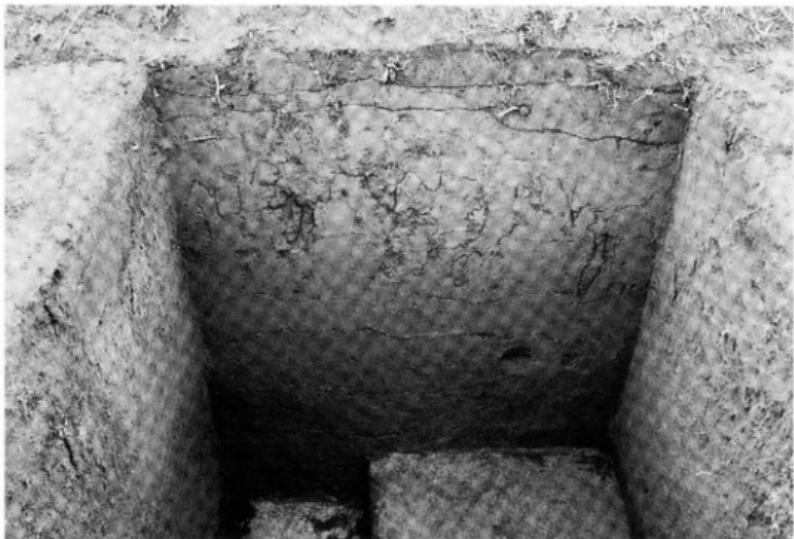
遺構外出土遺物



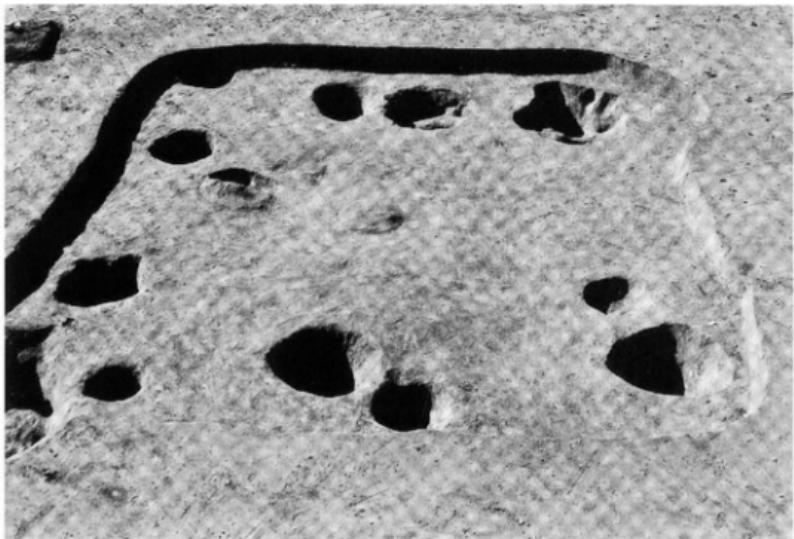
壺呂清水西遺跡調査前全景（北より）



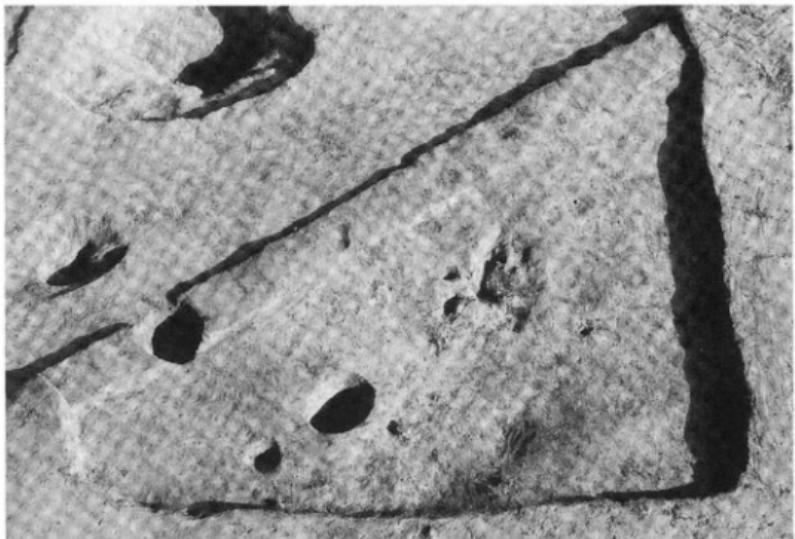
壺呂清水西遺跡遠景（西より）



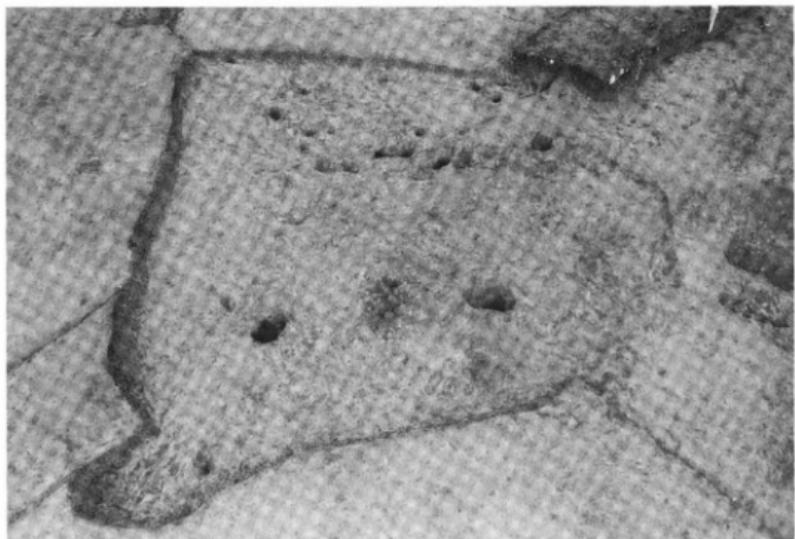
壳杯清水西遗址基本层序



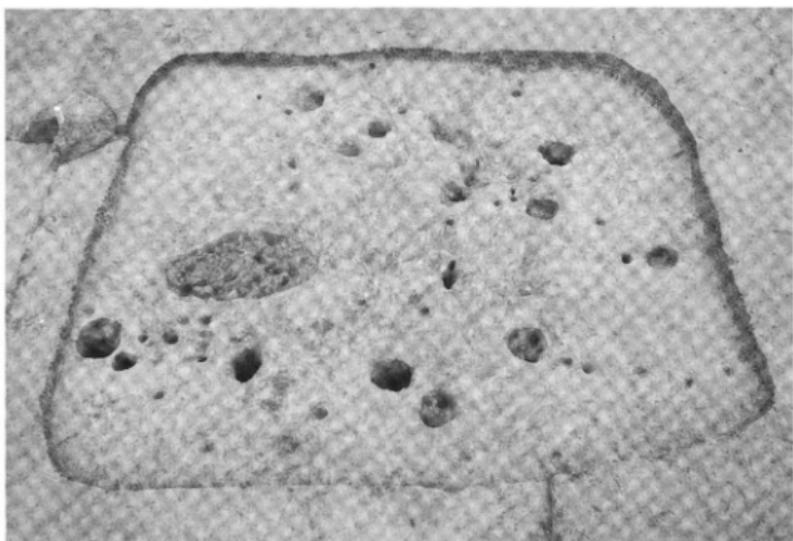
第3号住居址



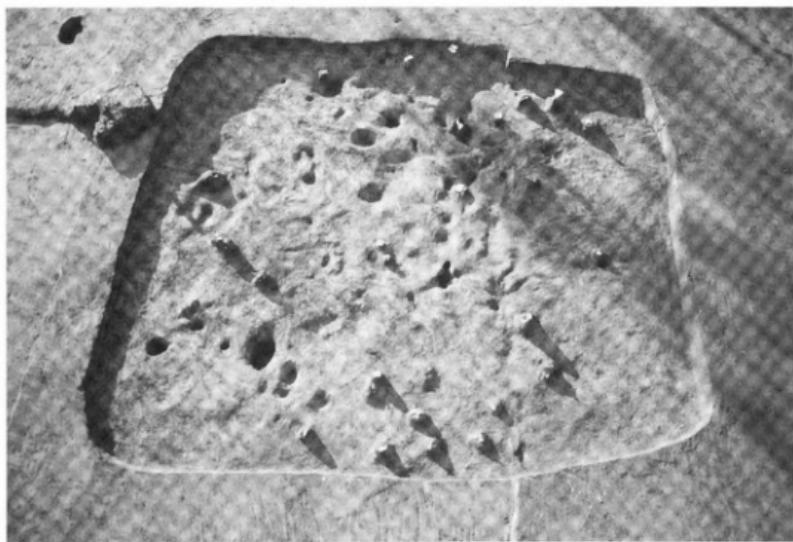
第4号住居址



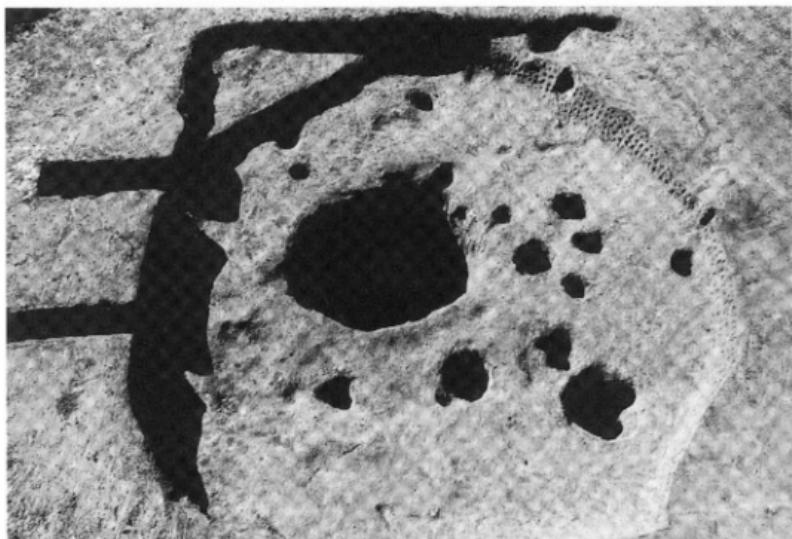
第5号住居址



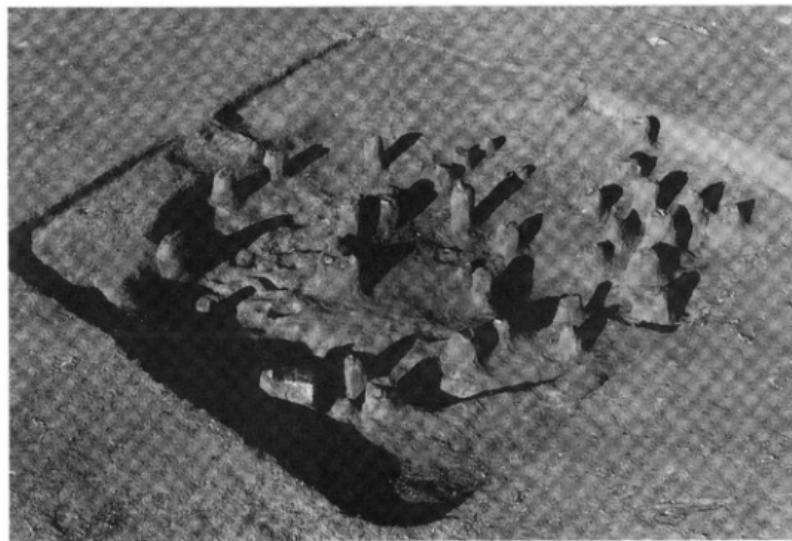
第 6 号住居址



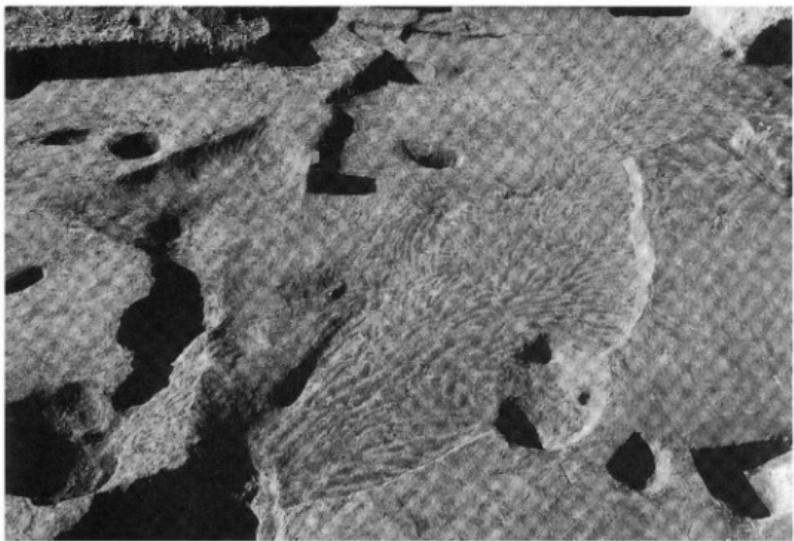
第 6 号住居址遺物出土狀況



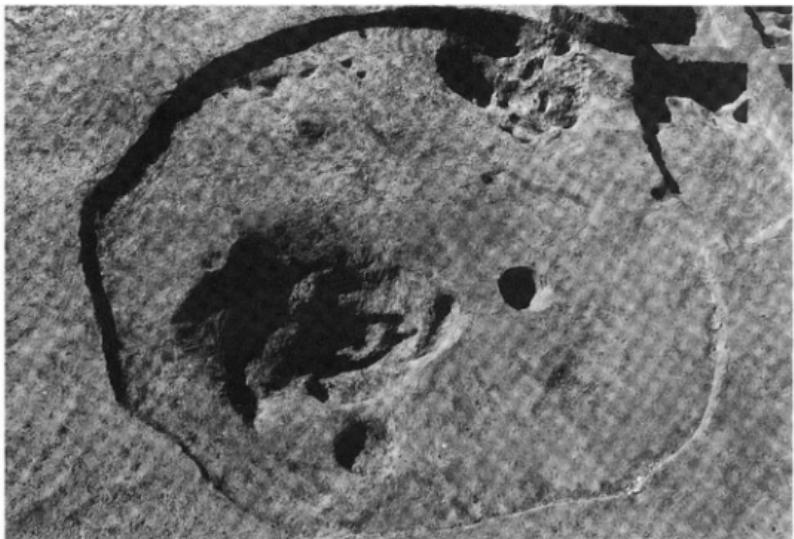
第 8 号住居址



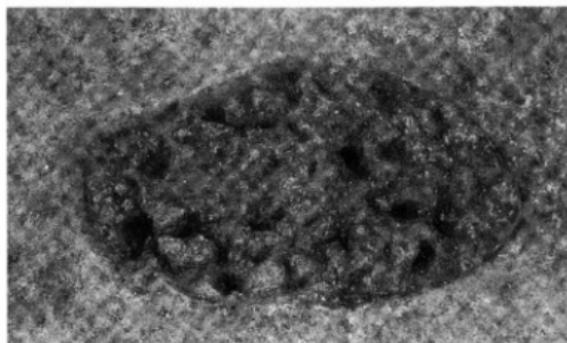
第 8 号住居址遺物出土状况



第10 a·b 号住居址



第11号住居址



第6号住居址炉址



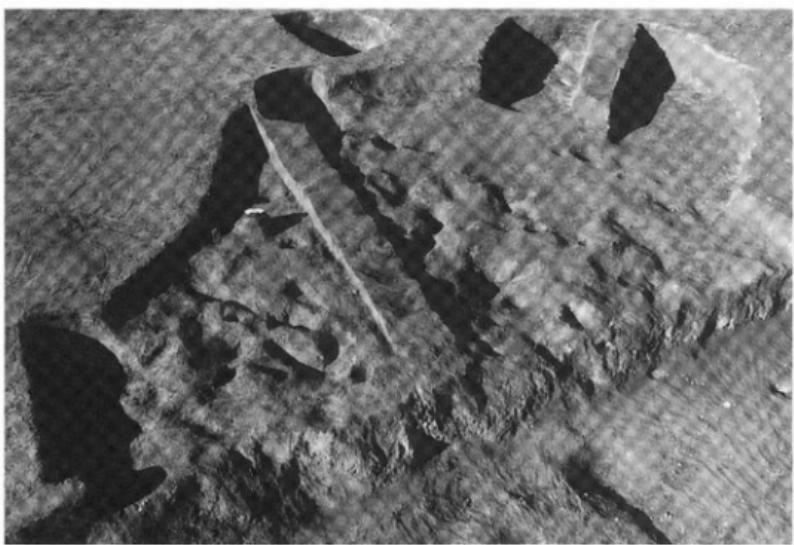
第8号住居址遗物出土状况



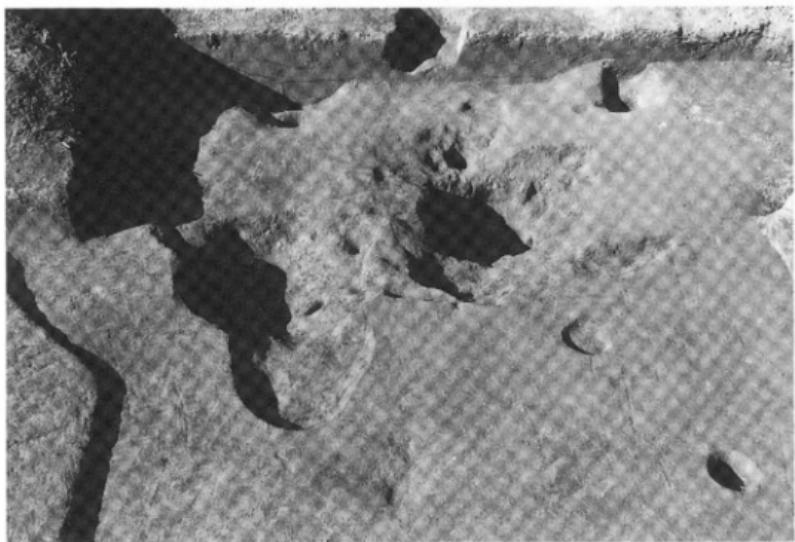
第11号住居址遗物出土状况



第12号住居址



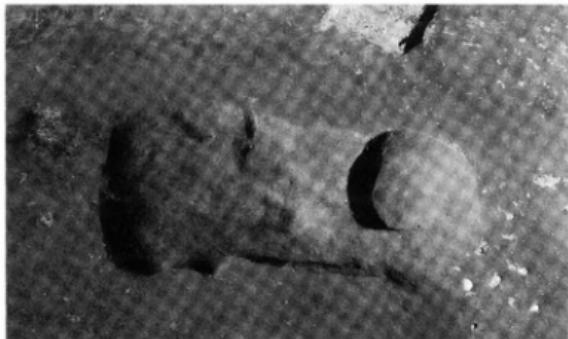
第14号住居址



第15号住居址



第1号柱穴列



第2号土坑



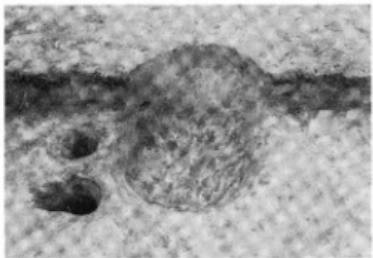
第2号土坑遗物出土状况



第7号土坑



第8号土坑



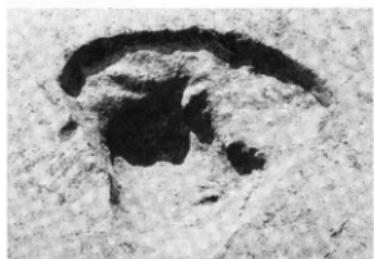
第14号土坑



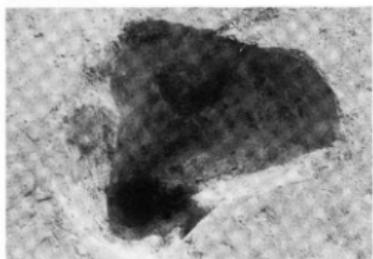
第16~19号土坑



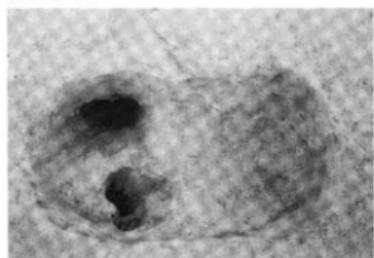
第20号土坑



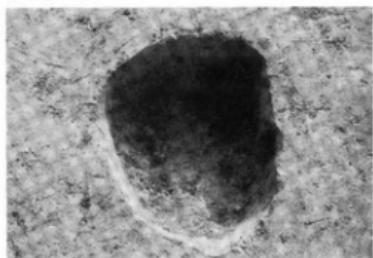
第21号土坑



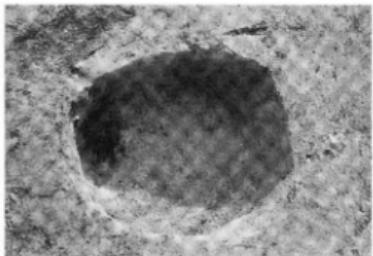
第22号土坑



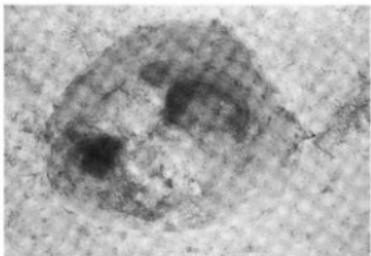
第23号土坑



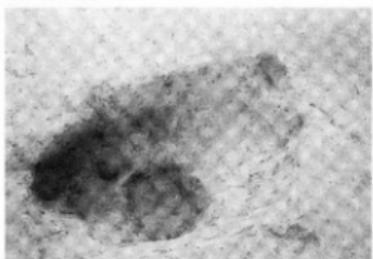
第24号土坑



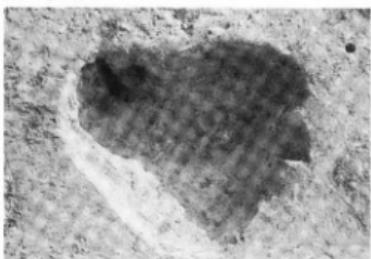
第25号土坑



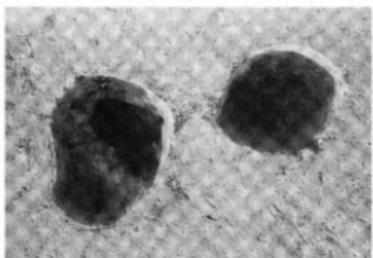
第26号土坑



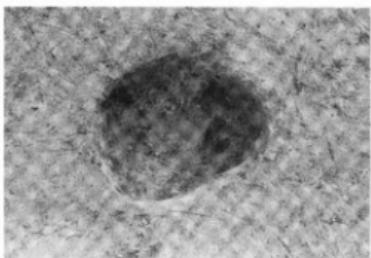
第27号土坑



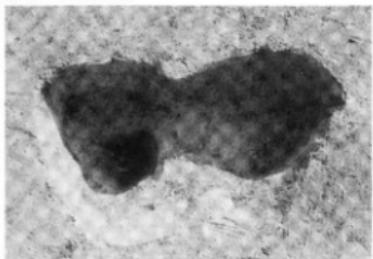
第28号土坑



第29・30号土坑



第31号土坑



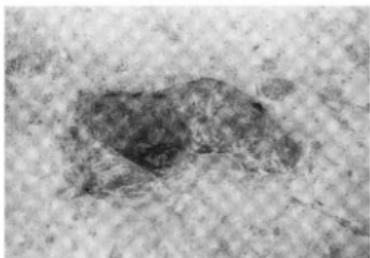
第34号土坑



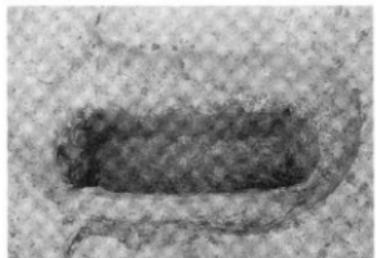
第41号土坑土屑



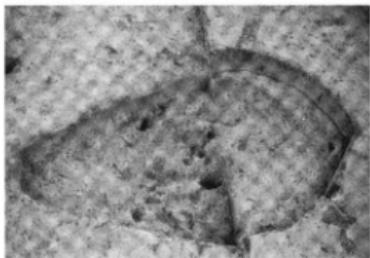
第43号土坑



第44号土坑



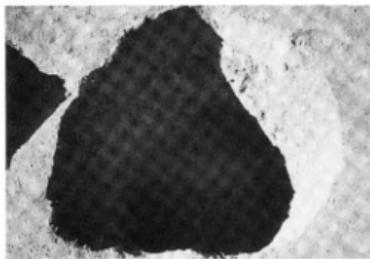
第47号土坑



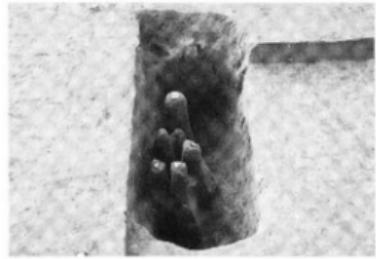
第49号土坑



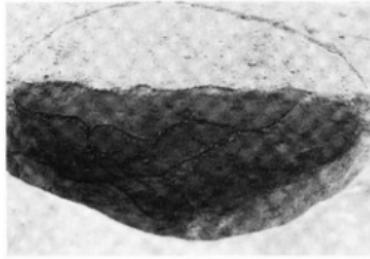
第52号土坑土屑



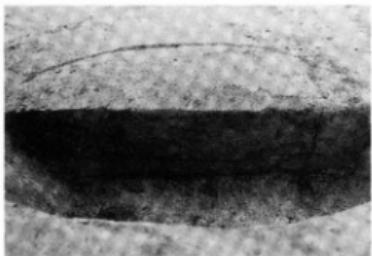
第53号土坑



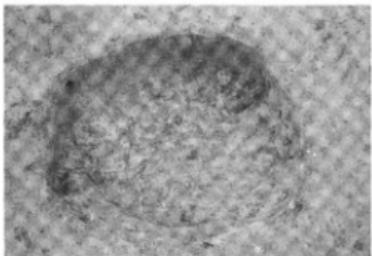
第54号土坑



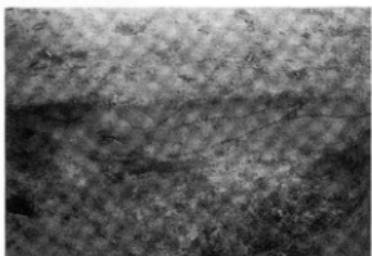
第56号土坑土屑



第57号土坑土層



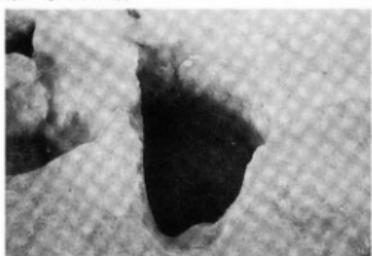
第60号土坑



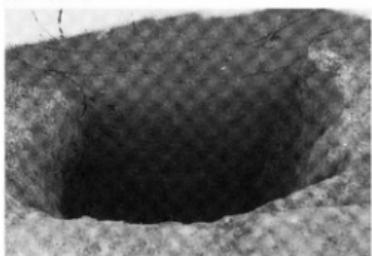
第62号土坑土層



第68号土坑



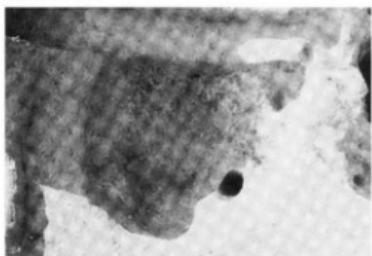
第70号土坑



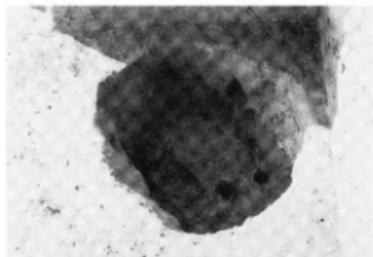
第72号土坑



第72号土坑土層



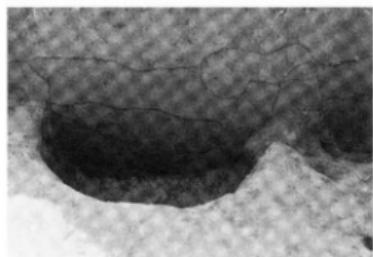
第75号土坑



第76号土坑



第76号土坑土层



第77号土坑土层



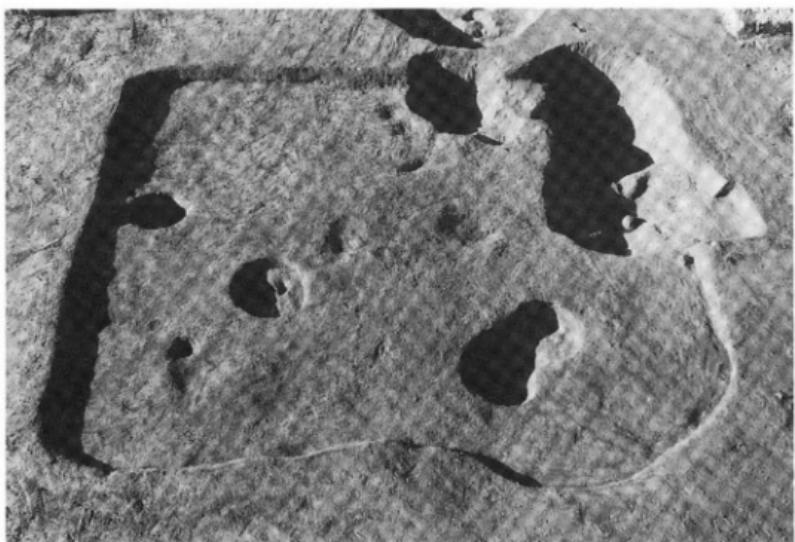
第78号土坑



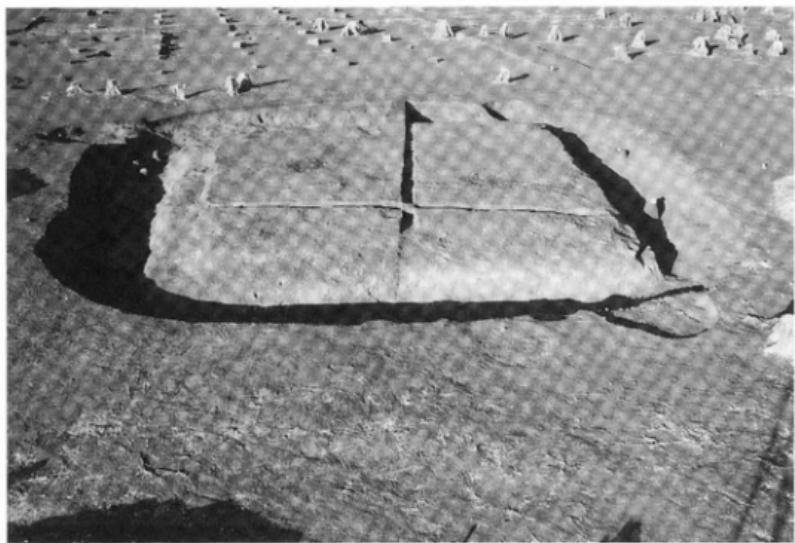
第79号土坑



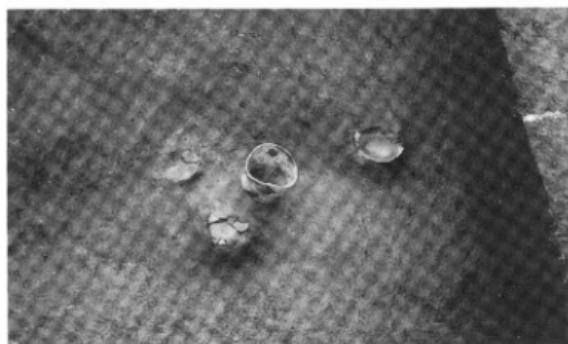
第79号土坑土层



第9号住居址



第1号方形周溝墓



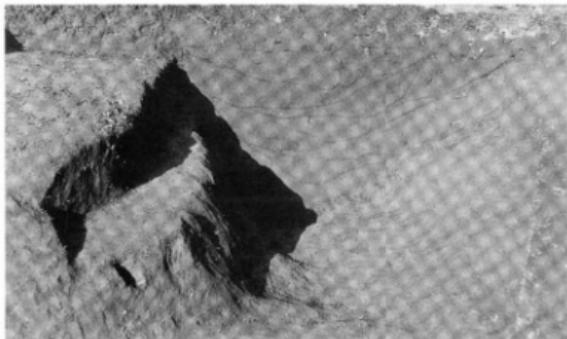
第1号方形周溝墓遺物出土狀況



第1号方形周溝墓遺物出土狀況



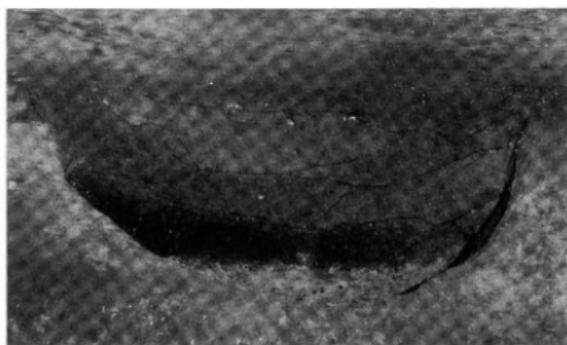
第1号方形周溝墓遺物出土狀況



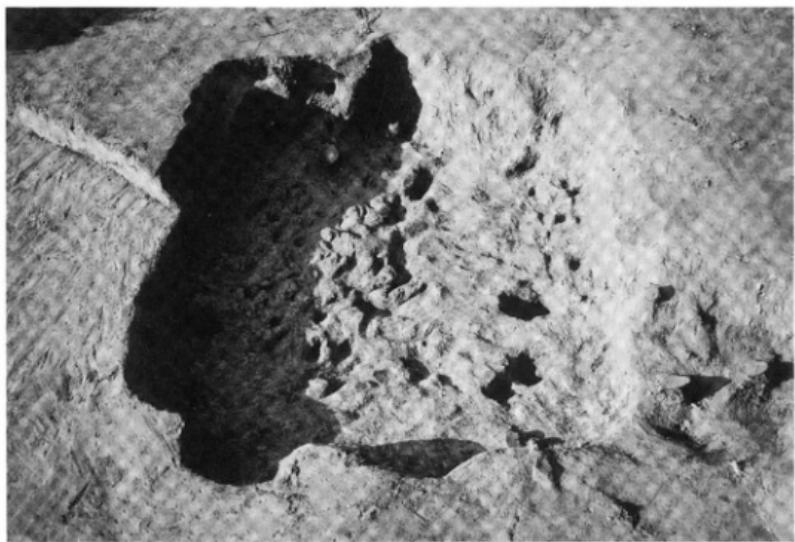
第1号方形周溝墓土層



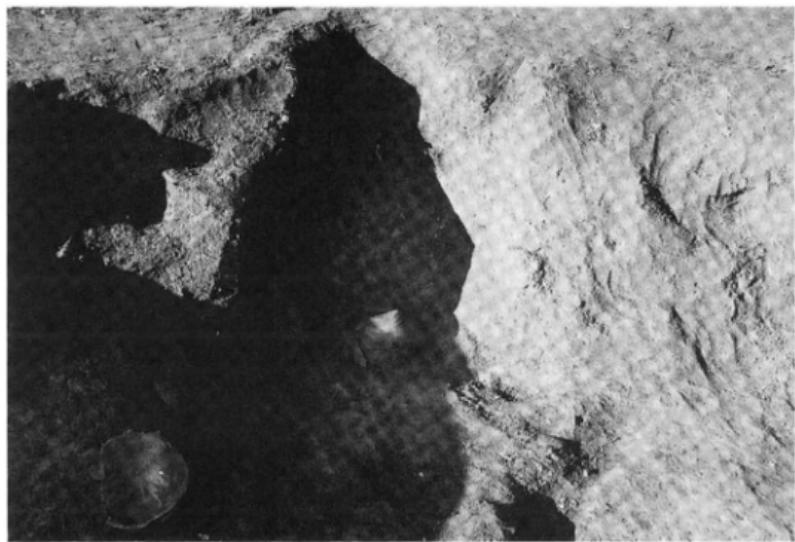
第1号方形周溝墓周溝内土坑



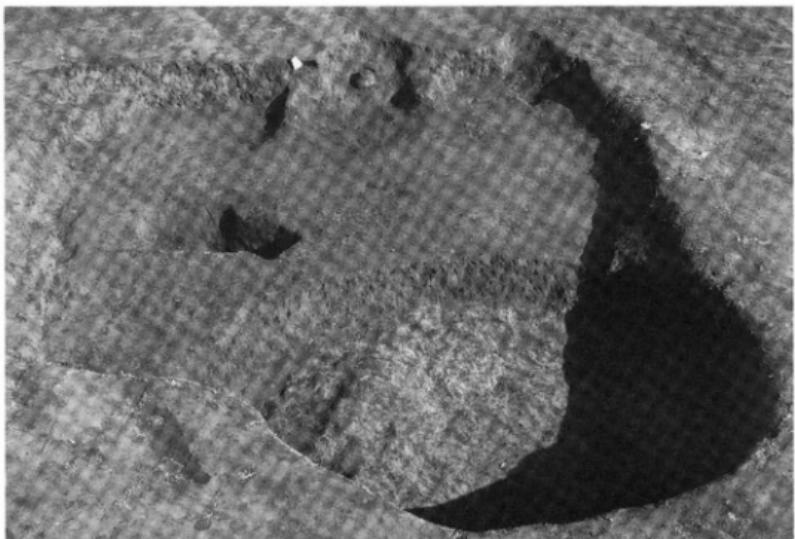
第65号土坑土層



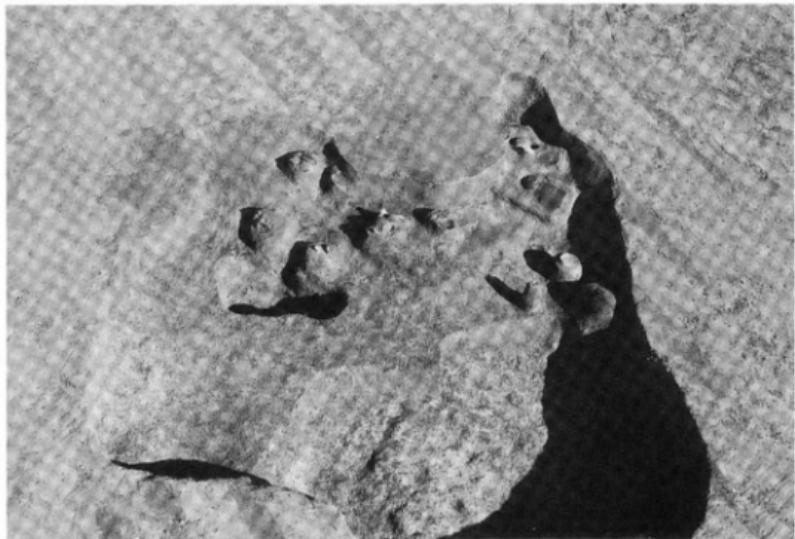
第2号住居址



第2号住居址カマド



第7号住居址



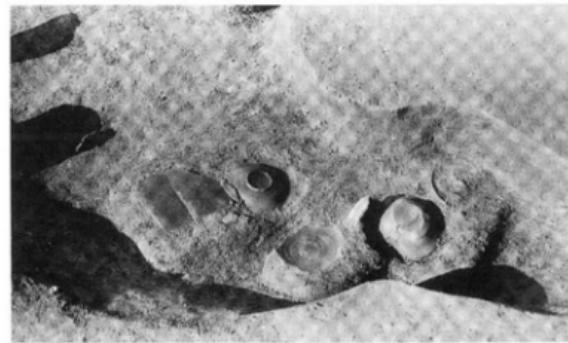
第7号住居址遺物出土状況



第7号住居址カマド1



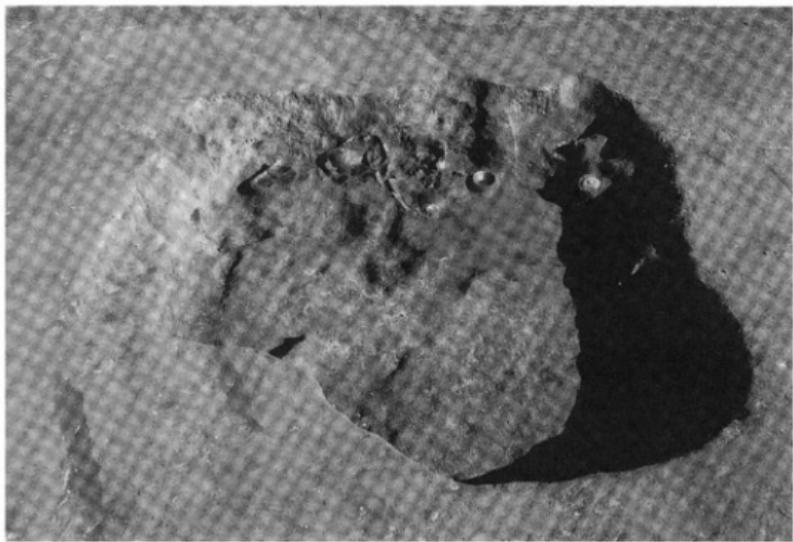
第7号住居址カマド2



第7号住居址遺物出土状況



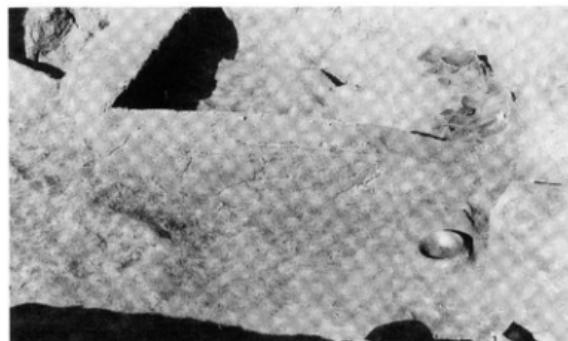
第16号住居址



第16号住居址遺物出土状況



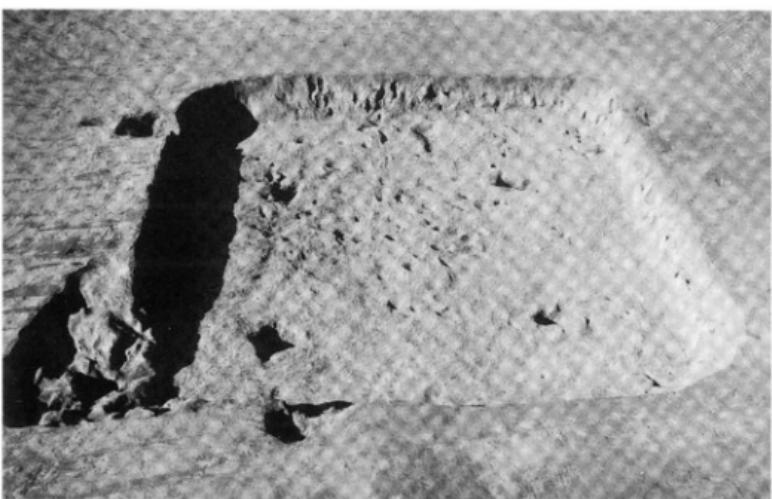
第16号住居址遺物出土状況



第16号住居址土層



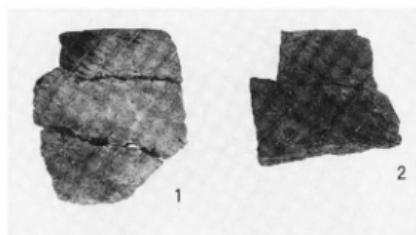
作業風景



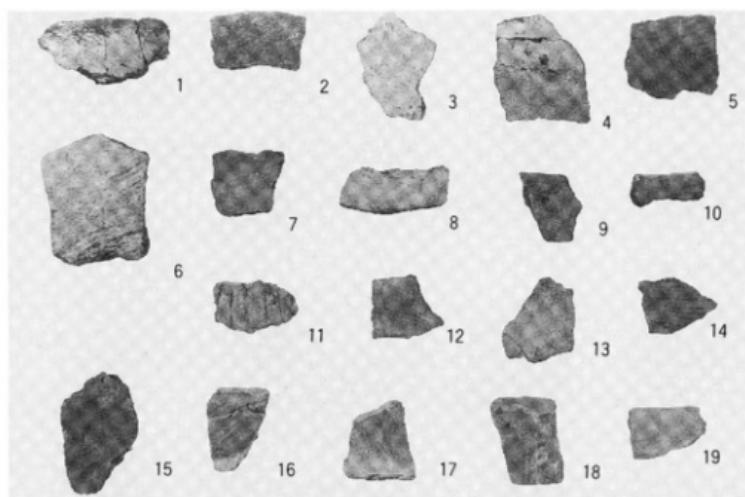
第1号住居址



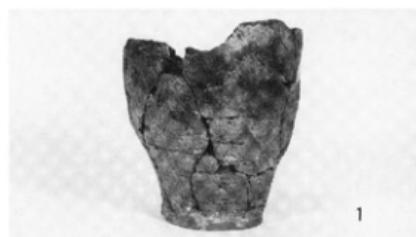
第1号溝



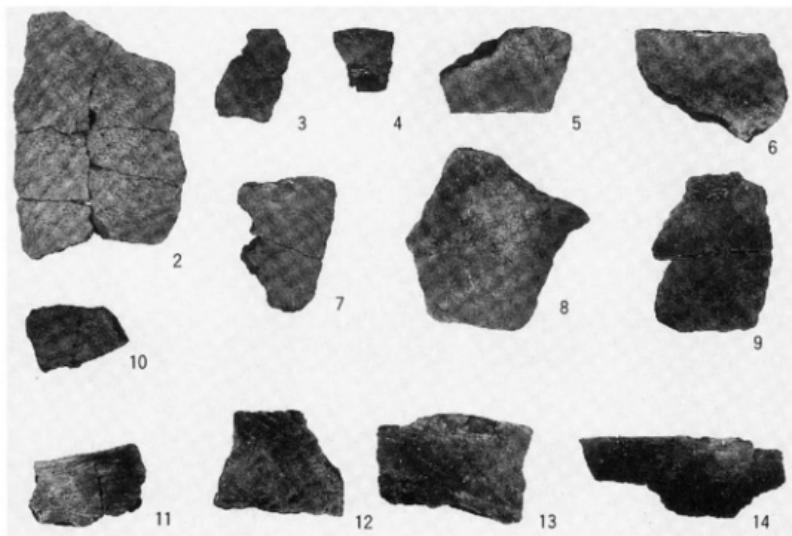
第3号住出土遺物



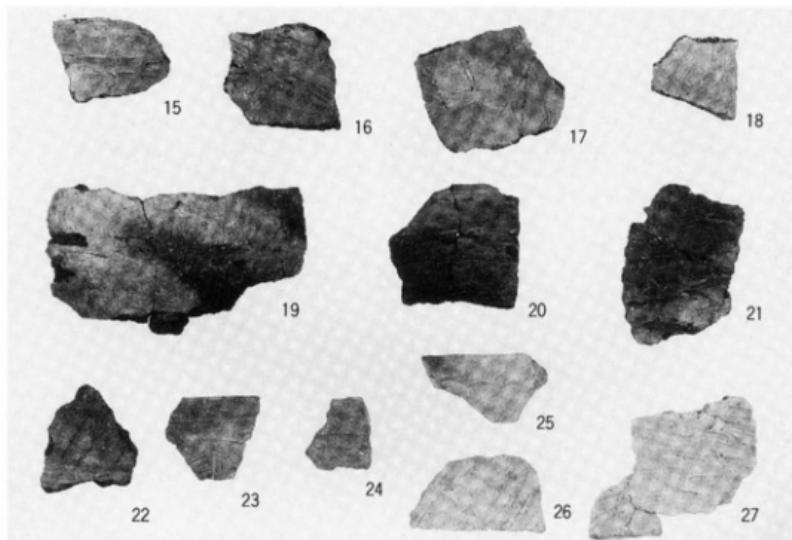
第4号住出土遺物



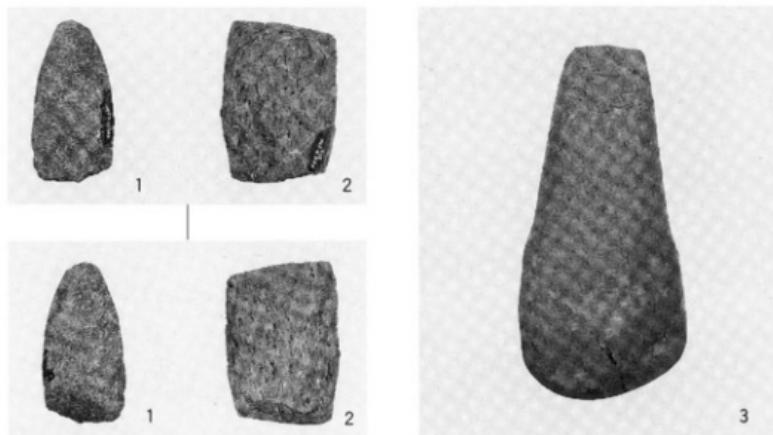
第5号住出土遺物



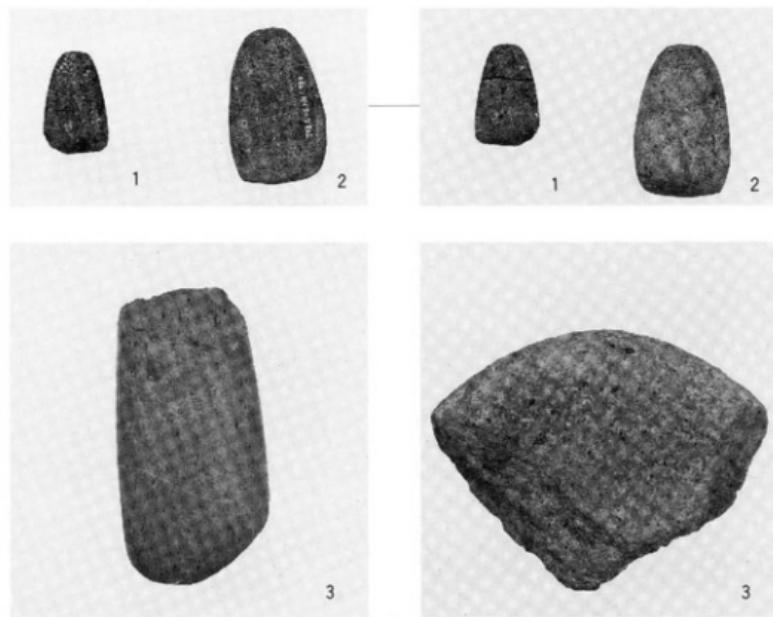
第5号住出土遗物



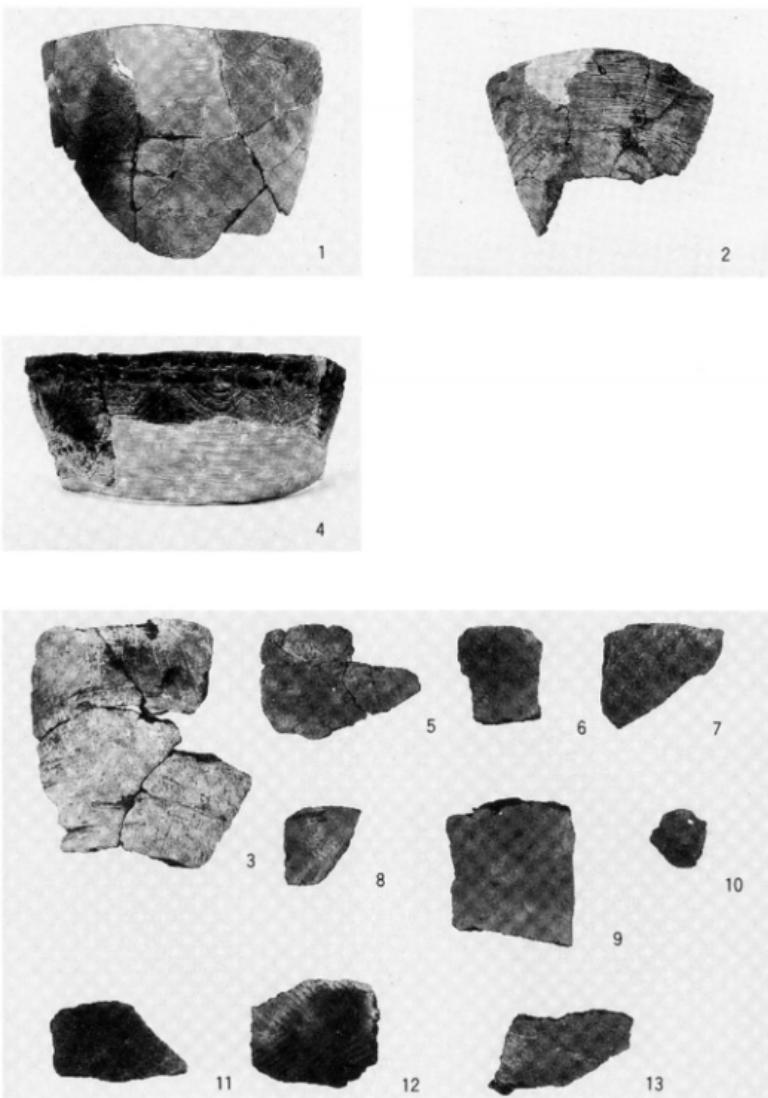
第5号住出土遗物



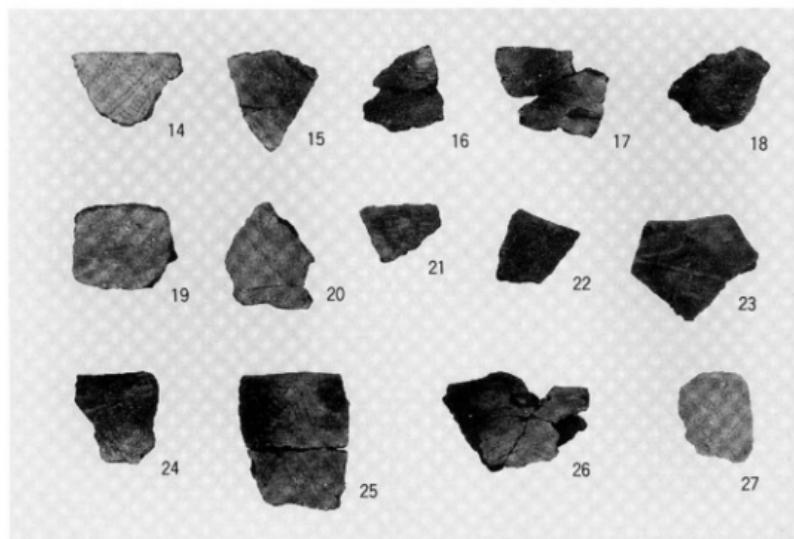
第4号住出土遺物



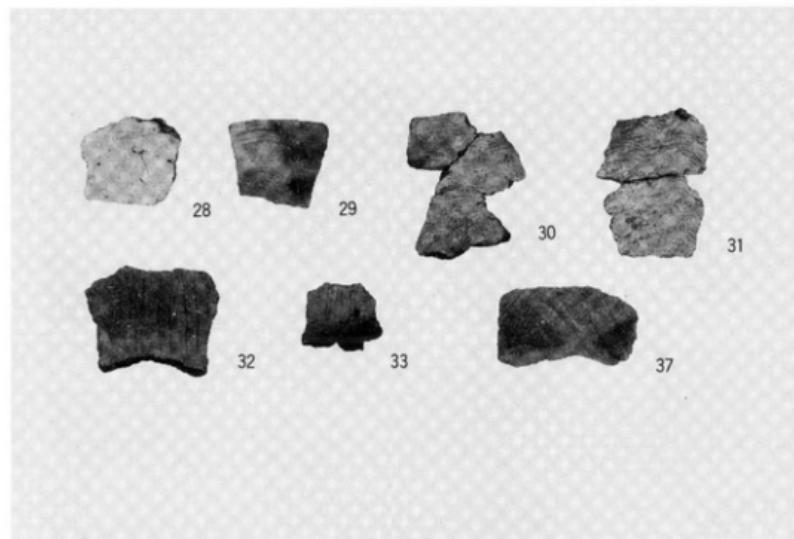
第5号住出土遺物（石器）



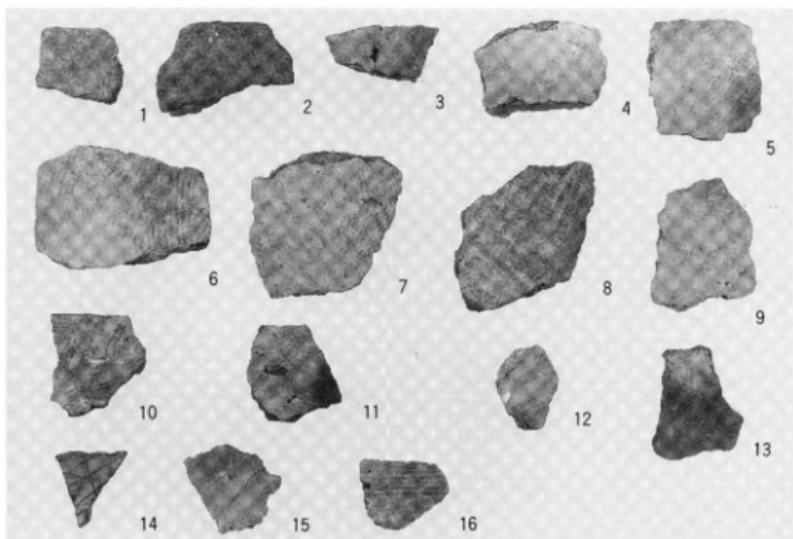
第6号住出土遗物



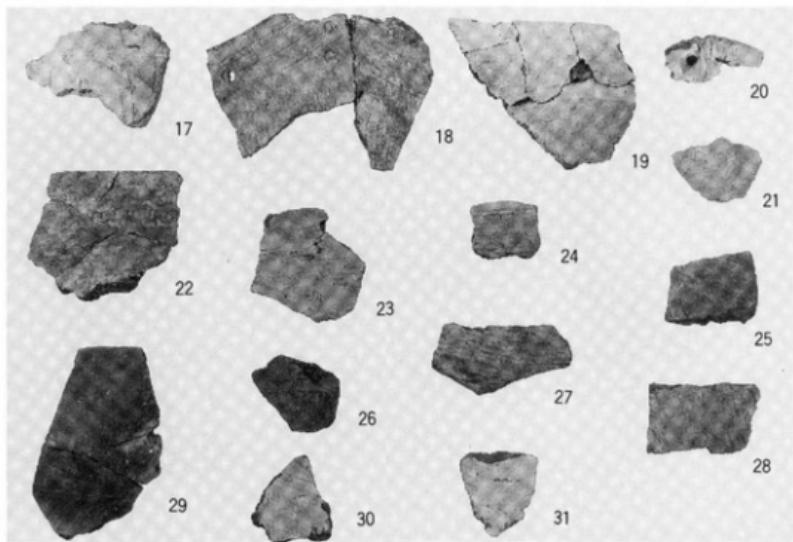
第6号住出土遺物



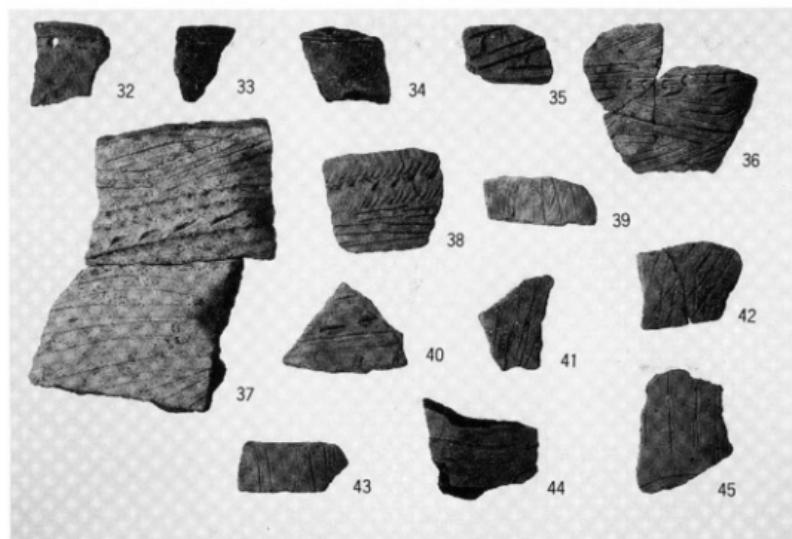
第6号住出土遺物



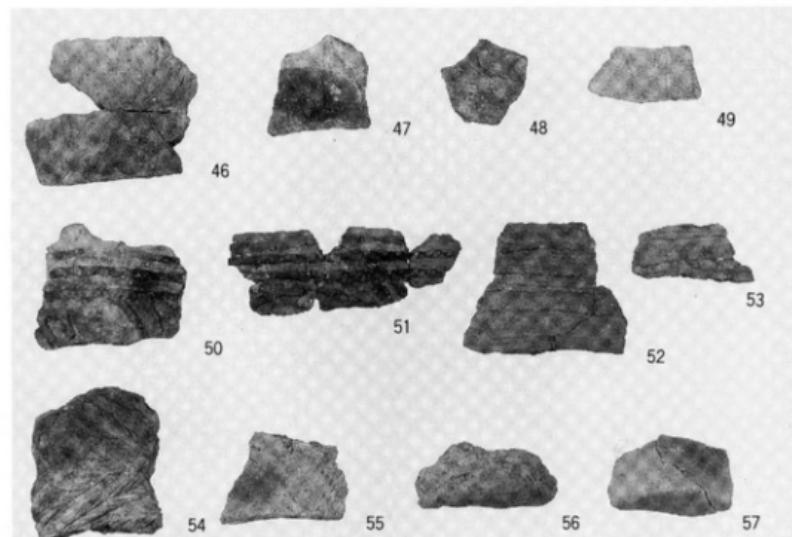
第8号住出土遺物



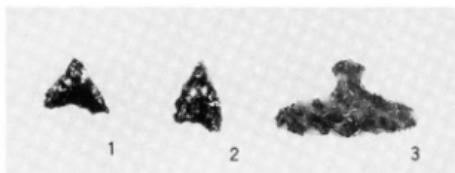
第8号住出土遺物



第8号住出土遺物



第8号住出土遺物



第6号住出土遗物



第8号住出土遗物



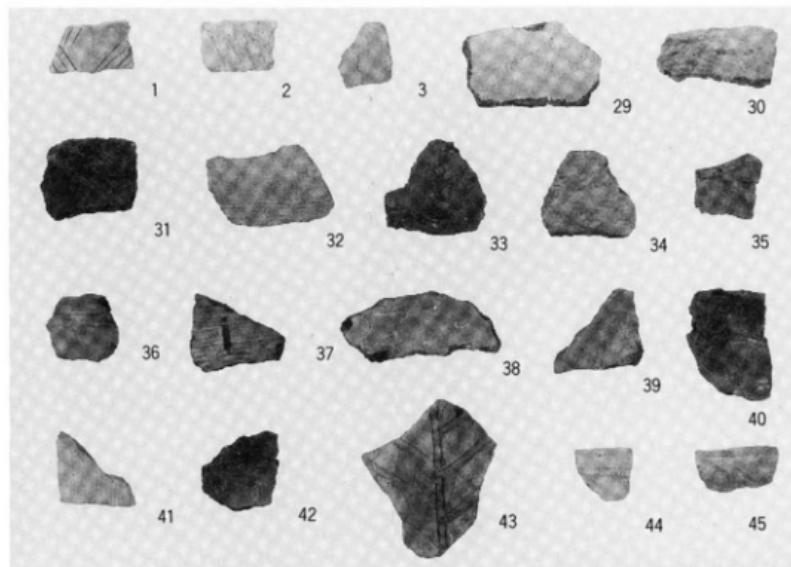
第6号住出土遗物



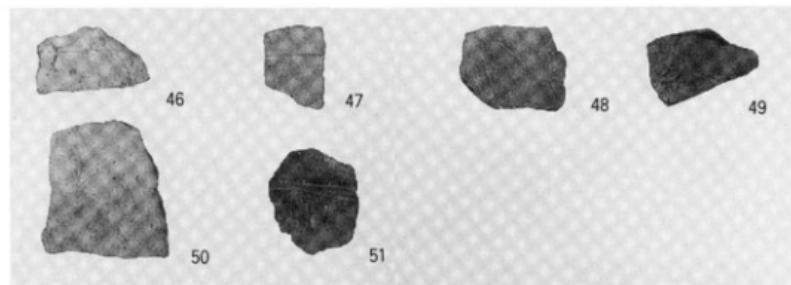
第8号住出土遗物



第8号住出土遗物



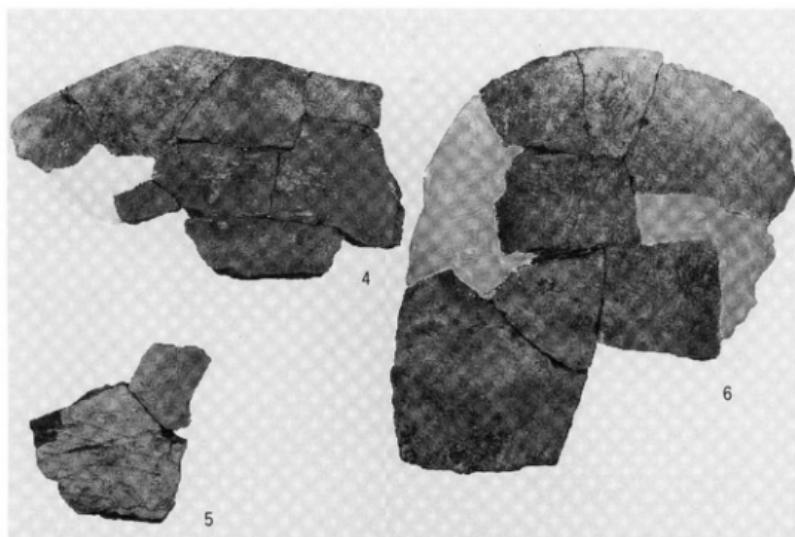
第10 a 号住出土遗物



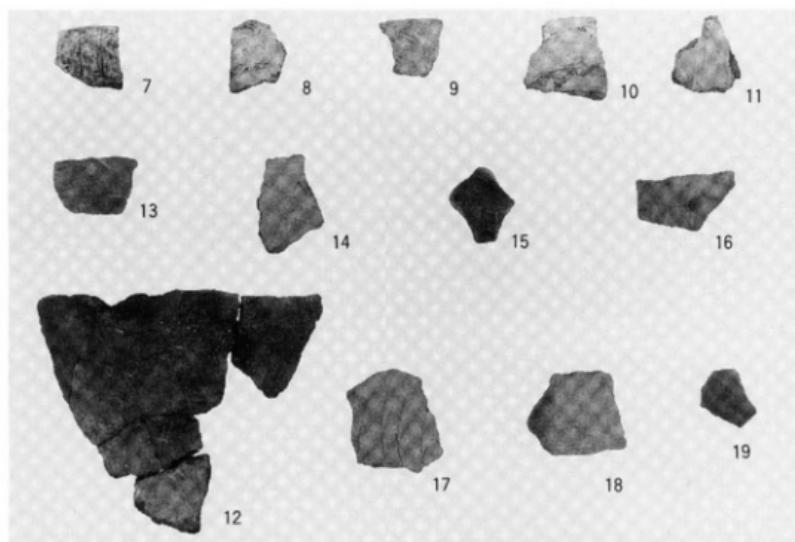
第10 a 号住出土遗物



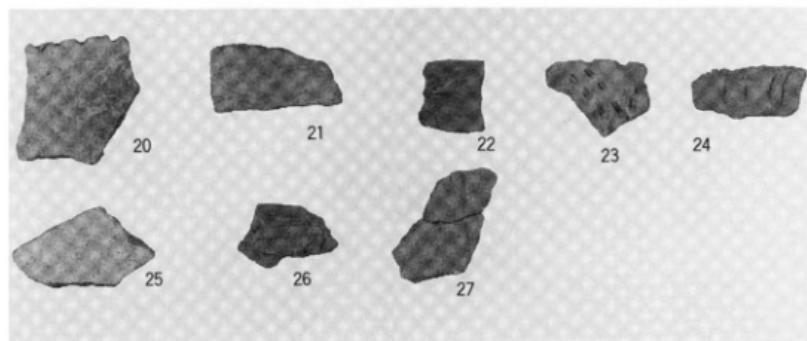
第10 a 号住出土遗物



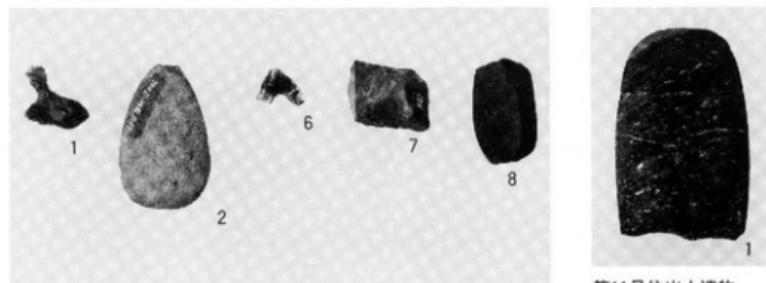
第10 b 号住出土遗物



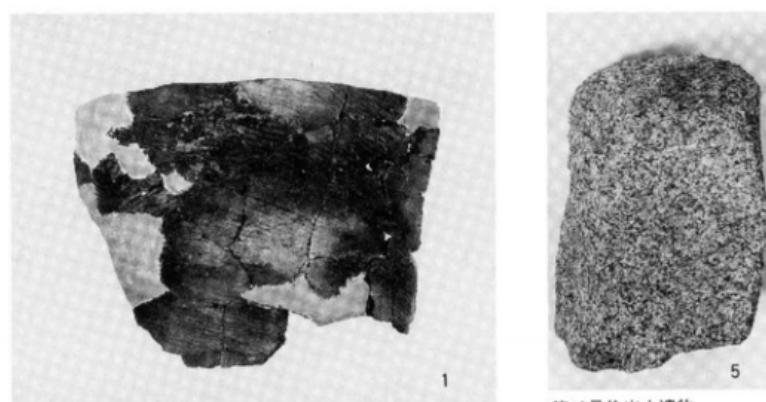
第10 b 号住出土遗物



第10 b 号住出土遗物

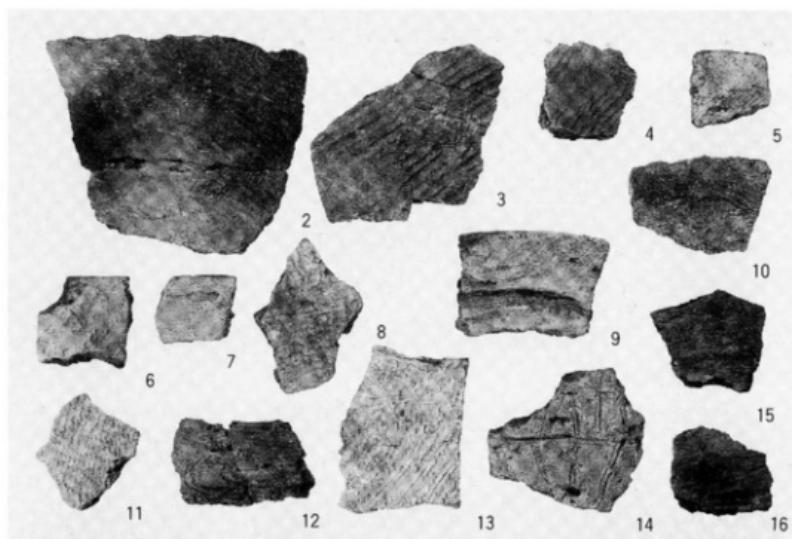


第10号住出土遗物

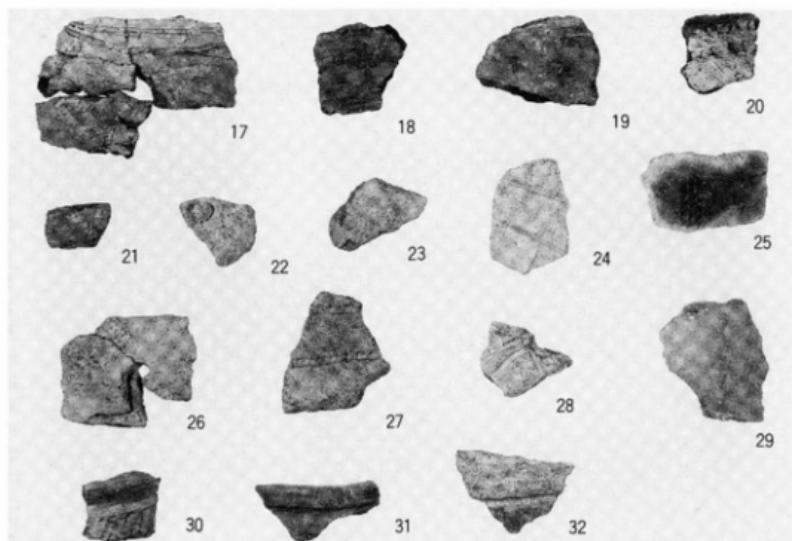


第11号住出土遗物

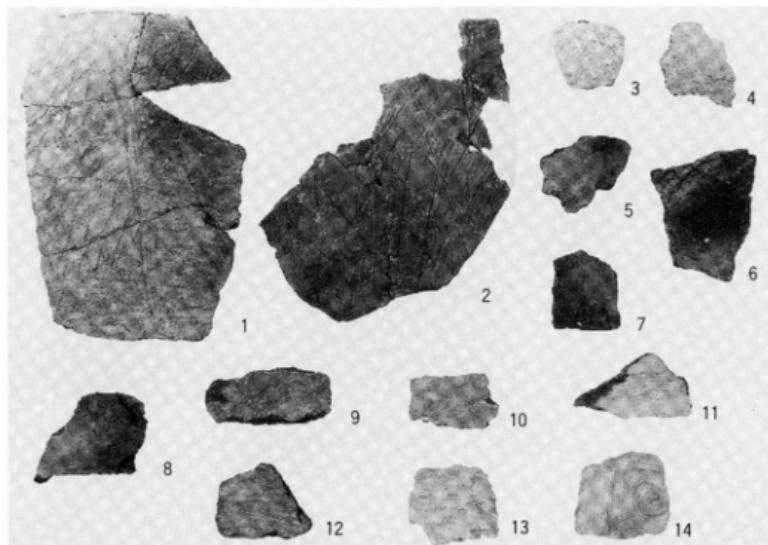
第10号住出土遗物



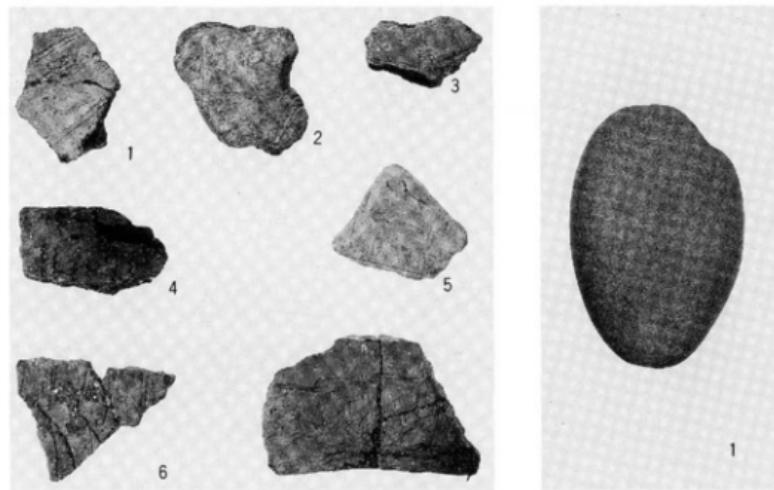
第11号住出土遗物



第11号住出土遗物

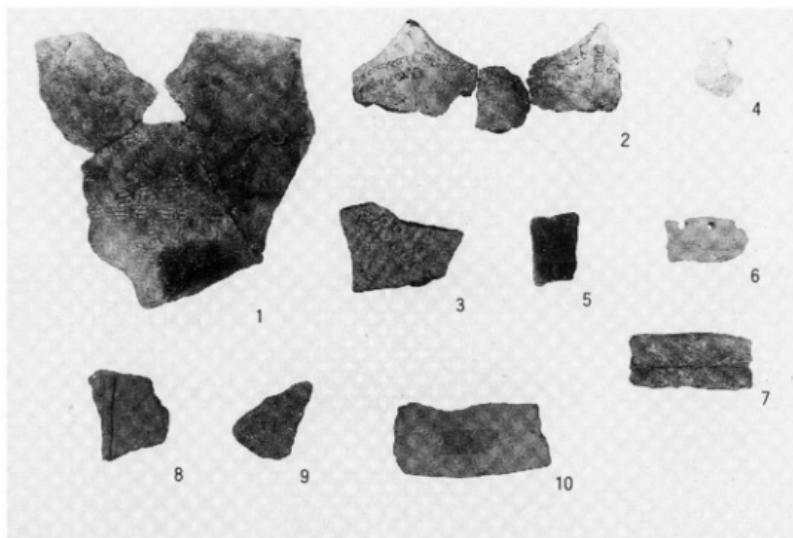


第12号住出土遗物

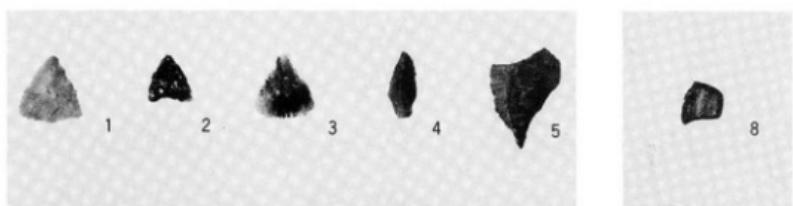


第14号住出土遗物

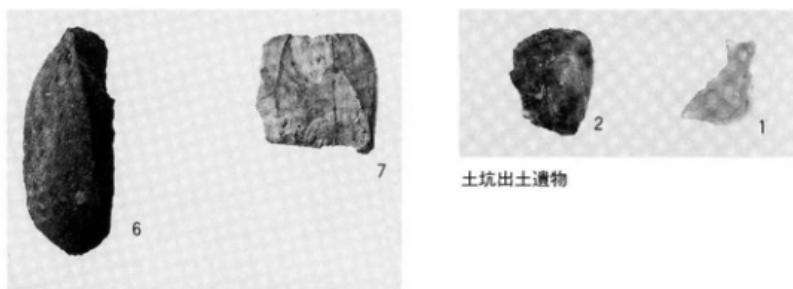
第14号住出土遗物



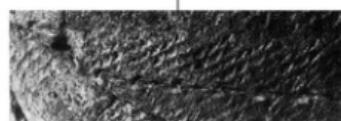
第15号住出土遗物



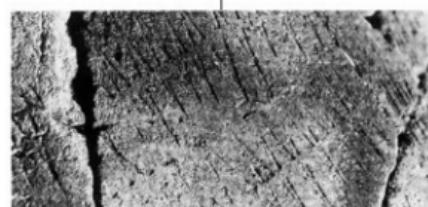
第15号住出土遗物



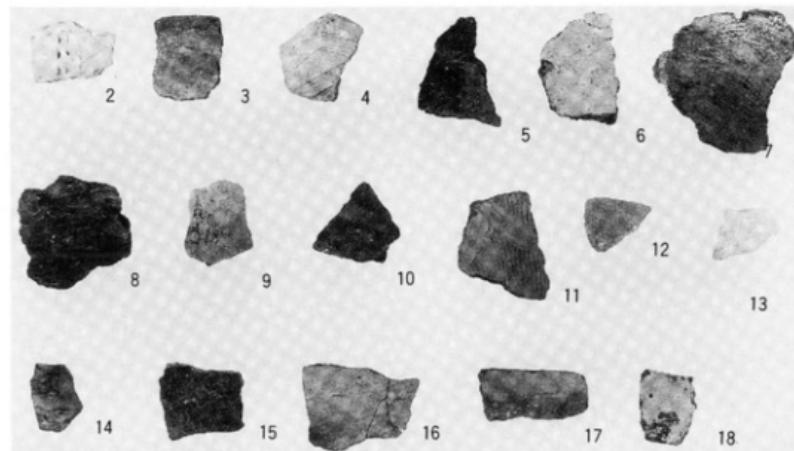
第15号住出土遗物



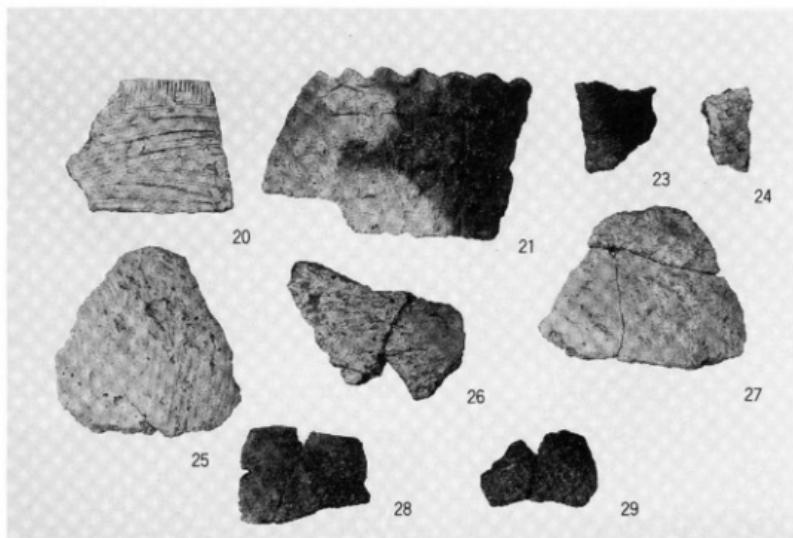
第2号土坑出土遗物



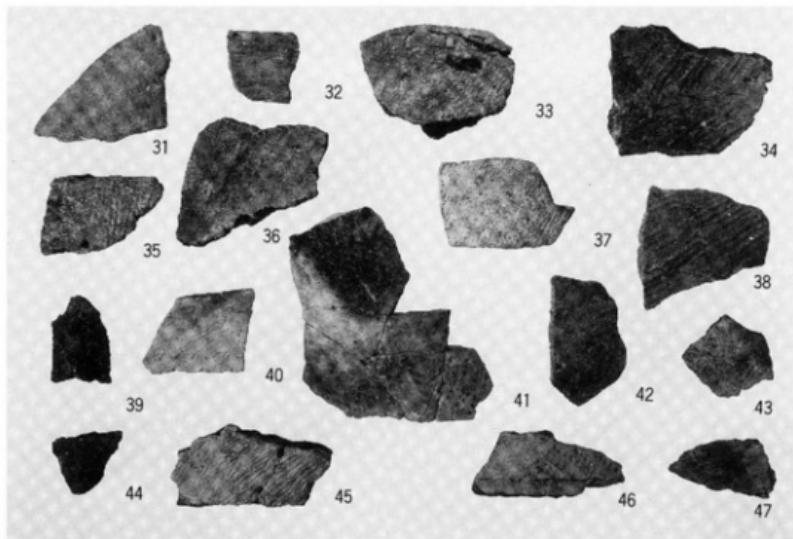
第7号土坑出土遗物



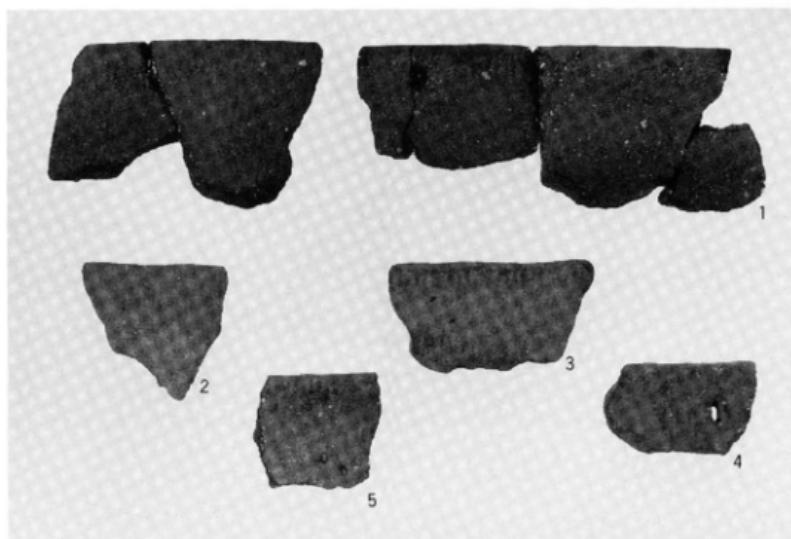
土坑出土遗物



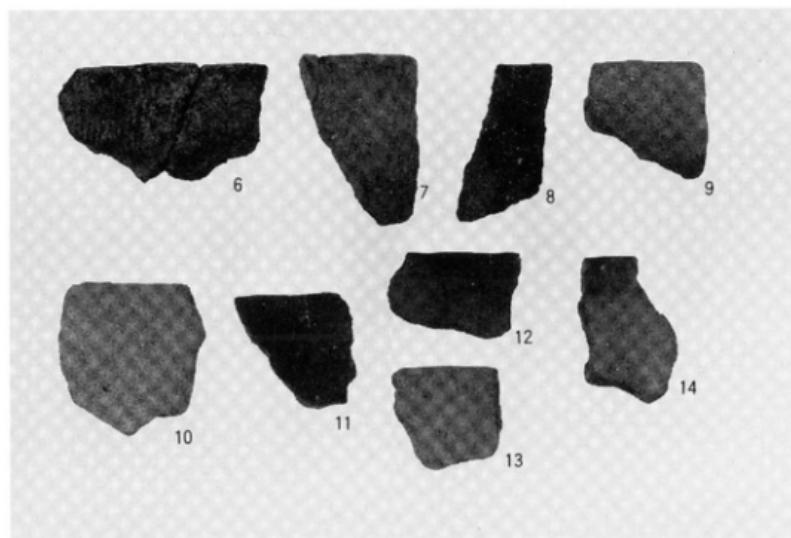
土坑出土遺物



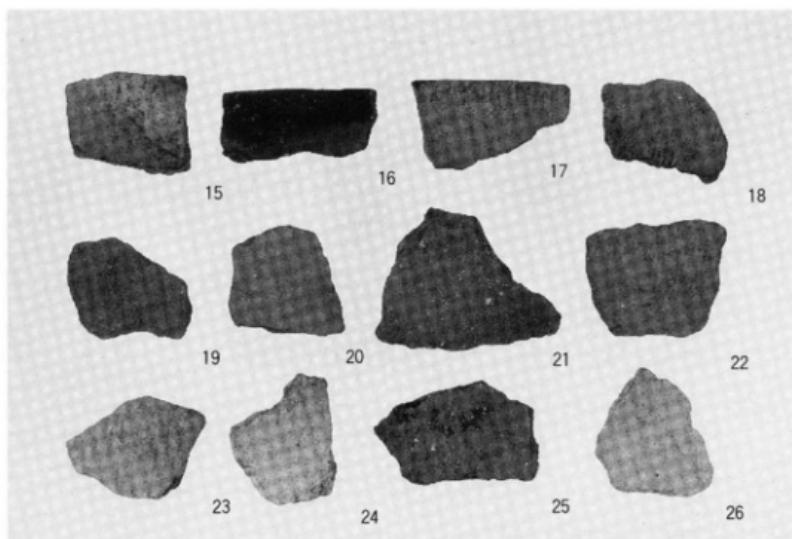
土坑出土遺物



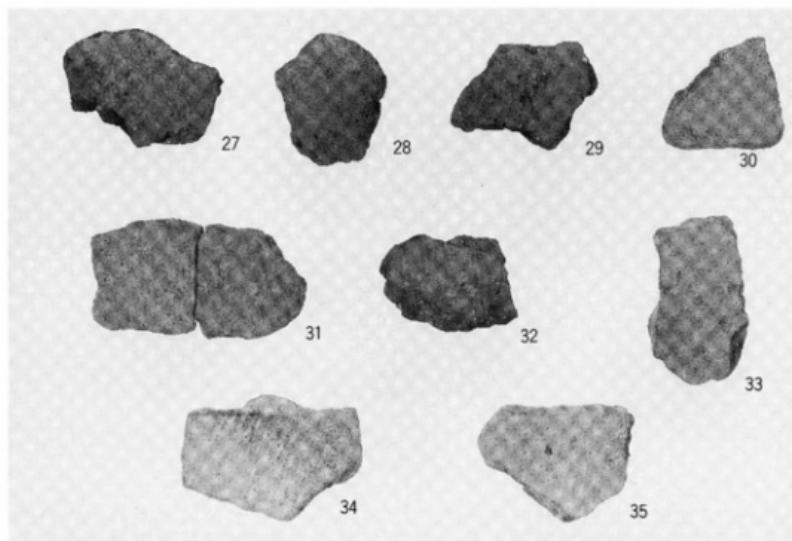
遺構外出土土器 1 群



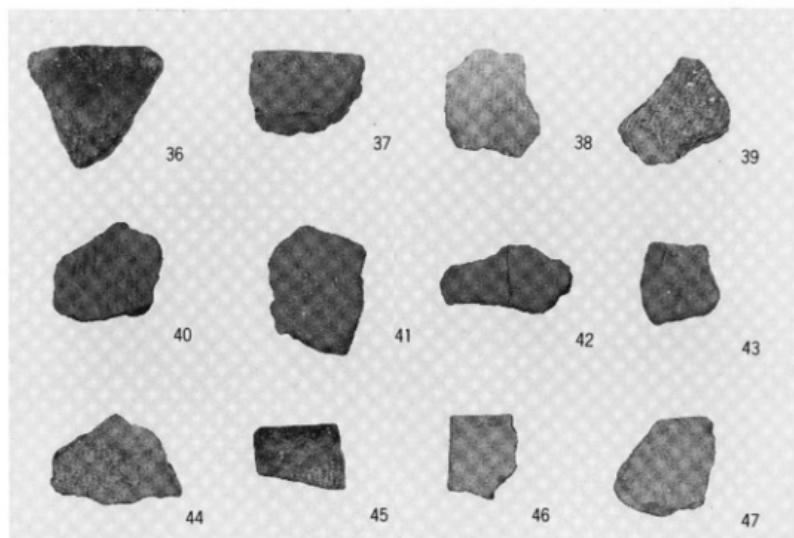
遺構外出土土器 1 群



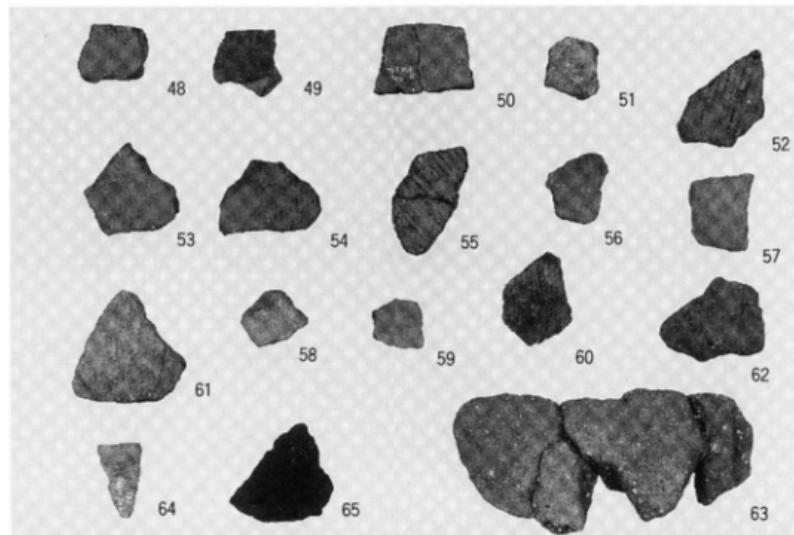
遺構外出土土器 1 群



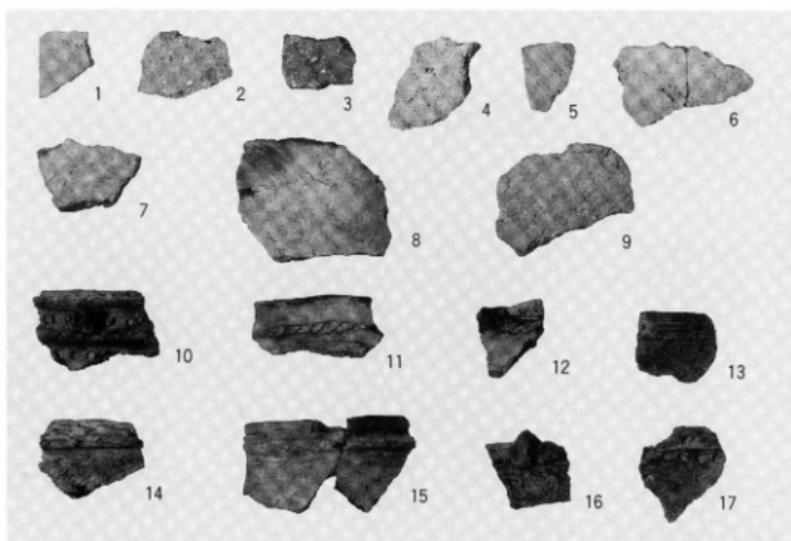
遺構外出土土器 1 群



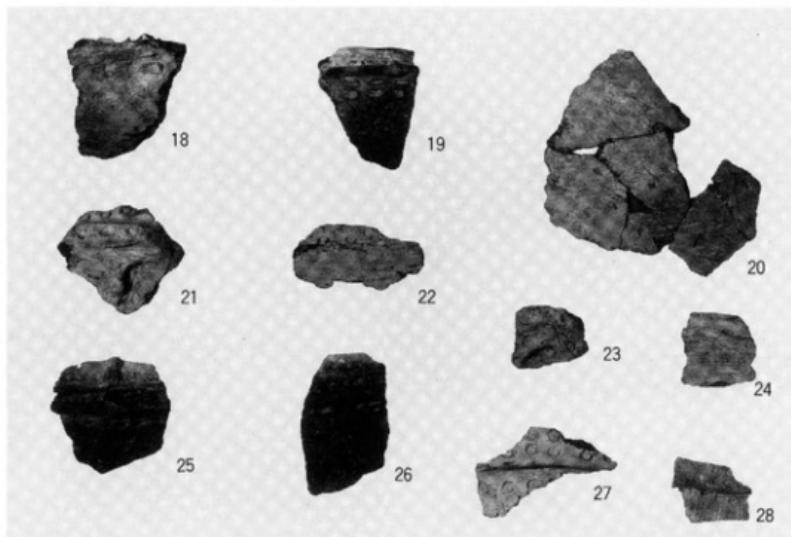
造構外出土土器 1 群



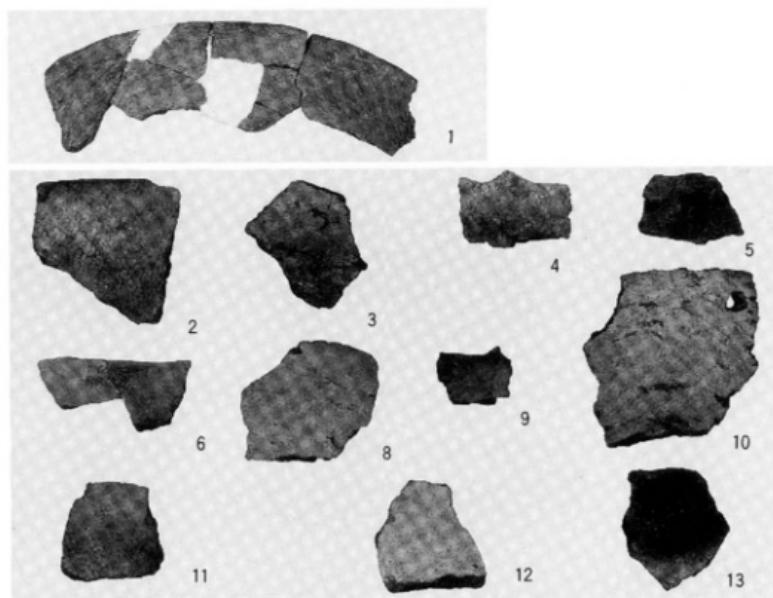
造構外出土土器 1 群



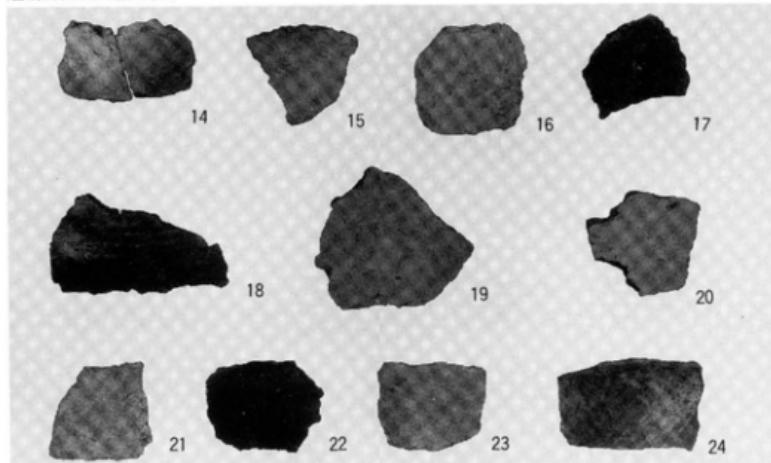
遺構外出土土器 2 群～4 群



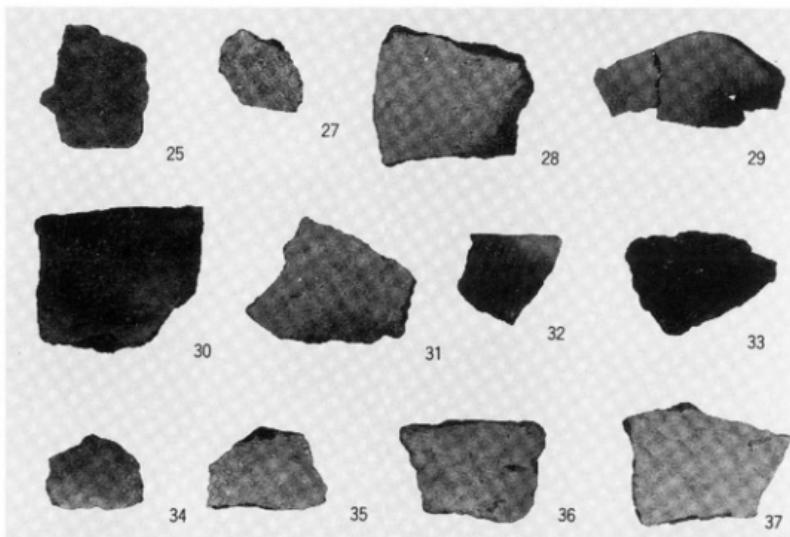
遺構外出土土器 4 群



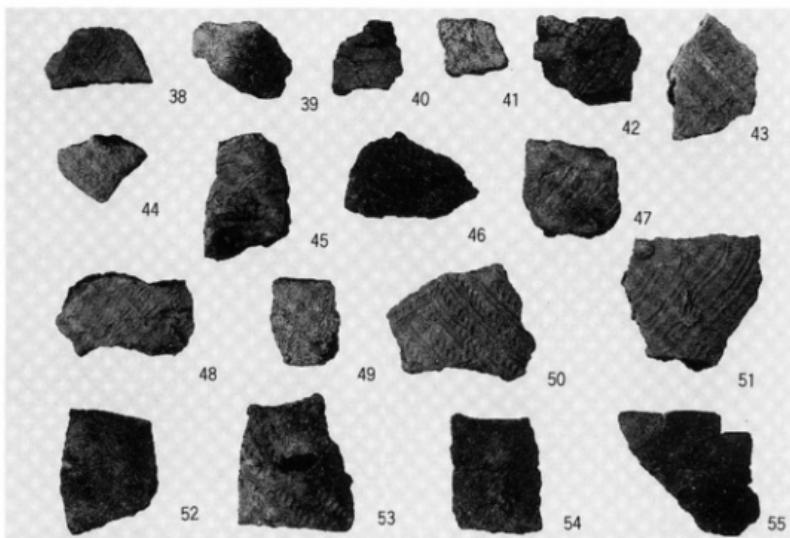
遺構外出土土器 5 群



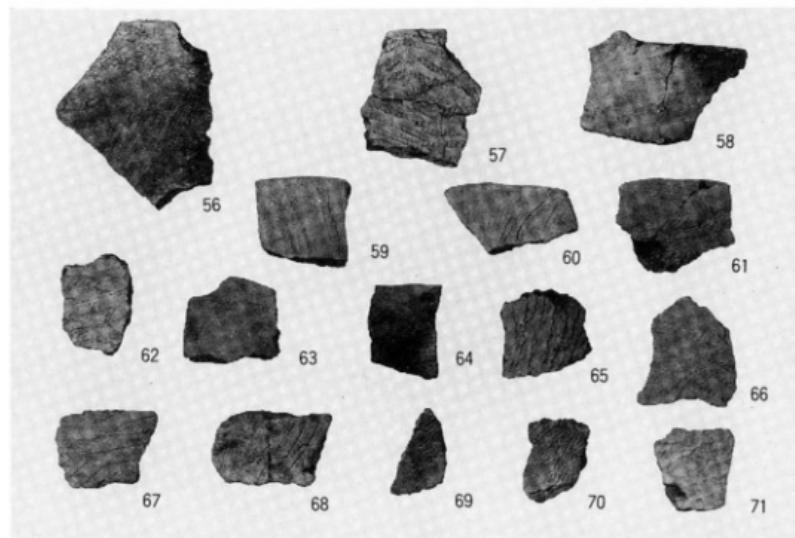
遺構外出土土器 5 群



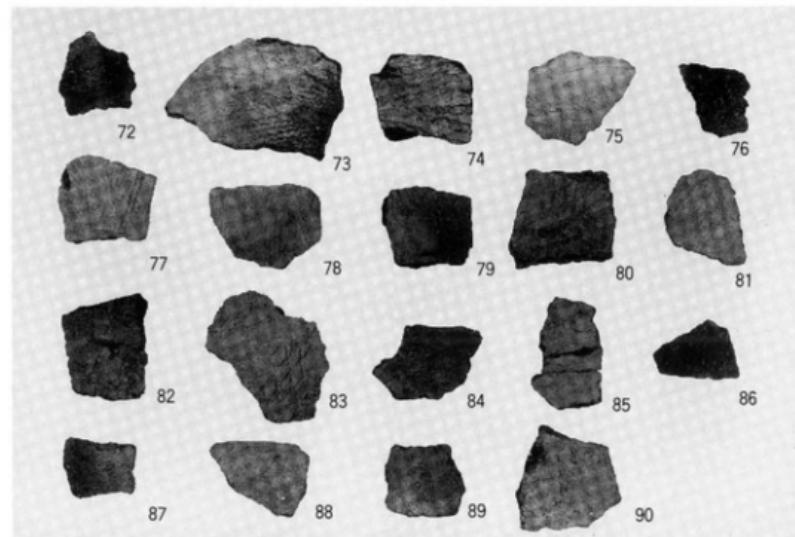
遺構外出土土器 5 群



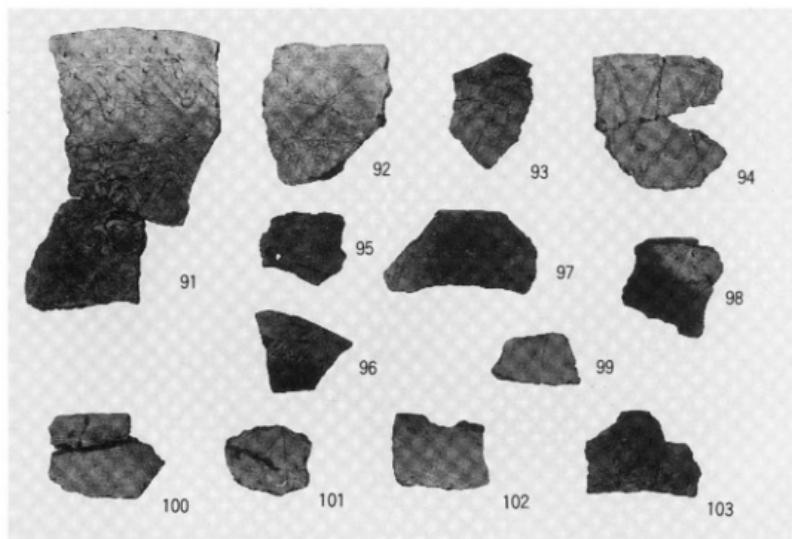
遺構外出土土器 5 群



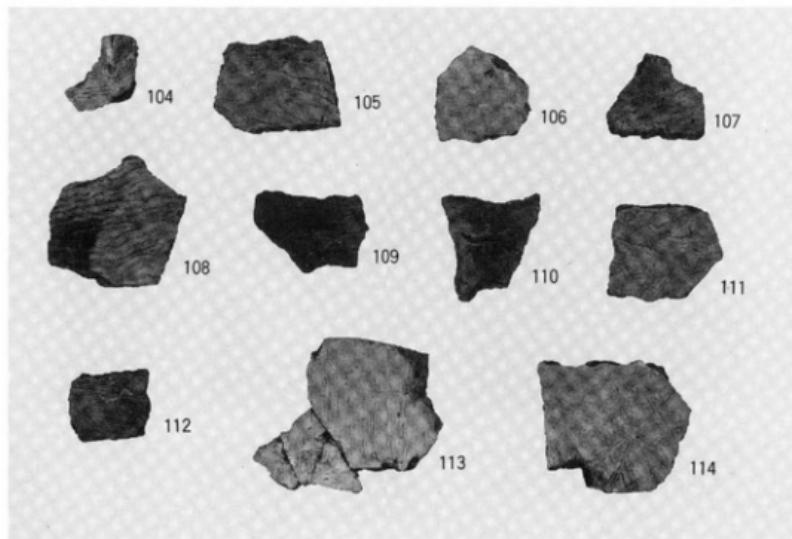
遺構外出土土器 5 群



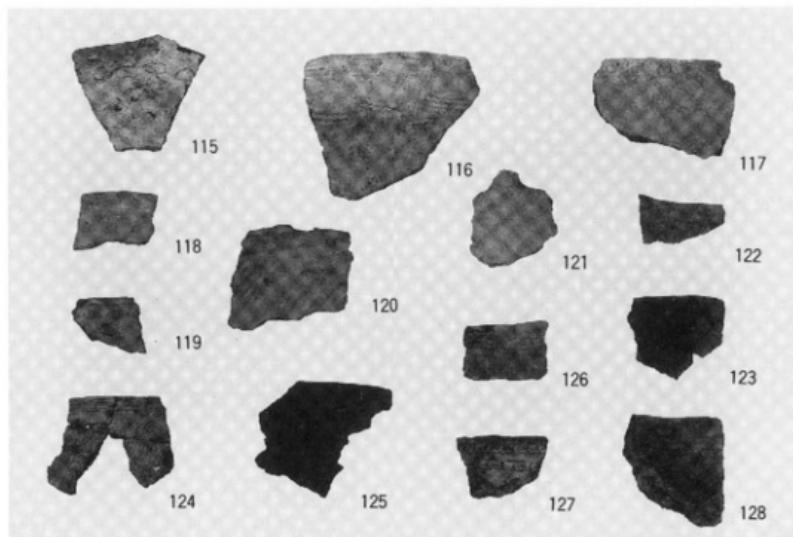
遺構外出土土器 5 群



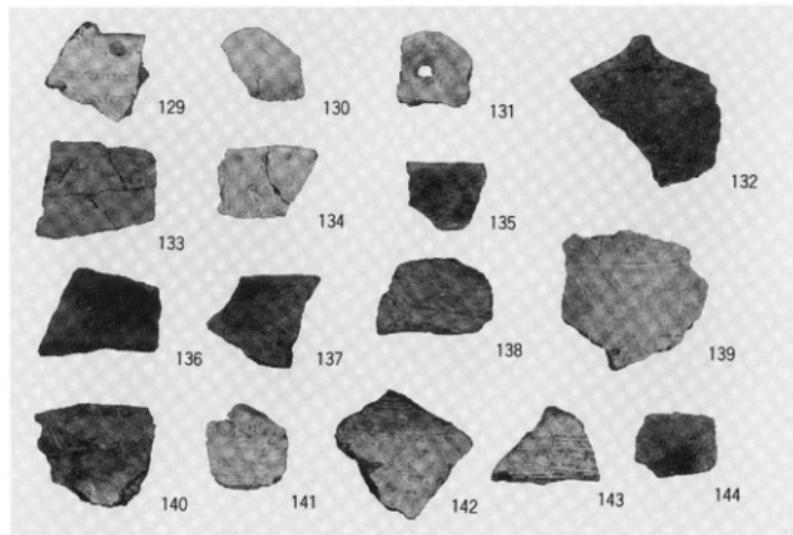
遺構外出土土器 5 群



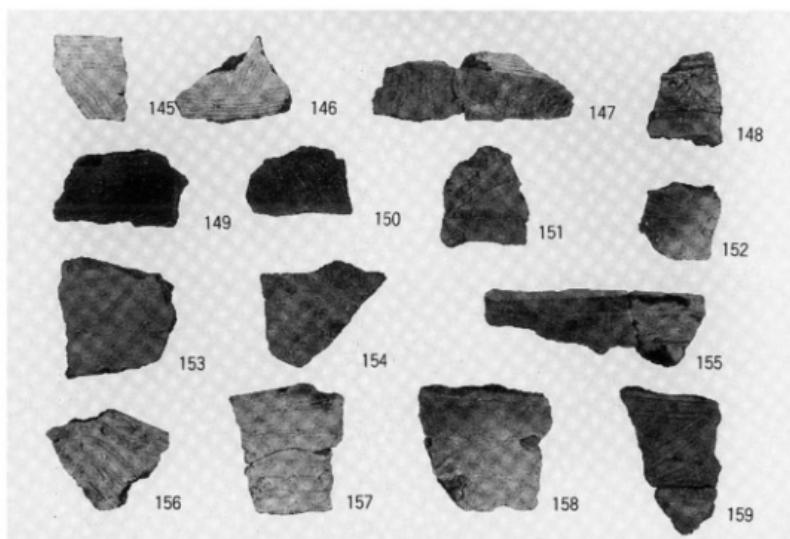
遺構外出土土器 5 群



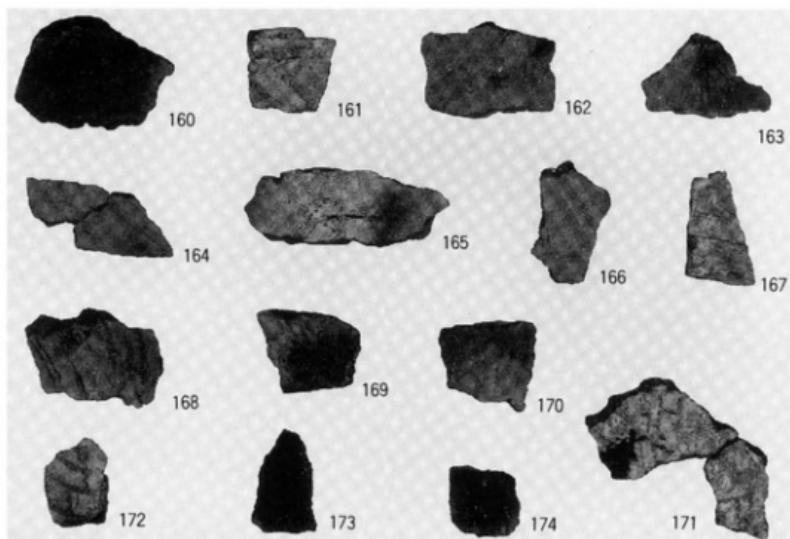
造構外出土土器 5 群



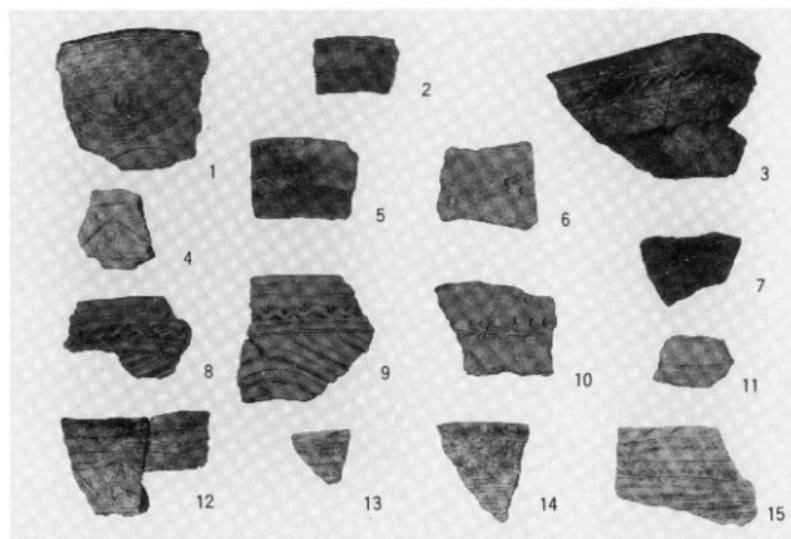
造構外出土土器 5 群



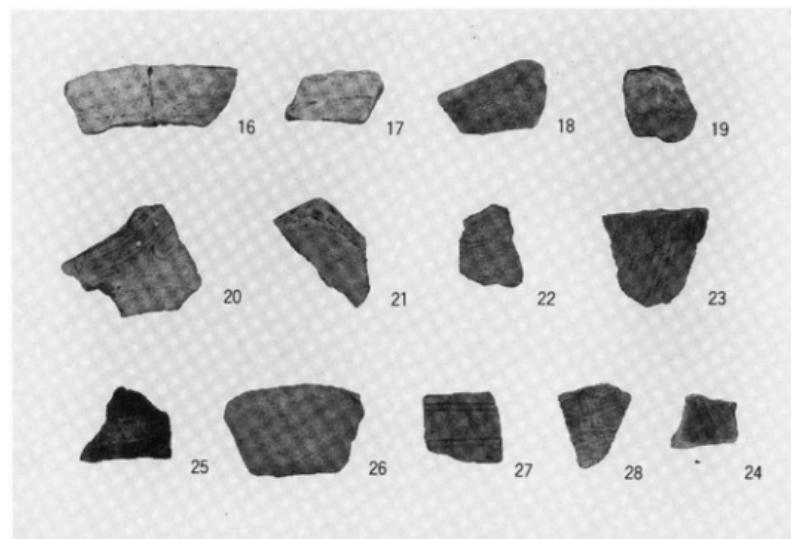
遺構外出土土器 5 群



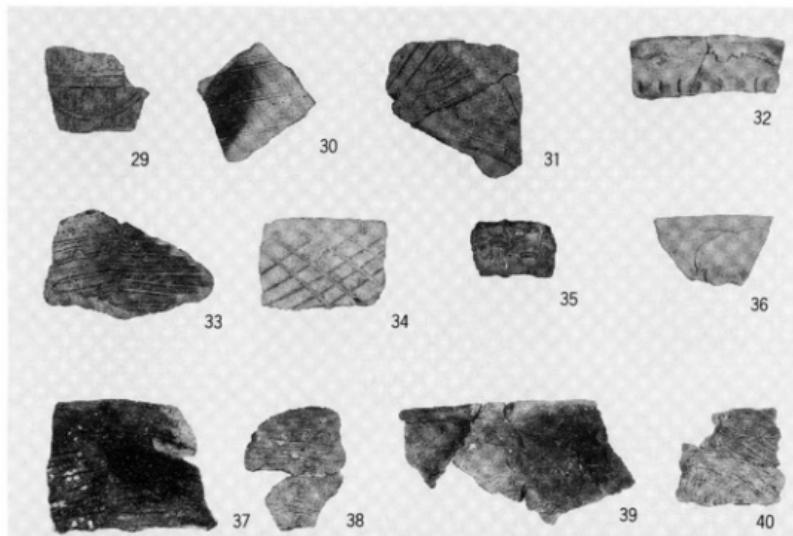
遺構外出土土器 5 群



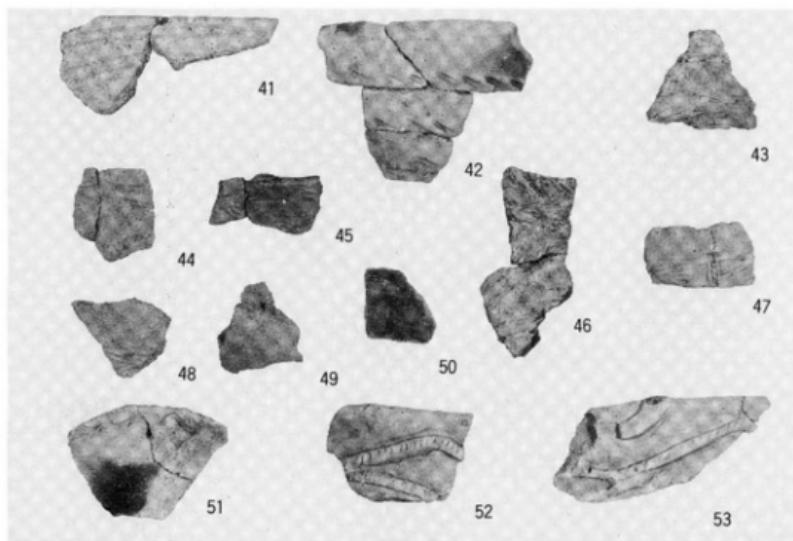
造構外出土土器 6 群



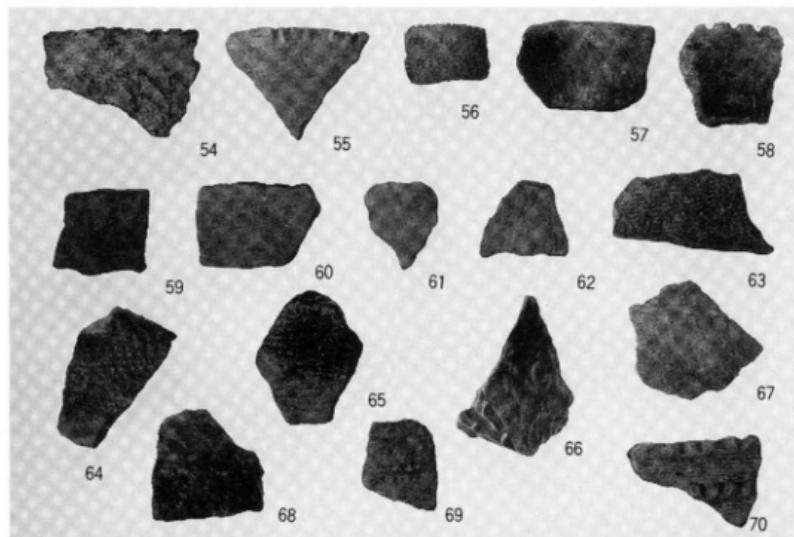
造構外出土土器 6 群



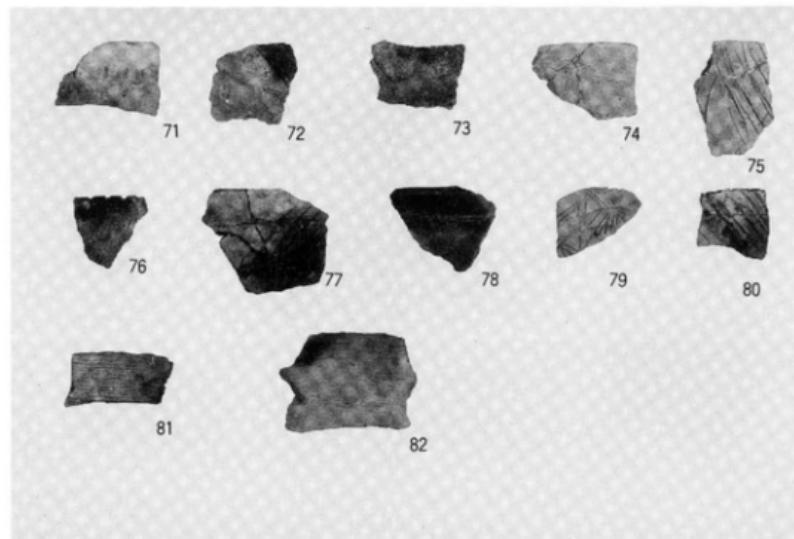
遺構外出土土器 6 群



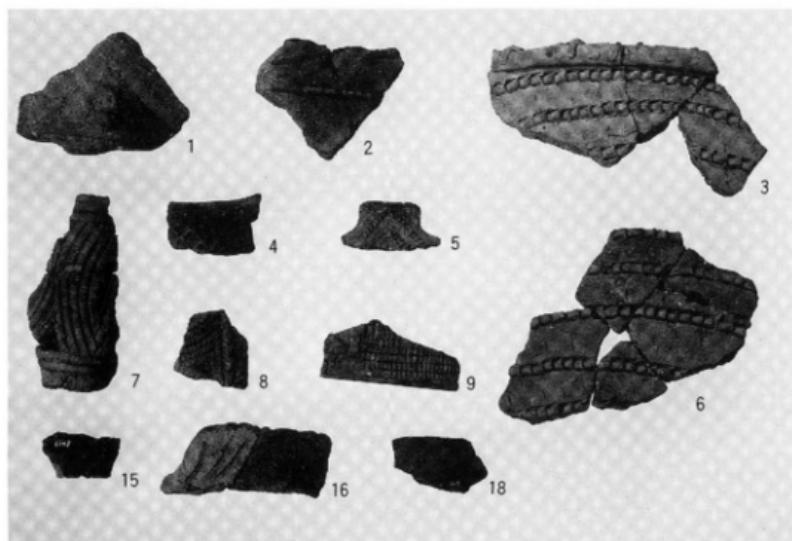
遺構外出土土器 6 群



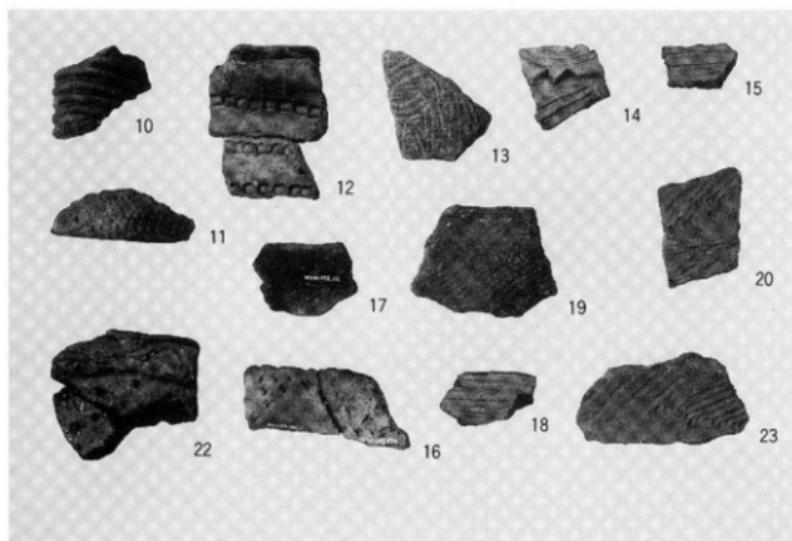
造構外出土土器 6 群



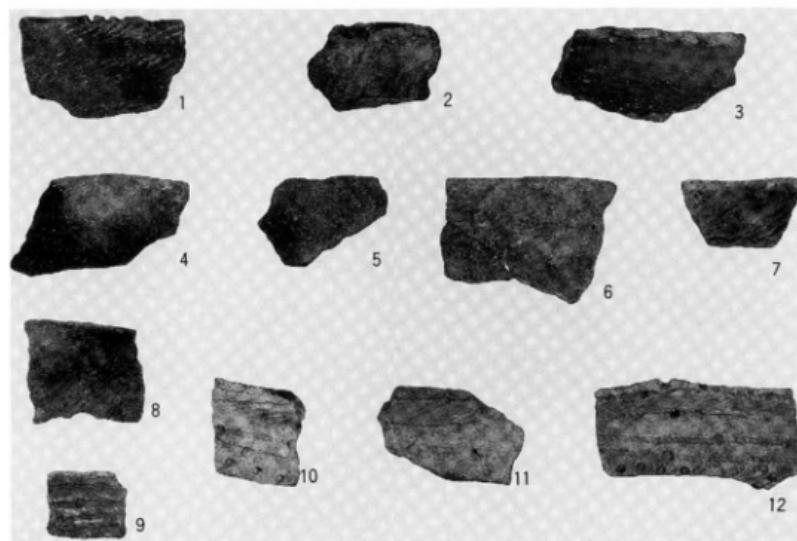
造構外出土土器 6 群



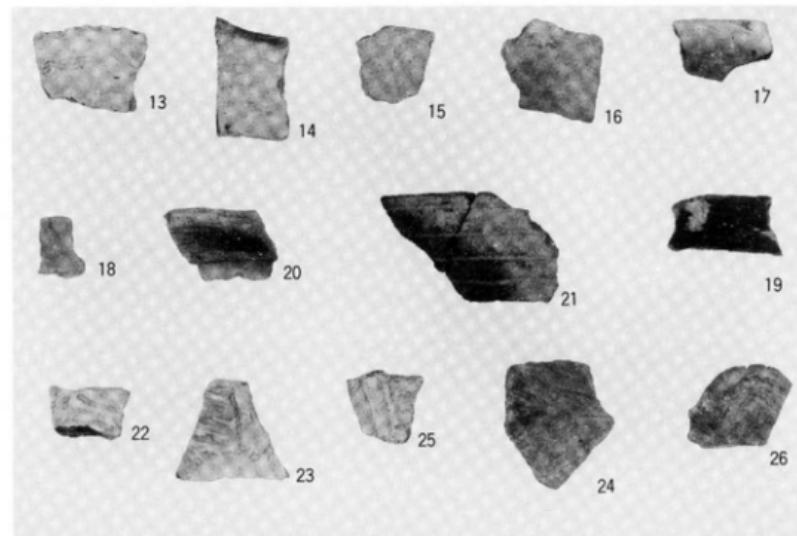
遺構外出土土器 7 群



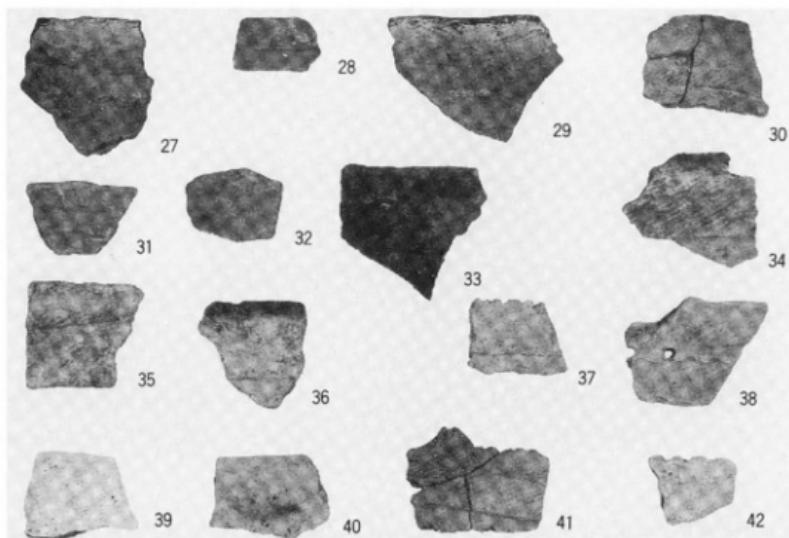
遺構外出土土器 7 群



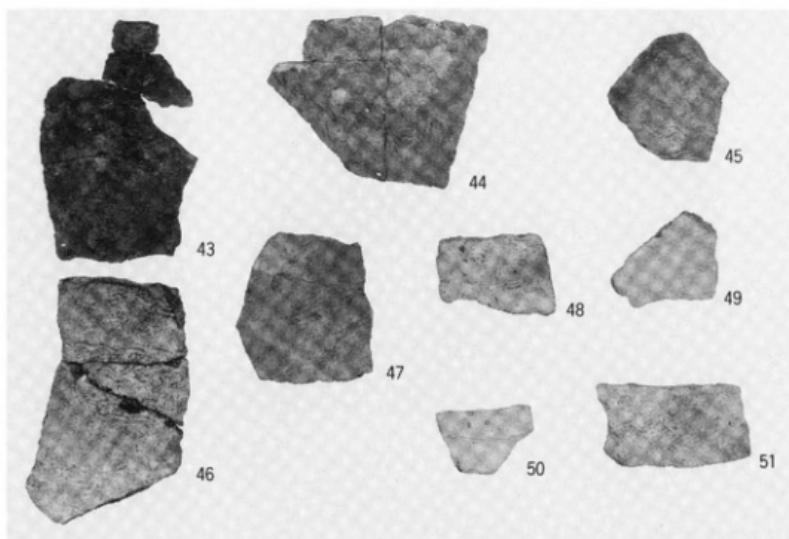
遺構外出土土器 8 群



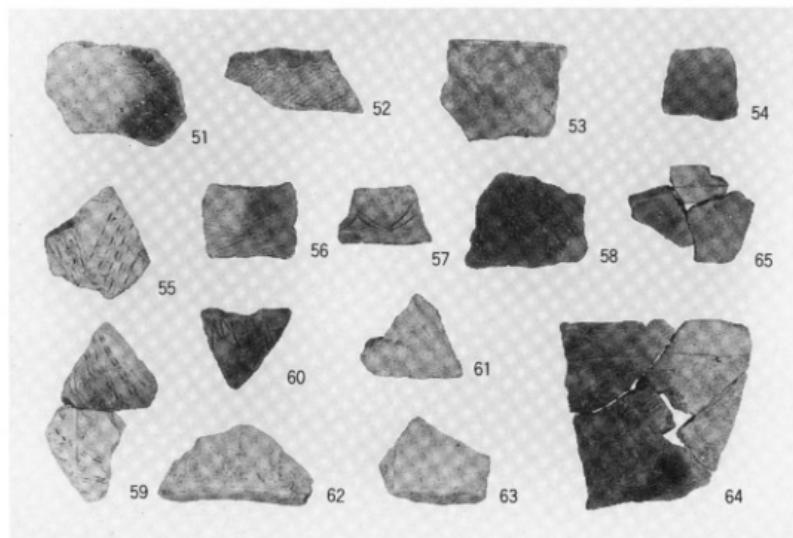
遺構外出土土器 8 群



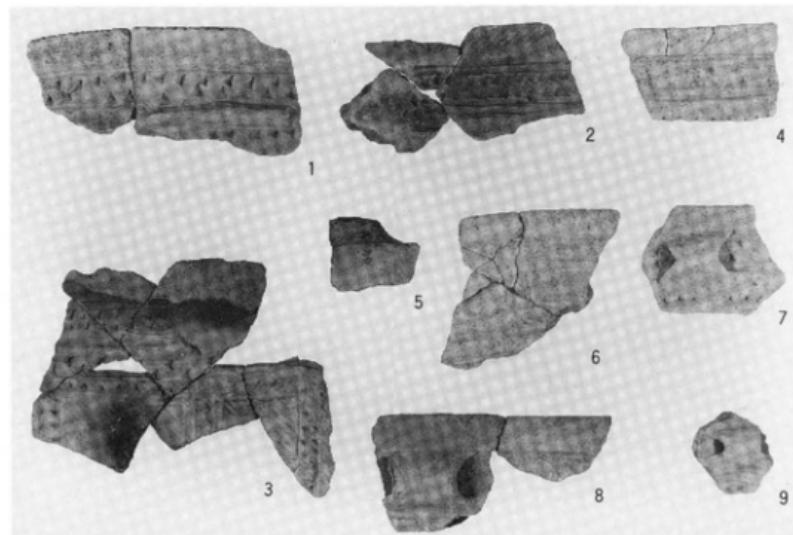
遺構外出土土器 8 群



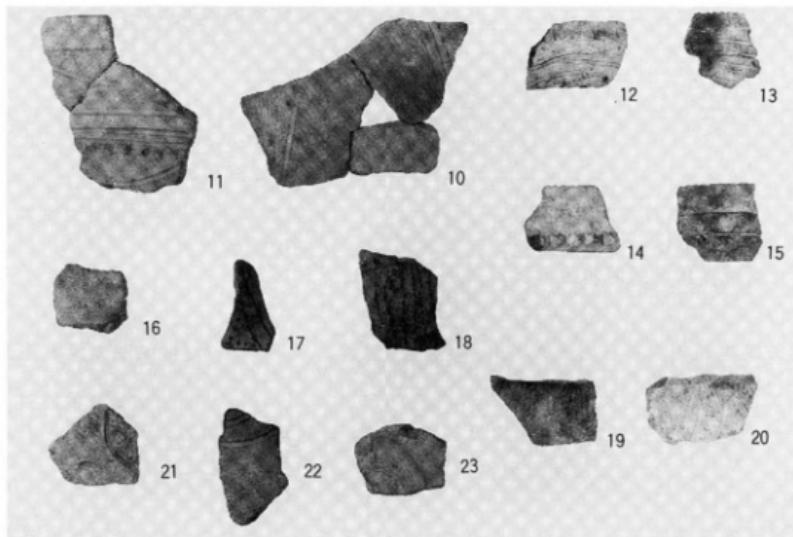
遺構外出土土器 8 群



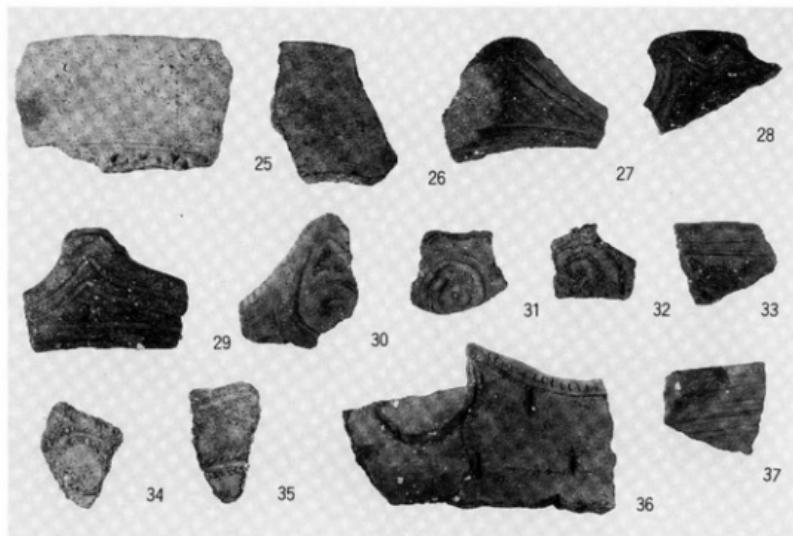
造構外出土土器 8 群



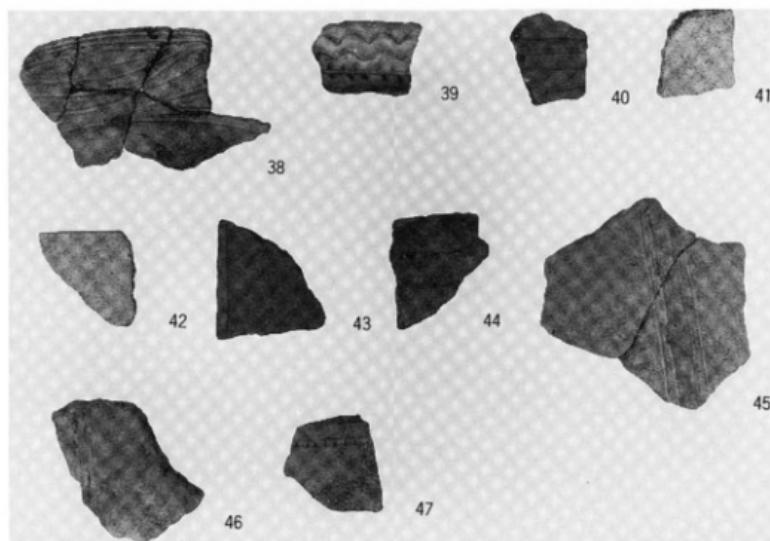
造構外出土土器 9 群



遺構外出土土器 9 群



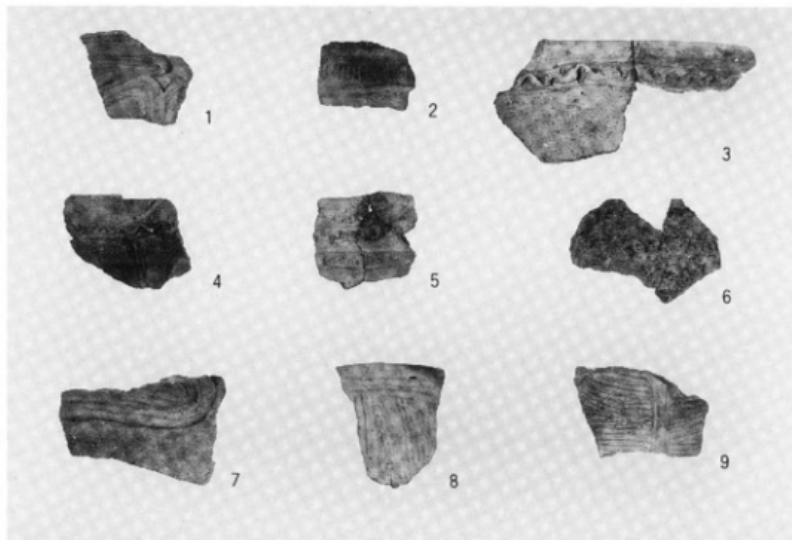
遺構外出土土器 9 群



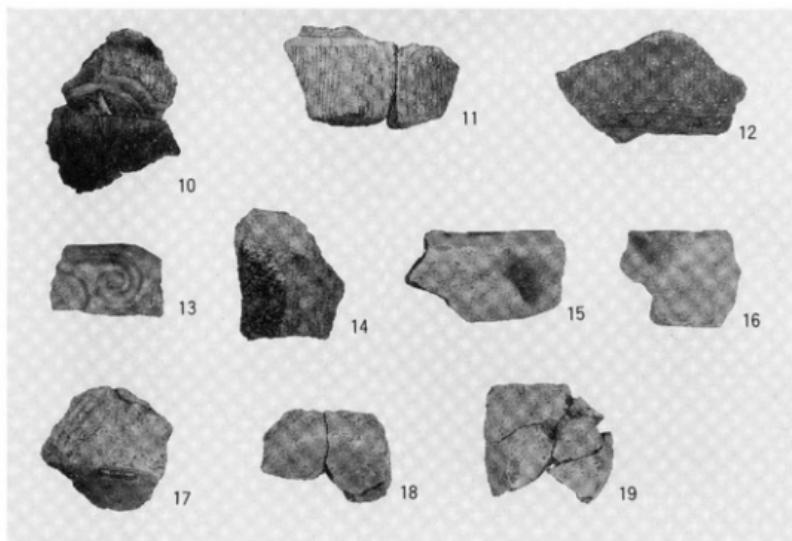
造構外出土土器 9群



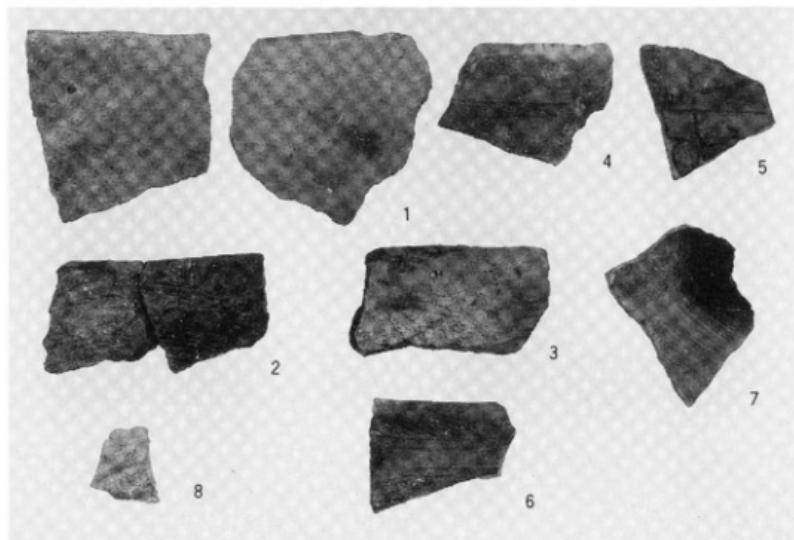
造構外出土土器10群



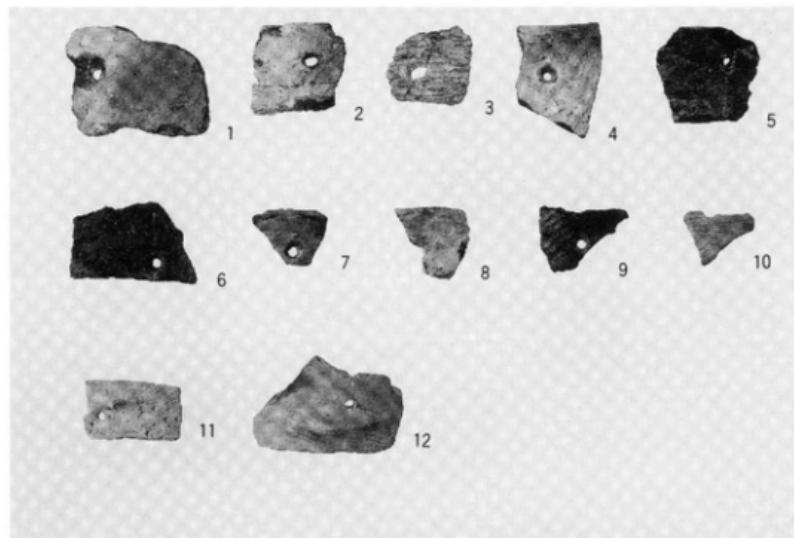
遺構外出土土器11・12群



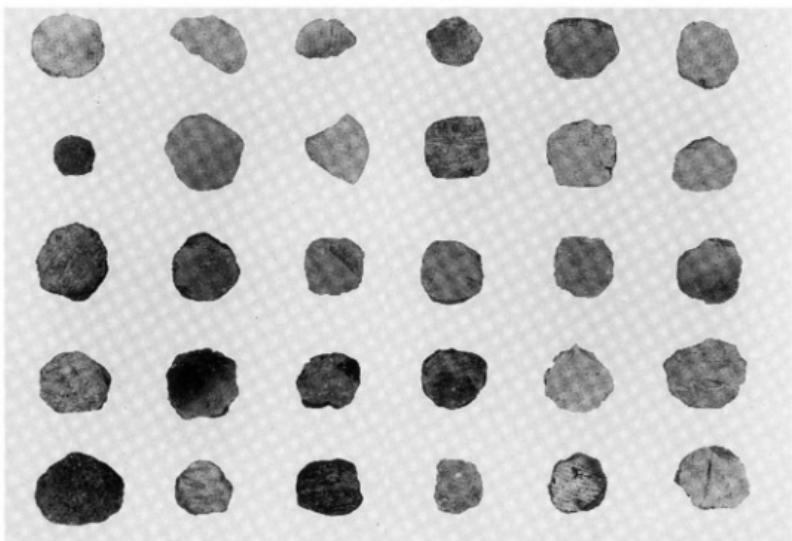
遺構外出土土器12群



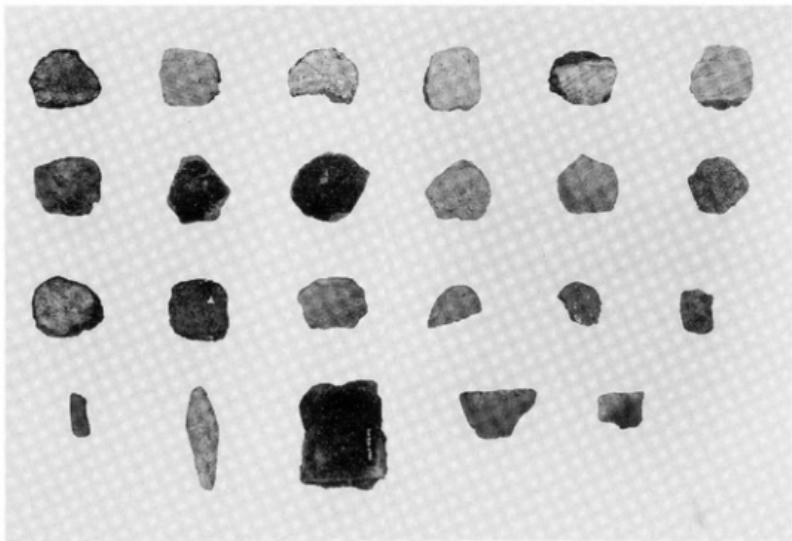
遺構外出土土器13群



穿孔土器



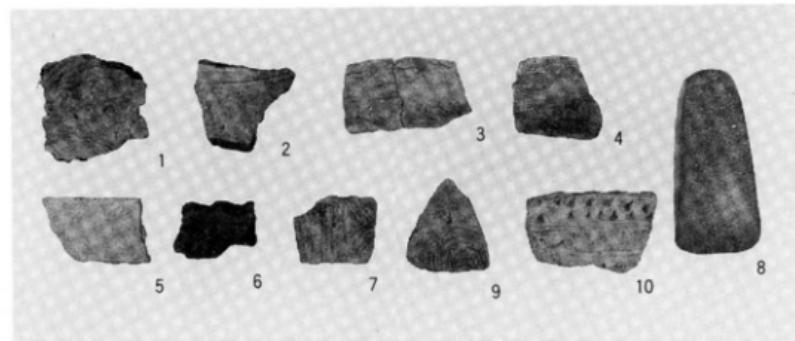
土製品



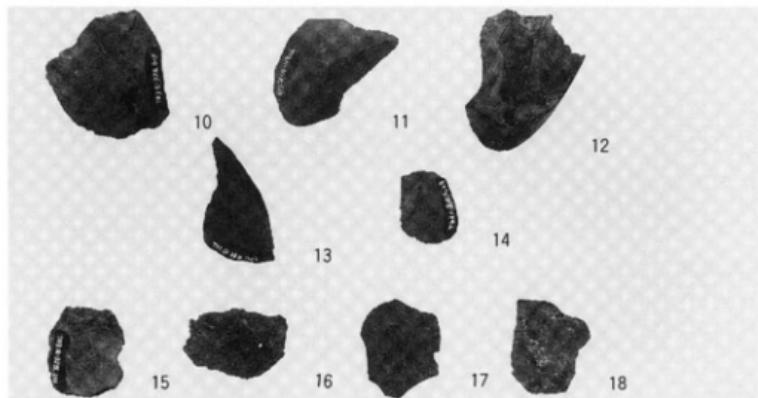
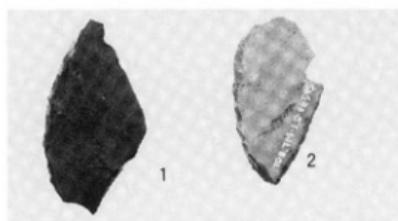
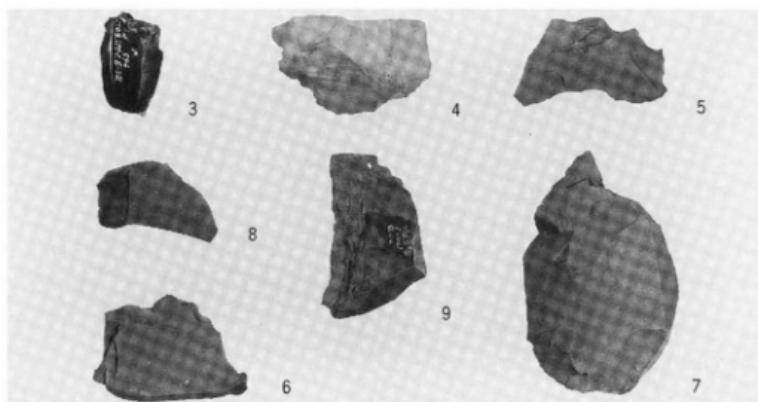
土製品



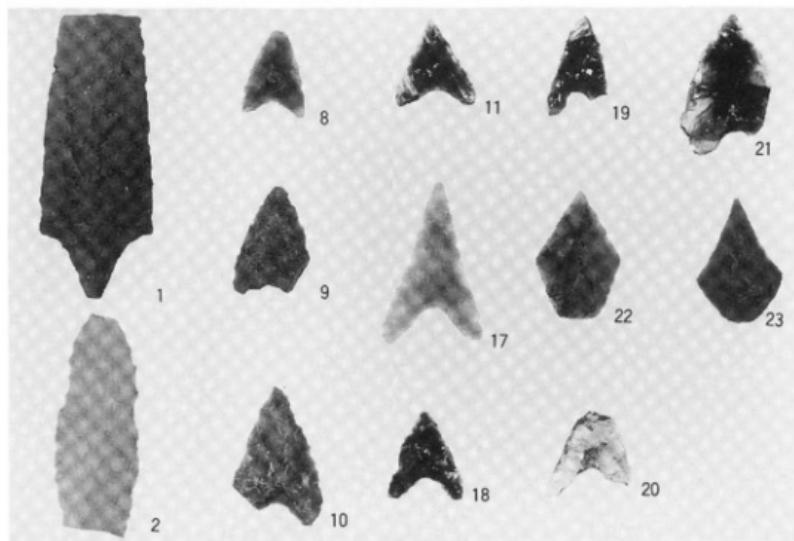
土製品



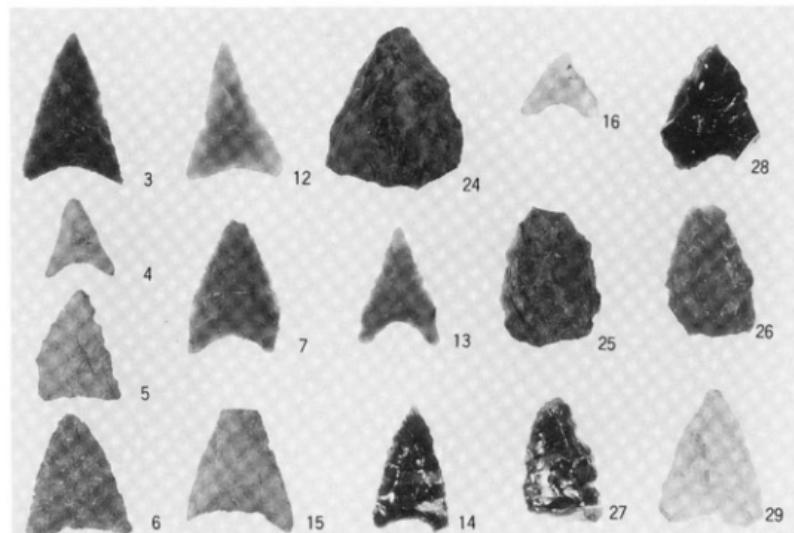
試掘出土遺物



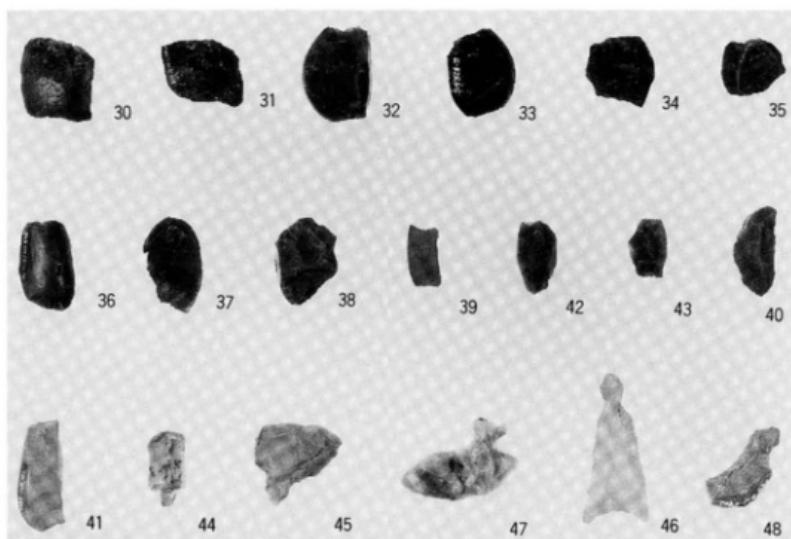
旧石器時代石器



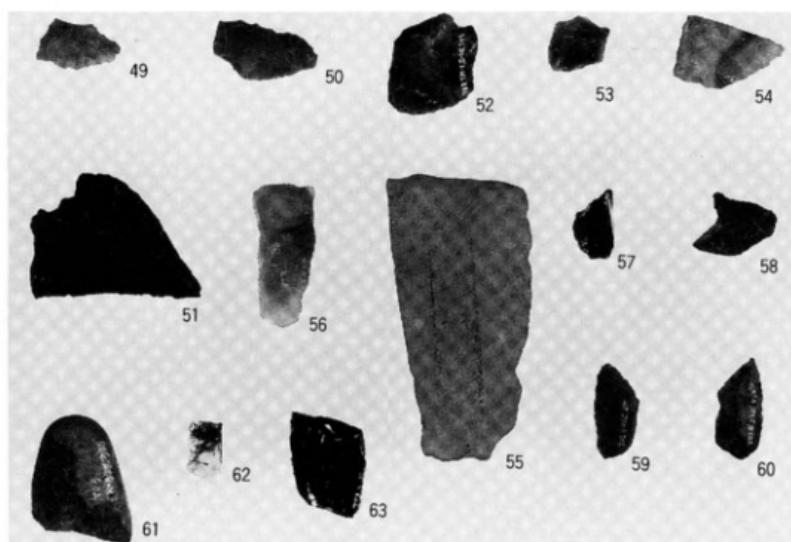
造構外出土石器



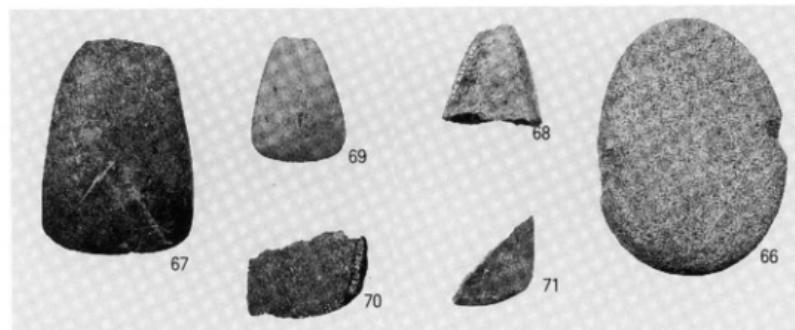
造構外出土石器



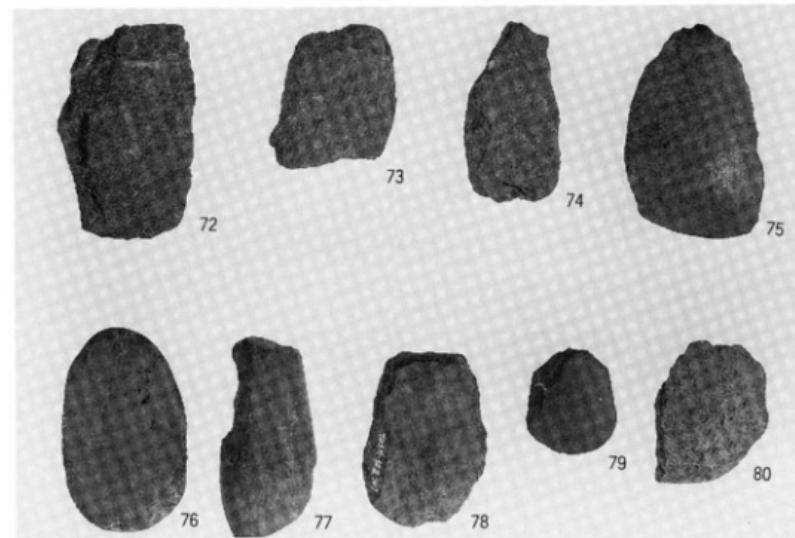
遺構外出土石器



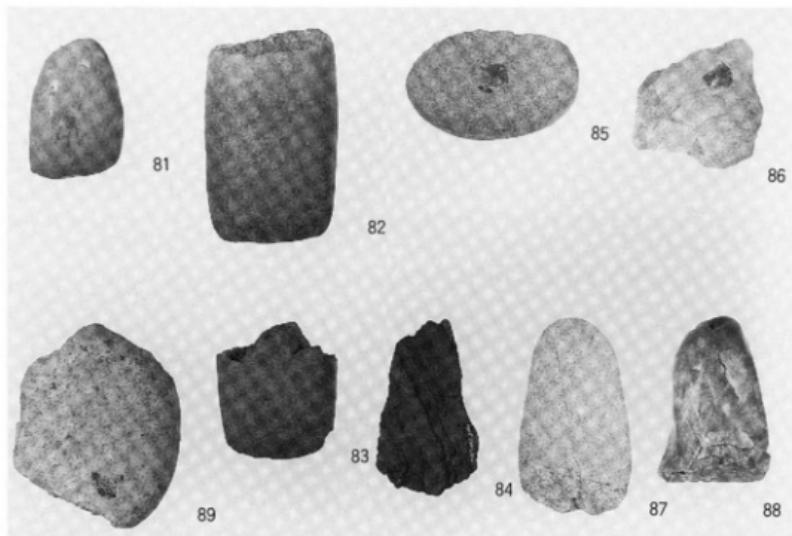
遺構外出土石器



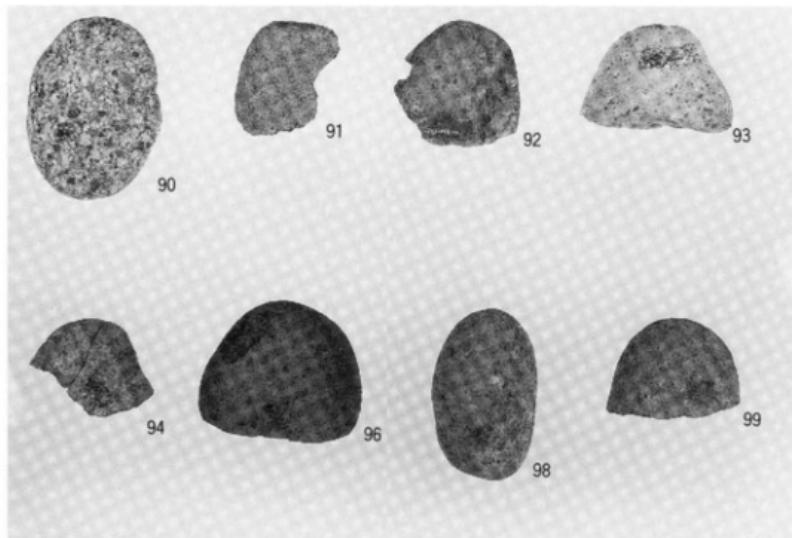
遺構外出土石器



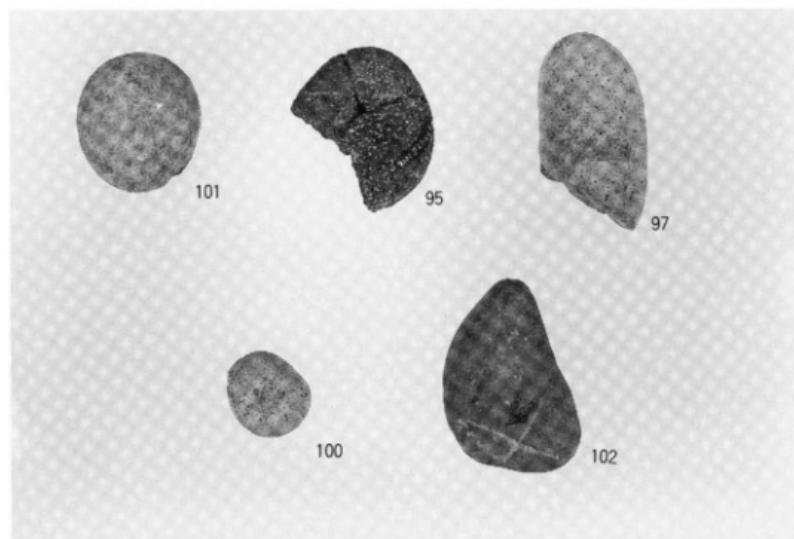
遺構外出土石器



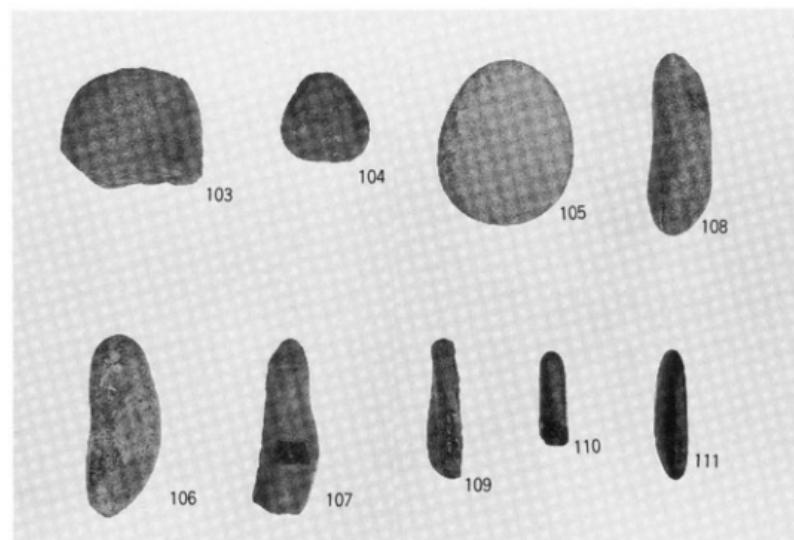
造構外出土石器



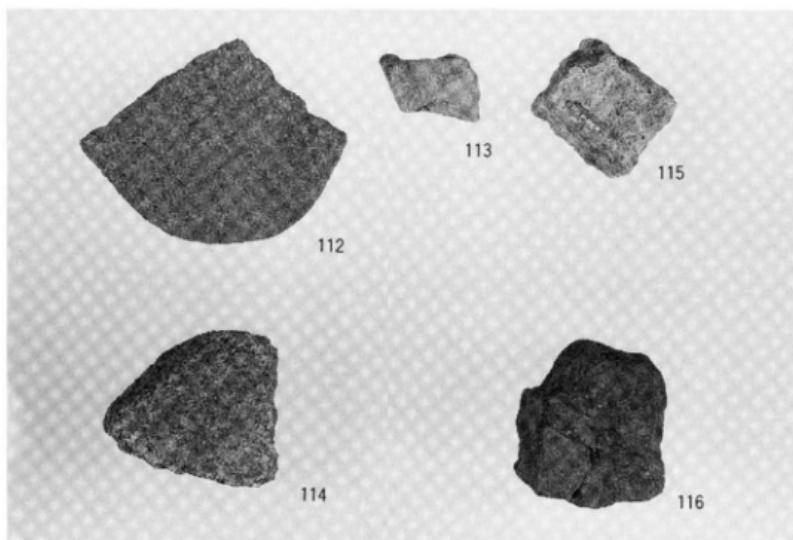
造構外出土石器



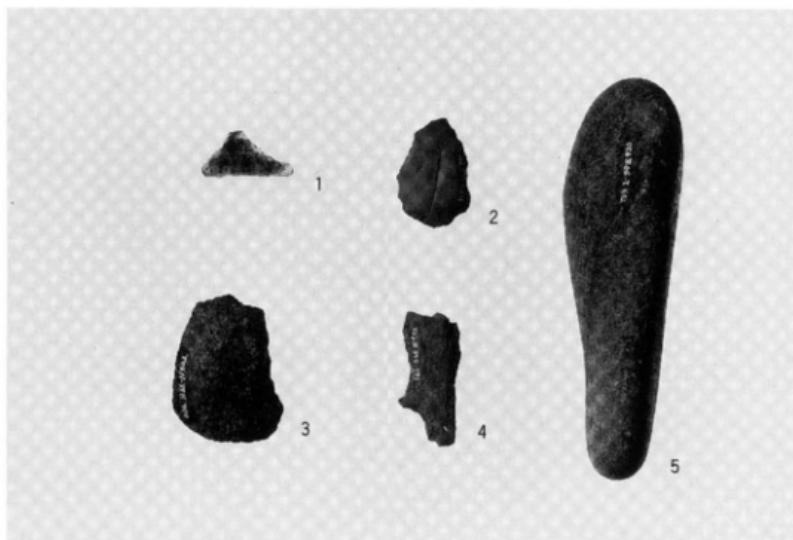
遺構外出土石器



遺構外出土石器



造構外出土石器



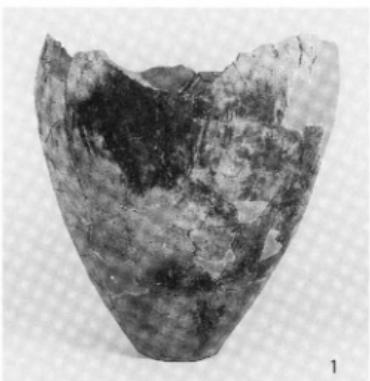
第9号住出土石器



第9号住出土遺物



第1号方形周溝墓出土遺物

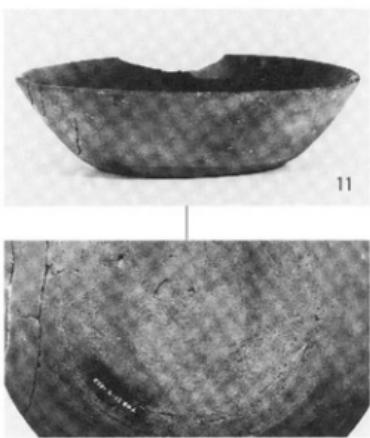
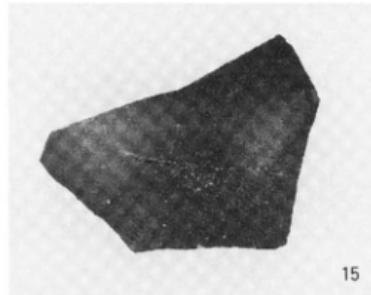
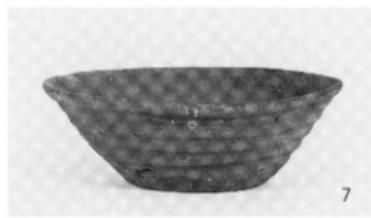
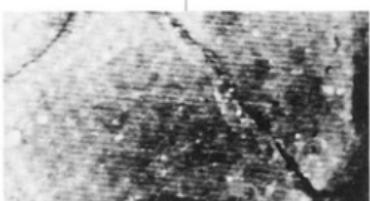


第2号住出土遗物

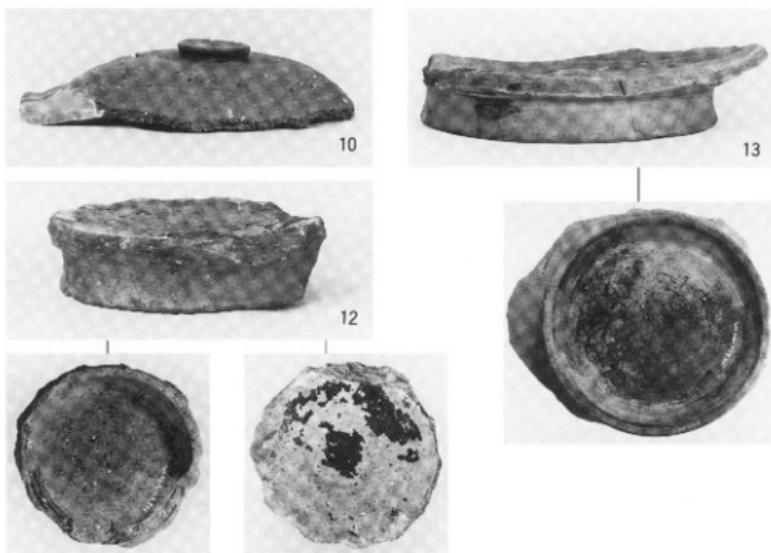


第7号住出土遗物

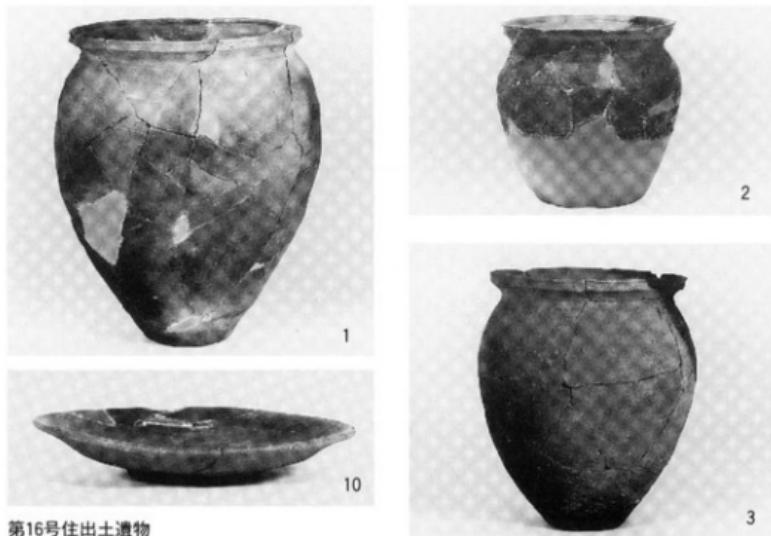




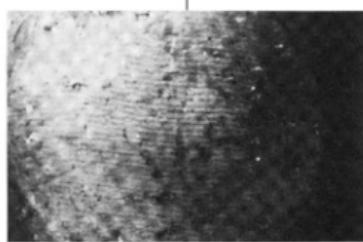
第 7 号住出土遺物



第7号住出土遗物



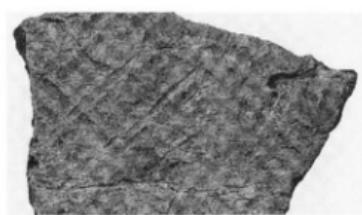
第16号住出土遗物



第16号住出土遺物



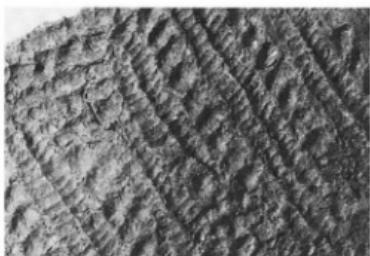
附加条縄文 (5群No.36)



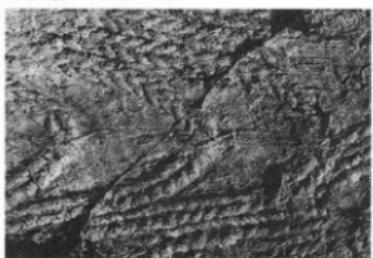
附加条縄文 (5群No.37)



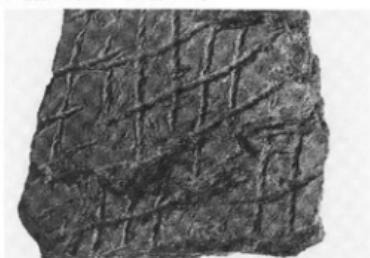
異条繩文 (5群No46)



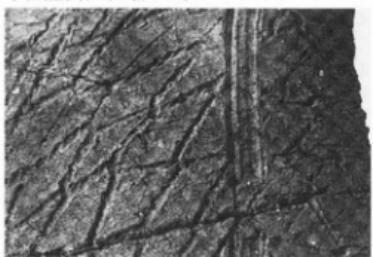
直前段半燃り (5群No50)



単軸絡条体 (5群No61)



単軸絡条体 (5群No80)



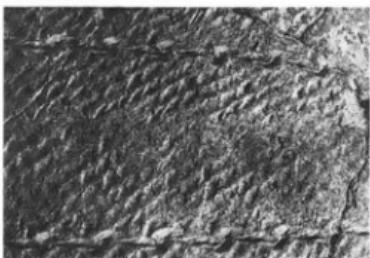
単軸絡条体 (12号住No.1)



絡条体压痕 (5群No88)



繩文原体压痕 (5群No57)



結節繩文 (2号土坑No.1)

三夜原東遺跡  
新堀東遺跡  
壺杯清水西遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 集

発行日 1997年3月

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
〒300 茨城県土浦市上高津1843  
TEL 0298(26)7111

印刷 株式会社いなもと印刷  
〒300 茨城県土浦市板谷6丁目28-8  
TEL 0298(26)1221代)